長塚節全集

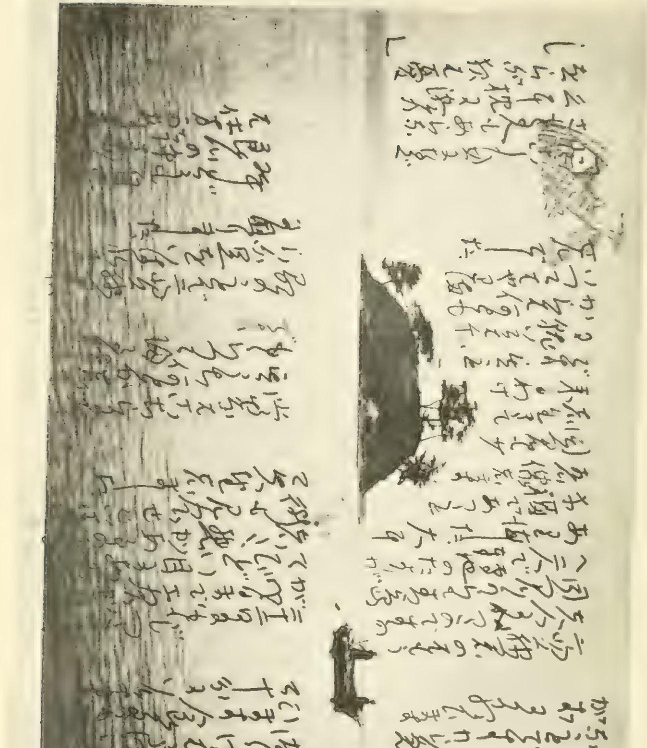
第六巻

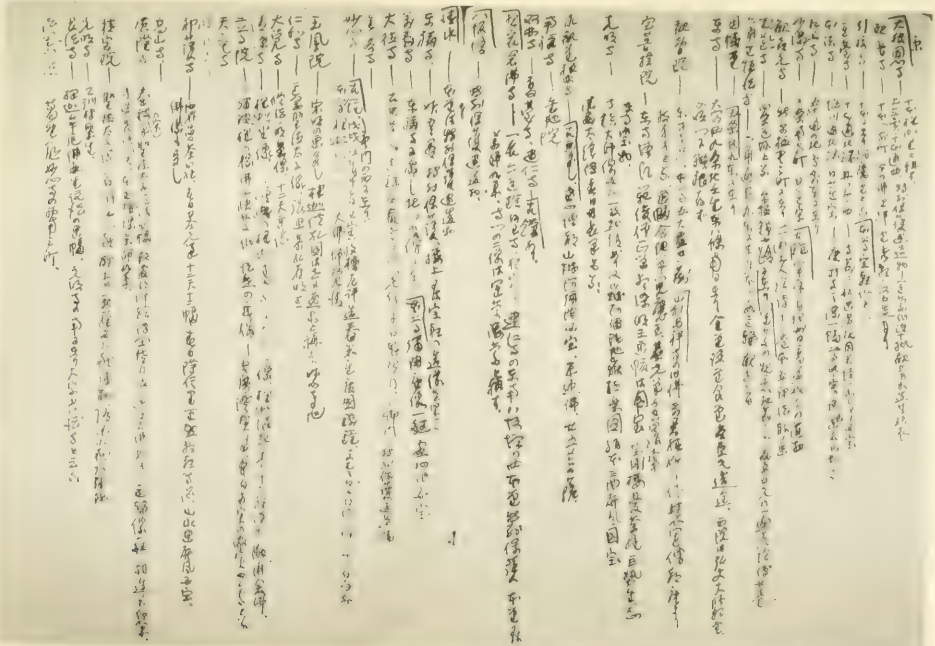
長塚節著

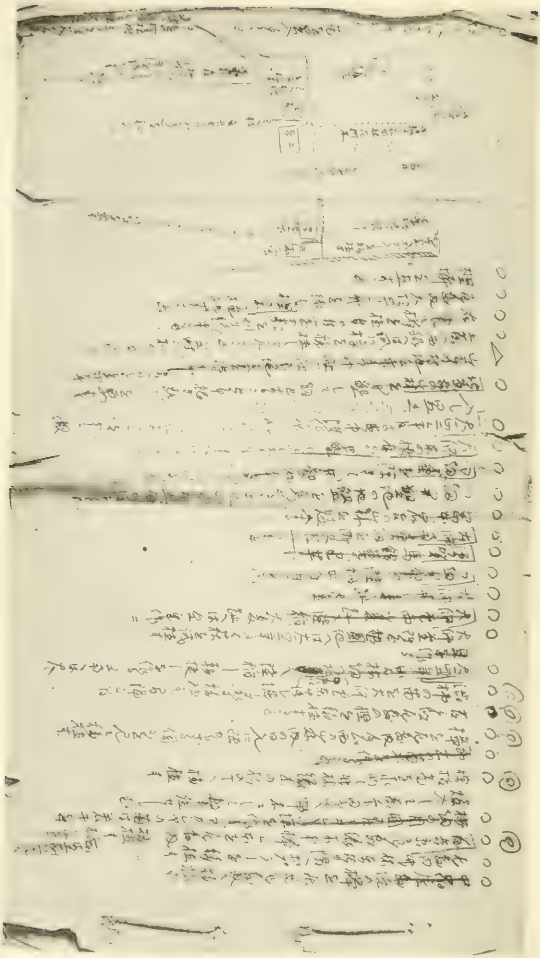
書簡集下・雜文・耕作手帳

東京
春陽堂版









◎大麦　人糞（?）趾　二尺畦、株間一尺
苗下約一反十歩　中耕（?）の肥料を施す　十月廿二日播種

堆肥	生糞（?）	大豆粕（?）	硫安（?）	骨粉	過燐酸	石灰	加里（?）
三五〇、	七、二〇〇（?）	三、	七、五	二、	二、	四、	
四四〇（?）	一、〇〇〇	二〇四（?）	一、〇〇〇	〇六〇（?）	八五（?）		二〇、
二、〇三〇	三八〇	六〇〇	〇八〇				
一、〇五〇	〇七四	一、五〇〇	四六〇	〇八四			
一、七五〇	〇九〇			九六〇	一、八〇		

計三、〇九〇　三、六四八（?）　二、九〇〇

◎苗下　四畝五歩　四畝七ー（?）　堆肥ヲ陸稲（?）趾　二尺畦一尺三寸　十月十八日播種

全肥四、四四四　合計八、〇九四
収穫二石三斗（?）

堆肥	骨粉	過燐酸	石灰	加里	硫安（?）
七〇〇、	二、	一〇、	二、	四、	
四九〇	一三五〇	一三〇〇	五六〇（?）	二〇〇	
四五〇（?）	〇四〇（?）		〇八〇		
二、一〇〇	二、〇〇〇		四〇〇	〇八〇（?）	
三、五〇〇				一、八〇	

計四五四〇（?）　四三四八　三、六〇〇

乙元肥ヒーて全肥二〇〇、砂糖（?）全量、種（?）道六、五〇〇
骨粉全量、灰二〇〇を施す
但し種道六、五〇〇の棒（?）般（?）は一、三〇〇なるを以て此分は一六〇（?）の多木（?）特般（?）七、五〇〇を代用す

此肥ヒーて堆肥四〇〇、種道三、五〇〇　灰一、〇〇〇を施用す
全肥三、二一〇　合計八、三一〇

◎苗下七畝歩　陸稲趾　二尺畦　株間一尺三寸　本年（?）十月廿五日播種
堆肥量は全〔断〕　但し追肥［illegible］堆肥一〇〇を施す　陸稲は元肥六、
全肥三、二一〇　合計八、三一〇
但し石灰（?）施用のものは三〇〇を増して全肥三、五一一とする

◎ ~~［illegible］~~
~~前同断　但し［illegible］~~

◎大師堂前（?）小割　四日一歩　十月廿日播種

堆肥	種道（?）	灰
六〇〇、	七、五	五、
四四二〇〇	一、〇〇〇	二五〇
三、四八〇		
一、八〇〇	一、五〇〇	〇二五（?）
三、〇〇〇	二二五	

計三、四八〇　三、四〇五　三、二二五

全肥〔?〕、〇〇〇　合計五、四五〇

書簡集下・雜文・耕作手帳目次

書簡集　下

雜文

書簡追加

長塚節書簡集 下

平福百穗宛

其一

1

拜啓。四十日の旅も恙なく、明日は中秋といふ日の夜にいりて歸宅仕り候。途中折々葉書などさし上申度存じ候へども、御住所を忘却して思ひながらの疎遠に打ち過ぎ申候。歸來御葉書に接して何となく申譯なき樣の心持致し候。小生も長らくの他行故所用も嵩み、明日はまた勿來關近くまで參らねばならぬことに相成、相應に忙しく候へども、右申譯までに旅中のことなど一寸書き記申候。詳しくは

日記を其うち馬醉木に掲げ申度と存じ居候。

先づ旅程は松島金華山より、更に出羽の最上に出て、大沼の浮島を見て、米澤より檜原峠を越えて會津にいり、新潟に至り佐渡に航し、還りて彌彥山に登り、中津川の上流秋山の郷を探りて、信越の國境苗場山を越えて、三國峠より上州沼田に出で申候。

金華山は晴雨共に見申候。洵に天下の勝地と存じ候。山雉の渡とて二十四町の海を越ゆることに候が、吹き降りにて小生には非常に愉快を感じ申候。乘合には嘔吐したるも有之候ひき。山蛭には食はれ候へども、金華山はよき山に候。松島より金華山までは陸路を辿り候こととて難道難道、去年凶作の結果として、店々軍用の堅パンを夥しく商ひ居り候。大沼は山形より近道を行けば七里、橘南谿の東遊記にて紹介せられ候所に候が、實際に島が遊行致し候。島といふものも小なるは盥位と申さば、沼の大きさも分り可申候。對岸の動かぬ島から島が一つ小生の

足元まで參り候に付、芦を三本程もぎ取りて態々自宅まで送り申候所、掃溜へ棄てられて今はもはや分り不申候。失望致し候。

檜原峠を下りて磐梯山のうら山を望む所凄絶に候。

新潟は信濃川の泥水を飲む所厭ふべく候へども、梨の安くて且つうまきは類なく候。佐渡は遠くて聞いてよく、地圖でよく、新潟で見て是非共渡つて見たくて、其實左程のことのない所に候。四日のうち三日は雨に降られ候へども、小木(ヲギ)の港の宿にて非常に美しき嫁さんが、出掛けに草鞋をたてて小さな槌でとんとんと叩いてくれ候所、甚だ感じよく候ひき。中津川の溪谷は越後より信濃へ掛けて秋山と申す地にて、奥へ進めば溫泉宿なるに、砂糖も醬油もなく候。玆へ二泊して稗ばかりの燒餠、粟ばかりの飯をたべ申候。家のうちは煙のためにすすけて漆の如くに候。只今食料の橡の實の採取期に候。いくら書いたとてどうしても直接に噺さねばやりきれ不申候。少し日も傾き掛け候に付、これにて御免を蒙り申候。早

々。（明治三十九年十月四日　自宅より　封書　平福百穗宛）

其　二

拜啓。一寸失念仕り候に付申上候。鳥海山の歌結句遙空に見るは見ゆと改むべく候。少々ながら大事と存じ候。總じて貴兄の作は、語句の接續自然にて一讀明瞭致し候。雫の歌の如きは珍らしき間違なり。小生は白鳥、碧の空に、國移るべし、鳥海山の四首を見て、近來此程愉快な思ひはしたること無之候。今日も何だかだまつて居られぬ氣がするので、近くの中學の教師で少し話せる男があるので、手紙に書き披露致し申候。

まだまだ秋田の風物珍らしきもの〻候ことと存じ候。無理に作つては駄目故、ゆるゆると御作り相成樣希望仕り候。（明治四十年三月二十五日　自宅より　ハガキ　平福百穗宛）

其三

此手紙書きたる所へ左千夫君より葉書來り候。もはや歸宅せられしことならむと存じ候。

拜啓。季節には候へども連日の雨天、小生の如き頭の惡き者には誠に困りいり申候。左千夫君は梅雨が好きなる由に候へども、木曾の旅行も此にては難儀のことと存じ候。

只今六月の末にて枇杷の漸くうまく相成候こととて、往年の筑波行を思ひいで申候。但し枇杷は年々なり申候へども、あの時ほど餘計になり候ことは前後に無之候。

飼鳥の死をいためる歌は傑作に有之候。二の句は「青毛の駒は」とあるべく候。

5 原作の儘にては調子のコセックを覺え申候。大石嶽も面白く候。大兄の御作には

常に一種の特色を認むることをうるは敬服の外無之候。

薫園の歌如何にも仰の如くに存申候。彼はいくらか（此は一寸要領を得ぬ文字なり。自然の景色といふべき所）厭味といふことを解せず候故に、衒氣鼻を衝くを覺え申候。

さみだれのふりのまにまにつややかに枇杷は熟せり無花果はまだ
おほさはにならぬ枇杷の樹ことしだに君來といはばなりにけんかも

（明治四十一年六月二十六日　自宅より　封書　平福百穗宛）

其　四

拜啓。しばしば御葉書下され難有奉存候。

好きな木は殊に面白く存申候。批評の適確なるおどろかされ申候。樣に就いて枯淡趣味は甚だ嬉しく候。斷食趣味は少々閉口に候。更に鴨川趣味と稀に調和すは、

甚だ人の惡き仕打と存候。されど稍得意にも相成候こと故、此は却て大兄の御手柄に有之候。然し杉の美人と調和せずは以ての外不服に有之候。東海道の宿屋を一々聞いてあるき度と存候。祕密などきき出して敵打致度と存候。それでも左千夫君が伊勢で田舍藝者と雜魚寢をした程の珍談は無之と存候。若し此が不服とならば御もらしあるべく候。左千夫君はわざわざ自慢して、祇園の藝妓と雜魚寢をして君は誇つて居るが、僕は伊勢でこんなことをした。僕の方が豪らからうなど申來候。牛と驢馬との道中甚だ以て御大儀と奉存候。大津の宿で杢右衞門と大兄と並びし時は、恰も左千夫君と同行の如く、三島あたりで鈍太郎と立ちし時は、恰かも小生と相伴ひしが如くなりしならむと、小生は當時ひそかに可笑しかりし次第に候。上京相叶ひ候ならば道中のくさぐさ承り度と存候へども、近々は希望不相叶候。殘念に存申候。

扨途中の玉詠大兄の特色は充分相見え申候へども、今回は頗る不出來に有之候。

「鞘びの國」と觀察せしが如きは大兄獨特と存候。此は從來も屢々見申候處に有之候。

赤土の素燒の國、山國の小くらき、の二首をとつて何れは捨つべきかと存候。補狹間は全部不贊成に候。此の如きは根本的に誤り居り候ものに候。五首は其當時の事實を只三十一字の一種の形式を以て列ねたるに不過候。作者が此の製作をなしたる當時の心の狀態は如何なりしか、卽ち「永祿五年」とか「義元」とか「補狹間」とか「今川治部大輔義元」とかいふ文字を用ゐる時果して平氣にて使用し得たるか、此の如き文字を使用する時、作者に不安心はなかりしか、不安の念を起しつつ作るといふことは、根本的の誤謬に候。是れ此五首の乾燥無味なる所以に候。右妄評不惡御了承なし下され度候。匆々。

梅雨なほ止まずあき申候。庭に梧桐を植ゑ込み其下に立葵を咲かしめたる

に調和頗るよろしく候。秋になれば此所へ葉雞頭を燃えしめむ所存に候。
近來一向手紙書くことなく、思ひながら返事も遲れ申候。今夜ふと思ひ立ちつつ書き申候。亂筆は御判讀願上候。

青桐の茂りがもとに丈のびし葵の花に梅雨晴れむとす。

（明治四十一年七月二日　自宅より　封書　平福百穗宛）

其　五

參謀本部の二十萬分一の地圖を披いて、信濃川に注ぐ中津川の溪流を御らん下され度候。其一番奥の切明の溫泉へ、上州草津の奥入山から間道を越えて只今滯在致居候。切明は溫泉宿が只一軒のみの地に候。
ここに老坑夫が萱で小屋掛をして住み居候。十八年此溪に居る由。彼は十六年間寂しく銅鑛を守り、昨年春十七年目にして銅山は漸くひらけはじめ申候。先頃ま

て二十五六人の坑夫と人夫と居りし由なれど、今は五六人に減じ候。されど此溫泉宿の二階を借りて十六七人木流しの連中が控へ居り候。ここに老坑夫に一人の娘あり年二十五、曾て戀を知らず。今年二月のはじめに來りし木挽、此は越後の者の由、如何なる緣か娘と人目を忍ぶ仲となり申候。それを銅山の人夫や木流し共が、一は嫉妬から兎角噂をたたず。彼の娘を以て山猿に似たりなど評し候。娘は歌を好むこと甚だし。而して皆無意識に自己をうたふ。曰く、

七つ八つから大工はすれど、人の口には戶がたたぬ

わしとあなたはおく山つつじ、さいて居れども人知れぬ

器量なあなたにふ器量なわたし、あなたいやとは無理もない

の類なり。而して、

大工さんより木挽さんが可愛い、かたい木の中ひきわける

に至りては滑稽に候。（明治四十一年八月卄日　長野縣下高井郡堺村切明(キリアケ)溫泉より　ハガキ　平福百

其　六

拜啓。與謝野鐵幹の彪蘗には小生も實におどろき申候。太陽は近來一向手にせざる故御藥書によりはじめて承知致候。されど皆古語を並列したるに不過候。卅首不殘見ねば斷言も出來不申道理なれど、あれだけにては埓もなきものに有之候。近頃は御多忙の由御自愛專一と奉存候。畫の方は御出精相成居候こととは存候へ共、公設展覽會に御高作を拜見せざるは物足らず感ぜられ候。小生扨て先年來御依賴致置候藥の袋の圖案、何とか御工夫下さる譯には不參や。このと今回は賣藥の方も面目を改め申度、先づ第一に袋の立派なるものを作らむ所存に有之、態々上京の上滯留致してまでも、御工夫相願度と決心仕居候。中村不折氏の方はまだ取消さず候へ共、同氏は忘れて筆とり不申、それに同氏に描いて

もらうとすれど、定めし例の難題なるものを得可申存居候へば、此は早速斷り可申、是非共大兄の御骨折に俟ちたく候次第、億劫にせずして何卒一工夫被成下度偏に御願申上候。小生の上京を不待して御送付下され度、袋の注文には上京可致候へ共、上京後に重ねて御懸合致候樣にては時間もかゝり甚だ困り申候に付、よくよく御勘考被成下度候。如此御願は或は御感情を害し可申かとも存ぜられ候へ共、他に其人も無之候へば隨分御宥恕被成下度くれぐれも御願申上候。鶴首して御待申居候。匆々。（明治四十一年十一月四日　自宅より　封書　平福百穗宛）

其七

藥ぶくろの圖案は、其後御考下さるやうな御手紙でありましたがどうしましたらう。此度小生も上京して兩三ヶ月位居る積ですから、何とか御工夫下さる譯には參りますまいか。どうしても出來ぬとならば、令夫人へ嚴談に及びます。さう

して叱つてもらひます。

藥にする藥種の花がさきいで申候。雨がふりふり土がおちついて心持よく候。蕗の葉の土にひつつついたやうに出た處、つくづく可愛らしいものに有之候。藪のなかに萱草が靑く見え出し候。山吹を垣に植ゑ込み候に付、其やまぶきのもとに萱草を植ゑたく考居候。匆々。(明治四十二年三月三十日 自宅より 封書 平福百穗宛)

其 八

國民新聞連の遊に、水戸から平泉靑森を經て此の弘前へ參り候。舊城址にはおどろき申候。藩祖爲信は岩木山の權化と存じ候。舊城址から見る岩木山の姿は比類稀なるべく候。靑森には美人多しと申候。今日靑森から非常な美人の嫁さんが乘り申候。弘前にもいい顏が見えるやうに候。(明治四十二年十月四日夜 弘前市より 弘前市大圓寺の五重塔の繪ハガキ 平福百穗宛)

其九

拜啓。毎日の雨、電車まで隨分御困難のことなりしならむと存申候。小生等は何處へも出掛け不申候。今年も枇杷はなり不申、風で折れてだらりと下りし枝へ數粒黄みたる様なりしが、たべるまでには至り不申候。

近頃立葵の花を仕入れ申候へ共、先頃の風にて滅茶滅茶に相成申候。

豌豆の種、思つたよりとれ申候へ共、百姓はまだ少なきものに有之候。ゑんどうを何にするかと申せば、秋蒔いて五月の末頃花の盛を土へ鋤き込み申候。畑の土を肥さんとてに候。何故に畑の土を肥すかと申せば、其處へ竹を繁殖させる目論見に候。小生は兩三年來竹の栽培者として本縣下の先覺者を氣取申候。戯談には無之候。御笑ひ被下間敷、唯今筍の成長中嬉しく頼もしく候。五六年經てば小生も此の竹にて飯くふだけの方法相立ち可申と樂み居候。その曉には老兄に繪を書い

て貰はんと心掛け居候。

今回一寸上京、序に齋藤君をたづね可申、其節は同道おどろかし申度、多分九日の日曜に相成可申かと存じ候。日中相うかがひ可申候に付、スケッチなど御見せ被下度、此は特に只今より御願に有之候。春の無聲會を見ざりしは近頃忘れ難く殘念に有之候。先頃歸途汽車中にてミレーの傳記を見て難有うれしく相成、老兄とすぐにも會つて話して見たく成り申候ひき。郊外涼風おほかるべく、上京の日老兄にも支障なからむことを祈申候。我は夏日の長きを愛すとは何人が申しけるか。老兄と心ゆくばかり會談することを得ば、小生は更に夏日の長さに感謝致可申、唯何事も其の日に讓り申候。九日間の雨今日十日目にして晴れ申候。庭の松が枝に涼風こまやかにあたりて耳爽かに候。庭にこぼれたる豌豆白く根を出し、小麥は天の川の如く戶口より戶口へ趾つけられ候へ共、まだ掃くにはいたらず忙しきために候。雀は囀りながら燕と相交り相群り瓦の上に羽を干し申候。うれし

げに見え申候。小生も此の手紙を書くに心うれしく成り申候。匆々。（明治四十四年七月五日　自宅より　封書　平福百穂宛）

其十

拝啓。過日は思ひ掛けぬ御慰問にあづかり難有奉存候。早速御挨拶可申の處、却て御書状に接し恐縮の次第に有之候。

例の扇は未だ買ひに参る機會も無之、思ひのみ焦し申候。果敢なき一篇の情史語つて未だ盡き不申候。小生は齋藤茂吉君の、

ひとりのみ朝の飯はむあが命は短かからむともひて飯はむ

の絶唱を解するを得て、同君の前に小生の心理を打明け申度、今日手紙差出し申候。小生の身體をめぐる血潮を溯つて數代の前にはいまもなほ、櫟林の間に尾をする雉子の羽ほどの色彩は有之候ひき。小生は今三十四年にして、つくつぐ婦人

に運なき生涯を嘆じ申候。

櫟の林は夏来らざれば悲しき枯葉をふり落さず。春はくぬぎの林と交渉を有せず。然しながら夏は長くして且つ秋は爽かに候。小生の生涯に於て春は即ち櫟の林の如く、しかも直ちに冬に接したるが如く覚えられ申候。されどこれを解するもの小生の外はあるまじく、櫟を愛するもの亦小生以外に存ぜざるべく感ぜられ申候。扇は不日何處かに求め申度存居候。其上は新聞社へ御訪ね申様相成可申候。然しながら此の贈物を受くべき人は再び来るまじく候。

玉詠頗る珍らしく存申候。詞藻の上には議すべき點も有之候へ共、そは更に御面晤の折に讓り申度、御參考までに何か可申上候に付、其上はあらぎなどへ御發表可被下希望仕候。匆々。（明治四十五年一月廿日　下谷根岸養生院より　封書　平福百穂宛）

其十一

拜啓。十一日の日曜に是非共御目にかかり申度候へ共、御都合如何に候や。日曜日は午前十時頃からひまに相成可申候に付、小生より御たづね仕りたく候。例の扇漸くに求め申候に付持參可仕候。尤も只今殊の外御忙しきことと存候に付、或は御迷惑にも有之可申か。若し左樣の節は御斷り被下度願上候。至急御返事被下度候。匆々。（明治四十五年二月八日夜　下谷養生院より　ハガキ　平福百穗宛）

其十二

拜啓。先刻（四時）社へおたづね仕候處、まだ議會からおもどり無之由、卅分ばかりぶらぶら致候て相待申候へ共、何となく心細く相成申候に付歸宿仕り候。「土」の裝幀の意匠に就き是非御目にかかり度と存じ候ことに候へ共、小生は明日歸鄉致候故此處一寸御面談は相叶ひ不申候。尤も十日以內には九州へ出立可仕候に付一度は御面晤も相叶ひ可申と存候。されど不取敢用事申述度、最早何とか御考も

つき申候や。春陽堂の番頭も社へお伺ひ可致候へ共、餘り後れ不申候樣と昨夜も小生への話に有之候。何分とも作者のため十分御奮發被下度、先頃コッテリしたものとの御噺も有之候ひしが、小生も成るべくは其コッテリしたものを希望仕り候。御參考までに申上候が小生は自叙傳の表紙のやうに、色彩(圖案に非ず)が如何にも引き立たず影うすき感じのするものにては、どうも心持惡くて仕方なく候。意匠の簡單なると複雜なるとは、小生の一向問ふ處には非ず候へども、只自叙傳の表紙のやうに影うすく齒痒きものは困り申候。斯樣のこと申上候ては萬事御任せ申候大兄に對し、此(上、脫?)もなき失禮なれど、ほんの御參考までに申上候こと故、不惡御了承被下度候。

それから標題の文字に候が、此は大兄に於て圖案にうまく嵌り候樣御揮毫可被下候や。漱石さんの「門」は背にばかり文字を現はして、表面には一字も無之候由、意匠次第にて此も面白かるべく存ぜられ候。小生のは一字のしかも一番簡單なる

字畫故、一寸扱ひ悪き點も有之べきかと存ぜられ候。如何に候や。近來作者自身に筆を執ることも流行のやうに候へば、時宜によつては小生認め候ても宜しく候。兎に角背にばかり文字を現はし候ことなどは、却つて存分の意匠を凝し得べきものかとも存ぜられ候が如何に候や。近來籾山から出るものは背を思ひきつてはなやかにして、そこへ金字で現はし候が、それも御參考被下度候。然し此は無經驗なる作者の一時の思ひつき故、如何樣にもそこは春陽堂と直接に交渉を重ね、心持よき表紙をとの御心掛にて御骨折被下度、大兄を措いて他には小生の希望する畫家も無之候故、大兄にフイにせられ候樣にては以ての外困り申候に付、其邊とくと御ふくみ置被下度願上候。

或は四月中に出版に相成可申かとも存ぜられ候に付可成御急ぎ被下度候。

ひよつとすれば箱入にも成り兼ねまじき容子相見え申候。

御手紙被下候ならば郷里へあて御願申上候。

小生は十五日前に上京可致候に付、それまでに圖案成り申候はゞ、版屋の手に行かぬうち拜見仕度候。
小生もとの「土」切拔一時御手もとへ差上申候。内三日分は缺け申候に付其御積にて願上候。（明治四十五年三月五日　東京市下谷上車坂町十四那須館より　封書　平福百穗宛）

其十三

思ひ掛けなくここへ入院することに相成今日參り申候。
暫時のことながら辛抱せねば成り不申。其代り思ひがけぬ花見は出來申候ことに有之候。
柳がいま黄ばんだだけにて、まだ花のけしきは見え不申候。（明治四十五年三月廿六日　京都醫科大學病院耳科より　京都三十三間堂の繪ハガキ　平福百穗宛）

其十四

長崎へ海を渡り佐賀に出て、太宰府を經て福岡へ歸着仕り候。觀世音寺には只おどろくの外無之、平子君が居たなら就いて聽くべき處おほかりしならむに忌々敷候。小生當分滯在故御暇もあらば何か御たより賜はりたく候。（明治四十五年五月九日福岡市東公園武井兵方より　筑前觀世音寺觀世音菩薩像の繪ハガキ　平福百穗宛）

其十五

九州めぐりの最終に太宰府へ來て僕は驚いて畢つた。表面で見て見すぼらしい觀世音寺が立派な佛像でぎつしりだ。二十體も國寶だ。奈良京都を除いては日本に類がない。數は兎に角だが、値打から云つたら京都よりは上だらう。梵鐘なども第一流だ。菅公の觀音寺は云云といつた鐘だ。坊さんが撞いて聞かしてくれたが

恐ろしくいい。佛像がなかなか大きなものが儼として居る。寺が寺だけに觀音の像が多い。それで大抵は觀音といふと何處のも慈悲の相であるが、此處の唯一つの馬頭觀世音は、全身黎黑で頭部は前後左右辛辣な相形の四つの面を有して、其上に赤い馬の形が載せてある。二丈に近いのが恐ろしい目をむいて居る。然しそれも皆ぼろぼろに腐朽して居る。これも二丈もある不空羂索觀世音の如きは、ひよつと觸つたら八つの手の内の一つがばらりと落ちたさうで、實に危險いやうになつて居る。今年の十月頃から一年半の豫定で、修繕があるさうだから大きにいいだらう。それに大黑天でもかういふ形だから豪いぢやないか。僕が特にこの一枚を選んで君に贈るのである。どうか總てを想像してくれ給へ。都府樓の址もすぐ側だが、あの時代の建築の雄大であつたことを追想して暫く立つて居た。太宰府の遺蹟は藝術的にも歷史的にも九州の眼目である。九州の山水はそんなに驚いたものではないが、此の太宰府は九州全體の幾十百倍の價値を有してゐる。

それにしても僕は秩序的に何も見る目がない。平子君が生きて居たらしみじみ咄を聞くことが出來るだらうと思つて忌々しくてならぬ。僕はこんな數を相應に見て居るのだから聞きさへすれば了解する處があると思ふ。東北では中尊寺へ二度も行つたし、京都へは五度、奈良へは三度、今度歸りに寄るから四度になる。さうして更に太宰府へも來たし、僕は其點では極めて幸福な人間である。水城のあとの土手でも汽車から見たが、今一度も二度も太宰府へは行く積だ。停車場のすぐ側に立派な溫泉はあるし病人に嬉しい處だ。

今日に香椎へ行つて戻りに名島へ行つて例の檣石を見た。神功皇后の三韓征伐の時の檣だなどと云ふのだが、兎に角珍しい化石には相違ない。そんなことはどうでもいいが、僕はそこから干潮を幸におやぶおやぶ水を渉つて一町にも足らぬ妙見島へ行つていけすの鯛を抄つてもらつて晝飯を食つた。刺身をどつさり持つて來いといつたら持つて來た。普通の皿がついて、山芋のすつたのをかけたのが一

皿、それに湯がいたのが此は木の芽味噌をつけるのが一皿、それに吸物、それだけかと思つたら、すばらしく大きな鉢へ刺身がうんと出た。大に腹の具合がよかつたので食ふのもうんと食つた。五人前は平げたが、日の下一尺以上の鯛だからそれでも殘つた。僕の病氣はうまいものを澤山食ふのが一番いいんださうだが、食ふのでなくて食へたのだから今日は得意である。座敷からは博多灣の水を隔てて千代の松原が土手のやうに續いて居るし、土手を中斷したのが箱崎で、盡きる處が博多だ。殘の島が横つて居るし、それからずつと西手に白い砂が見えてその先が志賀の島だ。酒も飲まない僕の處へ女が來て居て頻りに噺をする。如何にも田舎めいた女だつたがそれが其の志賀の島の者だといふ。女がいふのにお日樣が志賀の島へはひるさうだ。其處には高い處といつて格別でもないやうだが、それでも一番高い處からは空氣の冴えた日には壹州から對州も見えるといふ。志賀の島からつづく半島は長い手を出して、博多灣を抱いて居るのだ。

僕は暫くここに居るから手紙でもくれ給へ。久保さんはさうたいして惡くもないやうだといふのだが、それなら僕には本當に嬉しいんだが……。（明治四十五年六月發行アララギ第五卷第六號所載　五月九日夜　福岡より　平福百穗宛）

其十六

「十一　春陽堂よりとどき申候。裝幀に付先日二葉の御葉書頂戴致し候ひしが、成程變更致し候方ずつと宜しかるべく、扉の畫ある以上は見返しは要らぬ道理、殊に扉の如きは色の配合極めておもしろく存じ候。」表紙は本屋がもつと錢をかけ候はば引立ち可申に、此だけは大兄も定めし御不滿に候はんかと存じ候。然し小生には此だけにて近來出色のものとして、充分の敬意と滿足とを表し申候。（表面）古泉君から葉書參り、箱の赤いのも枇杷の色も表紙も扉も何もかもうれしき由申來り候。小生も嬉しく存申候。古泉君は漱石先生の序文を見て、先生がよくなつ

たと申され候。小生はまだ旅中から一回も先生へ消息致不申、今度は御挨拶致さねば成り不申場合に相成候へ共、何と申してよきか分らず困り申候。あの序文を小生はもう十遍以上も反覆して讀み申候。小生はすべてに於て幸福と存申候。

此葉書のうちで一番高い處が殘の島、蒙古軍に關係ある處に候。（裏面）（明治四十五年五月二十日　福岡市外東公園武井氏方より　福岡市西公園より見たる玄海の夕照の繪ハガキ　平福百穗宛）

其十七

ふと何か差上申度相成別包一箇相求め申候。此地自慢の名物と申候故何卒御笑味被下度願上候。匆々。（表面）

日曜日にまた佛像見に參り候。丁度此日遞信大臣も來られて、此大黑さんは袋が小さいから立つて居られる。もつと重ければ坐らねば成らぬなど串談いうて笑は

せ候由住持が申居り候。小生は此大黒天が好きに有之候。も一度行つて見申度、國分寺があると申す故それへもと存居候。(此間は久保さん夫妻で博多節をまごつてくれました)(裏面)(明治四十五年五月二十八日　福岡市外東公園武井氏方より　筑前觀世音寺佛像大國天の繪ハガキ　平福百穗宛)

其十八

御手紙拜見、雜誌は何も見不申候に付、新潮は是非御惠贈被下度願上候。咽喉が腫れたりして心もとなく存候。(表面)

一昨日久留米の南、船小屋の鑛泉に行き今日もどり申候。石人山の石人見て參り候。

兎に角高山彥九郎の墓にも詣で申候。(裏面)(明治四十五年六月二日　福岡市外東公園武井氏方より　筑前觀世音寺佛像持國天の繪ハガキ　平福百穗宛)

其十九

吉田博氏の如く、かういふ處を唯寫生して畫になると思ふは間違と存申候。（明治四十五年六月十一日　筑前芥屋より　筑前芥屋御椎石の神風窟之景の繪ハガキ　平福百穗宛）

其廿

對州へ渡るには博多から夜出て朝つく。博多へ渡るにもさうである。汽船は荷物を主にして居るのだから、客として我々はみじめである。何處へ行つても朝鮮と云ふことをいふ。釜山なども對州の人が眞先に行つて、それから壹州の人々が行つて開いたさうだ。北の方へ行つて見ると面白相だが、船は不便だし、陸路は險惡だし、病人には迚ても駄目だ。丈夫の人がゆつくり歩いて居るのには乾度いい處である。漁で持つて居る國だから百姓は下手らしい。昨日竹敷から歸りに富東

で一緒になつた百姓が、肥料をすると稻が駄目になるから只作るのだといふ。拔手がついて居てさうなんだから驚く。伊勢蝦を自慢でフライにして呉れたが始めて見た。よく獲れるさうだ。野菜は然し氣の利いたのは博多から來るさうだ。對馬の唄に曰く、

對馬名物鳶に烏又も名物淺根の石

然しとんびも烏も殆んど目に觸れず。昨日竹敷まで行つて見たが、途中の民屋は皆瓦葺で石を載せたと云ふものは少かつた。期待して居た烏賊が、竹敷から歸りに見ると、よつぽど鰑の臭ひに成つて居た。對州も一寸覗いただけでもう壹州へ渡るのだ。仕方がない。今日は雨である。

女の馬乘、せなには籠、三巾(はゞ)の前掛カス卷横ぐはへ

在から嚴原の港へ薪などを賣りに來る女が、歸りに馬上で辨當がはりに横かぢりに嚙るのがカス卷で、それは菓子の名である。馬は皆小さい。さうして島の産で

なければ跡を疾めて用をなさぬさうだ。（大正二年一月發行アララギ第六卷第一號所載　明治四十五年六月二十六日附　嚴原港より　繪ハガキ　平福百穗宛）

其廿一

昨日來て今日雨だけれど一通りは見ました。何もかも有りやしません。愉快でたまらないんです。（明治四十五年七月廿六日　宮島より　嚴島神社長澤廬雪筆の繪ハガキ　平福百穗宛）

其廿二

十二日に登山したら偶然其日から盆だといふことであつた。今日は牡丹餅を馳走になつた。大分粒の儘の小豆がくつついて居た。山上は何といつても凉しいには違ひない。然し寺院は皆同（道？）者等が泊るんだからお粗末なものである。尤も

それは客の種類に從つて區別のあるのは勿論であらう。山には蚊帳はないらしいのに蚊は隨分安眠を妨害する。それでも四晩ばかり泊ることにした。山上は幾度か火災に逢つたので、思つたよりは枯燥して見えるが途中は實にいい。關西へ來てこんな處は全くない。樹木は蔚々蒼々として小さな山雀の聲さへこだまに響いて大きく聞える。本當に天下の靈地へ來たやうな氣がする。途中人足等の噺に遂近頃のことで、百十七の老婆が伴一人つれて徒歩で登山したといふことである。百十七はどうか知らんが、大分の年寄であつたさうだ。婆さんは湯にははひらないで水ばかり浴びるといつて居た。（表面）念のためですが此の葉書の分だけは新聞へ出しては困ります。（裏面）（大正元年八月十六日（東京消印）　高野山より　高野山不動堂の繪ハガキ　平福百穗宛）

其廿三

拝啓。一昨日歸京仕り伊藤君には逢ひ申候。明日根岸に歌會ある由故、おほくの人々にもあひ可申候。大兄は只今も午後は御在社に候や。一寸御報被下度歸郷までに一度御目にかかり度と念じ居候。（大正元年九月十七日　下谷那須館より　ハガキ　平福百穗宛）

其廿四

栗は一本有之候へ共此間の嵐にて散々に實は落ち申候。下りし枝は一つもなき有樣遺憾至極に存候。お出に成るも無駄かと存候まま如此に候。（大正元年九月廿九日　自宅より　ハガキ　平福百穗宛）

其廿五

文展を見に參り申候へ共、大兄の作を缺きたれば、遺憾此上も無之候。小生病氣

少しおもしろからず候に付、今一度福岡へ参り申度、内々其支度致居候。（表面）日本の油絵は進歩はしたが、まだ描かれた人間が動いて居ない様に思はれますがどうですか。（裏面）（大正元年十一月八日　下谷那須館より　文展第六回南薫造氏筆六月の日の絵ハガキ　平福百穂宛）

其廿六

喉頭は既に全治致居候由申され大いに安心仕り候。数日の内に歸途に就き申度考居り候。（表面）瀬戸内海をふたたび船にてぐるぐるとわたり可申候。或ものの餘裕を見出し候上は山陰の風光にも接申度希望致居候。久保夫人より江さんと御噂など致申候。（裏面）（大正二年三月廿八日　博多千代松原より　筑前觀世音寺狛犬の繪ハガキ　平福百穂宛）

其廿七

前に來た時に見そこなつた佛像を、心ゆくばかり見ることが出來たのを愉快に思つて居ます。（大正二年四月五日　宮島より　嚴島大願寺國寶阿難尊者の繪ハガキ　平福百穂宛）

其廿八

ここに見える後の山へ此度も登つた。齋藤君は決して高い處へは登つてはいけないと小言をいふけれど宮島だけは除外例だ。松でも樛でもてんで翠が別である。博多で一昨日袷になつて爽快である。より江さんが袷で大丈夫ですかと案じてくれたけれど風邪など引きさうにもない。

山へ登る時に廻廊の近くの干潟に鶴がぶらりぶらりとあさつて居た。見ると去年の夏卵から出て四十日ばかりだといつた雛が大きくなつたのであつた。其時も彼

は脚だけはすばらしく發達して居たが、身體はいかにも短い軟かなさうして褐色なむく毛で覆はれて居た。今ではもう一人前の身體で大威張して居るが、頭の毛だけがまだ黑くならないで去年の俤を見せて褐色である。

山から下りて來たら潮が廻廊の下へ一杯に滿ちて居たが、彼はその長い脚がまだ充分の餘裕あるを示しつつ大得意で水を渉つて居た。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　四月五日　宮島より　繪ハガキ　平福百穗宛）

其廿九

八日の九時頃門司から、瀨戶內海第一の汽船紅丸の一等室に身を据ゑて愉快な航海をした。昨夜大阪まで行くと時間が遲れるので、七時半に神戶へ上陸してすぐに京都へ來た。博物館繪畫が今日までで陳列替になることを、大阪の新聞で見て居たからである。案の如く觀覽中二室も替つた。表慶館のやうに愚圖々々して居

ないのは我意を得て居る。彼の建仁寺の風神雷神があつた。さうして光信筆といふ北野緣起があつたが、菅公の怨靈といふ雷神が、宗達の屛風のと姿勢がちつとも違はない。領巾のやうなものの靡いてるから、太鼓の撥を握つた手の向き方から、手首足首に金の鐶の篏つて居るまでそつくりである。宗達は光信からとつたのである。只宗達のには二角を生じて金鐶を鉢卷して居る。それが光信のにはない。それと光信のは身體が赭いが、宗達のは胡粉で白く描いてある。金屛風であるのと、風神との配合具合からあゝしてあるのだらうが、宗達のは氣持が非常にいい。それから光信のには、太鼓が九つからも描いてそれが中々大きく、且つ明瞭に巴の紋まで表はしてある。處が宗達のはほんの太鼓といふ形ばかりに、然かも手首から先の大きさ位に薄く染めて數もずつと少ない。餘程考へたものだ。どうしてもこの雷神だけでは宗達の方がいい。だけれど宗達は雷神だけを全體として取扱つたゞけに、光信のはそれが長篇の一齣に使はれてゐる。其處に大變な相

達が生じて來る。宗達も少し功を光信に讓らなければならぬが、より以上のものに成就した點は矢張り偉大である。世間の多くは原本より劣るものを仕出來すのだから、餘計宗達は偉大である。二つの雷神が別室であつたので、僕は何度となく行つたり來たりして見較べた。國寶ではないが山樂の葛花の屛風が出て居たのを見ると、宗達とか光淋とかいふああいふ專門の豪傑の事業も、既にあの頃に胚胎してあるといふことがつくづく覗はれる。朝鮮鐘も大分見た。毎日よく腹が減る。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年四月十日　京都より　平福百穗宛）

其卅

緣むすびの神樣へおまゐり致申候。

（大正二年四月十七日　出雲杵築より　出雲大社の繪ハガキ　平福百穗宛）

其卅一

度々の御たより難有く御禮を申します。只こちらからは一回も申上げないのは何事でも懶く成つて困つて居たからです。この間の御手紙で今後のことがすつかりわかりました。何よりもお喜びを申します。小生は昨今二年の旅行で美術文藝に關する考へが變になりました。どんな大人物だつて生涯にさう澤山出來るものではないと思ひます。生活の爲にも人間は努力する必要がありますが、生涯の力を籠めつくす程の心が今も大いに必要と思ひます。文展などはどうでもいいのですから骨折つて下さい。（大正二年十月三十日　自宅より　鹿島神宮奥殿及森林の繪ハガキ　平福百穗宛）

其卅二

拜啓。小生二三日この方非常に工合宜しく、日方も一ヶ月前と比較して七百匁を

増し申候。それ故この處無理は致申間敷、尙四五日間凝然と致置く必要有之可申と存候。それ故二十日位までの御手紙ならば當所へ御差出被下度願上候。三穗は漁師などの間借りにても結構に有之候。（大正三年一月十四日夜　神田區金澤醫院より　ハガキ　平福百穗宛）

其卅三

母の病氣のため俄に本日歸國仕候。尤も小生自身は非常に工合よろしく、一昨日も亦三四日間に二百匁を增加し居たるを發見致申候。大抵以前の最絕頂の目方にまで達し申候。これからもつと增加の見込に有之候。前途大いに有望に有之候。（大正三年一月二十三日　神田區金澤醫院より　ハガキ　平福百穗宛）

其卅四

昨夜は餘り粗末なものを差上げて申譯がありませんでした。齋藤君からお願する様に依賴はして置きましたが、小生としては大變な事情のもとに是非欲しいのですから、あの毬を二つ程また筆執つていただきたいのです。事情はいつか判明しようと思ひますから聞かないで下さい。只お願ひ致します。（大正三年三月廿三日　神田區橋田病院より　ハガキ　平福百穗宛）

其卅五

私も漸次いい方であります。

一昨日訪ねてくれた先輩の話に鴨は大分評判がいい相です。此間電車で工科大學の塚本博士に逢つたら今度の鴨は面白いぢやないかといはれた相です。私も近く一寸行つて見る位は出來ようかと思ひます。

裏面に苦心のあるものは、何處かに人を動かす力が潛んで居ます。（大正三年四月二

□　神田區橋田病院より　ハガキ　平福百穗宛）

其卅六

拜啓。御不快の由齋藤君よりも承り候へども、御葉書に接し實に意外の感じ致申候。今日あたり朝の内一寸御尋ね申度と存じ居候處、一昨日より少しく宜しから ず大事に致居候に付、途其儘に相成申候。今日入浴致候が夜分は少々熱も出で申候。然し七度位の處にて格別のことは無之候へ共、服藥中散さもなくてはなかなか容易なるまじく、只大事大事に打過ぎ申候。昨日は鼻に風邪を引いて頭痛有之今暫くの辛抱是非もなく候。退院の後は九州へ參らねば成り不申、途中奈良の藤は見申度候。工科大學の朝鮮の分だけ展覽會をのぞいて參り申候。實に何とも申様なきは墓穴の壁畫に候。鐘にも驚き申候。斯様なものを發見し研究しつつある人々は幸福に候へ共、藝術家は尙更のこととつくづく感じ申候。鴨はまだ拜見不

致残念に有之候。

其卅七（大正三年四月十三日　神田區橋田病院より　ハガキ　平福百穂宛）

近頃になつてから兎角に熱が出ます。尤もたいしたことではないのですが、咽喉がどうもいけないのです。それから昨日少しは熱のあるのに神尾の處へ行きました。矢張いけないのです。も一度思ひ切つてそこを取ることだと申します。然しさうなれば久保さんにやつて貰ふ方がいいのですから、ここに十日も居たら一寸郷里へ歸つて九州行を決行しようと思つて居ります。ですから此間の晩の畫は是非近い内にお願致します。それと復た絖を二つお願致したいのですがどうでせうか、月並の畫といふ仰でしたが至極結構です。さうして成るべくならば少しは目に立つもの、成る程私の處にあるものは黒人の見る畫だといつてくれた人がありますが、これはどうしても殘さねばなりません。私の唯一の樂みにして置きま

す。萩の葉は晝見るとさう濃いことはありません。其内朝うかがひます。（大正三年五月十日　神田區橋田病院より　ハガキ　平福百穗苑）

其卅八

小生昨日上京夜久保田君をたづね到頭十二時近くまではなし、宿へかへつて終夜眠らず、其間咳止まず困り申候。今日はまた博覧會などへ參り候爲め疲れ申候。御訪ね仕度存居り候て其儘に九州へ立ち可申候（明日午後三時五十分）不惡願上候。

福岡へ行けばといふ望みある故少しも心配不致候。（大正三年六月××日　神田區三國館より　ハガキ　平福百穗苑）

其卅九

出立の際は御見送下すつて御好意申上様もございません。途中三泊して十日にこちらへつきました。病室がいつも満員なので十日間待ちました。廿日にやつと入院。私は特別の待遇ですから單獨の一室を占領して居ます。

あの掛物は早速應接間へ飾つてもらひました。秋海棠は夫人さん大喜びでしたが、私に歌を書けといつて到頭私が負けました。近頃これ程困つたことがありません。廿日の朝ふと書く氣になつて筆とりました。一向勝手がわからぬものですから、名畫を臺なしにして濟まないことをして畢ひました。さうして其朝歌が書けたからこれは入院が出來るんぢやないかと、一寸虫が知らせたといふのですかさう思ひましたが、案の如く出來ました。只入れてくれたのです。それで御馳走をたべて肥えようといふのですが、食慾のないだけが困つたことです。其内燒いて貰ひます。何だか少し見込があり相にも思はれます。歌が出來ればいいとだけ思つて居ます。（表面）

御葉書をかいてる處へあなたの葉書がつきました。私の方から後れて濟みません。すぐ病院へはひれる積なので、其上どこへも御知らせしたいと思つたのでした。さうして意外に暇どつてしまひました。（裏面）（大正三年六月廿二日　九州醫科大學附屬醫院より　筥崎宮樓門之額龜山天皇宸筆の繪ハガキ　平福百穗宛）

其四十

私も暑くて困つてます。然しここでは大變な待遇を受けてるのですから、苦しいなどとはいはれたわけでないのです。手紙をあげたいと思ひながら、あなたから度々御葉書をいただくばかりで濟みません。

鎌倉行は近來の快心事と思ひます。どうかこれから大きなものへしつかと取りかかつて下さい。

先頃あの増宮村へお出の樣に萬朝報で見ましたが、實際行つてもいい處なのです

か。

私は咽喉の方が焼いた處は大分いいといひますから、あと暫くしてここを出て日向の青島の海水浴場へ行つてて、歸國の際に復た久保博士に見てもらふ積です。歸國して仕まつたのではすつかり便宜を失ひます。

ここには海岸のこととて松の樹ばかり、其所爲か蟬が鳴きません。もの足らぬ感じがします。庭のけふちく桃が大分咲き出してそれだけがうれしいと思ひます。歌だけはどうにかつくりたいと思つてますが、此間の原稿以後にはさつぱり浮びません。またアララギと離れなければ成らぬ星合かも知れないと思つていい心持でありません。三年ぶりでやうやく氣乘りがしたのですから此儘では惜しいと思ひます。

觀世音寺の佛も大分修繕が出來てるだらうと思つてまだ見ません。もう博多へ來て四十日ですが、今年は大きに身體の工合が違つてるのですから仕方がないので

す。

これはまだかなりさきのことと思ひますが、私は別段の事故が生じない限り、まだ見たことのない北陸道を踊りたいと思ひます。停車場の附近でそれぞれ見るべき處をあなたの手で一寸おしらべ下さい。それをお願ひ致します。

またあとから申上げます。どうも近頃うまく手紙も書けないでいけません。（大正三年七月二十日　九州醫科大學醫院より　封書　平福百穗宛）

其四十一

いつかの御葉書の明月院の上杉重房の木像は御覧になりましたか、あれをもつと大きな寫眞版で見ましたが、何といふいいものでせうか。私はまだ鎌庭（倉？）を見たことがありませんが、こんど是非いつて見たいと思ひます。能樂堂も見せてもらひます。日向にも繪葉書はあらうと思ひます。（表面）

明後日退院ときまりました。まだ本當によく成らないのですが、一寸日向の海岸へ行つて居て、もどりにまた何とか手術してもらふ積りで居升。久保博士は私の爲には至極いい人なんですから、頼めば大抵のことはしてくれるのです。いまのところは餘りいぢつたから一寸手をつけまいといふことに成つて居るのです。明日の朝他の助手に見てもらつて歸りに先生へねだれる材料を見つけておかうと思ふのです。（裏面）（大正三年八月十二日　九州大學醫院西二ノ一より　福岡百景名島の夕照の繪ハガキ　平福百穗宛）

其四十二

十四五日頃迄には博多へもどります。どうしても今一度手術をしてもらはないといけないのです。日向は最初から私には餘り幸な處でなかつたやうです。

日向にも繪葉書はあるだらうと書いてあげた樣に思つてますが、此はと思ふ處に

碌なものはないのです。何分にも氣分が惡いので困つてますが、身を落つけるところなくこんな南の方まで來ました。景色がいいから今少し南へ行かうかとも思つてます。

歌はもう作りません。殘念ですがすつかり出來なく成つたのです。歩けば無闇に出來た昔が懷しいと思ひます。（大正三年九月三日　日向油津港より　日向びしやごの奇岩の繪ハガキ　平福百穗宛）

其四十三

青島へ昨日もどりました。こんどの宿には括枕も座ぶとんもないのです。それに時化で生はなし。災難です。もう博多へもどりませう。昨日アララギを見ました。森田君の消息は非常に面白いと思ひます。近來西洋から通信がおほく、自己といふものを確かにして居る樣で、愉快な現象と思ひ升。アララギには澄んだと

か冴えたとかいふ分子が見當らなくて困つて居ます。いつか久保田君からあの鴨が褒狀に過ぎないといつて何かいつて來ましたが、私は構はないと思ひます。あなたもさうだらうと信じ升。どうか大家に成らないで下さい。實質が最後の勝利を占めるのです。極りきつたことですが。（表面）

見るところ皆熱帶植物です。それは島にばかりあるので地理學上有名なんださうです。（裏面）（大正三年九月七日　日向青島より　日向青島檳榔木の繪ハガキ　平福百穗宛）

其四十四

秋海棠の御葉書に九月十一日とありますがもう花はないでせう。私も一年庭へ植ゑたら花も見ないのに、何時の間にか絶滅して遺憾に思つたことがあります。其後はもう此の病氣です。どうも秋海棠といふ花は暑い內に少し冷かな處のある季節にしつくりと合つて居るやうに思はれます。今日は少し冷える位な雨の日に、

白地の浴衣でも着て居て見るのが何ともいはれずいいと思ひます。昨日はこちらは雨でもう袷羽織を引つかけましたが、あなたの秋海棠を見てふと其心地になつて一首作りました。

　うなだれし秋海棠にふる雨はいたくはふらず只白くあれな

まだ發表する歌ではありません。（表面）

文展には例の神話をお描きに成りますか。今年間に合はなかつたら來年にして下さい。大切なことですから急がずに願ひます。

齋藤君のはもう夫人に成つたのですか。同君からも青島へ二人で轉地のたよりがありました。大に幸福であつたと想像します。同君も少し生きて來るわけです。其ことに就いては私からは何ともいつてはやりませんでした。

　とこしへになぐさもる人もあらなくに枕に潮のをらぶ（おらぶ？）夜は憂し

不思議に昨日から熱がさめて居ます。此儘つづけばうまいと思ひます。食事も隨

つて十分にいけます。

二十二日にもどつたのですが、昨日まで工合が悪くてひどい目にあひました。熱があるので手術も見合せといはれて失望しました。

當分はこちらに居て、其うち何とかしてもらつて歸る積りです。

歌のことで齋藤君から不足をいはれて大に困りました。

然しどうも自己の良心の許さないものは、仕方がありません。（裏面）（大正三年十月一日　福岡市外東公園平野旅館より　福岡百景鶴來島の風光の繪ハガキ　平福百穂宛）

其四十五

御葉書拜見。七面鳥屏風半双はいつか拜見致し候ものに有之候や。あれならば人選せぬが奇蹟とも可申候。小生も病勢おもしろからず。粗末な宿屋に獨りで困つて居申候。十一月にはひつたら歸り申候に付、七面鳥も拜見が出來ることと思ひ

樂み居り申候。しきりに描きたいと仰せられ候こと、何より何よりのことに存じ候。それをどうか依頼品等に骨折る傍ら、何か胸裏に湧いたものは、二年でも三年でも工夫を凝して、何年かに一度位の割に、大作を發表され候樣切望致し候。五千圓の屛風十双など申す無駄骨折は、眞實可哀想な畫家とあはれになり申候。横山大觀審査員を失脚して其畫の價格五分の一に下落したりと申すこと事實に候や。世の中はあてに成り不申、何事も自己以外に無之候。（表面）

森田君の消息に就ては小生は感嘆せる一人にて、早速アララギの誰かにあて申送り候等に候。留學の畫家にも段々日のあいた人が出來て心強く存申候。

今月のアララギ歌は澤山なれど、小生等と大變に立脚地を異にしたるものおほく、今は暫時批評も致兼候。小生は一寸「冴え」といふことを申おくり候へども、彼の人達には却て反感を起しはせずやと存ぜられ候。齋藤君など北原白秋氏の歌を非常に讃嘆致居候へども、小生には北原氏の作を歌として許すには、餘りに不備

の點がおほくて困り申候。此邊小生の合はぬ處に有之候。然しこれは大兄へのみ申上候。暫時御吹聽はお控へ被下度候。

小生の日向行の消息など、實はアララギへ出してもらふことを窃に望み居り候に、それに就いては一行も無之候。小生の廣告の爲めには無之、特殊の事情の存する故に有之候。（裏面）（大正三年十月十日　福岡市外東公園平野旅館より　福岡市を望む繪ハガキ　平福百穗宛）

其四十六

拜啓。此の二十日程前より八度以上に昇りたる熱、今もつてさめ不申少しく困り居り候に付、何處へも手紙書かず、戰地に居る舍弟へも漸く昨日一寸消息致候が、見ぬ前に戰死などさせては、殘り惜しき心地も致可申候。實は先頃七面鳥製作の動機に就き御葉書下され候折、寢て居て嬉しくて嬉しくてたまり不申、其時思ひ

切つて手紙書けばよかりしに、遂氣分惡しく一寸眠りしがくされにて御無沙汰に相成申候。あれ程のことと思うて筆執る畫家は當世に何人ありやと、問ひ申度程に有之候。小生は近來どうしてゐ繪畫には主として氣韻生動を尊重致度、然してそれは德川時代末の南畫の先生方の間違つたものとは異り申候。小生には鳥羽僧正の動物畫卷も、藤原時代より鎌倉時代にわたりたる極彩色の繪卷物のおほくも、すべて氣韻の生動せるを覺え申候。同時に小生にはそれ等の畫家は悉く製作の當時に於て、所謂其描くべき對照物に乘り移りたるものなるを思はしめ申候。奈良あたりの彫刻を見ても、すべて此感をたしかめるのみに有之候。作者の乘り移つたる作品にしてはじめて氣韻の生動を見るべくと小生は固く信じて疑はず候。それだけ小生には七面鳥製作の動機を拜誦して感慨無量に有之候。三等賞など世間の俗衆に知らしむる方便には、全然無用のものにも無之と存候へども、二等の顏ぶれなど見ていささか人を愚にしたるものにも相見え申候。恐らく貴兄と雖も從

來は今度の七面鳥程しみじみしたることはさう幾度もは有之間敷と存申候。畫家としての用意に於ては至極と存申候。小生も十日前に受けたる手術效を奏して苦惱したる咳も薄らぎ申候へば、成るべく文展の開期中に歸東致度心組に候が、いつまでに歸れば宜敷候や折返し御知らせ願上候。此頃寢てばかり居て歌など一向に作り不申、この間齋藤君より不平をいはれ候へども、何とも致方無之候。以前は歸途に京奈良を十分に見物の積りに候ひしが、餘りの長き滯在に不如意の廉も生じ、今回は一二泊位にてやつとのことに歸り可申候。先頃差上候ものは、小生はあの家の老主人が頑固に其家傳來の方法を墨守し居る處氣に入り、大贊成の品に有之候。五ケ月間に四五町さきの博多へ行きしこと僅に三度、其三度目の記念に有之候。其後寢てばかり居り申候。只食事は相應に參り申候故、いささか手賴に存居り候。先は右まで。匆々。（大正三年十一月三日　福岡市平野旅館より　封書　平福百穗宛）

其四十七

熱がふいとさめて五日に成ります。咽喉はまだいけないので、も一度手術しなければ成りますまい。歸國が一寸遲れます。博士は忙しい上に大事をとつてますから、なかなかしてくれません。隨分ねだれる積りで居ます。それで此間のお手紙に何でも欲しいものが有つたらいひおくれといふ痛み入つたことでしたが、今夜ふつと思ひつきました。それは例の毬を二つばかりお願ひ致したいのです。どうでせうか。そして成るべくいそいでお願ひ致したいのです。誠に勝手なんですけれど。こちらに居るのが何時までなのか少しもわからないものですから、何事も氣がせくのであります。餘程こんなことは控へようかと思つたのですが、心でいろいろ押問答せぬ内に申上げた譯なのです。

それから齋藤君への赤光評なのですが、どの位私は心を苦しめたか知れないので

すにしたら、しひてその事を念頭から去る樣にしたら、何程心が休まつたか知れません。

も一つ二三年前の文展に大阪の北野恒富といふ人の日照雨といふ美人畫がありましたが、それが假字では「そばえ」とあつた樣でした。そばえといふのは日照雨と書いてさうよむのでせうか。辭林など見てもないのです。若しさう讀むのだとすると、私の歌が一首復活するのです。さうしてアララギの一月號へ少し纏つて歌が出せます。恐入りますがおわかりになりましたら大いそぎで知らして下さい。若し手がかりがないやうだつた(ら、脫?)無理な處は申譯がありませんから御免を蒙ります。(大正三年十一月十一日　福岡平野旅館より　封書　平福百穗宛)

其四十八

此葉書をかく時外は雨でしたが一時止みました。此間の庭に落葉を焚くの御手紙が思ひ出されます。颯々として松の梢にひびきが聞えて居ます。御たよりで大分歌が出來てます。アララギで御らん下さい。

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かん庭の土白く

どうも只灰に霜置かんだけならいいのですけれど、力が足らない作者だから駄目です。

齋藤君へは原稿おくる時に手紙をかきます。感想もかけと云ふのですが出來さうもありません。かくことはありますが。

徒三つきのふとどきました。やつぱり私にはおもしろく思はれます。厚く御禮申上げます。只當地に御禮に差上げるものが見當りませんから、暫時御ゆるし下さい。私はまた十日か十二日に咽喉を燒いてもらふことに成りました。それで十分かどうかも疑問ですから、何だか博多で越年することになるかも知れません。心

細いやうにもあります。七面鳥が見られないでしまつて殘念至極です。森田恒友君へは其内手紙をかきます。アララギの原稿が出來あがつてからのことです。幸に熱に其後あまり出ません。先月末からふと歌の心が湧いて、かなり歌を作つたものですから少しいけません。熱のひどく出た頃は何も考へずに居たものですから、頭はかへつてよかつたのです。十日までにはどうしても齋藤君へ原稿はとどく樣にせねばならないけれど、うまく行かないで困つてますから、もうまづいのでも構はずに出しますが、それでも六十首にはなりません。いつか手紙で申上げた「日照雨」がわかれば歌が一首活きるのですが、おわかりにならないと見えて困りました。おわかりになつたら齋藤君へおはなし下さい。（大正四年六月發行アララギ第八卷第六號所載　大正三年十二月六日朝　福岡より　平福百穗宛）

久保田俊彦宛

其一

拜啓。かねて御目にかかりたく存じ居候へども未だ機會をえず、遺憾に存じ居り候。今秋甲斐より御地へまかり出て、木曾を經て再び關西を遊行いたし度、端書のはしへ認め松本在なる胡桃澤氏へ申送候ところ、日取など貴兄へ通知ありたき旨さき頃申來り候。早ければ二十二三日、遲ければ二十五六日に東京を出立の豫定に候。途中古屋夢拙氏を相たづね、更に昇仙峽をも探らむと存候へば、少くとも其間三四日を要し可申候。山水明媚の地に御連中と相會し候こと、快之に過ぐ

るものなからむと存じ候。出立の際は改めて御通知可申上候。早々。（明治三十八年八月五日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其二

拝啓。昨秋御約束の品其儘に打過ぎ候て、心中苦しさに不堪候故、此地にて手に入れ候木の實少々さし上申候。火に掛けて熬つてたべ候時は味も頗る宜しきものに候。來春芽を吹かせ候とならば、濕りたる土中に貯ふべく、然らざれば忽ちに蟲つき可申候。小生は只今利根河の沿岸に來り居り候。此木實のありしは弘經寺と中寺の境外地にて、椎の木は他の樹木と共に伐採せられ候へば、明年は此實も拾ふ能はず候。茶店の婆さんが日々に子供等の隙を見て拾ひ集めたるを貰ひたるものに有之候。昨秋の品々只今にても御入用ならば、今度こそはさし上可申候。

小生は明後日あたり歸宅可仕候。

馬醉木六の萱草の花、潮音は頗る譽め申候。小生は三四日前上京左千夫宅の會にも出席、潮音の手紙も見申候。一般の批評は後半明瞭に過ぎたりと申ことに有之候。潮音のいふ如く淸新の氣は全篇に溢れたりと存じ候。早々。（明治三十九年十一月十三日　下總北相馬郡取手町より　封書　久保田俊彥宛）

其　三

拜啓。御旅行中よりの御葉書難有存申候。

昨日伊藤君より葉書とどき木曾福島と有之しにはおどろき申候。それによれば二十五日は歸京と申こと、馬醉木流としては思ひの外の速かさに有之候。小生は或は今頃木曾路にて降られ候ことと存じ居候。伊藤君は寢覺の床を天下の絕勝なりとして「察するに君は見ずして過ぎたらむか」など申來り候。此れ一つは同君が今迄寢覺の床を聞知せざりしと、同君には山水到る所無闇におもしろく見ゆるよ

り起り候批評に有之候。然し小生も寢覺は面白しと存候。尤も此は川の岸までおりて見ねば眞の趣は解し難しと存ぜられ候。小生の下りし時は雨中にて不少困難致申候。二十日前後は此邊は雨なかりし樣記憶いたし候。木曾路も定めし雨なかりしならむかと存候。今日あたりは伊藤君は例の如く、近い眼を机にすりつける樣にして居らるるならむと存ぜられ候。

木部屋の軒の枇杷の實つややかになり候へども、雨の日にちぎりては味よろしからず候。此枇杷伊藤君平福君の來られし時、非常の豐熟にて其後は餘りなり不申候。窓前の合歡の木漸く蕾を持ち候。梅雨晴れ候はばさき申さむかと存じ候。過日しらしら明に見ておどろきし桑圃、今日は既にめきめきとそだち申候ことと存じ候。

御約束の茶は只今の雨天にては口をあけ候こと叶ひ不申候に付、天氣に相成り候はば差上可申候。（明治四十年六月二十七日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其　四

拜啓。兼ねて御約束の茶は非常に粗製なることに氣づき申候故、心進まず其後も空しく打過ぎ申候處、此は却てよろしからずと存候に付少々さし上申候。飛んだ約束をしたるものかと後悔いたし候。

扨て甚だ御迷惑の御願に候へども御地に於ける桑園の施肥のことにて概略御通知下され度

一、三百坪に二十圓の肥料とすればそれは一回に施すものか、二回か、一回ならば何時、二回ならば何時と何時。

一、肥料は何々。

右にて大抵相分り可申候へども、實地家に一應御たづねの上、御心づきのことは洩さず御報下され度候。

尤も小生地方のは桑は春蠶の上簇の折に、根もとより刈とり申ことに候へば、御地の桑の作り樣とは多少の相違有之候こととは存申候。

左千夫君の家は今回の水害におそはれ遂に浸水いたし候由、加之原稿は悉く水中に沒したりと申候。馬醉木は更に遲れ可申候。今年四回の發行も六ヶしかるべきかと存候。小生は依然として歌なく、漸く昨日初秋の歌といふものを得申候。空想交りの歌に有之候。其うち發表可仕候。馬醉木の遲れたるため、或は今回發行の分へ揭げ可申かと存じ候。今秋はどこへも旅行不仕、氣ぬけの樣になりて暮し居候。御わらひ下され度候。

庭前一むらの葉雞頭今漸く紅を呈しはじめ候。到る處秋色十分に有之候。（明治四十年九月三日　自宅より　封書　久保田俊彥宛）

其五

拜啓。秋氣漸く身にしみじみと致し來り候。御地には霜ふり候噂も有之候が如何に候や。

此間中はこまごまとの御手紙、桑畑のこともほぼ承知仕り難有奉存候。肥料ぎらひの連中に見せて大いに說明をこころみ申候。小生も隨分奮發して桑作りいたし可申候。後日更に御たづね可仕かども有之候。其折は改めて御示敎の程希望仕り候。今回はまた名物かりん羹御贈り下されかさねがさね難有奉存候。あれでは却て御返禮が過ぎ申候と御氣の毒に存申候。尻から押す處、其具合殊に氣にいり申候。自慢して人にも味はせ申候。今夜月明かならず、洋燈の光にて緣先の芙蓉の花白々と見え申候。萎美たる花の形、夜みるに相應してえもいはぬ風情に有之候。早々。（明治四十年九月廿日　自宅より　封書　久保田俊彥宛）

其　六

拜啓。小生近來に到りて漸く歌ごころ起り、少々づつよみいで申候。いづれ日本などへ出し可申、此十日ばかりのうちに數はなかなか有之候。

芋がらを壁につるせば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

薬雞頭は籾のむしろを折りたたむ夕夕にいやめづらしき

紅の二十日大根は綿の如なかむなにして秋行かむとす

こほろぎははかなき蟲か柊の花が散りてもおどろきぬべし

秋風に否を否をとおも振りし芋の葉なびきぬ一夜霜ふり

尤も以上の如きものにて隨分非難もおほかるべく、左千夫君は否と申さむかと存じ候。此が四十首ばかり有之候。其うちに

柿の木に柿くひ居れば藪つづき隣の藪の柚子黄み見ゆ

稻を扱くをちの庭人驚かむとどかばそこに柿なげて見む

小刀の鞘うち拂ひ手をのべて一つ二つとちぎておもしろ

等八首は大兄の過日の北山行の御葉書に對し、小生の近況を報ずる積にてよみたるものに有之候。兎に角四十首を纏めて出して見たき樣存ぜられ候。あとになつて見たならば、厭になり可申は申までも無之候。

小生此中句以來八つあたりの氣味にて秀眞君へは

土芋も洗へば白し鑄物する人に戀ひむは浴みして後

などくさぐさ申送候。ふと何か浮み候はば、誰へでもからかひ申度存居候。篠原君などには何か種は無之候や。只あのぼんやりとりとめなき處だけにては困り申候。

最後に小生の歌もつまらぬもののみなれど、歌は只文章にいふことを、其儘三十一字にしたるのみにては洵に興味索然たるべく候。大兄の近業はおほく、此の普通なる文章中の普通なる數語を排列したるが如く相見え申候。等しく目に映ずる處のもの、一たび作者の頭腦を透して現はるる時、其所に生命を有せざるべから

ず。即ち作者の主觀が濃く又は薄く表はれねばならぬものと存じ候。此點に就いて小生の昨年あたりまでの、唯々自然の材料にのみすがりたる寫生の歌は全くつまらぬものと存じ候。其材料はつまらぬものでも、其人の見様如何にて、一首のうちの一句に生命を保たしむるものをも得べくと存じ候。此邊餘程注意して今回の歌は作り申候。素より未だ滿足なるものを得べき道理も無之候故、非難百出なるべく候へども、何かへ表はれ候折はいく重にも御批判の程相仰申候。
大兄の御作に就いての愚評に就いて御説も候はゞ、折返し御もらし下され度候。
今夜ふけ申候に付、忽卒に此狀したため申候。よろしく御判讀願上候。早々。

前掲柿の歌は柿とりにのぼりたる時の歌のうちに有之候。

前述のうち自然の材料のみにてもおもしろきものはうべき道理なれど、それは非常に六ヶしかるべく候。他に例もなき故、小生の作にて申上候。昨年の分なれど、

南瓜の茂りがなかに抜きいでし葬(ハグサ)そよぎて秋立ちぬらしを岡麓君は三四の句に秋意十分なりと申され候。如此讀者に向つては、作者は感謝せねばならず候。小生の前述の主觀と申候は、此樣なものと覺召され度候。（明治四十年十月二十八日　自宅より　封書　久保田俊彥宛）

其七

拜啓。過日の御手紙によれば、伊藤三井兩氏間におもしろからぬ感情の行違有之候樣子にて、甚だ御苦心遊ばされ候趣、尤も伊藤君よりは先日葉書にて、非常に三井氏に對する不平を申來候へども、小生には何のことか一向譯わかり不申、反問も不致居候處、今日伊藤君より葉書來り、ホトトギスへ歌を出すといふことにて、三井君の誤解を招き候譯にて、其後ホトトギスはやめに致し、三井君とも逢ひ候處、只何事もなく感情更に平日の如く相成、雜誌の命名もいたし候由、平穩

に歸し候へば安心せよとの文意に有之候間、大兄にもちつとも御苦心遊ばす點は無之候に付、以後は只三井君の雜誌へ御盡力相成候はば其上は無之と存候。小生はホトトギスへ歌を出すといふこともちつとも知らざりしことにて、小生は餘り氣にとめ不申候。
本來根のあることとならねば、側から左程心配せずとも纏りつき不申ことは無之と存候。
小生も今年は身體の具合よろしからず困り申候。先日は三井君よりも長文の手紙來り至極の懇切にて、十分望あることと信ぜられ候。小生も出來るだけは骨折る積りに有之候。されど近來は兎角氣乘り不仕、小說も二篇ばかり材料はあれど、筆とる氣になり不申候。
近來晴天持續して寒さうちにも心地よく候。小說も其うち書き可申候。早々。（明治四十一年一月三日　自宅より　封書　久保田俊彥宛）

73

其八

拜啓。過日は比牟呂御惠贈なし下され難有奉存候。突如として姿をかくし、更に又突如として現はるる處、諏訪式とも申すべきか頗るおもしろく存申候。殊に印刷部數の少なきこと、從つて定價の極端に不廉なること、而して更に寫眞版の極端に贅澤なること、一として諏訪式ならざるものは無之候。重ねて其内容の胡桃澤を有し、望月を有し、堀内を有し、篠原柳澤を有する處、諏訪式の抱擁するところも亦恐るべしと存申候。

此頃天氣晴朗なれば春暖の加はれるを覺え申候。湖水の氷もとけそめ候はむかと存じ申候。小生は近來更に歌なく面目相立ち不申候。殊に茜二月號の歌の如きは唯慚愧の外無之候。三月號の批評の項に常音氏の「歌はなぐりつけに寫生」云々の數言は、小生の頭上に打撃を加へられたるが如く相覺え申候。それにしても昨

秋いさゝか得々として大兄へ手紙差上候ことなど以ての外の心得違ひと後悔致し居り候。小生は近來文章の頭になりて歌はますます出來不申候。此も一時の現象致し方も無之候。不惡御宥恕なし下され度候。先は御禮のしるしまでに右申上候。御意見などうけたまはり候へば幸に有之候。匆々。

近來雛は如何に候や暖く相成候はば、又雛雞にいそがしく相成可申候。人を慕ふ處面白からず候や。（明治四十一年三月十日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其　九

小生は此下妻といふ地にて高等小學を終り申候。此沼のほとりに住みしため自然に泳ぎを習得いたし候。

下妻は小生の地より二里、鬼怒川を越えて行く、小生今も月に數回は行く處に候。

（表面）（明治四十一年八月十日　自宅より　下妻砂沼の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其十

小生の土地にては鬼怒川の堤に野茨の花の白き時、即ち五月中旬が尤も好きな時に候。尤も強き力を持つたるは梅雨の時期に候。十月は強烈なれども、同時に凋落の色を現はし候。（表面）

鬼怒川の美の一部は檣に白帆なり。されど實際は此葉書よりもよし。（裏面）（明治四十一年八月十日　自宅より　下妻十勝鬼怒川歸帆の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其十一

一昨夜ふと作りたくなり、小生としては珍らしく歌が出來申候。榛名山上の濃霧の歌に有之候。一二首は物に成り可申かと存候。アララギへ出す原稿無之候故、此歌をおくる積に候。先日申上候如き六かしき注文には合格せぬものに付、掲載

の折は其積にて御らん下され度願上候。一二首御目にかけ申候。（表面）

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒に相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ

おもしろき天つきりかも東の間に山の尾ぬれを大和田にせり

此森から小生宅迄一里に候。森から右手に見ゆる鬼怒川堤を行きて渡しへかかれば半里足らずに候。此堤野茨のさきし時殊によろしく候。（裏面）（明治四十一年九月二十二日　自宅より　下妻十勝宗道歸帆の繪ハガキ　久保田俊彥宛）

其十二

拜啓。淺間も赤城も雲にて登山することを得ずして、去る十五日歸宅仕り候。それでも家を出てから廿七日目に有之候。時間のかかりし割には旅行の區域は甚だ狹く候。信州も下高井郡をぐるぐると廻り候に不過候。御地へも沓掛から追分へ出て御立寄申度と存居候へ共。十月の初旬に小生の弟にて東京へ昨年養子に參り

候もの夫婦連にて、始めて客に參る手筈に相成居、かたがた其意を不果殘念に存申候。今回の旅行秋山を出づる日より右の膝の所に大なる腫物生じ、野澤峠、澁峠、など非常の難儀仕候。總身に惡寒を感じ候こと、今更ながら腫物には閉口致申候。澁峠の絕頂に今年は空屋の茶店有之候まま、そこで馬士の焚き殘しの榾を焚きつけて二時間も暖まり申候。峠は濃霧に包まれ居候こととて、榾火に逼つて霧が吹きつけ來り候。足は時々休ませねばならず、休めば其步き出しに三四町が程は腫物にひびきて惱まされ申候。澁峠を越えて草津に宿り翌朝膿出でやがて足輕になり申候。

昨日漸く御惠贈の比牟呂通讀仕り候。歌の數のおほきに驚き申候。近來小生は作歌の勇氣も失せ候ためか、妙な頭に相成容易に他人の歌に感服出來兼ぬることに有之候。本誌の諸作皆面白しと申せば面白く候へ共、總體に今一段突き拔けねば今日の小生には滿足致兼ね候。此は餘り漠とした申やうにて御了解相成らずと存

候へ共、要するに數首の歌を連ねて其各が餘り異らぬ意味のもの許にては飽き可申候。比むろの歌は何となく稀薄なる感じ致し候。今少し數少く、今少し引きしめねば小生の只今の頭には浸み不申候。何人も歌作の初期には英氣充滿して、各首皆潑剌なる生命を有する道理なれど、更に作つて作つて或時期に到達すれば何時の間にか以前の生命は失せて、徒らに形骸を曝すが如く相成申候。然しながらこれ何人も一たび踏むべき常道と存申候。比牟呂の同人も多くは其處に達したらずやと存候。小生も其數に漏れず候。小生のは昨年以來妙な頭に相成、何か纏つたものを作ればそこに自分も再びすべからず、素より以て他の模倣は許さぬといふ或點が欲しく候ことに候。然し此等のことも自分が今作らねば、具體的の說明は出來難く候。小生旅中一首も無之候。興來らば作らむと思ふ個所は少しく頭に殘しおき候。小生の頭の妙に變りしは、文章を書きはじめてよりに有之候。文章は小生に更に經驗なかりしこととて、以前は寫生文といふものは、東京市中の出

來事を洒落れて云はねばならぬものの樣に誤解致し居候。されば文章の善惡の如きもちつとも判斷がつかず一向に迷ひ居候。炭燒の娘を書きし時は稿を改むること前後六回程にて、八頁のものに六ヶ月を費し申候。恥をいはねば分り不申候へ共事實此の如く候。然し其時以來人の文章を見て是非の判斷に苦まぬやうに相成候には自分ながら喫驚致し候。佐渡も半年の苦心に有之候。斯樣に經驗なき小生は迚ても急速に文を草することは只今の處到底出來不申、向後幾年かの後筆に馴れ候はば、餘計に出來可申かと存候。小生は自己に何等の手頼るべき長所を有せぬ以上は、只自己の滿足するだけの努力を盡せばそれで諦め候より外なしと心に極め居候。纒つた一文を草することは小生には大なる苦惱に有之候。此の如くにして小生には一年一篇を得ることも容易には無之候。寫生文は一は材料なりと虛子君は申され候。其材料を得るためには小生は筆の努力の外に身體に苦勞を掛くることを厭はず、今年の如きもわざわざ秋山まで參り候。豫期に反するは人生の

常態なれば思ふ程にも非ず候へ共、數月の後には必ず一篇を綴り得むかと存居候。小生は近來他人の文を見るに餘りに努力足らず、餘りに人を馬鹿にしたる感じを起す場合多く候。

小生の頭は此の如く偏し申候。此頭を以て歌を見る、物足らぬ感じを起す場合多きも道理に候。其うち小生の頭も常態に復し可申と存候。

自分のことのみ申上申譯無之候。比牟呂へもどつて象山の和歌、象山として珍らしきものと存候。象山には勸學の歌と稱する長歌一篇堂々たるもの有之候。御承知のことと存申候。

雪人といふ人は餘程才氣ある人かと存候。卷頭の瑣の歌就中振ひ居候。いつか布半の裏二階にて妻なる人のコンボコ背負つて來るに遇ひ、屋根から逃げたりとの話を思ひ出し申候。志都兒は何時も濫作に流るるの傾あるを遺憾と致候。殊に稀薄なるを志都兒に於て認め申候。先は右まで申上候。匆々。

雞百羽にも相成候由おどろき申候。小生も他にて良種の雞を見て何となく飼養して見たく相成、其うち手に入れ度と存居候。雛は餌を與ふる人には少しの恐も懷かず肩などに乘り候由、此の如くならば面白からむと存じ候。産卵雞二百羽に成らば御伺ひ可申候。比牟呂の作者のなかに節といふ字ありしに目を惹かれ候處、それは女なりしに心づき候。

小生の庭には秋草盛にさき申候。葉雞頭今年のは七尺程に成り申候。

紅蜀葵　馬蓼　姫日廻り　ダリヤ　女郎花　百日草　芙蓉　センヂユ菊

水蝶花　錦紫蘇　紫苑　オシロイ　紐雞頭　等

其他數種皆小生旅行前の丹精に候。只草花は風雨を厭ひ申候。昨夜の雨にダリヤの大なる枝したたか折られ申候。（明治四十一年九月廿日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其十三

拜啓。御葉書難有奉存候。小生の連作は其後自ら甚だ或物の不足を感じ申候。左千夫君は熱乏しと申候。小生は何となく力の足らざるを自覺致候。捉處なくぼうつとした或物が現はし足らず遺憾に有之候。鳥の聲の如きそれに候。あれが隔世的にぼうつと現はれねば駄目に候。唯「しましくも」の一首は稍得たりと自信致し候。左千夫君は十五首のうち、其多くは他人にても、また實況ならずとも、作りうるものなりと申され候へ共、小生はそれが目的物の霧なる故、自然如此なるべき道理と存じ候。つまり景色に捉處乏しき故、唯ぼうつとした或感じを現はし候はば十分と存じ候。其感じが小生の作には全く缺乏致し居り候。然し春以來はじめての作故小生には脱稿の當時は喜悦禁じ難く葉書へも認め申候。兒戲に等しと可申候。

小生の手紙へは何と認め申候ひしか忘れ申候へ共、そは一に大兄の御意に任せ申

候。小生は永むろへ一回も投稿不致申譯無之候へ共、適當の時期に製作なく、思ひながら疎遠に打過申候。今回は何時頃發行の運びに候や。

左千夫君の

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる露を手に振り落す

の歌には閉口致し候。小生は分らぬ歌と申候處、それは小生の解釋力の缺乏せるなりとの論に歸着致候。何と申しても小生は不服に候。露を我と置き換へて見よとのことなれど此は甚だ無理と信じ候。

一、此歌は三の句で切つてもよく、四の句までつづけてもよし、これ措辭の粗笨なる所以。

一、露といふ語にはまつはるとはいふべからず。露がからみつくといふ語のつづきはあるべからず。

一、手に振り落すは、手にて振り落すと解すべき句なれど、無理に見れば

露を手のひらに落すとも見ゆ。

以上は此歌の措辭の甚だ粗笨なるを表明す。言語の意味は作者が恣に改むべきに非ず。自然の約束なればなり。言語の意味を或は廣くし、或は深くし、或は重くすることは作者の技倆次第なれど、白といふ語は依然として黒きものとは反對なり。

一、此歌三句までの秋草は序なり。假設的なり。四五の句の露は現實的なり。而して兩者は密接の關係を有すべき物體なり。故に甚だ錯雜の感あり。此は許すとしても露と置けば、露がいひがてにしてまつはるといふことに聞ゆ。三の句までは如何にも人間らしけれど、四五の句はどうしても實際的の露其物を見るに過ぎず。若し全く比喩にするならば、何處までも露ならば露をかりていふべし。半分は人間らしく半分は露らしきいひ現はし方は到底不解に終るべし。

一、作者は萬葉を引證して、萬葉の言外に意味ある歌卽ち「大寺の餓鬼」の歌等を以て論ずれども、萬葉のは言語の意味は明瞭なり。此歌は言語が錯雜して殆んど解すべからず。つまり作者に聞いて見なければ分らぬといふ作者が恣の語法なり。

一、今一遍繰り返せば三の句までの續きにては我といはねば意通ぜず。

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる我を……

此の如くなるべし。然るに五の句は「我」といひては全く調和せず。

まつはる我を手に振り落す

此では飛んだ意味となる。五の句を生かすにはどうしても露ならざる可からず。露とすれば三の句までが調和せず。前述の如く、

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる露を

にては露が思ひに堪へ兼ねしことになる。どちらにしても上下掛け合はぬ

歌なり。妖怪的の組織なり。

一、如何なる作者も言語の意義だけは、吾々國民の間に於ける自然の約束に從はざる可からず。白は到底白にして、黒は到底黒なり。作者は常識的に見るから分らぬ。若し一遍讀んで分らなければ、作者はどういふ積で作つたかと考へて解釋すべし。そこが解釋力の乏しきなりといふ。然れども此歌の如きは日本語を解する日本人に分らぬ歌なり。此を許すならば明星の歌も許さねばならず。明星の歌も分らぬ歌なれど彼等には分る也。解釋力乏しければ分らぬといふ也。同じことなり。

右要領を不得候へ共、大兄も分らぬ由申され候趣承知致し候故申述候。左千夫君には近來此の如きものあるを嘆ぜざる不能、しかも頑として他人の言に耳をかさず候。大兄は富士見の會に於て納得致され候由なれど、全く心よりに候や。小生は不思議に不堪候。左千夫君は阿羅々木の歌に傑作おほしといはるれど、小生に

は殆んど近來の歌は爺むさくして、スカリとした秋天の如き歌は一首もなき様に感ぜられ候。此處左千夫君と意見の著しく異れる所以に候。左千夫君は小生の霧の歌の如きも遙かに時代後れにして、近來の佳作には及ぶこと遠しと申され候。左千夫君の激稱せる馬宿の歌の如きも、取材に珍らしけれど、措辭の雜駁にして粗笨なるを否むべからずと存じ候。筆の序なれば忌憚なく申候。大兄の分水莊の歌の如きも、今日の小生には今少しスカリとして秋天の如き感欲しく候。其上貴人別莊の如きを本氣になつて賛することは材料は新らしけれど、其態度には賛成なり難く候。今日の元老貴人の如き一人の人格あるものを不見。現實の力に於ては彼等は强大なり。されど小生等の尊重するは其現實の力には非ず、小生は路傍の一小草花に對しても、無限の尊敬と感謝との念を禁ぜざるべく候。然かも貴人に對しては常に其卑野なるを感ぜざるを不得。或は其一時の出來事、即ち其人の一小部分には感ずべくもまた尊ぶべきこともあるべし。されど其人全體としては何等

の價値なきもの比々皆然り。分水莊の歌の如き、歌として勢此の如くならざるを得ざるべきも、別莊の爲めに富士見は光榮なりとの意なるが如き甚だ遺憾に存じ候。

志都兒の蓼科山の歌、左千夫君は分水莊の歌にもまされる如く申さるれど、小生には幾首を並列して見る時、散文と相去ること幾何なりやと反問致度候。

以上甚だ意を盡さず、殊に小生は作歌に遠ざかり、時代後れに候へば申すこと齒も立たずと存候へ共、思ふことだけ申述候。不惡御了承被成下度候。匆々。

過日の御手紙に對し早速御返辭可仕筈に候ひしかど、小生には非常に六かしき問題にて迚ても及び兼ね候に付、遂々手紙書くこと延引致候。あれに就ては暫く御猶豫なし下され度候。唯御手紙の趣大部分贊成に有之候。象山の勸學の歌其うち差上可申候。象山の歌よみし時は其境遇よりして、極めて眞面目なりしことと存候。されど江戸に於て法螺の種乏しくなり、伊

豆韮山の江川太郎左衛門のもとに話を聞き（砲術の種をききに）に行きし時、江川は象山の法螺吹なるを兼ねて承知せしを以て、元來豪邁にして温厚なる人なりしかど、象山の膽を奪ひくれむと大廣間に待たしむること多時（江川の家は非常に宏大なる由）嚴然として襖を開いてヤア佐久間さんと一喝を喰はしめし時、流石象山思はずヘヱと頭をさげし由、象山に世間氣多かりしは事實に候。されど學問才幹衆に挺んでて寫眞術にまで其力の及びしが如きは、何れにしても非凡の人物と存じ候。色を好むことの甚だしかりしは一失に候。

小生も御面會の上申上度こと山々なれど當分其望絶無に候。（明治四十一年十月二十五日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其十四

拜啓。前便は少しく申過し候個所も有之候につき不惡御了承被成下度願上候。小生は今回上京、はじめて左千夫君に猜忌の眼を以て見られつつありしことを發見致し候。而して不少不快を感じ申候。詳細は御面晤の折にゆづり可申候。左千夫君は意外に神經家に有之候。大兄にも其お積にて御交際可然と存申候。小生は此間の不快なりし事實も忘れて、左千夫君と交際する覺悟に有之候。可成注意して今後も感情を損ぜぬ工夫可致候。されば先便の如きも其儘左千夫君へ御示し下されれ候ことは、當分御控下され度希望仕り候。

右心がかりに候まま念のため申上候。匆々。（明治四十一年十月廿六日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其十五

拜啓。左千夫君に優越の長所あり、其長所を取つて交際せよとの仰御尤のことに

存申候。此は小生も從前よりしか思ひ居りし處にて、今後も變るべき筈無之候へ共、唯今回同君の恐ろしき猜忌の眼を以て小生を見つつありしを發見して、一方非常に驚くと共に、容易ならず不快の念を禁ぜざりし故、大兄へも漏し候次第に有之候。地方在住の人にして、此の如きことを打ち明け可申もの大兄一人に有之候。事實は左の如く候。先月虛子君宅の文章會の歸途、兩人にて岡君方へ立ちより申候時種々の談話の間に、小生の友人に對する厚意の全く缺乏せるを責めたる上、更に小生の豫想外なる詰問を起し申候。尤も小生の冷靜なり、熱情に乏しとの注意は此迄も數次にて、此は小生の癖つてかかるものあるべしと、服從致居候ことゝて何も辯解も不致、自己の短歌の甚だ救ひ難きを嘆ずるのみに候。三井君に對する小生の態度が以ての外にて、左千夫君の親友と見るべからずとのことに候。其以前も伊藤對長塚と、三井對長塚とはいづれが重きかとの詰問有之候て、不少小生を喫驚せしめ候。久しき前小生が三井君を訪問せしことを、小生に禍心

ありとの何處よりかの聞き誤りにて此に出でしものに候。小生はアカネ發行當時の事情を知らず。すべて左厳兩君の方寸より出でしものにて、爾後に於て小生へ通知ありしに不過。隨つて三井君との間に如何の契約ありしかも寸毫も知る處無之候。而かも暫時にして兩君の交際は一變致し申候。此も其原因は小生の與らざる處にして、左君に質せば三井は我儘勝手の人物なり。度すべからずといふ。三井君に聞けば左千夫は殘忍酷薄の人物なりといふ。小生の觀察にては兩者は此の如き人物に非ざるを思ひし故、其衝突は單に一片の感情に基けるものと想像せしを以て、何時か氷解する時期の到達せむことを信じ居候。中間に介在せる時は、兩者いづれにも隨分大人氣なき行爲も有之候。何故に惡人ならざる兩者の間に、此の如き暗闘を生じたるかを寧ろ怪まざるを得ざる次第に有之候。小生の居住は常に東京を離れ居候へば、直接兩君の爭には參加せざる地位にも有之、小生には小生自身に甚だしく感情を害し居る事實なき限り、自ら搆へて三井君へ喧嘩を吹

つ掛くる譯には不參候。大兄の如きは遠隔の地に在りて巨細のことを知るに難く、殊に事情を語るものは一方の相手たる左千夫君のみに候へば、一も二もなく三井君を敵視致さるべく候へ共、小生の如く幾分兩者の行爲を聞知し得るものには、一方に片寄つての判斷は迚ても出來不申、どう見ても兩君の間は我儘なり、殘忍なりとの一點張りなれば、到底如何とも手の出し樣は無之候。加之左千夫君の信州善光寺より寺中生といふ匿名にて、三井君を罵りたる葉書を送りたるが如き、如何に左千夫君に同情あるものの眼にも、左千夫君の大なる缺陷なることを認むべく候。左千夫君の小生に責むる處は、何故に三井と喧嘩せざるかといふ樣に聞え申候へ共、事實を知れる二三人の友人は、暫く其爭論の渦中に投ずる勿れと小生に注意致しくれ候。それでも小生は兩三回の手紙のために、却而三井君の感情を害し居候は事實に有之候。歌集の披露は決してアカネの誌上に敢てせざることを、左千夫君と爭ひしにも不拘、消息欄に穩當の筆を以て披露せしは、全く

小生の言を用ゐしより出で申候。小生は左千夫君の責むるが如く、同君に背きし事實を記憶致し居らず候。尤も以前左千夫君は××××××の説を用ゐて、三井は根岸短歌會を標榜すと雖、根岸の眞の短歌會に非ずといふ旨を、新聞雜誌に廣告せむとのことにて、小生上京の折相談有之候故、小生は以ての外大人氣なき所爲なりとて、極力反對致し申候。如何にしても廣告すべしとならば、小生の名義を加ふることだけは絕對に拒絕する旨申候て、それは沙汰止に相成申候。此も或は左千夫君の感情を害せずやと存候へ共、若以上の手段に及ばば天下の物笑には候はずや。其他くさぐさの話申上度候へ共手紙には盡し難く候。大兄にも合點の行く個所も可有之と存候へ共紙上には及び兼ね候。唯小生は左千夫君に今日の如く、甚だしく詰責せらるる理由を有せずと信じ居候のみに候。先月文章會歸途の出來事は左の如くに候。種々の噺のうちに小生の不人情を責め申候。小生が昨年結婚問題の起りし折、擧行の當日には參列すべしと左千夫君は申され候。此

は小生も記憶致居候。然し此の問題は當時埒明かずして空しく今日に立ち到り申候。隨つて左千夫君の好意を受くることも得ずして月日は經過致候。左千夫君は參列すべしといふ好意を、小生が言下に拒絶せりとの事實を小生に强ひ申候。小生は此を聞いて呆然たると共に、甚だしく不快を感じ申候。左千夫君は如何にして此の如く記憶し居たるか、小生の到底解釋致し能はざる處に有之候。如何に小生が冷靜にして、情義の何物たるを知らざるものなりとも、決して此の如き極端の言動を敢てするものに無之候。小生は心中に拭ふべからざる汚點を印せられたるを感じ申候。此故に小生は左千夫君に、猜忌の眼を以て見られつつありしものなりと申候次第に候。此事に就いては此外は申上ぐまじく候。小生も都合ありて明年一月の頃を以て上京、二三ヶ月間下宿住ひ致し可申と存居候へば、其折ならば遙々御たづね申すことも出來可申かと存居候。心がかりに候まま右前後もなく申述べ候。左千夫君は少し逆らふ時は甚だしく激昂してしまふ故、喧嘩すること

を厭ひ候ては、深く立ち入つては申されず候。然しながら優越の長所あるは事實に候。小生も大いに愼み可申候。而して其優越の長所に兄事可致候。以上申上候ことは大兄のみ御含み置下され度候。くれぐれも御願申上候。匆々。

歌少し有之候へ共差上可申か否か惑ひ申候。十日までに届かねば止めに致し候ものと御承知被成下度候。

あとの分は其うちまた申上ぐべく候。（明治四十一年十一月三日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其十六

拜呈。御申越のおもむき素より左千夫君の衷心小生を惡ざまに思ひ居候こととは思ひ不申候。唯小生が此の如く猜忌の眼を以て見られつつありしかと、歎き申候次第に有之候。其後左千夫君には手紙も書き不申候へ共、これ更に同君の感情を

害するにも當り可申候へば、近日中長文の手紙相認め可申と存居候。御心勞下さるまじく候。

象山の勸學の歌其後相探し申候へども、更に相分り不申、御約束申上候て誠に申譯無之候。長野あたりへ御照會相成候はば、早速相わかり可申と存ぜられ候。

小生の歌は七八首のみに有之、それも作りて程を經れば、自分にもいやに相成申候。されど末尾にしたため申候。宜しく御取捨被成下度候。匆々。

秋雜詠

葉雞頭の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕はいや大なり
久方の天を一樹に仰ぎ見る銀杏(チチ)の實ぬらし秋雨ぞふる
秋雨のいたくしふれば水の上に玉うきみだり見つつともしも
こほろぎのこもれる穴は雨ふらば落葉の戸もてとざせるらしき
鬼怒川は空をうつせば二ざまに秋の空見つつ渡りけるかも

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠く聞えて秋たけにけり
稲刈りて淋しく晴るる秋の野に黄菊はあまた眼をひらきたり
鶺のひびく樹の間ゆ横ざまに見れども青き秋の空よろし
取いそぎ右申上候。（明治四十一年十一月十二日　自宅より　封書　久保田俊彦宛）

其十七

拝啓。十一日を以て上京、十六日歸宅仕り候。長文の御手紙難有奉存候。背景論大賛成にて、小生もかく考へ候ことに候。只今蒋年末故手紙も落付いて書く能はず、數日中ゆるゆる御返事可仕候。大分異見も有之候。先は御挨拶まで。匆々。
（明治四十二年一月二十日　自宅より　ハガキ　久保田俊彦宛）

其十八

拜啓　漸く閑を得て一書認め申候。愚作につき意外の御稱揚を蒙り汗顏の至りに有之候。然し小生は脫稿の當時より惡作と存居候。清書することが厭で厭で堪らず、されど捨ててしまふも惜しく強いて虛子氏のもとまで送り置候

一、脈絡通ぜず。

一、四五を讀めば一、二、三は全く讀者の腦裡を去るべきこと　即ち一、二、三に費したる力は全く徒勞なること

一、一體に幼稚の感を免れざること。

等の缺點腦裡を往來して不安を感じ居候　虛子は不取敢稱揚し來りたれども、小生はそれが爲に決して無上に喜ぶことは出來ざりし次第に候。一部一部の描寫は小生の非常に力を致したる處とて、小生は他の諸作を見るに、事件描寫の一段に至つては頗る不滿足に感じ申候。されど小生のは單に一部一部に止まりて、全體の纏りなし。寧ろ大兄の御稱揚を得て驚き申候　小生にはどうしても、前後の連

絡なきものは駄目と存候。事件は途切れ途切れにても、之を貫くに一個の思想感情等なければ駄目と存じ候。小生のにはそれが無之候。あつたとて不明瞭にて稀薄に候。四方太氏の如きは作者の目的が何處にあるか分らぬ駄作なりと排斥致し候由、無理ならぬことと小生は存じ申候。

故に小生は原稿を虚子氏へ送る當時も此事を申添へ、小生在來の癖なる事實を面白がり過ぎる弊を脱せざるを嘆じ申候。左千夫君は只技巧の一段には三嘆敬服すと申され候。小生にも多少其自負心は有之候へ共、纏らぬものは矢張り纏らぬものに候。

一、事件の發展するものか。

一、或は又個々の事件ならば、之を或思想感情を以て一貫したるもの。

に非ざれば小説は駄目と唯今は信じ居候。

愚作性格の一段に至りては小生は餘程注意致したる積りに候。御高評は至極嬉し

く存じ候。四、五に現はれたる看護婦との關係の如きも、世話する世話するとて世話は出來ずに遂に之を墮落せしめて、剩へ捨つるに至る徑路を兩者に同情して書きし積りに候。然るに左千夫君は以ての外不自然と申候。小生は世間何人か小生の心を以て之を讀みくるるものあらざるかと遺憾に思ひ居候處、大兄の御高評にて少し安心いたし候。

背景論大贊成に候。小生は更に一言御高說に蛇足を添ふれば、同じ御馳走を食ふにも唯御馳走ばかりよりも、之に相應する器具調度あらば更に御馳走榮致す譯に候。背景には此意味も十分可有之候。其御馳走の品によりて器具調度の相違ある如く、小說の内容によりて周圍の空氣も異るべき道理に候。世上の小說は纒り居れど、此の周圍の空氣が朦朧と致居候故に、巾と奥行となく而してせかせかと忙しく下品の感じ致し候。

小生の作を左千夫君が一向感心せぬ如く、小生も胡頽子を一向感心不致候。左千

夫君は小生とは常に全く相異る徑路を辿り申候。小生のは只今部分的描寫故纏りなく候へ共、左千夫君のは兎に角全體的なり。然れども其部分描寫は支離滅裂故纏らず候。胡頽子の如き寫生の下手なること驚き申候。讀了の際ちつとも文字に興味を覺ゆる點なし。成田詣の如きは拵物に過ぐ。殊に作中の人物は活動せずして、作者の議論が跋扈致し居候。鼠骨氏は役者が口上言はずに、黒ン坊が饒舌つて居る樣だと申候由、小生は出語りの大夫が汗を流しても、折角の人形がちつとも動かぬ樣なりと、虚子氏へ申送り候。只作者の描かんとしたる不穊緻な女房を持つた男、及び其女房といふ目のつけ處はよろしく候。小生は兎に角拙作と斷定致し候。

中央公論にては、藤村の一夜よろしく候。一讀してわからず、再讀して贊成致し候。眞面目にして下品ならざる處をとる。然かも目のつけ處、描く處すぐれ申候。風葉はくどくて到底駄目に候。白鳥はきびきびしたれど下品、花袋は論外に

候。

扨而過日小生上京の折左千夫君と同道三井君を訪問、仲直り致し候。尤も小生上京前虚子氏などの心配にて、兩者の意は餘程傾き居候ものに候。小生左千夫君訪問の席上、蕨桐軒來り三井訪問の由を語り、三井の意向よほど解けたるをいふ。左千夫君曰く、幸君來れり、君と行くべしとて小生を誘ふ。事實は此の如く候。歌出來さうにて出來ず困り申候。三井君は歌々と申せど天然の趣味の缺乏に驚き申候。小生は囚はれ居るまで天然を愛し候。而して天然を解する人の極めて少なきを嘆じ申候。解する者の有無は小生を左右するに足らず候。

東京へ養子にやりし弟に男子出生、兩親上京、舊正月を一人にて留守居す。然るに一昨夜「芋掘」の維次の兄癲癇持の太一死去、今日葬式にて下男下女を手傳にやる。一時はガランとした家に十五の下女と小生と只二人になる。年始客來る。困却す。葬式の場へ人を迎にやつて客への御馳走をつく

る。朝ちらちら雪ふる。母の歸宅遲るるならん。夜になりて葬式の義理に行く。

孥芽の號は先年捨て申候。小生には實名を三字ならべし方尤も調和よき樣感ぜられ候。（明治四十二年一月二十八日　自宅より　封書　久保田俊彥宛）

其十九

水戶より平泉靑森を經て、昨日此地に來り、今日小坂鑛山に赴く。此邊美人多し。弘前より見る岩木山は雄大なり。表面の塔は國寶に候、歸途最上川を下らむ希望に候。汽車の旅は興うすく候。（明治四十二年十月五日　弘前より　弘前市大圓寺五重塔の繪ハガキ　久保田俊彥宛）

其廿

わが鬼怒川の上流にも如此ところが有之候。されど小生はまだ探り見不申候。此寫眞は小生の知人の兩度まで踏みいりてうつし取候ものに有之候。小生は近來全く歌にも文章にも遠ざかり居候。どこへも御無沙汰に打過ぎ申候ものは、母の四十日以來の不快に困り申候。不惡御ふくみ下され度候。

小生ことしも草花つくりに精出し可申候。葉雞頭の二葉を樂み居候。（明治四十三年五月十一日消印　自宅より　繪付寫眞ハガキ　久保田俊彦宛）（金原省吾所藏）

其廿一

葉雞頭は苗のまゝ畑に放棄して此の地に來り候故、今年は庭に八尺の紅を見るべからず候。頗る遺憾に不堪候。尤も病氣意外に早く快癒するならば、苗の最少なるを選び、土用でも構はず植ゑんかと心掛居候。毎日の曇天にて頭惡く困り居候。其の上自宅には庭に花おほく候へ共、此處には一叢の月見草、朝夕殊に雨戸

を開けて蚊帳の中から眠き目をこすつて見る處に興趣を有するに不過候。

「土」は御覽被下候ことに候や。あれで隨分の無駄骨を折り候ことなれど、清書する時一日に原稿紙卅枚四十枚と急ぎ候爲、意外に印刷したる後語句の澁滯して讀み憎き處も有之、自分ながら不思議に感ずる程に候。其の後病氣のため一向稿を繼がず、どうしたものかと存居候。横臥しながらも今日あたりより筆とり申度心得なれど、一ヶ月以上も休み居候こととて、何となく厭でなり不申候。今日までの處にては幸に一般の評判よろしく、何卒して完結を告ぐるまでは、氣力の衰へざる樣と祈り居候へ共、假令些少にても身體のうちに損所ありては、一體に衰弱を來し申候。且旅行記等ならば何處に居ても自分の記憶のみを辿ること故差支無之候へ共、此で「土」の如きものになれば自分の熟知して居ることでも人物の動作や、季節の變化等を仔細にまのあたり見ねば本當の情が乘らぬものにて、小生は病氣の爲めに、大事を逸し去つたるが如き感を懷き申候。西洋畫家がモデル

なしに描けぬやうに、小生の「土」は自分の土地を離れては困難の事業に候。つまらぬことと御笑ひ下さるまじく、小生には此から先が心配で心配で堪らぬ處に候。然し書き出したら一生懸命やる積なれど、書き出しがまた大問題にて、一向愉快な日とては無之、頭の悪いのは天候の關係のみには無之候。此の樣な愚痴もあとで物笑の種になれば、小生には幸此の上もなき次第に候。

「土」の冷えは胡桃澤君より御きき被下候ことと存申候。

此の前は御挨拶も申上げざりしが、芋井村からの繪葉書も慥に拜受仕り候。

「土」の人物は皆現存せり。（明治四十三年七月十一日　茨城縣眞壁郡河間村より　ハガキ　久保田俊彥宛）

其廿二

拜啓、望月君の凶報は誠に意外のことにて、生前今一度親しく語らざりしこと殘

り惜しき限りに存申候。同君とは四十年の初夏に舍宅へ伺ひ候節、淺間の温泉より松本へかけて一兩日遊びをはり候外、再會の機を得ざりし様記憶致し候。其の時上原三川氏とも面談仕り候。三川氏は敬慕すべき人格の人なりしが、此も再會の機を得ずして、前後二週日にして死去せられ候。此の人小生よりの手紙を待つこと甚だしかりし由なりしが、小生の檢束なき遂に其の志に報いずして、當時頗る心を苦しめ申候ひき。望月君に於ても、小生は近來甚だよそよそしく過し來り候。小生は心に再び悔いざるを得ず候。小生には先年來一の惡癖ありて、手紙書くこと厭に相成り候ては、數十日間如何にしても筆とること相叶はず、只怏々として日を暮し申候。只今も其の癖に苦しめられ候。御葉書の文面は小生に於て殆んど、痛棒の感なき不能候。

寒中に不似合の暖き天候、雨おほく人々夏の水を惧れ居り候。今日漸く晴れて道路の泥落つき候こと春の如く候。匆々。（明治四十四年二月三日　自宅より

其廿三

拝啓。日頃の御不沙汰を謝して一書差進申候。

小生昨年の病疾其因をなしたるものか、喉頭結核に罹り一昨日を以て此處へ入院仕り候。此から退屈の日を重ね可申、今は只名醫の術を信頼して餘命の長からんことを欲する境涯に陷り申候。或專門家よりは放棄すれば壽命は一年か一年半との宣告を受け、一時は大に神氣沮喪致し申候ひき。但し只今は大に落つき申候。肺は重症には無之樣にて、熱も七度に達すること殆んどなく、數里間の徒歩にも左まで苦痛を不感候。患部を切つて取り去る由に付、うまく參り候ものか。人は兎に角岡田博士故此人の手に任せ候より外は無之と存候。

扨て過般同時に落手仕候二葉の葉書に對し、例の疎懶の質、返事も不申上、矢張

心苦しく打過ぎ申候。あのうち「或ものは」の歌なぜあららぎなどへ御發表無之かと不審に存候。

あるものは草刈小舍の草月夜眠りて妻を盗まれにけり

の如きは、只一首にして土地の狀況、卽ち人情風俗具さに人を首肯せしむるものと、小生は少なからぬ興味を以て記憶仕り候。娘が髮を結ふとてもどつて來たなど、僅に四首の歌にして一編の風俗史を讀むの感あり、確かに一の連絡線を通じて、背面に隱れたる或物を窺はしむる力の十分に籠り居候ものと存候　恐らく作者は藝術は如此ものとか、或は歌は如此なるべしなど、理窟の附き纏ひたる心には決して無之と信じ申候。自然に流露したるものに非れば、必ず如此なる不能、又地を換へて作り得べき性質のものに非ずと存候。作者たる大兄も或は自ら甚だ好まれざるべきか。多數の讀者は素より知るべからず。然しながら小生は如此餘裕のおほき、而して淡々として飽かざる作品を好み申候。近來アララギ誌上凡て

せせこましき切つまつた窮屈にして、些の餘裕なき作品を以て埋められたるの感ある時、如此作品を希望仕候。而して如此作品の大兄の全體に通じて却て甚だ乏しきを憾とせざる能はず候。今は既に門外に在る小生の言、果して大兄の容るる處となるべきか否か、思ひ出づる儘申進候。小生も大兄と會はざること既に五年に相成可申か。小生に於ては殆んど短歌界より逐放せられたると、結核患者として、所在に恐れられ且嫌はれ可申ことが、五ヶ年間に見る著しき變化に有之候。最後に申進め候。小生は生命の一日も長からむことを切に祈らざるを得ず。此は少くとも三四年間の休養の後、今一度長篇の小說を成就したきが故に有之候。描かんとする處は大問題に候。御面晤の折も候はば詳しく御話し可申候へ共、書中にては盡し難く候。

近來御盡力の結果女流歌人の輩出おほき由、伊藤君より承知仕候。御介閨の作品など刮目して注意すべしと存候。

病院は不自由の場所にて硯箱の備も無之、やつと硯の古きを一つ借り受け、此も古い盃の上に載せて僅に用を辨じ候。先は右まで。匆々。（明治四十四年十二月七日　東京市下谷區中根岸養生院より　封書　久保田俊彦宛）（平木音吉所藏）

其廿四

重ねて御慰問被下難有奉存候。手術は二囘程受け申候。只うまく彎曲したる細き器械をそつとさしこみ、其先端の小さなる、譬へば家鴨の嘴の如きものにて患部をはさみて喰ひ取り申候。小生のは會厭軟骨と申す處故、ぽきりと音して缺け申候。痛みといふ程にも無之、思ひしよりも手輕に有之候。只二三日過ぎて傷の處少しづつ痛み申候。手術はあと二囘位に候べきか。今月一杯にては退院相叶ひ不申候　先づ結核患者として小生などのはまだ輕症に可有之、治不治は別問題に候へ共、治療の餘地は存在するものと見て差支有之間敷と信ぜられ候。只今心も落

つき食慾も有之、上京後美食致居候ものか血色などは却てよろしく相成申候。熱は先頃より少しも無之、唾液を嚥むに咽喉に少しの痛みを感ずる外、病症を自覺すべき兆候は更に無之候。入院患者として何處が病人らしきか、一向見分け難しと申すことが小生に對する衆評に有之候。小生は深く考へ候へば心配も湧き申候故、餘り考へぬことに致居候。御高諭御尤もにて大いに啓發せられ候次第に有之候。在京の諸友交々たづねくれ候て、皆小生の病氣を意外とおどろき申候。うれしく存居候。近頃に小説一つ二つ出來可申、去年以來の試みに有之候。

十二月十九日夜十一時五十二分。電車の音まだ聞ゆ。晝はきこえず。（明治四十四年十二月十九日　下谷根岸養生院より　ハガキ　久保田俊彥宛）

其廿五

左千夫君と趣味上に非常の懸隔あるは當然と存申候。それ故頓着したのでは、伸

びる譯に不參候。自分の道を誤らず進むこと必要と存申候。（表面）

博多節の唄に因く

筑紫名所は名島に宰府芥屋の大門の朝あらし

今日芥屋に行かんとして雨故果さず。（裏面）（明治四十五年六月八日　福岡市外東公園裁縫女學校前より　名島の帆柱石の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其廿六

此間の御葉書は頗る面白いからあれはアララギへ掲載したらどうかと思ひます。博多へ歸つたら古泉君あたりへ送らうと考へて居ます。暑くなつてからがつかりして仕やうが無いから、成るべく見られるだけそこらこゝらと見ようと思つて出掛けて來ました。今夜壹岐へ渡る筈です。漁季に成らないから對州も淋しいものです。（表面）

筑前を立つて行く日も近づきました。非常な好意を表してくれた久保博士の手を放れて歸るのです。あとは天に任せるより外はなく成りました。（裏面）（明治四十五年六月廿六日　對馬國嚴原より　對馬雞知樽ヶ濱の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其廿七

咽喉だけはかなりいい樣ですが、身體の工合が惡くていけません。鎌くらあたりへ行きたいと思ひます。中原しづ子さんは何處のあたりにおいでだつたのですか。私はまだ鎌倉を知らないのです。かういふ旅行家も世の中にはあるのです。御わらひ下さい。いろいろの都合で先頃の法要にも行かず、我儘なことばかり振舞つて居ます。

來月から私の近くも汽車が通ることに成ります。（大正二年十月三十日　自宅より　常陸處

島名所高天ヶ原の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其廿八

中原しづ子さんから懇切の手紙が來ました。大兄からの御配慮による由が申添へてありました。お禮申上ます　此間御令閨に久々でお目にかかりました。其席上で小生のいひ様が悪かつたかして、齋藤君を怒らせて、滅多にあはぬ御令閨へ飛んだ御迷惑を掛けてしまひました。お子さんはどうですか。人の家にはうまいことばかりはないものです。つくづくさう思ひます。（大正二年十一月十六日　自宅より　筑波山一の鳥居より見たる景の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其廿九

御手紙非常に珍らしく難有拜見仕り候。小生は恐ろしく健康を害したる結果、喉

頭の宿痾も再發致候ひしが、二三日以來殊の外工合よろしく、一ヶ月前在宅の當時と比して七百匁も目方を增し申候。今日退院の筈の處延ばして明日に致申候。平福君から先夜贈られし繪の內、此一枚手もとに殘り申候。さうして今夜寢ようとしてふと思ひ立ち、夜の書へ書きつけ差進め申候。近日三保松原へ轉地の覺悟に有之候。此は平福君の切なるすすめに從ひ申候。重ねては彼の地より可申上候。

齋藤君の歌に就いては同君からのたつての頼みで、只今批評の準備にとりかかり居り申候。再讀三讀する間に長所も短所もいささか明瞭に成りて愉快に有之候。小生は忌憚なく書く積りに有之候。暫く遠ざかり居り候小生のいふことには、間違ばかり多かるべくと存候へども、成るべく精讀して此事業成就致可申候。實際小生には容易のことに非ず候。小生は從來批評したることなく、他人の心血を注ぎしものに對して卒爾の言說は自ら恥ぢ

て出來不申候。それと同時につまらぬ骨の折らぬ作品に接すれば、心から忌々敷成り申候。

小生の大兄に望む所は齋藤君に傾倒するも宜しけれど、形式の上にいささかも影響を蒙らざる工夫第一と存申候。獨自一個の境地を開拓する處に値打は存在致申候。こんなことではわかり不申候へども、今夜はからだを大事にこれにて擱筆致申候。

赤光を精讀したる後、一度直接お目にかかり申度希望致居り候。小生は頑固に成り申候。（大正三年一月十五日　神田金澤醫院より　封書　久保田俊彥宛）

其卅

旅疲れといつていいでせうか、今に成つて大儀で困つて居ます。アララギの六月號では中村君の若き諸に就いて、大に注意すべき點をしみじみ感じたのでしたか

ら、一寸でも書かうと思つたのですが當分駄目です。
汽車の中のことも第一日から第三日まで、皆相應に材料を供給してくれましたが
それも預り。いよいよ梅雨らしく成つて氣分の惡いのに閉口します。梅雨の氣節
を病院で横臥した儘に暮さうと思つたのが、病室が一杯で久保さんが非常に心配
して下さるんですが、暫く不愉快な宿の二階に辛抱しなければなりません。然し
私はこちらでは特別な待遇を受けて居ます。病院へはひつたら又水のやうな歌が
出來るかも知れません。病院の裏手は廣い構内一杯に待宵草がびつしりです。工
科大學の構内には、月見草がこれも無數だと、久保さんの夫人さんから聞きまし
た。夫人さんから二年分ばかりの國華を借りて見て居ます。記者の所論と私の考
へとが一致して居る處などがあると殊に愉快です。（大正三年六月十六日　福岡大學通前
平野旅館より　ハガキ　久保田俊彦宛）

其卅一

鴻巢のよせ書と、あなたの葉書とが今日とどいたのです。原稿十日には間に合ひません。齋藤君のいふ通り十五日迄と思つて下さい。君も大分歌人同士に知合が出來た樣ですがどうですか。矢張りアララギの本壘が賴もしいでせう。私は東京の文士詩人等にちつとも知合がありません。求めないからでもあるでせうが、不器用なんですね。どうもアララギ詠草の中に注意すべきものがあるのに興味を惹きました。一寸書きませう。腕の出來た人々にはあれが出來ないやうなものが交つてます。(大正三年七月七日　九州大學附屬醫院西二ノ一より　醍醐天皇陵筆宮崎宮樓門之額の繪ハガキ　久保田俊彥宛)

其卅二

大いそぎで書きます。

昨日齋藤君へ手紙を書きましたが、一寸漏らしました私の歌の詞書きに、

博士の手折りけるなり。

とあるところは、

手折られけるなり。

と直して下さい、又、

只快く其夜ねむりき

の一首「き」を「つ」としてあつたら直して下さい。

先生の診察によび出されて一寸やめ。

私の咽喉は必ず久保さん自身に見ます。嘗て人の手に掛けません。單純なんだから助手に見せて置いて、時々でいい譯ですがさうしないんです。齋藤君へも手紙に書きましたが、私のは異常の厚遇といふのでせう。感激に堪へません。何處でこんなことがしてもらへませう。

又詞書のところ、

一輪挿は同夫人のこれもベコニヤの赤きを活けてもて來てくれたるなり。

を、

赤きを活けもておくられけるなり。

と末のところを直して下さい。

此の間のあんな手紙でも押して書いたのですが、あとで八度三分まで熱が出ました。何といつても暑いのでいけません。

どうも其後歌が出來相にして、いけません。頭が少し晴々としないと出來ません。

詞書があるんだから、毎月二頁位にして送りたいと思ひますが、不安に堪へません。

弟がこちらへ來る用があつたので、あの赤い紙をもつて來させました。漸く一枚ばかり書きましたが、こんどのは少しよく書けた樣です。久保夫人に對して三年

來の書債を果すことが出來るのです。看護婦が交々花を折つて來てくれます。(大正三年七月十八日　九州醫科大學第二病棟第一室より　封書　久保田俊彦宛)

其卅三

歌がどれもおもしろくないとのことは私によくわかつて居ます。然しここに頑健の君に多少の疲勞が加はつて居はせぬかと思ひます。胃の惡い時にはどんな料理をたべてもうまくなく、又餘りに滋味に飽きた人は、毎日毎日何か佳味いものはないかと探して遂に求め得ないのです。其時多少の休養を敢てすると、全く舌の味を恢復することが出來ます。君の意味は私に非常によくわかつて居て、絶體の境地に想を馳せて居ることが、しかと私の頭にはひつて居るのですが、以上のことゝ幾分無意義な言でもないと思ひます。(裏面)

私のは私ので全然別物ですが、以前は他人の作品が一向感心しませんでした。さうして自分でも出來はしませんでした。それが近來まだ名を成さぬ人々の作品などに、興味を有つ樣に成りました。私は私の現在に滿足しませんが、悔いることはありません。何ヶ月かを通じて私に或物を發見したいと思つてます。案内記へは代金をあげます。はやくして下さい。（表面）（大正三年七月二十九日福岡大學醫院西二ノ一より　福岡公園玄海島の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其卅四

齋藤君は旅行しましたか。去年の鳳仙花のなみだはもう繰返さないのでせう。それもいいでせうけれど、現在の私には只さういふことに泣いて居るなどは、何だか變な感じがして成らないのです。さうして私の心の底に在る或物は、君の所謂もつと根強いといふ或物と、一致してゐる點が有るかも知れません。

編輯は終りましたか。苦しいでせう。アララギの來るのを待つてます。（表面）私の歌はもう葵湯程の味もなく成りました。
先頃からのことですが、殊にこのごろに成つて不眠の夜があつて困ります。食慾の減退も著いからでせう。だがそれは今日あたりから恢復に向ひはじめたやうです。
九月號には歌がちつともないのかと思つて居たら、昨夜ふと十幾首から出來ました。兎に角それを取捨しても一頁にはなりませう。私の歌も段々いけなくなるのでありますが、今私自身のためには一轉化を來して居るのですから、ここの處つづけたいと思つてます。
赤光評にとりかからねば成らぬのが苦痛です。とても思つたやうなことはいひ得ないと考へてます。（裏面）（大正三年七月二十三日　福岡大學醫院西二ノ一より　博多港夕照の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

其卅五

旅中から中村君へ二三枚葉書を出した筈ですが、同君の手にとどいたかどうかと懸念します。あの日まはりの歌も、私の最初の解釋は變つて居ました。日まはりをめぐりつらむかを、私は日まはりの花が日光を慕つてめぐることばかり思つて居たのです。私は一體が草の花などが好きなものだから、向日葵の花の少しでも日に向つて動くなどには、非常な興味を持つのです。それ故一も二もなく花の動くことにとつて畢つたのです。此もお目にかかつたらお話の題にしたいと思ひます。（表面）

昨日漸くもどつて來ました。今日診察をしてもらひに病院へ行く處です。其上で今後どうなることかまだわかりません。咽喉は痛くて困ります。先頃手術をし殘した處のやうなのです。

御葉書も見ました。八月號のは實はどうして訂正してないのかと思つたのでしたが、其儘にして置きました。あれは仕方がありません。それよりも私の方が當分アララギへの御無沙汰を仕方がないものと思つて下さい。アララギの前號評には大變私等と考の違つたものが出て來ます。お目にかかつたらお話して見たい樣に思ひます。

貧いとか、佳作だとか、厭味がないとかいふ言語の意味が、私等の思つて居た處と大變違つて居るのです。（裏面）（大正三年九月二十三日　福岡市大學通り平野旅館より　福岡名島の夕照の繪ハガキ　久保田俊彦宛）

齋藤茂吉宛

其一

昨日秋田を去りて新庄に來り、今日十三里の間、十二里は徒歩にてこの鶴岡に來り候。山形縣に來り候ためかふと大兄を思ひ出で申候。羽黑山は低き故登れと人に申されしもえ登らず。表面の塔も見不申候。

最上川は平凡と存候。月山の頂は草の色ならむ、まだ青きに雪積り候。明日酒田へ、それより象潟へ、さうして再び新庄へもどりて歸宅可致候。（明治四十二年十一月發行アララギ第二卷第三號所載　明治四十二年十月十五日夜　羽前鶴岡より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其二

拜啓　兼ねて御約束の文章俗事の忙しきと、健康の思はしからざるとのために今に筆執り不申、遺憾ながら記念號原稿締切の間に合はぬことと存じ候。實は故先

生に關係ある掟の木故、書けば小生の心も落つき申す道理なれど、如何なるものか筆を執ることが厭にて自分ながら困り申候　第一近來手紙を書くことが億劫になりて、これには殆んど術なき次第に有之候。然る處不思議と申すものか、先月末胡桃澤勘内君より燒岳噴煙の繪端書を得て「此山乘鞍岳の北にあたりて」といふ解說に興を催し、嘗て一日見たる乘鞍岳の歌續々として湧き出で申候。三年以來はじめての稀有なる現象、小生も作品の巧拙など申す以外に、多少の喜悦を禁じ不能候。小生には歌といふものはつまらぬものといふやうな考も、始終頭に往來致し候ひしものの、自分で作つて見ればやはり懷しきもの有之候。敵になれば憎み、味方になれば愛すといふことが、人間の眞情なるべく候。

此歌內容は毫も見るべきものなく、十四首を獲たるはいはば一片の感興故とも申すべきか。數年繼續して研究に腐心する諸先生の間には、小生の歌は陳腐に候べけれど、小生には句法も偶然に、自ら嘗て用ゐざりきと記憶するものなどを得た

るが如く感ずるは、此れにも多少の愉快を禁ぜず候。拮倔なるもの、晦澁なるものも有之候へども、皆頭に浮ぶ處を書きつけ申候。決して如此句法を敢てせんとしたるに非ず候。何は兎も角小生には後日に成らば知らず、今日の處にては歌の出來候ことが只滿足に有之候。記念號の原稿として歌を送り得しことが手柄の如く存ぜられ申候。先は右迄。（明治四十四年十月發行アララギ第四卷第九號所載　自宅より　明治四十四年八月六日　封書　齋藤茂吉宛）

其三

この寫眞の一番右手で上の角から、もつと右に花矢倉といふ處あり。佐藤忠信が單獨で戰つた處と申候。其處に茶店あつて吉野全體が一目なり。今度もそこで暫く休む　茶店の婆さんに五年前に自分はここへ來たことがある。其時愛嬌のいい廿ばかりの娘が居つたがと申候に、小さな女中がそれでは多分花ちやんのことで

せうと申候。「あの子は五年も六年も續いて來やはりましたが、へへらへへらいうてな、あんたはん」と婆さんも威勢よく愛嬌をふりまき候。「あの子はもう、ややはん一人抱いて居りますのや」「櫻はひね木になる程花がよう咲きますが人間はさういきまへん、逢うとりますな」と申候。雲井の櫻は枯れたれど、茶店に近く老木の花が咲いて居るのを小生が譽めし處かく申候。小生が關東の人間であることを知ると共に婆さんは驚いて、それから笑つて「あんたはん連れて行きやしよと思ひなしたか。關東のお方はんやつても愛嬌ある子やさかい、忘れやはらんのやな」と申して、この子もころりと變つたと申候。小生の參りしは五年の昔に候へばさもあるべく候。「あんたはんお子さんのないやうな顔やござりまへんけれど」「をのこは旅へ出やはると内にお子さんが帶で掃く程ありやはつても、奥さんが無い無いいやはりますさかいあんたはんもさうどすやろ」と申して婆さんは笑ひつづけ候。其子に逢つたら婆さんは小生の事を傳へる由に候。（明治四十五年六月發行ア

ララギ」第五卷第六號所載　明治四十五年四月十三日　吉野より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其四

暫時のこととながら再び病院生活に入り申候。患部をきつてとる由、わけもなき手術と申候。明日すぐに手術をうけ申すべく、京の花と女とを見ての後は旅行を繼續可仕候。（大正元年九月發行アララギ第五卷第九號）　明治四十五年三月二十六日　京都帝國大學病院十二病舍耳科より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其五

九州から一度も葉書をあげなかつた。鹿兒島をそこそこにそれも雨のどしや降りの日、さうしてうつかり大隅の山の中の溫泉へ行つたので、書く積りのこの葉書も其まゝになりました。長崎へも行くし、開聞岳へも登るしして、太宰府にまどろ

いて遂に福岡へ到着しました。暫時滯在です。何か御知らせ下さい。開聞岳へ渡る甲板で天草の女の博多節に聞き惚れました。長崎へわたる甲板で天草の女を數多く見た。大隅の山の溫泉で思ひがけぬ美人を見た。（大正元年九月發行アララギ第五卷第九號所載　明治四十五年五月十日　福岡市武井氏方より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其六

對馬から昨夜壹岐へ渡る。玄海の波にすつかり醉つた。この島のたつた一つの溫泉へ來て、船の疲れを息めようとしてゐる。菽の畑に涼風のわたるのを見て、故鄕へふいともどつたやうな氣がした。（大正元年九月發行アララギ第五卷第九號所載　明治四十五年六月二十七日　壹岐國鯨伏村湯本より　勝本港小敷瀨の繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其七

地圖を見てもすぐ分る、對州は大きな蜈蚣が穴から出かけたやうでもあるし、又やどかりが體を突き出したやうでもあつて、山ばかりだから丁度毛だらけのやうに見える。それが壹州になると靜かな水の上に溶けた蠟が、ぽつちりと落ちたやうな形である。さうしてさう高い山がないから地圖で見ても滑らか相である。それが一昨日と昨日とで空氣が冴えたので、それでなくても景色のよい海岸が如何にも爽快であつた。壹州に只一つ溫泉場があるが、入江になつてあたりは鯨伏村といふ。鯨伏はイサフシである。殊に昨日は一番南の鄕の浦へいつて少し高い所へ上つたら、肥前の平戶から五島の一部まで見えた。そこに土地の商人らしい人が六七人居たが、五島のあたりが見えると云ふことは容易にないのだ相で、其内の何かは始めて見たと云つて居た。そこらには松があつて土は短い靑芝で掩はれて居る。靑芝は伸びれば苦牛が喰つて畢ふから何時でも綺麗なのである。牛は到る處に居る　小徑を行くと時としては牛が橫に立つて道を塞いで居る。彼等は

人が行つたつてちつとでも動かうともしない。しいしいと少し位いつたつて駄目である。其の筈だらう、島では今田植の終る所でそつちでもこつちでも馬鹿に百姓が喚鳴つて居るがそれは乾度牛に田を掻かせて居るのだ。此島の樹木はかなり多くてさうして翠が深い。其の間にそれは山の上の方までさうなんだが、淡い緑が交つて居るのは皆大豆畑である。大豆は大分よく出來るとかで、畑といへば九分まで大豆ばかりである。涼しい風が大豆の葉を渡つて吹く夕方に、牛は依然としてのつそりとして、葉をむしつて居ることがある。畑と畑との間に茨に交つた芒をむしつて居るから牛は大豆の葉は喰べないのかと思つたら、牛によつて好きなのと、嫌なのとがあるんだと云つた。

牛の立つて居るところには、地を偃つて茨が白い花を開いて居る。赤い莓がびつしりなつて居る。莓は大分たべた。それに到る所山桃がある。時々腕白も木になつてることがある。何處であつたか、熊野あたりの神社の謠であつたが、

山を通れば山桃ほしや、身をも投げかけて搖すらば落ちよ、さてもつれなの
　山桃よ。

と云ふのがあつた。記憶の誤はあると思ふが、何でもこんなのであつた。山桃は幾年前からどんなのかと思つて心にかけて居たが、博多で始めてたべて、此の島で成つてる處を見た。ここでは一合が一錢宛ださうだ。

今日元寇の難に殉じた、少貳資時の墳墓のある瀬戸と云ふ所へ行つて見た。料理店はないから木賃宿で飯を食つた。有合の飯は麥八分に米二分であつた。子鰯が三匹、それと朝干ししたばかりだと云ふ烏賊を燒いて呉れた。これは甘かつた。それから五つも燒いて貰つた。それで幾らだと聞いたら六錢くれと云つた。生來始めてこんな廉い勘定を拂つて見た。島の人の言葉の丁寧なのに驚く。

壹州と云つて一國だが、北の勝本から南の郷の浦まで僅かに四里、馬車は八臺あるが人力車は郷の浦に四臺切りださうだ。これで全島に人力車が四臺しかないわ

けだ。それで遂に人力車の走るのを見ない。（大正二年一月發行アララギ第六卷第一號所載　明治四十五年六月二十九日　壹岐國勝本より　封書　齋藤茂吉宛）

其八

明日は道後の溫泉へ向け出發します。首が二つのぞいてるところはどうです。さうして此女はどんな種類だと思ひます。（大正元年九月發行アララギ第五卷第九號所載　明治四十五年七月十八日　別府溫泉より　別府濱脇藥師溫泉女湯內部の繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

（齋藤茂吉曰、繪はがきには裸形の今樣の可哀らしい女が八人湯を浴みてゐる。女童も一人居る。お尻から膝あたりまでいかにも恥かし相にしてゐる。）

其九

實は昨日小豆島へ渡る計畫までしたのであつたが、寒霞溪は少し難儀な處だとい

ふし、急に身體を大事にしたくなつたので思ひ止つてしまつた。其かはり屋島や金峰は十分に見た。那須の與一の扇の的も畫に描いた處では向ふが果てしのない大海のやうに見えるが、實は西が屋島で、東が五劍山で、左手の人さし指と中指だけ二本突き出して、それを少しく開いたやうな形の處である、指の間がその海である　五劍山といつたつて何でもない低い山に岩が立つて居るだけだ　其挾まれた狹い海の邊で繼信も死んだのである。與一が大將の御前を立つて、何でも常陸の北下野境のあたりから出たといふ馬に跨つて、ざぶりと海にをどり込んだ時は、波があつたといふ事は、あの條を讀んだものは知り切つた筈であるが、彼が弓箭の神を念じて居るうちに、眼を開けば波は全く靜まつて居たといふ事が、それに瀨戸内海に面した何れの國の諺にもある、夕和の時が來たのであつたといふ事は、凡ての人に必ず知られて居るとは云ひ得ないだらう。夕和でなくともそんなに波の荒れる處ではない。前にもいふ樣に恐しく狹い入江である。然しながら

海中に馬を乗り入れながら、遠い扇を射ようとする者には、鬢の後れ毛を吹くやうな風でも非常な邪魔であつたのであらう。だから與一の功名は決して沒却されるものではないが、自分は屋島へ來てはじめて源平の戰がどんなであつたかを想像することが出來たのを愉快に思ふのである。瀬戸内海は綺麗な場所である。さうしてこの碧の靜かな海の中に、平家が沈んだといふのは、悲慘の極であるが、又何といふいい調和であるだらう。（大正元年九月發行アララギ第五卷第九號所載　大正元年八月九日　屋島より　善通寺國寶行基菩薩作地藏尊の繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其十

喉頭は心配なくなつて居るさうです。二三日中に立つ積りです。
久保夫人は先月からアララギを購讀して居られる。久保博士も大分君を褒めて居られるさうである。精神病科のお醫者さんだといつたら夫人が驚いて居た。獨の

み朝の飯はむ「幼妻少女となりて」「みちのくの我家のさとに黒き蠶が」「ほのぼのと茗荷の花を見守る時」だの一切合切話した。さうして「女難の相かしかに非ずか」から君が市中を歩いて馬鹿に女に目がつくこと、紐のついてない羽織を着ること、足袋のこはぜのはめないのを後から僕が見て、獨で微笑して居たことまですつかり饒舌つた。それでも中原しづ子さんが來た時には兩方のこはぜをすつかりはめて待つて居たぢやないか。蔭での紹介がすんだから、これで君も博多の方へ知己が出來た譯だ。

アララギはまた柳原伯爵家からこちらの鑛業家へ輿入に成つた方も見られる。久保夫人と大仲好しである。此夫人も新しい女歌人だから君の歌も見られるだらうと思ふ。さうして解つて欲しいと思ふ。婦人畫報の令孃畫報といふのを見た。君は仕合者だ　大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年三月三十日　博多千代松原より繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其十一

昨日門司を立つて今朝宮島へついた。宮島は外見はもう俗地になりつつあるが、一歩踏み込むと深山にあるやうな感じがする。赤松の下にはアセボの花が白い玉でも懸けたやうにざらりとさがつて居る　松の幹がかすかに綠を返すのか、鵯の聲までが餘韻を含んで鳴いて居る。一帶に水がたまらぬ程淸冽である　いつ來てもいい處だ、二階の障子を開放して對岸を見て居ると、汽車がごろごろと走つて來て宮島驛へそつと止る。だから汽車の窓からもこちらの赤い大きな華表がはつきりと、さうして赤い大きなお宮がほのかに見える。どうしたつて宮島は瀬戸内海の眼目である　中心點である。山の翠がこんな處は他にない。だから海は活きて光つて居る。世の中はもう花である。宮島も花である　さうして病人は午餐をもどかしがつて往來をぶらぶら歩いて居る。西洋人の女が三四人連て何かぷりぷ

り喘つて行くのを羨しがつて居る、それだけ病人はもう希望に輝いて居るのである。

それからも一つ、僕は三日の日にもう九州を去らねばならぬので、たつた一つ見殘してあつた宇佐八幡へ行つた。停車場から往復三里を僅の時間で歩いて疲れなかつた。病人は足が丈夫である。そこは應神天皇の誕生地と傳へて居る。九州一の欅の大木がある。いい鹽梅に實を拾つた。歸つたら圃へ蒔いて二三年して屋敷へ移植しようと思ふのである　箱崎でも拾つて置いたから、雨方蒔いて箱除をして丹精しようと思つて居る。病人はもうこんなことを考へるやうになつたのである。

宇佐の八幡には子を抱いた若い女が幾らも參詣に來て居た。三日四日は子安の祭といふので賑へるのであつた。さうして此の四月の三日といふのは僕の誕生日であつたのである　病人も段々めでたく春になつて來さうである。（大正二年六月發行ア

其十二

みな月十日の葉書が十四日に手に入りました。久保さんの夫人さんを訪ねてあの葉書を受取つて、其日は琉球の西瓜を御馳走になりました。葉書といつてもたつた一首の歌、大いにまごつきました。

國出でてはるばる來ぬる我故にここに女を憎むべしやも
我故に國いでてはるばる來ぬる女をここに憎むべしやも

から置き換へて見て、赤光一中の或物に該當しはせぬかと思ひます。アララギの同人の消息を一向に解して居ないものですから、時々は空しく首をひねることがあります。どうですか其内に何とかいつてよこしませんか。

昨日内科の武谷教授の診察を受けました。四十四年からの病氣としては進んで居

ないといふことですが、去年の末頃からの悪かつた時期を知らないからなんでせう。二三月の頃からでは體によくなつて居るからなのでせう。動いちやいけないといふのですが、入院が出來ないものですから、毎日雨の中をしよぼしよぼと病院へ行かなければなりません。寶亭へ行つた次の日から昇つた熱がそれつきり下がらないのです。箱崎の砂畠に作つてある南瓜の花を見に行きたくても雨だから駄目です。庭には枇杷が山のやうですが、一昨年程うまく感じません。(大正三年六月十七日　福岡大學前通り平野旅館より　ハガキ　齋藤茂吉宛)

其十三

病棟には時々教授の總廻診といふことがあります。今朝もそれでしたが、私の一室は除外されてゐます。それは日曜日を除くの外は、必ず一度博士自身に外來の診察室で藥を塗布してくれられるからなのです。これから一時間後には今日も藥を

つけてもらふのです。此の手紙を書き終つたら間もなくでせう。十日に二度目の手術がありました。手術といふのでせう、咽喉を電氣で燒いてもらつたのです。現在博士のやられてる咽喉の見方は、懸垂喉頭檢査法とかいつてます。神經を鈍らせるやうに注射がしてあるし自分でされることですから、舌の根で頭を引つ釣るのだといふことは分つてますが、よくはわかりません。兎に角藥のためにふらふらになつて其日は筆を執ることは不可能ですから、原稿は九日にあらまし書いて罷ひました。さうして十一日に蒼き溝の後半をつけ足しました。床頭臺といひますかあの藥壜を置いたりする戸棚ですが、私は其上で立つたなりにして書きました。隨分腰が痛くなつて閉口しました。歌の原稿は蚊帳の中で書きました。二日ばかり前に中村君から葉書が來ました。一寸でもいいから蒼き溝の評を書けとあります。作者としてはさう希望するのは當然ですが、私の方からいふと、多少でも身體に苦痛を感じつつ書くのは結果不十分に陷つて、隨つて無責任に見えま

す。それは大變厭なことであります。中村君の葉書は三枚つゞきですが、例の氣分が出て居て非常に面白いから、編輯所としての貴下の所へおくります。序に葉書のとゞいた時は原稿は出來たところでした。雜誌の編輯者でない私には、行數などに少しでも心を配るのは、無意味であることを、つくづく感じたのですけれど、さうばかりにも行かないものですから、きつちり六頁の積りで、加減しました。中の歌などを六號にしたらうまく篏りませう。私の歌はもういけなくなりました。あの半分にすりやいいのですが、頁の都合を思つてあゝして置きました。詞書を六號にでもしたら三頁になりませう。編輯などといふことを、ちつとも聞きも知りもしないうちはよかつたのですが、そんな所へ心を配るやうでは、平生六ケ敷いことをいつても駄目な譯です。然し凡てあはれな自信のないものばかりですから構ひませんが、若し幾らでも自信のあるものであつたら、一字でも他の爲めに增減はしまいと思つて居ます。だがそんなものが出來るかどうかが疑問で

す。――もう外來の診察室へ呼ばれました。九時半です。それから吸入をしますし、午前は暇が少くなります。――今日は吸入だけでよかつたので意外に時間があることになりました。――十時十分。――今朝博士の前に餘り暑いから何處ぞへ行く積りだといふのです。さうして私には涼しい處へ行つたらよからうといふのです。一週間か十日で燒いたあとが癒るだらうといつてます。私は先頃から日向の青島といふ處へ行きたいと思つてます。宮崎まで行くのが汽車からおりてかなり不便なやうですが、青島は宮崎から四里位だといつてます。宮崎には專門は眼科ですがここから出た學士が一人居ます。私の知人ですからすべて此間照會して置きました。

　　飫肥の殿さま清武泊り亂れ桶かよ帶こひし

といふ俗謠を此間見つけたので其學士へ序に聞きましたが要領を得ません。然し清武といふ處は宮崎に近いといふことだけは分りました。何だか興味饒かなやう

な俗諺ですから、若しも日向へ行つたらよく聞きたいと思つてます。暫時九州に居れば歸りにまた診察してもらふ便宜があるのです。中村君から紹介して貰つた高崎君の噺に、種子ヶ島附近の島で鹿狩りをしたとあります。小さな無人島で今でも種子ヶ島家の領地だといひます。乳を沒する草原が起伏して居るだけで、其周圍は蘇鐵ばかりの茂つた丘陵ださうです。山羊も手捕りにしたといつてます。それが種子ヶ島家の當主の歡待であつたといひますが、蘇鐵の丘へ鹿や山羊を追ひつめた光景を想像して見ると、私達には南海の島々はわからないにしても非常な興味を喚び起します。それに種子ヶ島にはバナナがあるのです。私はどうかしてバナナのなつて居る島へ一度行つて見たくてたまりません。大隅の南端の佐多の岬には、野生の蘇鐵が茂つて居るといふことを聞いた丈で、行つて見たくなつたことがあるのです。開聞嶽へ行つた時に、蘇鐵の葉で結うた垣根を見たことがありました。

病室では蚊と蚤とでかなり困りました。蚤は二三日前の夜、其の健脚をふるつてむくむくと進んで來た處を、私の指頭が敏捷に働きました。それは一匹でしたがそれで大抵最後らしいやうです。五十匹以上捕つたのですから容易ではありませんでした。只うつかりすると蚊が蚊帳の中へ侵入して困ります。藪蚊なのですから敏捷で手におへません。だが妙なもので、蚊には困らないといふものが居ります。以前瀨戶內海で鹽田を經營したことがあつたとかで、あの鹽燒く煙の立ち騰る鹽屋の中は蚊が居るさうです。低いさうして甚も薄闇い鹽屋は蚊のためにはいい隱家でせう。それで蚊といふものには一向屈託なくなつたさうです。此人は夫婦で朝鮮から來てます。眼の見えない七つばかりの子のためです。最初眼科へ行つたさうでしたが、實は鼻腔內に肉腫が出來て、其爲に壓せられて眼球が飛び出し、同時に失明の狀態に陷つたのですが勿論癒りやしません。夫婦はそんなことは知らず只管博士を手賴つて居るのです。さうして世故を經た亭主は噺が好きで

相手を擇びません。何も知らずに居る患者が相應に多いのですが、無智なのが却ていゝか知れません。考へて見ると哀れなものですが、あはれといへば彼の子の母が最初耳鼻咽喉科の教室へ來た時、博士が一寸鼻を切つたので子は非常に泣きました。只怯えたのです。それを次の室に待つて居た女房が、袂を目に當てて泣くのです。袂はぐつしよりになりました。それが一番深く私の頭に印象されてます。

昨夕から今朝へかけて私の床頭臺の一輪挿に小さな變化が起りました。看護婦の詰所の窓の下にはどの病棟にも草花を植ゑてます。昨日の夕方看護婦が頻りに草に水をくれてました。一人の看護婦が私に夾竹桃の一枝を折つてくれました。此の看護婦は撫子の花が一番好きなので、それも野生の薄い花のに限るといつてます。それで何處に能くさいてゐるといふことまで非常によく知つてます。惜しいことに博多の海岸には餘計にはない相です。今朝おそく目がさめて、いつの間に

か蚊帳も外されて居ました。室の隅へそつと置いた夾竹桃がどうしたのか萎んで居るのです。それが何といふことでせう、十分だと思つた水に枝の端がとどかずに居たのです。さうしたら撫子の看護婦が、白い桔梗とモントブレシャの花とを見つけて來てくれました。モントブレシャは伊藤左千夫君が平福君に頼んで、あの小さな戸棚の扉へ描いてもらつた赤い草花です。牛乳を持つて來た看護婦が、白い桔梗もいいが此の赤い花がいいといつてました。暑くて汗がだらだらと出ます。然し私等は肌を脫ぐし、水でふくことも自由ですが、看護婦には同情してやりたいと思ひます。年のいかない見習で小さなガーゼの切をもつて「暑うして、暑うして」といひながら汗をくるりと拭つてる所はいぢらしいと思ひます。

これからエニグマの原稿を始末しなければなりません。歌はアララギ以外には決して出さないのですから、勢ひ何か書かねばならなくなりました。また汗びつしよりになります。もう疲れました。書きたいと思つてたこと

がこれてすつかり忘れて居ました。あとはあとから。（大正三年八月發行アララギ第七卷第七號所載　大正三年七月十四日午後一時　福岡より　封書　齋藤茂吉宛）

其十四

島にまばらなのは松の樹です。さうして草の茂つたやうなのがびらう樹の葉で、ぎつしりに成つてゐる處です。地理學上熱帶植物の多いので有名な島だ相です。その草木が陸地の方にはありません。期待して來てもそれほど失望はありませんが、ここで生れて初めての目に遇ひました。それは肺病の様だといふので一軒體よく斷られました。そしたらふと知合の東北人の土木技手がいい家を見つけて與れました。今居るところです。それがまた其技手へ向けて、私の宿がへの請求です。先の宿の主人から注意されたらしいのです。それでまた技手が見つけてくれました。（大正三年十一月發行アララギ第七卷第十號所載　大正三年八月十七日　日向青島より　青島の

其十五

日向の南の方まで來てしまひました。此處から日和の都合でいますこし南へ行きます。心の落つく暇がないので仕方なしに歩いて居ます。（大正三年十一月發行アララギ第七卷第十號所載　大正三年九月四日　日向梅ヶ濱より　梅ヶ濱の繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其十六

從來の「鍼の如く」のやり方は投げやりで慚愧の至りです。あんな事はもう再びしません。少くとも二三ヶ月ぢつと見て居てからでなければ、人に示すべきものでないことをつくづく悟つたのです。こんな事は今更のやうですが、人間は時々無氣になつて常規を逸したがるので悲しい。

凡ての藝術は「冴え」があつて活きる。短歌の雜誌を見る毎に此の「冴え」のある作品を發見してさうして十分の尊敬を以て之に對したいと念じてゐる。これは決して小さな問題ではない。

アララギの前號評には大變私等と考の違つたのが出て來ます。貧いとか佳作だとか趣味がないとかいふ言語の意味が、私等の思つてゐた處と大變ちがつて居るのです。お目にかかつたらお話して見たいやうにおもひます。（大正三年十月發行アララギ第七卷第九號所載　大正三年九月××日　別府より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其十七

別府へ上陸して始めて大阪の新聞を其日に見る事が出來た。尤も午後四時過頃でなければ賣りには來ないが、晩餐の給仕に來た女中が膳を置いて飯を一杯つけると直ぐに新聞を取きよせて、「こりや毎日ですね」と獨語してそれから「旦那さん

あなた小說を讀みますか」と突然な問を發した。「何を」――ここに此の「かたおもひ」といふのがありませう」「ええつまらん」私は何心なくから言つた。すると女中はお盆を膝に突きつけながら、「そりやねえあなた、からいふものは考へて見りや馬鹿馬鹿しいやうなものですがね。それでもやつぱり讀んで置いた方が身の爲になりますよ」

女中は濟したものである。一語塞る。（大正三年十二月發行アララギ第七卷第十一號所載　大正三年九月二十一日　豐後別府より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

其十八

博多で出來た原稿紙はこんなものです。私位の作者には丁度いい鹽梅か知れないがどうもペンの滑りが惡くていけない。丸善の支店があるが二十四字詰のは無いのです。それでも歌が六十首からになりました。どうか詞書は六號にして下さ

い。七卷五號の工合は私が非常に氣に入つて居ます。あれだと歌が惡くても活きるやうな心持がする。江戸の魚屋は腐つた松魚を活かして賣るといはれたが、こんな僻遠の地に居る人間の作品を活かすのは、江戸在住の君等の手腕にあるかも知れません。

「霧島はそばえする見ゆここにして蟵の釣手のさやぐまともに」といふ私の歌の「そばえ」が不安だから別にして置いたのです。文展に日照雨と題した美人畫があつたが其れを一方では「そばえ」とも讀ませて居た樣だつたから本當にそれなら何處の方言でもいいから棄てない樣になれば幸だと思ふ。

先月下旬からふと歌の心持になつて大分推敲がうまくいつたけれど其ため頭を非常に惡くして眠れない事があつて困ります。今夜も頭が痛くていけない。それに寒が凄くなつて北風が戸をがたがたさせて居る。何しに急ぐのか外を驅けて歩く下駄の音も寒く響く。いやな晩です。うまく眠れればいいがと思ふばかりです。

感想も書けとあるが明後日は大事の電氣燒灼のある日だからパントポーンの注射で身體がぐつたりとなる。もう其内には締切日限に後れます。……何だかこちらで越年し相です。未だ言殘があり相でならない。（大正四年一月發行アララギ第八卷第一號所載　大正三年×月×日　福岡より　封書　齋藤茂吉宛）

其十九

久保田君、古泉君、いま變革の時期。大事な時。あぶない時。いくら作つてもうまく行き相にない時。だれる時。いまいましい時。怒りたい時。何でも彼でも氣に入らない時。濁る時。冴えない時。泣きたくなる時。誰も同情者のないやうな心持のする時。此時があぶない。さうして尤も大事である。難有い時である。自分にだけは遮られて見えないが、赫灼たる光明が、壁一重のあなたには耀いて居る。もつと疲れなければいけない。へとへとに成つて仕舞はねばならない。

棄ててしまふまで脈に成らねばいけない。さうしてそれからである。それからである。（大正四年一月發行アララギ第八卷第一號所載　大正三年×月×日　福岡より　繪ハガキ　齋藤茂吉宛）

古泉千樫宛

其一

御書状難有奉存候。拙作に就き意外の御稱揚にあづかり却ていたみいり申候。小生には最初より氣にいらぬ作物に有之候。其缺點は作者が一番よく知悉致居候ことと信じ申候　所謂藝術的良心の缺乏より來り候失策に有之候。むふさは實在の

人物に候。然し小生は此の人物は一遍も見不申候。篇中の光景人物他は皆小生の熟知せるものに候、主人公の不分明なる所以に候。小生は更に小生の幼時より熟知せし男の噩に就いて異狀の事實を耳にいたし候。此は兩三年のうちには書き可申候。判斷すべからざる異狀の戀に候。

早速返書差遣可申の處、ホトトギス十月號へ掲載すべき小説の執筆に忙しく昨日まで頭をいためて申候。小生は人の倍も執筆の時間を要し申候に付、虛弱なる身體はために苛はれ申候。題は教師と申候。幸に掲載相成候はば復た御高評相煩はしたく希望に不堪候

葉雞頭九尺に相成申候。

歌とは絶緣に候。匆々。（明治四十二年九月二十二日　自宅より　封書　古泉幾太郎宛）

其　二

拜復、過日は珍らしく御目にかかり半夜の淸談近頃心行く限りに有之候。其節御はなしのアララギ原稿わざわざ御催促被下候へども此はすこしく困り申候。一月の分へならば執筆相叶ひ可申候へども、唯今はホトトギスへ載せ可申小說の腹案中にて、何事も手につき不申候。十二月五日までに逃れと申ことに候へば、此も果して期日までに出來可申か否かも覺束なく焦心致居候次第不惡御宥恕被成下度候。歌は今年になりて一首も無之隨つて歌論などはとてものことに有之候。甚だすげなき申條に候へども御諦め被下度願上候。匆々。（明治四十二年十一月十五日自宅より　封書　古泉幾太郞宛）

其　三

拜啓。「土」の校正は是非共御願仕度、今朝春陽堂の番頭とも談合仕り候。それに付甚だ恐入候へ共、明後日の日曜午後三時頃から小生方へ御出被下度願上候。

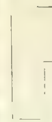
御差支有之候はば一寸葉書なり御遣し被下度候。（明治四十五年三月一日　東京下谷車坂町那須館より　ハガキ　古泉幾太郎宛）

其　四

拜啓。明日は御差支無之候はば午後一時過位に御出被下度候。他に大學生一人同行有之候て苦しからずば、有樂座見物仕度候。如何にや。午前は他出　正午頃歸り可申候。（明治四十五年三月二日　東京下谷車坂町那須館より　ハガキ　古泉幾太郎宛）

其　五

忘れぬうちに一寸申上度候は、御手許へ差上候切拔の內、十の一二郎ち四十七八回、及び廿二の一郎ち百廿回の三日分は、小生所持の分を切取り申候もの故、校

正の時分は右三日分だけは、必ず御保存被下度願上候。小生の分を無理に切取候故こんな形に相成居候。書物になればそれにて宜敷ものの樣に候へ共切拔も保存致置度、それには途中が缺けては淋しく候へば前以て御願申上候。面倒の仕事なれど何分とも御盡力被下度候。小生は明日歸郷仕り候。（明治四十五年三月五日　東京下谷郡須館より　ハガキ　古泉幾太郎宛）

其六

右手の人家の上にむつくりとしたのが笠置山に候。月が瀬の梅はおそかつたが此の山には節は無之候。どうしても登つて見ねばわからぬ山に候。山上の眺望もおもしろく候。（明治四十五年四月發行アララギ第五卷第四號所載　三月二十二日　笠置より　繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其七

今日は備前岡山から廣島位までは參り居る筈にて、ふと此の病院に入ることに成りすつかり豫算外れになり申候。暫く此處にいねどり可申候に付、今年も思はぬ京の花見をすることに可有之候。

「土」に就いてはすつかり小生方の申出は駄目に相成申候。すべて止むを得ぬ儀と存じ候。

入院中に序文なども認め申度と存じ候。

すべて何分ともよろしく御願申上候。（明治四十五年三月二十六日　京都市醫科大學十二病舍耳科より　三十三間堂の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其八

吉野より一葉差上申候。病院は十日に出て昨日ここへ參り候。尙ほ暫時京にあり

て西行の途をつづけ可申候。小說の校正はまだはじめ不申候や、御消息被下ならば、すぐならば病院へ願上候。（明治四十五年四月十三日　吉野山中より　吉野山中一目千本櫻の繪ハガキ　古泉茂太郎宛）

其九

廿八日登山仕候。今日市中を見て此地を立ち可申候。若し小生へ御消息可被下ことも有之候はば、福岡市外東公園裁縫女學校前武井準氏方宛に御願申上候。（明治四十五年四月二十九日　鹿兒島より　薩摩開聞嶽の繪ハガキ　古泉茂太郎宛）

其十

御葉書拜見仕り候。すべて木呂子氏へ申送り候へ共、小生は何も書き不申候。校正も隨分御骨折被下候ことと蔭ながら御推察申上候。小生は暫時此地に滯留、久

保博士の世話に相成筈に有之候。一寸左千夫君まで葉書にて申上置候へば、小生の近況は就いて御覽被下度願上候。（明治四十五年五月九日　福岡市外東公園裁縫女學校前武井準氏方より　筑前名島海濱の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十一

御挨拶の御葉書拜見仕り候　小生も何もかもうれしく存申候　漱石先生の序文は小生感謝の外無之、もう十遍以上も反覆して讀み申候が、どうも何と挨拶の手紙を書き候て宜しきか殆んど困り申候。（明治四十五年五月二十日　福岡市外東公園女學校前武井氏方より　筥崎街道の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十二

芥屋の大門に來りし記念に有之候。

あゝらぎ難有奉存候。齋藤君思ひきつたる處おもしろく候。（明治四十五年六月十一日筑前芥屋より　芥屋の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十三

近々に博多を立つて歸途に就くので、私の生涯にはもう再び來る機會は無いと思ふので、遂對州まで遁れて來ました。ほんのもう上陸したといふ丈で、竹敷まで行つて見たに過ぎません。竹敷も既に海軍の方では必要がなくなつた相で、軍艦は急に引き揚げる、で目前に滅亡だ相です。去年の三月廿日と今年の四月廿日と二回に、海軍の所有大倉庫が火災に逢うて、其上に要港部も直ぐなくなるといつて居ます。昨日竹敷で午餐を喫べながらきいた女中の咄なんですが、其女中が倉庫の燒けたのは誰かが火をつけたので、竹敷を惡くしようと思ふ者の仕業だらうと眞面目に成つていつてゐるのです。それ丈竹敷はひどく成りつゝあるのは事實で

す。對州の東海岸でも北の方では山へ登つて海戰を見た相で、艦が沈んだと思つて居るとぞろつと端艇が浮んでさうして澤山の捕虜が一時民家へ收容されたなどといふことも聞きました。今夜壹岐の勝本まで乘らうと思つてますが、少し風が出て來た樣で不安に思はれます。何しろ暑くなるので身體の疲れるのには閉口です。（表面）

歌は一つも出來ません。どうかして畢つたからもう駄目です。文章も一つも書きません。頭が惡くて迚ても根氣がないのです。書きたいと思ふことも有るのですから、打棄つてしまふのは遺憾のはなしですが仕方がありません。何處でも見られる丈見て行かうといふのが現在に於いての第一の希望なんです。女の馬乘りせなに龍三巾の前掛カス卷横ぐはへ」といふのがこの唄の一つですが、港へ薪など賣りに來た女が、歸りに馬上嚙つて行く菓子がカス卷で、餡を入れて卷いたので、伊達卷の渦をまかぬものです。成程在所の百姓女には大きなのを一つ嚙るの

がうまいことでせう。さうしてそれが一寸辨當がはりだといひますが、成程腹へも溜りませう。（書面）（大正元年八月發行アララギ第五卷第八號所載　明治四十五年六月二十六日對馬嚴原より　對馬農人風俗の畫ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十四

壹州で一番南のさうして凡ての役所などの存在してゐる郷の浦の岬の上から昨日展望を恣にした。非常に冴えて肥前の五島の方まで見えた。遙か沖に二神島（フタガミ）といふのがある。そこには誰かが牛を放牧して番人が一人ついて居た。孤島に牛を相手といふのは寂しくもあるだらうし、又暢氣でもあるだらうと思つたら、それが此の二月に殺されて居たのを發見したさうだ。牛は皆居なかつた。醫者の鑑定では死骸はどうしても去年の十二月頃斬られたのだといふ。賊が牛を盜んだので、脱そこ　ある。さういふ悲劇があの美しい海上に演出せられたといふことは請取れ

ない程である。壹州の（以上表面）軟かな女性的な景色は他には見られないかも知れない。私は非常に好きである。女性的といへば畑に到る處大豆ばかりといつてもいい位だが、其大豆の種類は皆「生娘」である。私の郷里でも此は大分作るが此處で見るといふのは格別に面白い。

明日の朝はもう博多に居ます。さうして三四日の内に歸途に就かうと思ひます。平福君へ壹州のことを書いたら大きに種が少くなつて困りました。

（裏面）（大正元年八月アララギ第五卷第八號所載　明治四十五年六月二十九日　壹岐勝本港より　勝本港の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十五

宮島の山はさまで高くはないが、登攀してさうして宮島の全體に於て三景の第一たるを知つた。（明治四十五年七月二十六日　安藝宮島より　嚴島神社寶物長澤盧雪筆の繪ハガキ　古

泉幾太郎宛）

其十六

民部君へ一泊して松江の市中を案内して貰つた。同君の夫人にははじめて逢つた。夫人から君の噂が出た。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年四月十七日　出雲杵築より　出雲大社本宮の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十七

八月號に批評された私の歌は自分でも甚だ不滿足なんですが諸君は少し遠慮し過ぎて居るかと思はれます。二首の内はじめの二三の句は到頭落つかずに仕舞つたのです、御說は全くのことです。他を欺くことは出來ても自らを欺くことは人には不可能なのです。だから惡評を蒙むる時は大抵自己に覺があるのです　其時に

如何にも落ゐることが出來なかつたらそれは我慢の念があるからでせう。あの四五句は自分もいひおほせたと思つてました

アララギ八月號を久保夫人から借覽しました。私の處へはいくら待つてもとどかないからです。私の歌の詞書に就いての貴評には一言もありません。只私は君が不卽不離といはれたことに感謝いたします。此前秋海棠の讚の歌に就いても不卽不離といふことをいはれた時、さう理解してくれれば嬉しいと思つたのでした。私の歌も毎々濫作に流れてきてすつかりいけなくなりました。然し仕方がないから當分はこんなものでも出します。詞書といつても十分の含蓄があれば同時に活きてくるのですが、肝腎の歌が惡くては文字の數が餘計に成るだけ、却ていけないかも知れません。君の作品はアララギに見えませんが、大いに自重されて居ることと思ひます。それならば何よりのことです、大いにやつて下さい。八月號はいま以て私の處へはとどきません。それから久保夫人の（本、脱か）、來たばかりに

借りてしまつて、私へとどいた時に新しいのをかへることにしました。こんなことては暑いのに苦んで原稿を書く元氣もないからと、齋藤君へいつてやつたからおどろいたでせう。こんどは校正も粗漏だから大いに狼狽したのでせう。それで帳簿をあてに發送したものだから、私の方は忘れたらしいのです。君はどこへも旅行しませんか。（大正四年六月發行アララギ第八卷第六號所載　大正三年八月七日　福岡より　鵜來島の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

其十八

博多からの轉送の御葉書昨日拜見しました。アララギも。實は南の方へ出掛けて昨日もどつたのです。何よりもアララギにはすべてを通じて、澄んだとか冴えたとかいふ分子が殆んど發見されないことを遺憾とします。だから氣分とか感じとかいふもので、容易に人の頭にはひり得るものを、無理押しつけにして居る傾

さがあります　何をいつた處で自分自身に趣味をもつてからでないと無意味に成ります。君の九月號のものでも、もつと心にしみじみとしてから出すとよかつたと思ひます。お互に苦しまねば成りません。私も旅に出て全く出來なくなりました。

熱帶植物の繁茂によつて、地理學上有名な處に成つて居るさうです。（大正四年六月發行アララギ第八卷第六號所載　大正三年九月七日　日向靑島より　靑島檳榔木の繪ハガキ　古泉幾太郎宛）

中村憲吉宛

其　一

拜復。馬鈴薯の花愈御出來の由にて、御郵送下され候趣難有奉存候。扨て兼ねての御紹介の件は龜岡技師及び平等院住持へ在京中封書差出申置候へば、定めし好都合に相運び候ことと存ぜられ申候。なほ念のため御希望により名刺二葉封入仕り候。過日御懇談申上候如く、太秦の廣隆寺、平等院、日野の法界寺の阿彌陀堂、醍醐三寶院上下ともに篤と御らん被下べく、龜岡技師に御尋ね相成候はば、心切の人に見受申候故、必ず心ゆくばかり教へられ候ことと存じ候。此は別途ながら西大寺觀音の朝鮮鐘も一見可然存じ候。寺の受付へ申込み梯子を掛けさせ、歸りに受付のものへ二十錢を投ずれば非常に喜び申候。只今忙しく候故右申進候。匆々。（大正二年七月十一日　自宅より　封書　中村憲吉宛）

其　二

御葉書を今朝拜見しました。病氣は入院當時と少しも變つたことがない樣で、熱は此頃の方が出る位に思はれますが、最初の氣管支加答兒はなく成つた相ですから幾らかいい方なのでせう。今日あたり退院したい積のが月末までとめられました。來月の五六日か十日位までには福岡へつきます。あなたの處へも一寸行つて見たい氣もしますが駄目でせう。鳳凰堂のことに就いては大分御苦勞なすつた樣ですが、私も迂濶に失禮しました。熱があつたりした時なので、遂過激ないひ樣をしました。然し篤と拜見しませう。さうしていろいろに私も考へさせられる處があるだらうと思ひます。拜見した上で申上げることがあれば申上ませう。私は何も建築などのことに就いて知つてる處はないのですから、再び雜誌などへ書く氣もありません。他人に對して恥かしいからであります

蟬が鳴く相ですが、それは必ず松の樹に鳴くのでせう。さうすれば春蟬とも松蟬ともいふのです。一寸みんみん蟬に似てゐます。私の鄕里では丁度今頃の時候に

鳴くと思つてました。或は今より少し早くから。松蟬の歌でも作つたらどうですか。先頃の大佛の歌は先づあれていいと賛成したいのです。自然の方も少し研究されてはどうですか。私のやつて居る様なでもいけませんが。私はどうも熱が足りない足りないと、死んだ伊藤君からもいはれて居ましたけれど、私は其點に自分を悲みたく成ります。自然といふものの研究もなかなか容易でなく、寧ろ骨折つて損失の多いものですが、――要するに派手でないから、製作の分量が少いから、さうして世間の一般が歸依しないから、世間に名を成すのに面倒だから。――そこに只自然を樂んで研究して行くことが矢張り尊い仕事と思ひます。從來私の執つて來たやうな遣方でもいけないと思ひます。私が舊作を見て迚ても歌集の出版などが出來なくなるのはそこなのです。別な人が別な見方をしたらいいだらうと思ひます。熱があつて優しいといふ人に是非手をつけて貰ひたいと思ひます。あなたなどが少し努力されたならどうですか。一つことを澤山にならべて作

ることもいいのですが、此間の大佛の歌のやうに、興が湧いたことを一つにでも二つにでも、數などには頓着しないでやつて見たらどうかと思ひます。さうすると自然に詞書の必要が起ります。現在のアララギの多くの作品は、折角自然其物のいい處を攫へたやうで居ながら、妙に型に篏つた自分の主觀で捏ねかへして、どれもどれも不透明な弊に陥して居るやうに見えます。アララギは今私には閤くて困ります。陰鬱な空の下に居るやうで、私のやうな絶えず頭腦を病んで居るものには苦しくてしやうがないのです。闇いといつたとて、掩ひかぶさつた嫩葉の陰ならば、そこに清新の氣が充滿して居て精神を爽快にしてくれます。私はアララギにはもつと明快な分子が交ることを切望します。自然といふものに感興を冇して作つたものならば、そんなに晦澁な不透明なものばかりが出來る筈はないと思ひます。それは深刻でないかも知れないが、私はしみじみ若い空と明るい光とを欲して居ます。五月二十二日九時半。（兩面に亙る）（大正三年五月二十二日　東京神田錦町橋

其　三

今朝は隨分念入りな自畫像におどろかされました。何でも一寸見には五十以上の人らしく見えたのです。然し何でもあんなに骨折つたらいいのでせう

葉山も小生はまだ知りません。一體私は旅行好でしたが、よくよくの貧乏旅行ばかりして居たので、遂景氣のよささうな處に縁が薄かつたのでした。鎌倉の大佛をまだ見ないのが遺憾です。先頃の御葉書ではなかなか感じのよさ相な處に見えます。あの歌も贊成が出來ると思ひます。私の歌は六月號に四頁にして出すことに成りました。淡々として水の樣なものですから其積りで御覽下さい　今年これから歌が出來ればいいと思つて居ます。さうすれば思ひ切つて歌集も出しますが（裏面）

鳳凰堂のことはさう氣にしないで下さい。もういいぢやありませんか。それよりか十分歌をおつくり下さい。さうしてようく眠つて下さい。昨夜少し眠れないので私は今日頭が悪くていけません。天氣の所爲ばかりでもないのです。

昨夜久保田君の處へ行つて編輯のところを見ました。（表面）（大正三年五月十五日　東京神田錦町寺田精舍より　大正博出品上村松園氏淡雪の繪ハガキ　中村憲吉宛）

其　四

備後の山おくとだけで、どんな處かわからずに居ましたが、高崎君からきいて幸に持つて居た地圖を披いて興味をもちました。出雲にも石見にも近い、あなたもいい處で生れたものだと思ひます。意外に開けた處かとも思ひますが、何だか人間を離れたところがあるやうな、一度は長い道中をゆられて見たい氣もします。目に入るものの青いものばかりといふことも私の心を惹きます。私も一室におつ

として成るべく外出もしません。暑いのにはかなり困つてますが、あたりが砂なもんですから只乾燥してゐて、潤澤のある草の花が見あたりません。あの白い百合の花はどうしても清冽な水の流れる山の草の中でなければ成りません。石上を走る水の凍える程つめたい山へも行つて見たく成ります。私は以前は只山が好きなのでした。それがいまは海岸をたよらねばならなくなりました。いづれは難澁な病氣なのですが、あの神田の病院で暇どらなかつたら、こんなに著くはなかつたらうと思ひます。

あなたの「若い諸」に就いてはアララギへ一寸おくりました。もう御らんのことと思ひます。暑いのに苦しんで書いたのですから、尚更不十分でした。疎末なものを書くことが私には苦しいのです。さうかといつていいことは出來ません。あなたには鳳凰堂論のやうなうまい筆があるのに、私のは只枯燥して居ます。私の歌はせめて三分の一位に削ればいいのですが、さうも成らずに居ます。まづ

くても私としては一轉化を示して居るのですから、此際つづけて行きたいと思つて居ます。すべてがアララギの作品から胚胎して居ると思ひます。私はやはり目を開くのが遲い人間なのでした。一昨夜ふとうかぶ處があつて、九月號にも一頁はおくれることに成りました。然しもう麥湯程の味もなく成つて居ます。こんなことで手紙が長くなつてしまひました。あなたはお歸りに成つて間もなく此の手紙をお受取りのことと思ひます。四圍の青いものを見ながら私へ葉書でも一つ下さいませんか。私も筆不性にして居ますから、どこのたよりも稀なのです。待つて居ます。石見へ落ちて行く筈の布野川は、あなたの氣に入る處ぢやないのですか。

私の枕もとにはいま桔梗が一枝、これは昨日久保さんの妹さんからとどけてくれたのです。それに白い夾竹桃、これは他の患者がくれたものです。花は看護婦が時々何處からかとつて來てくれます。牛乳の壜などにそれがにほひます。知人

に逢ふ機會のないのは淋しいものですが、ここの病室を離れたくもありません。ことしは餘計に久保さんをたよる心が深く成つて居ます。どうしたことでせうか。

高崎君には大分にお世話に成ります。お序にあなたからも宜しくお傳へ下さい。それでは布野川の水を想ひつつお手紙を待ちます。（大正三年七月二十四日　九州大學醫院西第二病棟より、封書　中村憲吉宛）

其五

「日まはりの花めぐりつらむか」

私は日まはりの花が日輪の動くに從つてめぐることをいつたやうにばかり見て居ました。さうしたら男が向日葵の花をめぐつたことなのだ相で、成程さうすればさうだと思ひました。男がめぐつたにすれば意味は解り易く成ります。詞書でも

あればもつとわかりますが）然し私の最初の解釋のやうにすると、一首の上に向日葵が大變活きて來て、複雜なものに成ると思ひます。同時に短歌が單に一首だけでは解釋が六ヶしく成ります。だけれど却て不卽不離の妙味が加はるやうに思はれます。（表面）

二つの解釋によつて晝夜の別の生ずるのも面白いことです。あなたには珍らしい歌と思ひます。私の平生いふ六ケしい問題は別にして。（裏面）（大正三年九月二十日豐後別府港より　豐後國別府海濱砂湯の繪ハガキ　中村憲吉宛）

（中村憲吉曰、原作。「ほかに又或は男ちかづきて向日葵の花ぬぐりつらむか」と云ふのが當時諸氏によりて、下句を「花なめぐりつらむか」となの脱字として評されたのに對する長塚氏の來書である。第三句の「近づきて」と云ふ語調からしてをの脱字を想定する事尤もである。その時小生も第三句の語聲の曖昧なのに不安であつたと記憶してゐる。第四句末になの有るとないとは歌意に相違を生ずること、又長塚氏の所說の通りである。當時小生もこれの差異に對しての辯說は何もして居ないやうである。兎に角問題にされて初めて自身の注意を惹いたほど當時自信を持たなかつた速詠歌である。小生にはあの重たい向日葵の花姿からして、その太陽の居る所に向つてグルリと（事實は徐々にだが）

對面ると云ふ性質が一層の憎しみを覺えしめたのである。而してそのクドイ氣持に執して居た當時には、この歌位では物足りなかつたらしい。なの字が入ると意味は徹するが、第三者に對する戒心の方が強くなる。併し小生の氣持前者が主要であつたから、林泉集には瑕瑾を認めながら原作通にして置いた。）

齋藤隆三宛

其一

拜啓。さき頃は久々にて御目にかかり思ひの外の御もてなし難有奉存候。小生はじめて味ひ申候こと故、しかと相分り不申候へども、フライの中に林檎が有之候様に感ぜられ候。忘れ難き品に有之候。

今程行は殊の外ひまどれ、漸く四五日前歸宅致候。松飾りも撤し候て正月も濟しき樣にかへり申候。

餘寒きびしく候て朝寢の癖止み難く、これのみ困り居候。

また其うち御目にかかり可申、只管御病氣の平癒を祈り申候。（明治三十九年一月十六日　自宅より　封書　齋藤隆三宛）

其　二

拜啓。其後は一向に御無沙汰致居候處、先頃は思ひも掛けず御懇篤なる御書狀に接し恐縮の次第に有之候。早速返書差進可申候處、六月中より痔を患ひ候て、姻戚に當り候醫者の許に暫く厄介に相成居候內、洪水に出會ひ申候て、心配のことのみおほく遂に今日まで思ひながら延引仕候。一つには小說のことのみ頭を惱し候て、暇ある樣にて一向心に餘裕とては無之自分ながら困り居候。「土」は只今の

處九十九回までの原稿とどけ置候へ共、全體にては百三十回以上に相成可申、女學生に喜ばれぬ故に、社の營業部にては只今持て餘しの由に有之候。然しながら書きはじめ候こと故、兎にも角にも結末まではつづけ申度と存居候。老兄の如く多大の同情を寄せられ候こと、假令只一人と申候ても心強く感ぜられ候。然しながら今回長篇といふもの始めて筆執り候へ共、體力と申すものの至大の關係あるをつくづくとさとり申候。前申上候痔疾と申すも執筆の當初、木造の腰掛に一日數時間づつ腰掛居候が原因にて、痔瘻性の腫物を誘發したるものと申候。根本的の手術を施すには、多少の時日を要すべく、それにては小說の稿を繼ぐことを得ず、已むなく衰へたる體力に手頼りて結末までは努力の覺悟に有之候。只近來倦怠の氣を生じ漸く枯燥しつつあるを憾み申候。「土」は冗漫にして面白からぬ小說に候へ共、百回以後の分は出來るだけ骨折申度と苦心致居候。「土」は只空想に非ずして、篇中の人物皆生存致居候。主人公たる人物には氣の毒なれ共、是非もな

きことと存申候。今夜眠る能はずしていろいろのこと考へ居候處、ふと老兄を思ひ出で直ちに筆執り此の狀認め申候。申上げ度ことは山々に候へ共此にて御免蒙り申候。

單衣にては堪へ難きまで冷氣に有之候。こほろぎの聲しきりに候。匆々。

（明治四十三年九月十七日　自宅より　封書　齋藤隆三宛）

其　三

拜啓。過日はわざわざ御見舞被下御厚志の程難有奉存候。早速御挨拶可申上筈に候へ共、齒痛に惱み申候に付不思失禮仕り候。不惡御ふくみ被下度候。今日も雨故外出致し難く苦しみ申候。十幾本の齒にいたみ有之候に付、此際十分治療相加へ申度と存居候。尤も只今痛み居候は一本に候へ共、それが爲氣分もふさぎ申候。晴天に相成候はば、日ごとに齒科へ通ひ申度心組に有之候。小生も今月中に

は退院相叶ひ可申、其上は九州福岡へ参り、久保猪之吉氏の診察を受け申度希望致居候。それまでには一度御目にかかり申たく、小生より御たづね可仕候先は御礼のしるしまでに右申進め候。匆々。（明治四十五年三月三日　東京下谷中根岸養生院より　端書　斎藤隆三宛）

其四

退院後一度御たづね可仕存居候て、遂御無沙汰に打過ぎ申候。不悪御海容願上候。

昨日月が瀬に来る。梅はおそし。梅の下には山葵畑ありていま花のさく処、其花ひたし物にしてうまき由に候へば、只今笠置へ参るに買つて提げて行かうかと思ひ居り候。

京へついてから茹でさせようかとに有之候。（明治四十五年三月二十二日　大和月が瀬より

其　五

九州の果までと思ひ立ち、ここまで參り候處、復た病院生活をするやうに相成申候、松田道作君のために非常の便宜を得申候。明日手術をうけ可申、暫時の後には再び旅行を繼續致し可申候。（明治四十五年三月二十六日　京都帝科大學病院十二號舍耳科より上加茂神社の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其　六

記念のため一葉差上申候。

二度目の花見に有之候、今回は思ふつぼの滿開に候。（明治四十五年四月十三日　吉野山中より　吉野山中一目千本櫻の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其　七

廿八日登山の記念に有之候。（明治四十五年四月二十九日　鹿兒島より　開聞嶽の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其　八

豐後を除くの外九州はすべてを通過して此處に落つき、當分久保猪之吉氏の治療を受くることに相成申候。おひまも候はば御消息賜はり度希望仕り候。（表面）

東大寺の狛犬と比べて此はまた別種の面白味を感じ申候、太宰府は實に日本の靈地と存申候。東北に中尊寺を見、奈良には三度、更に觀世音寺に詣づるを得て自ら至幸の人とつくづく相感じ申候。（裏面）（明治四十五年七月九日　福岡市外東公園武井篤氏方より　觀世音寺狛犬の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其九

昨日途中博多の商人兩人連と一緒に成つて芥屋へ船を浮べ申候。兎に角一度は行つておもしろき處と存じ候。

博多の商人の氣質を窺ふことが出來てこれもおもしろく候ひき。（表面）

博多節の謠に曰く、

筑紫名所は名島に宰府芥屋の大門の朝あらし

東公園から僅な距離に東光院といふ寺あり。現に十五體の佛像が國寶に成つて居ます。おどろきました。久保博士から老兄の近世世相志を借りて見ました。（裏面）

（明治四十五年六月十二日　福岡市外東公園武井準氏方より　芥屋の大戶の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十

筑前の地にながく滞留せしは、一方に於ては確に小生の幸とも可申候。古刹おほく随つて古佛像の優秀なるもの、小生の既に見たるもののみにても、三十七軀に達申候。勿論皆國寶或は國寶に編入せらるべきものに候。朝倉郡の南淋寺の如きは四五十日前に、内務省の吏員のため、はじめて不時の開帳をなしたりといふ藥師如來の如きも、小生は容易に拜することを得て竊に喜悦の念を禁ぜず候。此秘佛七八年前は彼の吏員のためにも開帳せざりし由に候。（表面）とてものことに歸途は古刹の交通の便ある處はたづね申度心組に候へ共、名のみききて知りて所在を知らざるものも有之、岩船寺、大和九體寺の如きこれに候。老兄に御たづね仕候はば早速相分り可申と存候に付斯く申上候。御一報被下度願上候。（裏面）（明治四十五年六月十七日　福岡市外東公園裁縫女學校內武井氏方より　千代の松原夕照の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十一

追つて申上候。昨日御願申上候寺々は、あれは立派なる寺々と思召して御しらべ被下度候、小生の旅も隨分長く相成、其間にはじめは思ひも設けざりし古刹めぐりなどもする樣に成り、此から歸國までには相應の日子をも要すべく、奈良京都は此際更に十分見物致度と存居り候。寺々への賴み方も覺え申候へば、東大寺や法隆寺なども此度は二三日も通ひ申度など心掛居り候。（表面）

壁畫のある寺々は大和にては室生寺、法隆寺、山城に醍醐三寶院、日野法界寺、大原三千院、宇治平等院、近江に石山寺、西明寺、豐後に富貴寺等にて、更に岩船寺と大和九體寺と有之候も、此の二ケ寺がどうしても所在相分り不申、それ故昨日御願申上候次第に有之候。尙此外にも壁畫を存する寺院有之可申や、御しらべ被下度、小生は幸歸路は別府の溫泉へまはりて、瀨戸內海は汽船の便をかり申度存候へば、豐後の富貴寺は少しのまはりにて見ることを得可申候。何も知らず

に見て歩き候とてどうも成り不申候へども、それでも幾分のたすけには相成可申と自信致居候。（要函）（明治四十五年六月十八日　福岡市外東公園武井準氏方より　芥屋の大戸の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十二

こちらへ渡る日に御返事を拜見しました。淨瑠璃寺のある當尾村といふのは有名な柿の産地だ相で、村の收入が大變だといふことを、京都の病院で大和から來て居た百姓に聞きました。さうして同じ村に古代の藝術が、儼として存して居るといふことを、貴兄からきくといふのは何だか面白い樣に思はれて成りません。御手紙にある京都の人にも、是非御目にかかりたいと思ひます。京都の松田道作君へあてて私へ手紙下さい。私はもう歸ります。隨分ひまはとれるでせうか……
……。

念のため松田道作君は東丸太町川端東入十四ノ九であります。私もそろそろ歸途に就かうかと思つて居ます。（裏面）

廿三日の黄昏に博多から出て廿四日の朝嚴原へつき申候。其日の内に有明山へ登つて、日露戰爭當時の急造の砲臺の址を見て、山越に薪を馬に積んで嚴原へ賣りに行く女に逢ひ申候。少し遠ざかりし頃女は唄をうたひはじめ候が、薩摩の海の甲板上に天草の女がうたうたのをきく樣な聲が響いて參り候。昨日竹敷へ一寸見物に參り候に、同所はもう目の前に滅亡致し候。軍艦に見放されし故と申候。九州北部は毎日の晴天なりしが今日は雨に候。（表面）（明治四十五年六月二十六日　對州嚴原港より　對馬農人風俗の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十三

中津から耶馬溪を素通りにして彥山へ來て、今日雨にのぼりました。耶馬溪は天

下の愚劣なるものです。

彦山の一部なる薬師峠の雲霧は凄絶なものでした。（明治四十五年七月七日　彦山の麓より寶筐印塔の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十四

新耶馬溪といふは實に天下の絶勝に有之候。強雨を衝いて參り候故、無數の瀑布をかけ申候ひき。耶馬溪には樹木らしき樹木なきに、新耶馬溪には濫伐はしたれど、まだ昔時を偲ぶに足るものは有之候。兎に角風景畫家の領分に屬すべき境地に有之候。（明治四十五年七月十六日　別府温泉より　新耶馬溪芝石岩の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十五

昨日來で今日も雨です。然し一兩日居てもいいのですから、晴れし〔と、脱？〕雨樣の

景色を見ることが出來る譯です。大に氣に入りました。（明治四十五年七月二十六日　宮島より　嚴島神社御寳物長澤盧雪の筆繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十六

先月十九日に別府から伊豫の高濱に渡つて、それからまだこんな處に居るのですから、今年の夏は瀨戸内海で、暮してしまつた譯です。もう今日は秋になりました。志度寺、白峰、琴平、皆とりどりに心を惹く處ですが、其内にも屋島を見て瀨戸内海と平家とは、切つても切れない緣が結ばれて居るといふことを知りました。淸盛が宮島へあんな立派な建築を殘したのはいふまでもないことだが、あの山容水態が、平家とは實にいい調和を保つて居る。悲慘ではあるが、其處には人生の美の極致を發揮されて居る。平家は長門で水に沈む筈であつた。あれから先はもう内海ではないからです。（大正元年八月九日　高松より　弘法大師御誕生所屏風浦善通寺兒

肖像「大師叔父公通長公作」の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十七

天下の靈山に攀ぢて胸すく心地いたし申候。此山はいまが盆に候由、不思議の緣有べきか。（大正元年八月十三日　高野山地藏院より　高野山不動の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其十八

長き旅行の終の葉書に有之候。法隆寺にては夢殿の秘佛を拜し候。（表面）東大寺にては三月堂に入り、寶庫に入り、更に戒壇院の四天王を拜し申候。腹も減つていまは旅行の苦痛も感じ不申候。（裏面）（大正元年八月十九日　奈良より　西大寺與

其十九

法隆寺夢殿の秘佛も二度開帳してもらひ、東大寺の寶庫も二度見て、大佛殿の土中より發掘したる貴重の壺を手にとつて見た。京都は今日までに太秦の廣隆寺、丹波の穴太寺、醍醐寺は山上山下とも、日野法界寺等見てまはり申候。松田君へ御紹介の御手紙とどき居ることと存じ樂みにして參り候處、手紙はとどかぬとのことにて聊か失望仕候へ共、奈良にて折よく新納忠之助といふ古社寺保存會の人に會ひ候に付、少しの不自由は有りながら、先づ先づ望の幾部分を滿たし申候。

（大正元年八月二十八日　京都市烏丸通五條下る龜利方より　法界寺本堂繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿

小生一昨日歸京仕候。廿日頃に一寸御たづね申度と存候へ共、御都合如何に候や御伺ひ申上候。（大正元年九月十七日　下谷上車坂町那須舘より　ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿一

乃木大將の生地長府へ一泊、夜微雨あり。翌朝功山寺をのぞき、夏蜜柑の累々たるにおどろき申候。長府の宿は誠に心持よく、更に社務所の役員の懇切なるにも深く感心致申候。此事一寸書いて横山氏へ差上度と存居り候。

當地久保博士の診察によれば、喉頭結核といはれし患部は全く治療して何の疑も無之候由、喀痰の檢査にも病菌を認めずとのこと、同博士は更に前（一字不明）氏の診斷をも信ぜざるが如く相見申候。小生も不思議のおもひに有之候。

門司を七日頃汽船で立つて、瀨戸内海を復た經めぐり申度、京都へも月の半頃に相成可申候。例の紹介狀は七條郵便局留置にて御取計らひ被下度願上候。

京都の宿は烏丸通り五條下る龜利方に候故、そこへあて御送付被下候ても、いづれにてもよろしく候。（大正二年四月一日　筑前博多千代松原より　菅公之遺蹟天拜山の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿二

八日夜附の御手紙今夕拜受、横山氏へ電話にて問合せ申候處、未だ入京無之由、尤も十日頃はとのことに案内有之候由に付、小生宛へ先方より通知有之樣頼み置申候。小生は八日門司より乘船、昨夜七時二十分神戸着、取急ぎ十時半と申すに此宿まで參り、今朝博物館へ志し候處、觀覽中陳列替に相成、飽かぬ處も有之候ひしが、思はぬ利得も致申候。今日あるを豫期して昨夜急ぎ申候。新聞にて知りしため）明日は大阪へ。（表面）

此鐘を手はじめに新に朝鮮鐘を見ること既に六口、内五口は國寶、明日大阪に赴

き更に二口に接すべく、雲州へ志し居候へば、此點のみにても、大分見界をひろめ可申と愉快に有之候。（裏畫）（大正二年四月十日 京都市烏丸通五條下ル龜利方より 唐門及大梵鐘の繪ハガキ 齋藤隆三宛）

其廿三

一度御訪ね仕度と存じ果不申候。小生儀に今日歸國仕候間、不取敢御知らせ申上候。一ケ月間に體重一貫二百匁を增し申候。尤も此は漸く以前にもどり候に過不申、それとても小生には大滿足に有之候。（大正三年一月二十三日 東京神田金澤町三二牌尾兵方より ハガキ 齋藤隆三宛）

其廿四

過日は退院の日金澤醫院へ御見舞被下候由に候處、半日の差にて御口にかかるこ

とも成り難く、小生に於ても非常に殘念に罷在候、一時は非常に體量も增加し、經過甚だ良好なりしため推して歸鄉致候に、鄉里は養病の場所には無之漸次發熱、堪へ難く存候まゝ上京、一時鎭靜するまでと當院へ入院仕り候　診斷の上にては左までのことも無之由、入院の翌日より熱もさがり、都合によりてはこの處僅のうちに轉地の運びに至り可申候　近況御報申上度如此に有之候。（大正三年三月十八日　東京神田錦町三丁目橋田病院より　繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿五

御歸りがけに一寸御立寄りを願ひます。私より御うかがひ致すのが、順なのですが、日によつては外出の厭なこともありますし、もう近日中に退院して、福岡へ行く準備もしなくては成りませんから、ゆつくり御伺ひ致すことも出來兼ねることと思ひます。

それでも博覧會だけは見たいとおもつて居ます。（大正三年五月十五日　神田區錦町三丁目橋田病院より　ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿六

昨日はわざわざ御立寄下すつた處失禮しました。其折の大觀畫伯の薄一本の書方に就いては、私のいひ方が足りませんでした。私の知人の文士も幾年か歌を勉強して居てかなり大作もあり、一部の著書も出して居るのですから、全く一句一句の文字の數を指折つて見ねば分らぬといふのではないので、製作の間にいろいろと句を置き換へたり、慘憺たる苦心の結果、自分に殆んど意識が不明に成る樣な場合があつて、其時に指を折るらしいのです。そんなことを語つて居た處なのでした。昨日申上げた丈では私が大家を侮辱したり、毀損したりするやうに成つて心苦しい次第でありますから、一寸申上げて置きます。（大正三年五月十七日　神田錦町

三丁目橋田病院より　大正博覽會出品横山大觀若葉の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿七

暑い暑いでおられし以膽がかさなりましたが、こちらへ來てもう四十日に成りました。咽喉は燒いてもらつた處は大分にいいといひます。其うちに日向の青島へ行かうと思つてます。（大正三年七月二十日　九州醫科大學附屬醫院西第一病棟第一室より　鵜來島より西公園を望む繪ハガキ　齋藤隆三宛）

其廿八

けしきがいいので遂こんな南の方まで來てしまひました。も少し南へ行かうと思つてます。然し病體ですから不自由でいけません。日向へ來ては碌な繪葉書もないので漸くこれを見つけて、今日は三十枚以上書き

ます。それで只一寸記念に差上げます。（大正三年九月三日　日向油津港より　日向梅ヶ濱の怒濤の繪ハガキ　齋藤隆三宛）

胡桃澤勘内宛

其一

雨ノウタナホアラバ此月末マデニオ送リ下サレ度候。「アシビ」ハオクレ候。

玉稿正ニ拜受近來ノ御進境マコトニ喜バシク存申候。尤モ口調ノ整ヒ來リタルヲ多ト致シ候　仰ニ從ヒ卑見一二申上候。

「杉垣」ノ歌句法面白カラズ。一首ノ意ハ雨ガ降ツテ居ルノデ杉ノ芽ニ露ガオイテアル。露ハオモタ相デアルガナホ垂レガテニシテ居ルトイフノデアルカラ、句ノ位置ヲ換ヘナケレバナラヌ。原作ノ儘デハ露ガオイテアルノデ雨ガ降ツテモ垂レガテニシテ居ルトイフヤウニ聞エル。

杉垣ノ新芽ノ緑フル雨ニ露オキ結ビ垂レガテニセリ

トシタナラバ聞エルデアラウ。入選ニハイクラカ平凡ニナルデアラウ。「雨ハレノ」コレハ口調モ句法モ宜シイガ、矢張イクラカ平凡デ且ツ陳腐デアル。「春ノ日ノ」コレモサウデアル。調子ノ整ツテルノハ手柄デアル。「雨ハレノ日和ヨロシミ」調子モヨイ。見付所ガ亦面白イノデアルカラ愉快デアル。入選。「庭畑ニ」「春ノ日ノ雨ヲ」孰レモ調子ハヨイ。シカシズツト前カラコンナモノガ散見セラルルノダカラ選ニハ漏レル。「玉ボコノ」初二句ガ平凡ニナル。見付所ガ面白イ。實際アルコトナノデアルカラ、此ノ羽蟲ノ飛ブノヲ五加木垣ノ上トシタ

ナラバ、一首ヲ濃厚ナラシメルコトガ出來ヤウ。

眞垣ナル五加木ノ上ニ羽蟲群レタカタマケヌ雨フラントス

四五ノ句ニ注意ヲシテ見ルノガ肝心デアル。「タカタマケテ」トツヾケルト一首ガタルム。改作ニヨルト、「眞垣ナル五加木ノ上ニ羽蟲ガ群ガリ飛ンデ日ハ夕ニナツタ。空ハ雨ガフリサウデアル」コンナコトニナルノダ。原作ノ低キトイフノハ惜シイノデアルガ、道ナレバ低クトイハネバナラヌデアラウガ、五加木垣ノ上トイツクラ低イト故ラニ斷ラズトモ、垣ト甚ダ隔離シテ空ニ仰グヤウナ位置ト想像スルモノモナイデアラウ。

「安曇野」五ノ句ヲ「低キ雨雲」トシタ。カウイフ大キナ景色ナドヲイフニハ、ユツタリシタ落付イタモノヲ用ヰネバナラヌ「雨雲低シ」ト「低キ雨雲」トハドツチガユツタリシテ居ルカ。小生モ筑波山ノ雲ヲ詠ジタ歌ニ、

オホホシノ穗ヌレニ見ユル筑波嶺ユ棚引キワタル秋ノ雲白シ

トイフノガアル。雜誌鵜川ヘモ出シタノデアルガ、後ニ至ツテ五ノ句ヲ「秋ノ白雲」ト改メタ。ソレデコノ安曇野ノ歌モ珍ラシイトイフワケニハ行クマイガ、壯大ナル光景一讀壯快ヲ感ズルノデアル。入選。

「サ庭べニ」「華鬘ノ花ナドヲ歌ニスルモノハ稀デアラウ。調子モ惡クナイ。採ツテモヨイ歌デアル。他ノ人ニハワカルマイ「ココロミニ」「ドングリ」トイフ語ガ一寸變ダガ、寧ロ採ルベキデアラウト思フ。

總ジテ御骨折ノ程相見エ、面白ク拜見イタシ候。十首ノ内タシカニ四首ハ及第ニ候。成績ハムシロ上等ニ候。大兄ノ今後力ヲ專ラニセラルベキ點ハ、調子ヨリハ却テ内容卽チ見付所ニ有之候。有體ニ申候ヘバ、大兄近來ノ狀況ハ、幾多投書家ニタシカニ頭角ヲ露ハシ居リ候。卽チ毎々一種ノ生氣アルヲ認メ申候。漸ク進歩スルニ從ヒ、思想涸渇シテ殆ンド身動キモナラヌヤウニモ立チ至リ申スベク候ヘドモ、ソノ時ハモハヤ進歩ノ一階段ヲ越エントスル時機ニ候ヘバ、豫メソノ覺悟

ヲ以テ御從事相成候樣希望仕候。信州諏訪ノ青年ハ孰レモ達吟ニシテ、他地方ノ人ノ及バザル長所ヲ有シ居リ候。今又同ジク信州ノ一部ニ、大兄ノ漸ク發展シ來レルヲ見ル。愉快ニ堪ヘズ候。馬醉木ノ五月分ニハ左千夫氏ノ寫生歌ニ對スル攻擊出デ可申候ヘドモ、小生ハ服シ難ク矢張リ行ク所マデ行ク積リニ候。大兄モ此分ニテ怠ルナカランコトヲ祈リ申候。早々。

小生モ炭燒ニテナカナカ忙シクドコヘモ無沙汰ノミイタシ候。今日ハアマリ手紙ガ溜リ候ニ付、一日休ンデ方々ヘ認メ申候。ナホ小生宛ノ御手紙ニハ先生ノ二字ハ御免ヲ蒙リ候。逢ツテ見タラ先生ナド申サルル人間ニ無之候。（明治卅八年五月十一日　自宅より　封書　胡桃澤勘內宛）

雨のうた（編者曰、右書簡參考の爲に返送せる胡桃澤氏の原稿歌を錄す）

杉垣の新芽の綠露ふふみしき降る雨にたれがてにせり

雨はれの庭に下り立ち垣のへの五加木をつむと露にぬれけり

春の日の雨はれしかば山畑の麥生のうれゆひばりなき立つ

雨はれの日和よろしみ山人等新墾畑に桑植勵む

庭畑にひきのこされて薹立ちし大根青葉にはるさめのふる

春の日の雨をときじみ追込の鳥さへづらず今日もくれたり

玉ぼこの道の上ひくく羽蟲むれ夕かたまけて雨ふらんとす

安曇野の限りをしらにさきみてるなたねの花に雨雲ひくし

さ庭べにさける華鬘の花を茂みしきふるあめに土にたれたり

こころみに庭にうゑたる團栗のさ芽立つなべに雨ふりそそぐ

其　二

啓。玉稿正に拜受仕候。雨以來進境驚嘆に不堪候。口調の流暢にして内容の淸新

なるを喜び申候　入選のもの十首、タガラシ、クサノワウ、毛茛（茛に非ず音はゴン）獼猴草、ドクゼリ孰れも皆其性質を描きたるは寫生故と存候。小生の要求を滿したるものにして近來快心の事に候。尚二三十首御投稿の由鶴首相待申候。中には小生も知らざる草有之候。恥かしく候。連理草、九輪草、小手マリ、ヒナギク等に候。此次の御手紙に封入御送り下され候はば幸に候。もしもはやその花無之候はば已をえず候。今回は課題締切を一ヶ月繰延いたし候へば、初夏の花をも併せて御寫生相成度、十分に誌上を飾り度と存申候。昨日炭を出して眞木をつめこみ今日やや閑あり、長文の手紙など認め候ため頭腦いたく疲れ申候。葉書にて御免を蒙り申候　くれぐれも他人にいかやうに議するとも、自己が面白しと感じ候ことには御精勵下され度希望仕り候。（明治卅八年五月二十日　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘內宛）

其三

拜啓。過日の御葉書かさねがさねの御不幸御心中察しながら奉推察候。不取敢御弔み可申上筈に候へども、小生は在來の癖として筆とること懶く感じ候時は、三十日も四十日も日々に思ひながらも筆とらぬこと有之、自分ながら困却いたし居り候。これも年來の痼疾なる腦神經衰弱の致す所と存居候。不惡御ふくみ下され度候。

今回の課題は御投稿無之ためか殊の外淋しく候。次回は遠望の歌に候へば、御なげきの程も過ぎ候はば、御奮發下され度希望仕候。あしびの遲れ候は是非もなきことにて、編輯より發送にいたるまで、左千夫氏一人の經營に候へば、はかどり兼候ことと存じ候。（明治卅八年七月十一日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其四

拜啓、今秋九月上旬頃諏訪より木曾に出で可申、時間の都合にては御地へも立ち寄り度候へども、御地には見るものは何々にて候や、御手數下され度候。備前まででも參り候目的に候へば、時間に制限有之、或は御たづね仕り難きかも知れ不申候。大抵は御目にかかり度心に期し居り候。(明治三十八年七月十七日　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘内宛)

其五

拜啓。昨日東京を出で甲斐に來り候。明日昇仙峽を探り、四日頃諏訪に入る豫定に有之候。鹽山附近より望みたる甲斐の國原も壯大なる感有之候。(明治三十八年九月一日　山梨縣東八代郡南八代古屋夢拙氏方より　ハガキ　胡桃澤勘内宛)

其六

拜啓、過日はわざわざ御足勞下され難有存申候。奈良井、須原、中津泊にて木曾川を下らむと欲し、伏見驛にやどり、舟に乘り遅れ徒歩にて參り候。木曾は一日雨に逢ひ候ため、山をみることをえず殘念のこと仕候。華園氏は好人物なり。坐に俳人蝶衣あり昨夜上京。今月にいりて客のたえたることなしと申候。（明治卅八年九月十四日　岐阜在江崎鹽谷華園氏方より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其七

拜啓、さき頃の御葉書難有拜見仕り候。十九日大垣をたちて石山寺を見物、勢多の蜆とり舟おもしろしと存候。粟津より逢阪山を雨に過ぎて京に入り、二十日秋雨のなかをしとしとと詩仙堂芭蕉堂など見物いたし候。京の雨は格別に候。今日大阪より丹波路を汽車にて舞鶴港にいたり、更に汽船にて與謝の海を當地に參り候。天の橋立船中より咫尺の間に見たり。明日ゆるゆる探勝の筈に候。山上の眺

望果して可なりや否や。（明治三十八年九月二十二日　丹波國與謝郡宮津町より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其八

拜啓。須磨明石の勝を探りて、近江の湖畔に遊び、更に船にて彥根城の荒涼たるさまをみみて當地へ參り候。霧ケ峰三十首とは驚き申候　小生は二三首も六ケしく候。六日に汽船にて横濱に向はむと存じ候。

布雲ニ叢雲カカル近江ノ湖畔ノ櫟ニ朝鳴クヤ鵙

比良ノ山ナガラフ雲ニ落ツル日ノ夕カガヤキニ芦ノ花白シ

一は西近江、一は東近江彥根の夕に候。（明治卅八年十月四日　伊勢國一身田御學院より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其九

拜啓、四日市より海上風浪に逢ひ、暫時伊良胡ヶ崎の陰に投錨の始末かなりに困難、横濱に上陸、十三日歸宅仕り候。課題の歌ゆるゆる拜見仕り候。長歌殊に面白く候。もちづき君へよろしく相願候。（明治三十八年十月十五日　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其十

拜啓、過日鹽尻を越えし折くさむらの中にて「チツチツチツチツチツ」と鳴き候蟲を蟬の一種なりと仰られ候が、せみならばチツチ蟬には候はずや。學校にて御きき質しの上御しらせ下され度候。（明治卅八年十月十九日　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其十一

拜啓。原稿落手佳作おほきにおどろき申候。仰の如く十月分の誌上は課題の歌以ての外に振はず、大兄の長歌獨り群を拔き居り候。
望月君の今回の作は非常の出來にて、如何にも氣乘りしたるさまを認むべく候。
甲之君の作は近來の壯觀にて、小生など迚も及び不申と嘆じ申候。
小生は久しく振はず、心中不尠煩悶いたし候。選者になり候ことも少しく考へ物に候。
乍末筆兎角小生を知らぬ人は、小生を先生などと申來り候て、如何にも恐縮にたへざる次第、選者などにならぬうちは、一人も手紙を送りこすものもなく、素より先生など呼ばれ候こと無之候。此點のみにても選者は決して小生に於て喜ばしきことに無之候。年齡、學問、技倆等考へ合せ候ては、大兄より先生など申され候て快きことは決して無之、小生は伊藤君に對しても先生とは申さず、伊藤君に於ても友人として小生を目し居候。小生は時々如此年齡に相違ある人に對して、

對等の交際は憚りある様思ひ候へども、今更改つて申出ることもなし難く、心中に畏敬いたし候のみ。小生は如此伊藤君に對して對等の交際をなしながら、年齢の相違少き大兄などより先生と呼ばれ候ては、心に恥ぢざらむと欲するも能はず候。小生の今日は大兄に於いて一日の長は有之べく候。二年三年の後に大兄の抜倆小生の上に出で候時は如何に候べき。一日の長あるを以て先生と稱すべくば劣り候時は何と申候べき。過分の尊稱は徒に小生を苦しむるに外ならず候。望月君も先生など申來候、以ての外に候。大兄より宜しく御傳へ下され度願上候。頓首。

（明治卅八年十一月十四日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其十二

拜啓。たびたびの御書狀難有存申候。

玉稿いつもながら佳作おほく敬服のいたりに候。初冬雜詠長歌二首短歌六首入選

いたし候。望月君のは落葉松長歌一首短歌九首、初冬雜咏長歌一首短歌四首に候。課題の歌は殆んど兩兄の作を以て充たし居候。大兄の犀川の菜洗は、さ程にもなきことを無理に言葉を並べたる感じ有之候。望月君の「ひるさればおほよそにきる乘鞍を朝けにみれば近くまばゆし」はよく實況を穿ちたる佳作に候。アシビ二ノ七ノ「櫟たつ平瀨の山を山半ば下をこめたり夕引煙」も同樣に候。大兄の「平瀨山みのはろばろに黄葉せる櫟がうれゆ朝わたる鳥」と相俟つて平瀨山の面目を施したること一通りならず候。アシビの課題は左千夫君の出題に候。小生はいつかも申上候如く、選者などやめ可申かと存居候故、左千夫君まで其旨いひ送り候。それに就ての返事は無之候へども、或はそのためなどにて、題は左千夫君の設け候樣になりしものならむかと存じ候。仰の如く六かしき題にて、投稿も至つて少なかるべきかと存じ候。されど出來候曉には、案外變化したる面白きものをうべきかと存候　望月君とも御相談の上一花さかせられむこと希望にたへず候

羇旅雜咏に就ての御不審御尤のことに候。あれは「甲斐人の石臼（イシウス）たてて粉（コ）に碎くモロコシキビか此の見ゆる山は」にて甲斐の地は、低き山はいただきまで皆畑にひらかれて、何物をか作りあるを自體此邊一帶に唐黍の夥しきを以て、「此の見ゆる山なる作物も亦唐黍ならむか」と打ち興じ（たる、脱？）までに候。唐黍をば所の人は石臼に挽きて粉にして食用いたし候。そこを申候。小生の所存はさやうに候へども、聞えず候ては致方無之候。「岸の眞菰に浪越えむとす」の歌は、言葉つき春の感じなりと左千夫君は難ぜられ候　誤植はあまり無之様覺え候。「相模嶺は此日はみえず安房の門や鋸山に雲とびわたる」これが尤も甚だしく候。「甲斐の國は青田の吉國」「白妙にかはらははこ」「秋雨のしげき能褒野……さ莚掩ひ芋のから積む」此位に候。（今一つ唐茄子は廣葉ももむなし）孰も拙劣極まりたる歌のみにて申樣も無之候。御意見等も候はば承りたく候。早々。（明治卅八年十二月八日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其十三

拜啓。松島金華山を見て羽前に入り大沼の浮島を見申候。此印象大沼神社の印に候。一昨日佐渡より越後にかへり、昨日此地に宿り、郷里へ御遣しの御葉書落手仕り候。これより田代の七つ釜を見て間道を山深く分け入り草津へ越えて歸國の積りに有之候。（編者曰、ハガキの中央に「社務所印」の印章あり）（明治三十九年九月二十一日　越後國長岡市より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其十四

拜啓。窓前の合歡の葉漸く延びて、風にそよぐまでに相成申候。茶は既に終りて蠶の忙しき節に候へども、小生方にては手不足のため、養蠶は致し不申候へば、極めて靜に有之候。

扱て折入つて御願申上度儀は、只今兜町にて株式の仲買を致し居り、五萬の富を成したる由の小布施新三郎と申候は、松本在の百姓と聞き及び候ことに候が、生家の血縁とか門地とかいふ一身上一切のことは、貴兄にては御わかりには相成不申候や、銀行に關係ある人々にては、同じく經濟上にたづさはり居り候者のこと故、評判も有之候べく、隨而仔細に相分り候ことと存じ候。御精査の上至急御通知下され度願上候。

御迷惑御推察申上候へども、出來うる限りの御手數下され度願上候。（明治四十年六月三日　自宅より　封書　胡桃澤勘內宛）

其十五

拜啓　此間の手紙御らんのことと存申候。然る處御返事を待つ譯に不參、明日東京に行き明後七日御地へ向け出發仕り候。東京を早朝に立てば夕刻に御宅へたど

りつき可申候。夕暮にて御迷惑ならば市中へ泊り候てもよろしく候。此手紙は小生より先にとどき候筈なれば、兎にも角にも御待ち下され度候。早々。（明治四十年六月六日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其十六

拜啓。過日は久々にて御目にかかり御厚志を忝うし何とも御禮の申様も無之候。長野にて逐一用事は辨じ申候へども、背山氏を自宅へ訪ね候處差支あり、更に社へ訪ね候へども、小生より時間を誤りしため面會不仕候。久保田君は左千夫を出迎に、伊那より中津まで參る由に候。（明治四十年六月十八日消印　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其十七

拜啓、草夾竹桃の花赤くさき出でて土用も來り候へども、ことしは例の旅行も決行致し兼ね候模樣、これも兩親が溫泉へ參るため、其留守居故是非もなきことと諦め申候。留守居の間にゆるゆる萬葉などよみて、少し歌心つく樣致し度と存居候。御高作三首先づ先づ何よりも才氣の縱橫なるにおどろかされ申候。されど此の如き感嘆の語おほき歌としては說明の部分おほくして、隨而一體に長過ぎる樣相見え申候。記紀あたりの歌にても、感嘆の語おほきものは大抵短きかと記憶いたし候。强ち此の如くならざるべからずと申理由は無之候へども、五七の調を破りたる感嘆の語は前後の句と餘程よく注意して、調和を保たしめねば、其語が孤立して木に竹を接ぎたる感じを免れ申すまじく候。第一首に於ても別に他に異議は無之候へども、

節長にもと打きり、つくれる竿の、さやさやし釣竿はやも矢張五七を破ることなく、

……もと打きり、打ちきりてつくれる竿の……
とする方よろしからむと存ぜられ候。前もキチンとして、後もキチンとして、其間に五字足らぬため、よろよろとして足もと立たぬ人のやうに感ぜられ申候。
第二首　ならす井川原のうき草
これも調子悪しく候。此儘にてはうき草の次に七字を加ふれば、それで結末を告ぐる調子に有之候。
我行くやならぬ川原のうき草……
と幾たびも吟ぜられなば、明瞭致すべくと存じ候。
我行くやならす井河原、波傳ふ針こそ流せ
にて差支なきには候はずや。記紀の歌に何か「ならぬ川原のうき草」の次に七字を加へて、結末を告げたるやうな調子の歌ありし樣覺え居候。
第三首も、あはれあはれ、吾ここに覗はく知らに

も前同様の非難に候。

……さ走る魚の、吾ここに覗はく知らに、あはれあはれながらふる糸の、羽
虫鉤、はしくひもちて

とせば如何かと存じ候。以上三首共其他には別に朱を加ふる餘地もなく多少はあるにしても、作者の俤を存ずるには原形を損はぬがよろしきことと信じ候。只全體に就いて更に評を下せば、内容の割合にいひ方が餘り大袈裟過ぎはせずやと思はれ申候。針竿はや、あはれあはれ等の語が何となく浮いて聞ゆるうらみなきに非ず。「夏虫と鉤とを知らに」といふあたりも同様に候。されどそれは全きを求めての言にて、此三首はこれにて相應の面白味を有せる故、秋の馬醉木へ掲げたくと存候。小生の申ことに御異存あらば御申越下されたく候。此後は此と同様のいひかたは少し考物に有之候。（明治四十年七月廿二日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其十八

拜啓。箱いれの松蕈昨日とどき申候。蓋をとれば先づ羊齒の葉うれしく存申候。きのこは一つも損じたるもの無之候。丁度他へ嫁したる末の妹が、客に參り居り候故、早速うまき羹に料理せしめて、したたか賞味仕り候。此の妹は家にありし頃は、病身なりし小生のため常に心をくだきて、食物を調理いたしくれたる妹に有之、此者のつくり候もの、尤も小生の口に適し申候。されば其縁付候後は食膳は常に淋しく、ものごと不自由に感じ申候。松蕈のとどき候は妹の參り候てより二三日目にて、洵に幸に有之候。妹の嫁したるは水戸の近くにて、此所にも官林おほく初茸は非常に發生致す由に候へども、松茸は嘗て目にふれ不申候趣、小生の土地は林は隨分有之候へども、茸と申候ては、初茸もめつたに見られ不申候。母は初茸狩が大好にて、初茸のうま羹を喜び申候ことに候が、松蕈の甘羹も美味なとりておどろき申候。箱より取り出しおき候處へ父も歸宅いたし候て、此にどう

した茸かと不思議がり申候。父は茸狩りの名人に有之、小生が六つ七つの頃は時時松だけの小さなものをとつて來ることも有之候ひしが、今は林の改良さるると共に、餘ほど上手の者にて根氣よく探しあるくものに候はずては、何茸もとれ不申候。母は此十幾年暇もなければ、茸の出も悪しくなりしを以て、茸狩はちつとも致し不申、どこかへ一年行きたいものと秋になれば申居候。

小生は近來よく遊びに參る家有之候が、其庭には大なる芭蕉有之、玉の如き蕾を垂れて日々に花さき申候。ばせをの花に貯ふる露は天下ならびなき甘味と存候。此を小生は行くたびに啜り申候。此甘露の御禮に松だけ少々分與の心組に有之候。早々。（明治四十年十月十二日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

其十九

其後御無沙汰仕り候。西京よりはうつかり致し通信も不仕申譯も無之候。用あり

て此處まで參り候。明日東京へ。（明治四十一年六月十二日　水戸より　水戸公園好文亭の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其廿

其後は如何に御暮し相成候や。小生は此廿日頃信州の秋山へ旅行致し可申候。此地は一昨年も參り候。兩三日來風强く樂みに作りし草花悉く倒れ申候。今日舊曆盆にして天氣しづまり申候。（明治四十一年八月九日　自宅より　南朝忠臣關宗祐之城址の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其廿一

小生が四年間（十一より十五まで）育つて且つ泳ぐことを覺えし、下妻といふ所の砂沼といふを御らんに入れ申候。小生は此岸に住み申候。（明治四十一年八月十日消

印　自宅より　常陸下妻砂沼の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其廿二

拜啓、小生此の十五日を以て歸宅仕り候。御地へ參り度は山々なれど、今回は緣なかりしことゝ小生も諦め申候。旅中歌は出來不申候。榛名山上の濃霧の歌のみ一昨夜出來申候。小生には珍らしく其内發表可致候。（表面）

此は鬼怒川の流に有之候。此森から右の方に見ゆる土手を行きて渡しへかかればもはや半里足らずに候。野茨の咲きし時此土手はよろしく候。（裏面の畫の說明）（明治四十一年九月二十二日　自宅より　下妻十勝宗道歸帆の繪ハガキ　望月光男、胡桃澤勘内宛）

其廿三

青森には美人おほしと申候。美人の嫁さんとおなじ汽車へ乘り申候。山は岩木山八甲田山、迚ても信州の如き俤もなけれど、此の弘前の舊城址より見る岩木山の如きも、位置の佳なる風姿の雄大なる稱すべく候。津輕爲信は藩祖にして非常の人物なり。岩木山の權化なり。（明治四十二年十月四日消印　弘前より　弘前市大圓寺の五重塔の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其廿四

今夜はどうかしてこんなひどいことを書き申候。貴兄は御ゆるしに成ることと存じ申候。

拜復。御高作には殆んど困り申候。あれは五年前に在りても、注意を惹く能はざりしならむと存ぜられ申候。詳しく申さむことは此際小生には不可能に有之候。それは只今から、一心に小說へ力を注がねば成らぬことに立ちいたり申候故に有

之候。「足たたぬ歌よみ人」など申す故子規子に對するいひ方などは陳の陳なるものにて、今は殆んど厭味に堪へぬまで相成申候。チンノレヤが珍らしとて、それは只材料に過ぎ不申候。感情の上には些の新しき處も珍らしき處も無之候。茶博士など申す語も、子規子は多少伊藤君を愚弄したる調子も見え候ものを、今になつてもそれを踏襲する必要は何處に有之可申や。それも此も製作當時に面白しと感ぜられ候や。實際は心中に妙な一種の感じ、卽ちいはば不安に驅られつつ、更にいひ換ふれば人がよしといへば僅に胸を撫で、惡いといへば衷心から恥づるといふ樣な心持にては無之候や、小生にも此の經驗は數次に有之候。子規子の山吹は材料の珍らしとか新しとかにてはなく、作者の感興が湧き候處に長く淸新の感を讀者に與ふる所以に候。此の感興の人を動すものなき玉稿は、散文と擇ぶ處なく候。散文としても寧ろ散漫至極のものに候。讀むに堪へ不申候。

以上餘りひどく申候て自分ながら駭き申候。されど貴兄は尤も小生の趣味

と一致いたし居候樣、先年よりひそかに思ひ居候（雨の葉集歌當時より）ものとて、先年小生自身に自身の歌が、醜陋見るに堪へざるを悟り申候以來、自分の歌と同樣の邪路にまよひ居るものを見る時は、殆んど堪まらぬ感じを惹き起し申候。今回のは殊に甚だしき故、思ひ切つて申上候。貴兄に對する酷評とのみは申すまじく、小生自身の懺悔に有之候。不惡御ふくみ置被下度候。匆々。（明治四十三年五月一日　自宅より　封書　胡桃澤勘內宛）

其廿五

拜啓。御約束之品早速御惠贈被成下難有奉存候。傭人にまで味はせ申候。扨而過日は意外の雜言にて何とも申譯無之候。只今二三回分朝日の小說を書きはじめ候處頭惡く困り申候。先は右まで申進め候。（明治四十三年五月五日消印　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘內宛）

其廿六

拜復。帶下之藥七日分昨日郵送仕り候。御近所の方と申候へば、全快に相成候ことならば代金は頂戴可仕候。如何の病症とも相分り不申候に付、効能の程もしかと申兼ね候。先づ代金は頂戴致さぬことに致し度先は右まで申上候。(明治四十三年六月十八日消印　自宅より　ハガキ　胡桃澤勘内宛)

其廿七

爲替分は御返戻申上候。何遍御遣し被下候ても同樣に付、不惡御受取被下度候。

拜啓。再々御藥書難有奉存候。

小生意外の病氣、此は「土」を書くに小學校の圖書室に籠り、木の腰掛に長く掛

け通したるが原因にて、肛門の側に腫物を生じ、化膿して二夜一睡もせず苦惱の後切開、此處へ參り申候。家から北へ八里餘、下野境にて小栗判官の遺跡に近き處に候。妹の家に候。痔瘻にならねばよいがと懸念致居候。場合によりては土も中止せねば成らず候。然し五十一二回分迄は脱稿致居候に付、何とかまとめ申度と苦心致居候。それも氣力之問題故如何共致し難く候。全快まで當分妹と妹の夫なる醫者の厄介に成つて、此處に横臥致可申候。家は水に近く水車の音蛙の聲喧しく候。「土」の六の一は蛙の描寫故ゆつくり御一讀被下度希望仕り候。（明治四十三年六月廿九日　茨城縣眞壁郡河間村奥田氏方より　封書　胡桃澤勘内宛）

其廿八

拜啓　御惠贈の品本日落手仕り候。思ひ掛けぬこととは申ながら、小生の無聊を慰むること一通に無之厚く御禮申上候。はごろも漬は白馬山の名物の由申候へ

ば、同山自然生の蕗を以て製出したるものにても有之候や。蕗は秋田とのみ存候處、此は又別種の風味あり、其の色の淸くして靑き處誠に珍重すべきものと存じ候。杏は隱れもなき長野の名物、然かも高田屋本店の製造品を御選擇に相成候こと、御心づけの程深く感謝仕り候。然しながら如此格別の御配慮に預り候ては、只管恐縮の外無之候。此の地も小生の地方と同樣、智見に乏しきもののみに候へば、善光寺を拜したるもの幾らも有之間敷、それ等のもの共へ善光寺と申聞け味はせ可申候。

半夏も既に過ぎ候て、曆本上の梅雨季は去り申候筈なるに、陰鬱の天候何時晴るべしとも見え不申困り申候。小生其後別に變化も無之候へども、腫物は良性のものと確定したるものの如く候、只性質として他の腫物よりも長びき候こと、是非もなき次第隨つて「土」の稿も繼ぎ難く焦心致居候。「土」に就いて何か御注意被下覺召にても有之樣の御文意、如何なることに候や。語句の末に「た」といふ終

止言の多きが耳障なりとの非難は、素人の讀者よりも浴びせられ候。此は小生も承知致居候。されど原稿紙上にてはなかなかうまく參らず、それに鐵の針金を切斷したるが如く、ぷつりぷつりと書かねばならぬ處へは「た」を多く用ゐ候。然し是非共一日分に付三四ヶ處「る」と改めし方語路のよき處は有之、小生も此は心づき居り候。腹藏なく御申越の程切望仕り候。

先は御禮かたがた右まで申上候。匆々。（明治四十三年七月七日　茨城縣眞壁郡河間村奥田廉之助氏方より　封書　胡桃澤勘内宛）

其廿九

一寸此處へ參り申候。京も只今は淋しく且つ寒く候。明後日は國へ。堀内君は小生一度も逢ひしこと無之候。歌に縁遠ければ是非もなく候。望月君にもよろしく願上候。（兩面に亘る）（明治四十三年十二月二十四日消印　京都より　京都金閣寺雪景の繪ハガキ　胡

其卅

拜啓。今回は望月君突然の訃音只管驚き入り申候。昨夏小生の病中には殊の外元氣の由御報有之候故、別段同君の病氣などは心にも止めざりしものを、遂には草君を失ひ、根岸會の損失測るべからざるものと存申候。小生も久しく歌に遠ざかり居候ものから、今更ながら今昔の感に不堪候。望月君は一別以來再會の機なかりし樣記憶致居候。大兄には數次おん目にもかかり親密の度も他よりは深き樣覺えられ申候。今後も幾度か溫容に接し可申、小生の如きも周圍に人なけれども、只天然を友として隨時の感興を基礎と致居候。天然の現象に於て信州に及く處おほからざるべく存候。幸に御自愛あらむことを祈り申候。小生また疎懶の癖を生じ絕えて手紙の筆を執らず、今日漸く各處へ消息致し申候。偖て過日御惠贈の飴

は卅人程にて分けてたべ申候。兩三日前まで有之候處、寒中稀なる暖氣故にや解け申候。鹽を敵國に贈りし一條は謙信一生の美談ながら、此を今に忘れざる信州人の心の程も床しさの限に有之候。しかして御葉書の文面も亦頗る森嚴の感あつて打たれ申候。大兄よりは毎々御厚志に預り、此方よりは何の報ゆる處も無之日常苦心致居候。幸過日水戸に便有之候ひし故、名物吉原殿中少々取寄せ申候。御目にかけ申候。實は紙箱詰に相成居候へ共、破れ可申候に付、有合せの木箱を用ゐ申候。つまらぬものながら御笑味被下度右まで申進め候。匆々。（明治四十四年二月三日　自宅より　封書　胡桃澤勘內宛）

其卅一

拜啓。別紙は小生三年以來の稀有なる現象に有之候。あらら木記念號の原稿として、今日齋藤茂吉君あてにおくり申候。同氏へも手紙に書き申候へ共、小生には

從來歌といふものはもはや到底出來ぬものと觀念もし、又歌はつまらぬものとのひねくれたる考も起り申候ひしが、作りえたる時はやはり懷しきものにて、有るは無きにまさりたる心持に有之候。乘鞍岳はいまはしかと覺えざるが如く相成候へ共、その形のみはありありと目に映じ居り候。多分は霧が峰から見しものと存じ候へ共、或は松本城の附近よりなりしか、更に又故望月君の繪葉書に描かれしものが印象を深くせしものか、兎に角見たりと思ふ場所は、落葉松と鵙のこゑとに忘れ難き山坂にして乘くら岳は白かりし一つに限り申候。乘鞍岳といふことが只小生には嬉しくて何も彼も辨へ不申候。十四首の歌は僅なる感興のために成り申候。而して其感興を喚び起したるものは、貴兄より賜はりたる燒岳の繪葉書に有之候。更に又「乘くら岳の右の方に當りて」といふ一句、乘鞍岳の印象を小生の腦裡に新にしたるが故に有之候。小生をして僅かながらに再び呼吸するを得しめたるは全く貴兄に候。貴兄の賚に候。小生は斯く思うて深く感謝するものに有

之候。

近來絶えて文章を作らず、俗事のみおほく候、今年はじめての百姓として馬鈴薯を作り、此は先づ失敗、大豆も暴風のおそふ處となる。只陸穂のみ村一に相見え申候。此の秋の末は立派なる麥を作らむ計畫に候。

女郎花漸く綻ぶ。山百合既に過ぎて白鹿子の白きを愛し候。匆々。（明治四十四年八月六日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

（編者曰、別紙云々の「乘鞍岳を憶ふ」の歌は歌集にあれば爰には省く）

其卅二

拜啓。此頃は餘りの筆不精にて申上樣も無之候。七十八日の病院生活より、本日漸く表記へ移り申候。惡性の病なれば全治は望むべからず候へ共、小康を得たるは事實に有之候。本月一杯は滯京其上は九州へ轉地可仕候。福岡大學の久保猪之

吉氏を手賴りて診察を受け申度心願に有之候。明石以西は悉く生面の山相に候へば、序を以て煙霞の癖を滿足せしめむ計畫に有之候。

餘は重ねて可申上不取敢如此に候。匆々。

一、書中漏し候。養生院へ近く飯沼四郎といふ醫員參り、堀内君望月君など皆よく存居候ひき。

二、飯沼氏は小生がよく大兄などを承知致居候におどろき居候。同氏は溫順の人に見え申候。（編者曰、一、二以下は封筒署名の左右に記入せしものなり）（明治四十五年二月二十日　東京市下谷上車坂町那須館より　封書　胡桃澤勘内宛）

其卅三

先頃の御禮ここから申上候。梅には少しおくれたりと存候へ共、再びは望むべからず候まま、今日名古屋から逸れて參り候。明日は笠置へと存候に雨ふりいで申

候。（明治四十五年三月廿一日　大和月ヶ瀨より　月ヶ瀨風景桃ヶ野奥ノ谷梅林の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其卅四

廿六日ここへ入院。本當に思ひ切つて手術を受け申候。いま花の時に相成候故止むを得ず十分花見を致すことに有之候。暫く居たらまた旅行を繼續致可申、懷の許す限りはぶらぶらと馬鹿に成つて歩き申度存居候。京都はまだなかなか寒くて冬の支度が其儘とれ不申候。然しいま四五日で花の盛になり申候へば、すつかり身輕になれ候ことと存じ候。（明治四十五年三月卅一日　京都醫科大學病院より　京都風俗大原女の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其卅五

御葉書難有拜見仕候。小生病狀は依然として歸する處を知らず候。されど急にどうと申すことも無かるべく、思ひたのむ處なく氣長に相構へ可申候。あららぎの歌仰の如くわからぬ樣に相成申候。これも自然の趨勢なるべく、しかしながら何事にも弊はありて、わからぬ歌に雷同する傾あるは嘆ずべく候。暫く成行を見るに如かずと存じ候。（表面）

ここの滯在の時間からいへば、もう久しき前久保博士夫妻に招かれて、旗亭に博多節をきき候ひしが、其謠の一つに「筑紫名所は名島に宰府芥屋の大門の朝あらし」と申すあり。遂に憬がれし結果芥屋へも參り申候。玄海の波を正面に受けて壯快の景に候ひき。筑前に古刹おほく、國寶の佛像小生の既に見たるもののみにても卅七體に及び申候。久保田君近來懸命に成つてあららぎ誌上に歌の批評を書けども、同君には以前からどうも固陋なる分子のまつはり居るを遺憾と致申候。此間の御葉書の泉の如く、透徹したる感じに乏しきを惜み申候。（裏面）（明治四十五

年六月十七日　筑前博多東公園より　筑紫奇勝芥屋の大戸の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其卅六

歸國の途に就くも間もなきことと存じ、思ひ立つままに渡航一寸のぞいてかへり可申候。今日夜壹岐にわたり、三四日の後には博多へもどり、それからまだ其一端をさへふんだことのない豐後國へ向ひ可申候。（明治四十五年六月廿六日　對馬國嚴原港より　鷄知樽ヶ濱の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其卅七

期待して居た以上に宮島は氣に入りました。素より三景中の第一です、さうして平家といふものは豪氣なものであつたと、つくづく思ひます。（明治四十五年七月廿六日　宮島より　安藝宮島滿潮廻廊大鳥居遠望の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

文展を見に參り候へ共、平福君のがなくてもの足らず候。病氣おもしろからず候故、復た福岡へまゐらうかと存じ居り候。（大正元年十一月七日　東京市下谷區より　中川八郎氏筆瀨戸内海の繪ハガキ　胡桃澤勘内宛）

其卅八

拜啓。武井氏の六曲屛風今日か今日かと相待申候。小生も此ほどより熱出て甚だしく大儀に感ぜられ申候。半日づつは寐て居る始末困り申候。疾に鎌倉へは參るべきに、父も大患に打臥し居候ため段々に後れ申候。されど新年には匆々目的を達し申度心組、聊か心强く存ぜられ申候。數日來殊に氣分よろしからず、漸く此狀差進め申候。卷紙を探すも懶く候故、これにて御宥し被下度候。

其卅九

只今武井氏の上水一日千秋の思にて相待申居り候。匆々。（大正二年十二月十五日　自宅より　封書　胡桃澤勘内宛）

佐久間政雄宛

其一

拜啓。過日の御書狀繰り返し拜誦仕り候。伯樂の唄に就いては更に智識を得候段忝く存申候。つまらぬ事書き申候て却て未見の貴下より稱賛せられ候こと、近來の快心事に有之候。小生は十八才の折福島より相馬の中村へかけて、徒歩にて旅行致候こと有之候へども、御鄕里三春は未だ知不申、却て飯坂長國あたりは知り

申候。靈山は登山いたし候へども安達太郎、磐梯皆遠望に過ぎず、今一度參り度と存候。此の夏のうちに炭燒のことにて山形まで參る筈の所、話は立ち消えに相成り候。榾のことは小生地方にて、木挽などがけづりたる丸太をば「ホダ」と申候故かくかき申候。謬り候や否やしかと調べもいたさず、御書狀によりて、ことばの泉、日本大辭林を見るに木の伐りかぶと有之、山家にて薪とするものの由に相見え申候。薪と申候ても先年甲斐の山中にて見申候に隨分ふときものを用ゐ居り候。それらより木挽などはおのれらが扱ふ木材をば、「ホダ」と呼び來りたるものには無之や。小生のも却て假名にて認め可申ものなりしならんかと思はれ候。

小生には據所なきものに候へば、輕く御見のがし下され度候。

次に歌の上にて聊か心落居ざる御樣子、誰も一たびは遭遇する事實に候。小生も三四年前六箇月ばかりの間、煩悶に煩悶を重ね候事も有之候へども、其時少しく眞面目に、萬葉集を見申候ため調子付き申候。多忙の人は斯の道にのみ身を委ぬ

るわけには參らず候へども、一たびたづさはり候て善き歌作らん所存ならば、餘暇を以ても相應の勉强可然と存候。第一の條件は終始實際に接觸することに候が、調子といふもの中々六かしく候へば、これは矢張り先輩者の製作を誦して、不知不識の間に會得するより外は無之候「竹の里歌」など熟讀せられ候はば宜しかるべく併せて「竹の里人選歌」なども讀む必要はあるべくと存候。萬葉を讀むにも、わからぬものは除き、わかるものだけ讀みて興味を感ずるやういたし候は、怠らざれば三箇月にして面目を改むべく候。郵税などはいり不申候に付、玉詠いくらにても御遣し可有之候。小生も人の歌など添削する分に無之候へども、心付候點は申上ぐべく候。

課題の歌は少しく不結果に候へども、その御心掛にて御勉强願上候。(明治卅八年六月二十日　自宅より　封書　佐久間政雄宛)

其二

玉稿早速御返附申上ぐべき筈に候へども遂におくれ申候。嘸御待遠なりしならむと存申候。前回の作物は不結果に候へども、此度のは實況だけに立ちまさり居り候。次回よりは小生も急ぎ拜見可致候へば、盛に御投稿希望仕り候。何せよ少々身體に苦勞をかけ候て、實際を尋ね求め候が第一に候。妄評不惡御覽下され度候。

（明治卅八年七月十一日　自宅より　封書　佐久間政雄宛）

其三

拜啓。木曾、美濃路、近江の湖畔、京、須磨、明石、丹波天の橋立等を周遊、伊勢より船にて歸り申候。四十日の旅、拙詠少々來月の誌上に掲げ可申候。御笑覽下され度候。近來御高作「ホトトギス」にて拜見、茶の湯など東京にて評判に有之候。先は歸宅の御知らせまでに。早々。（明治卅八年十月二十一日　自宅より　ハガキ

其四

拜啓。小生よりこそ久々の御無沙汰申わけも無之候。いつぞや玉詠幼兒を悼まれ候ものは、大兄近來の作の樣存ぜられ候。いづれ其内誌上へ掲げたく存申候。其後のは隨分思案のものも有之候。小生も近來濫作に流れ候ため、いたく先輩より叱責せられ、深く自ら慚ぢ候有樣、人の製作品を見ても面白からぬもののみの樣にて、此ところ頭の靜まるまでは、自分にも譯のわからぬ樣の心地いたし候ことも有之候。大兄などにも唯正直に面白しと思ふことを捉へてよまれ候樣望み申候。要するに自分がさほど面白くも思はぬことを、如何にともして及第せしめむと思ふ樣なる野心は以ての外に有之候。これは大兄が左樣と申すことには無之、唯御參考までに申上げ候次第に候。

萬葉集代匠記は小生も所持致居り候へども碌々見不申候。なかなかの大部にて、よく讀めばそれにましてのことは無之候へども、解釋に於て完全なるに有之まじく、尤も後に出でたる古義は宜しきわけにては候へども、これは非常の大册にて小生も所持不致、今の所は一寸便利なるものは、橘千蔭の萬葉集略解なれど、これは誤おほく候。先づ第一に博文館の歌學全書中のものをわかる所だけを、わかるものとして反覆せらるれば十分に候。最初は少しもわからぬ樣なれど、段々と調子のよきことだけは御心づき可申候。

長歌は少しく解し惡く候へば、短歌だけを御覽なされ候はば宜しく候。但し古義を除けば代匠記宜しく候へば、求めおき候ても損は無之候。要するにわかるだけの所をいくたびも反覆誦せられ候こと第一に候。早々。（明治卅九年三月十九日　自宅より　封書　佐久間政雄宛）

其五

御手紙難有存申候。大概廿一、二、三日のうちにて拜眉の榮をうることに相成可申候。小生の旅行と申候は、昨年の如くすげ笠に茣蓙草鞋と申す出でたちにて、小さなる荷物を兩掛にして白地の單衣を着し候だけに有之候。時によりては寺院の一隅を無心し、時によりては博徒の親分をも手頼りみむ所存に候へば、宿などは如何なる所にても平氣に有之候。されば御指定の宿へは參り可申候へども、車には乘り申すまじく候。洵に御多忙の趣、然るに絶えず文章の名篇を拜見致し候こと驚嘆に堪へ不申候。一夜閑談翌日出立いとま仕度心組、宜しく御ふくみ下されれ度候。早々。（明治卅九年八月七日　自宅より　封書　佐久間政雄宛）

其六

金華山は船から上ると、刈込んだ樣な青芝に糸すすきが茂つて、鹿がぞろぞろ土

産を貰ひに來る。金華山は見てよく、渡つてよく、洵に天下の絶勝に候。小生は晴雨共に見申候。幸運なりと存候。今日仙臺へ歸る積のところ、汽船の來ぬため明日を待候。（明治三十九年九月一日　陸前牡鹿半島鮎川港より　金華山黃金山神社社務所印押捺のハガキ　佐久間政雄宛）

其七

拜啓。佐渡は雨の金北山に登り、雨に眞野の御陵を拜し、赤泊より越後の寺泊に渡り申候。彌彥山にも登り三條長岡を經て、昨日此地へつき申候。既に信州の境も近く珍らしきことおほく候。マイ茸とて大なるは徑三尺、普通のも一尺ありといふ茸をたべ申候。切取つたる一片を見るに、銀杏の葉の如き形の枝集りたるものにて盆に餘り居り候。マタタビの實もたべ申候。更に山深く分け入る筈に候。毎日粗食しては骨折候。朝も日記を書けば、大抵夜も疲れ申候ため、御無沙汰致

し居り候。他の兩君へもよろしく御つたへ下され度候。（明治卅九年九月廿三日　越後國中魚沼郡中深見村より　ハガキ　佐久間政雄宛）

其八

拜啓、日中はなかなかの暑さに候へ共、夜になれば涼味頓に加はりて、月色の全く秋なるにおどろかされ申候。小生は十日程前上京昨日歸國仕り候。東京へわざわざ苦しみに參り候かと思ふ程暑さにせめられ申候。日外の御手紙にては、其内横濱へ御出の樣に候ひしが、沙汰やみに成り候ことにも候や、左千夫君も是非共御目にかかり度と申居り候。御たづねの前日葉書をおくられ候ことならば、必ず在宅すべかりしにと其事をいつも申居られ候。昨秋御目にかかり候日も近づき申候。今年はどこへも旅行相叶ひ不申、つまらぬ心持にて暮し居り候。はじめて庭に植ゑたる葉鷄頭漸く丈高く相成候。此を樂しみにて此秋を過し可申候。庭の中

（ホトトギス所載、法師寫生文）は技巧はすぐれ居り候へども、虚子君などのやる悪いくせをその儘繰り返し居候は、如何にも殘念に不堪候、視線がどうしたとかいふことを、わざわざこねくらずに、もつと素直にいつて欲しく候。素直にいつて面白くない所ならば、いくらこねくつたとて只厭味になり候計に候。小生も昨秋の佐渡紀行を書き申候へども、矢張り氣どつたこねくりが交つて、自分でも困り申し候。然し此點は餘程自ら戒めねばならずと存居り候。放江氏近來歌を作られ候様相見え申候。元氣を少し歌の方へも分與せられ度と、御出逢の節御傳へ下されたく候　小生は昨秋以來歌なく、左千夫君を除く外はいづれも振ひ不申困り申候。

（明治四十年八月二十二日　自宅より　封書　佐久間政雄宛）

其　九

拝啓、小春日和とて日中は流石に暖く候へども、夜に入ればなかなか冷たく火鉢

のそばこひしく相成申候。其後は何か御書きには不相成候や。小生は兎角の不性にて何も出來不申、書き候とて骨ばかり折れて困り申候。佐渡が島は御覽下され候や。あれでも小生には相應の重荷に感じ申候。御覽下され候ならば、何等か御心づきの點も有之候はむと存申候。其邊腹藏なく御もらし下され候はば幸甚に有之候。御近況御伺かたがた如此に有之候。放江氏へは其後全く御無沙汰いたし居り候。過日は雜誌を御惠送下され候へども御禮も不仕候。よろしく御傳へ願上候。春哉氏へも御同樣願上候。早々　(明治四十年十一月二十六日　自宅より　封書　佐久間政雄宛)

其十

拜啓。兼ねて御依賴の歌集其節早速御返戻申上ぐべき筈の所、當時歌といふものの上には甚だしき疑を生じ、今以て何とも解決致不申候。それは小生自ら近來全く散文的の頭腦に相成、歌に全く絕緣致し來り候故に有之可申候。現今に於ては

何人の作を見ても、感服すべきものを發見致さず、感情を主とすと稱せらるゝ歌よりも、却て文章に於て切實なる感情を表現するに便利にして、且つ實際の傾向が如此きもの有之候狀態、小生の遺憾とする處に有之候。隨而唯に御預り申置候。玉稿の如きも、全く百中十首時代の形骸に過ぎずして、通讀するに製作の態度の甚だ輕浮なるが如く感ぜられ申候。妄言と雖小生にはしか感ぜられ申候。小生目下短歌の製作に熱中致候ものならば、多少の發明も有之可申、陳ぶる所肯綮にあたる點も無きに非るべしと存ぜられ候ものゝ、現在の有樣にては何事を申上ぐる資格も無之候。些少ながら十年養ひ來り候趣味性は、玉稿に對して十年以前の形骸なりと妄言せしめ申候。折角の御勉強に報ゆるに如此は、小生の衷心苦痛に堪へざる處に候へども、自ら欺き人を欺くことの更に苦痛なるを知るが故に、今夜腹藏なく申進め候。御面晤の折近かるべしと存候に付、其節萬々御詫仕候。此彼岸頃水戸より陸中平泉に遊び盛岡を經て淺蟲溫泉に浴し、弘前より秋田に出で歸途

御地へも一泊致し可申候。旅行の最長期間二週日、通路悉く汽車に頼り申候。今秋は何所へも参らぬ積りのところ、ふと思ひ立ち、短時日を利用して奥羽一週を志し申候譯合、昨冬十二月平泉へ一たび参り候て、依田秋圃氏の「わたりもの」（ホトトギス所載）の女主人公を見て興味を惹き、再び参る氣に成り申候。來月初旬には必ず御面晤の榮を得可申、何事も唯其節に讓り申候。先は右まで申上候。匇々　（明治四十二年九月十四日　自宅より　封書　佐久間政雄宛）

其十一

一日出立、二日平泉泊、三日淺蟲、今日青森の海岸を見て此地まで參り申候、八甲田山岩木山東西に聳え候。されど山は關東附近に及ばず只青森は遙かに北海道を望む處、旅人の興を惹き申候。只今より弘前の市中を見て、明日小坂に行き十和田湖を見物致すべく候。或は最上川を下らんかと存候に付、御地へは暫らくひ

など御申可候」（明治四十二年十月四日 弘前より 青森善知鳥神社の繪ハガキ 佐久間政雄宛）

其十二

此間は意外の御厚志を蒙り難有奉存候。愚作に對する御評御尤の儀と存候處、文章世界にも同樣の批評有之候。何とも汗顔の至に有之候。此から名譽を恢復致度存居り候。（明治四十二年十月二十四日 自宅より ハガキ 佐久間政雄宛）

其十三

「おふさ」の中へ書いたのが此土手に有之候。野茨の花のさいた時が鬼怒川の尤も愛すべき時に有之候。福島に見かけ候梨子はうまく相にて忘れ難く候。一籠土産に欲しかりしが、發車の時間が夜中なりし爲め、商人が居らざりしが遺憾に候ひき」（明治四十二年十月三十日 自宅より 下妻十勝宗道歸帆の繪ハガキ 佐久間政雄宛）

其十四

五月三十一日附の御手紙昨日落手仕り候。全體珍寄の事實を以て埋められ候ものとは申ながら、一篇の名文を讀むが如く、多大の興味を覺え申候。小生の隣それも垣根一重の東隣よりも、今春まだ雪深かるべき頃に、妻子を殘して北海道移住の目的を以て、先づ自らのみ參り候もの有之、此も十勝國と申候。隣づかりの事とて、一家の事情も委細に承知致居り候事なれば、いろいろ思ひやられ候處も有之、かたがた御通信のかどかど身にしみ申候。當地は只今麥刈の季節にて、畑の境には卯の花白く咲き出で申候。卯の花くだし降つて今日は晴れ申候。されど明日は覺束なく候。樹木のみどりは強く、且つ深く、蛙はまだ喧しく鳴き申候。何と申候ても、舊暦は依然として行はれ候故、只今が端午の節句前とて、勢よき鯉幟が村のそこここに見え申候。豌豆は百姓の口にも只に味はれ申候へども、夜

蕃と申す害虫の發生夥しくて困り申候。昨冬寒氣足らず候故か、今年害虫一般に多き由申候。扨て櫸の芽只今萠え候由、此狀御手もとへ屆き候頃は、嫩葉の林に有之べきか。小生は自ら趣味が漸々に變化し行くことを覺らざるを得ざる次第に候が、在來何とも注意を惹かざりし櫟や柊や櫸等の若葉に、近來は非常の興味を感ずる樣相成申候。迚も急速には伐採しえまじき櫸の林の嫩葉、只管思ひやられ申候　此の地方には小生等少年の頃とは異り滅切小鳥も減少して、雲雀頰白の外は容易に聞くことも見ることも出來不申候。御書中何から何まですべて面白く、何とかして小生も御在留中、一たびは殺氣に滿ちたる開墾地の容子も相探り申度と存申候。櫸の板のお膳にて一餐の御馳走に相預り度、人足どもの喧嘩も見申度と、好奇心も起り申候。小生の旅行は從來盛夏より初秋の候にわたり候故、季節の相違といふことには一向疎く候へば、若し御地へ參りうることも有之候ものならば、嫩葉になる時節を選び可申かと心構へ致申候。旅行の疲れにて御加減よろ

しからず候趣、御大切に奉祈上候。此ほど面白き周圍を有し候事とて、必ず名篇を得られ可申と期待致され申候。くれぐれも大切に願上候。先月初旬に瀬上町の門間春雄と申さるる人より、突然小生へ文章のことにて申來られ其書中にて、實は老兄の今回の御決行の趣をも承知致し、重ねて同氏の書を得て御住所も承知仕り候處、僅かに兩三日を隔てて玉章に接し奇異の感を懐き申候。門間氏は二十一歳の由書信を見て驚き申候。同氏は文章熱心の様に相見え、老兄と分れたることを悲む由申添へられ候。如何様の境遇に在る人か、逢うても見たき心地致され候。餘事ながら今少し申進め候。小生先月初旬より專心小説に筆を染め申候。此は朝日新聞よりの依頼により申候ことに候が、小生には過大の重荷にて隨分苦痛に有之候。漸く半分位下書も出來申候へ共、此から先が難問題にて行悩みの姿に有之候。然しどうにか纏め申度と勉強中に有之候。うつかり致居候時は此状も後れ可申候に付、亂筆ながら原稿紙へ此の如く相認め申候。不悪御ふくみ被下度候。白

宅にては煩きことおほく候に付、小學校の圖書閲覽室へ毎日通ひて筆とり申候。此も小學校にて認め申候。子供は六ケ敷しく候へ共、意味なき音響故平氣に有之候。十町程の道程一つは運動がてらに通ひ申候。先は右まで。匆々。(明治四十三年六月七日　自宅より　封書　佐久間政雄宛)

其十五

唯今花の季節に相成申候。祇園の櫻、此の前は篝火の光に照らされたるを愉快に見申候ひしが、今は病院生活を營み候へば、其自由は得難く候。病院に居ては暇に候へども、頭が惡くて文章などを作る氣も起り不申、頻りに繪葉書など買入れては認め居り候。ここまで來るのに月が瀨だの笠置だの見て參り候。九州へ行く積りで出掛け候て、ふと此病院に這入り申候。花の散り過ぐる頃旅行を繼續致すべく、懐中の都合にては鹿兒島まで參り申度心算に有之候。平素餘りの御無沙汰

致居候爲、繪葉書位にて申上候ことは一寸氣が濟まぬ樣の心持にも有之候。門間春雄氏とは近來再々書信の往復致居候。(明治四十五年四月三日　京都醫科大學病院より　京都圓山祇園の夜櫻の繪ハガキ　佐久間政雄宛)

其十六

小生當分此處に滯在、久保博士の治療を受くることに相成申候。此地附近に名所古蹟おほく、すぐ側には蒙古の上陸したる多々良の濱も有之候。礎の大なるを御覽下され度候。此に相應したる柱を以て建てられたる堂宇も想像するに難からざるべく候。小生は二度訪れ候へども、また參り可申候。(明治四十五年五月十三日　福岡より　都府樓古蹟の繪ハガキ　佐久間政雄宛)

其十七

いつか石にかぢりついても癒れとの御藥書でしたが、幸にも咽喉は全治して居る相です、此を貴下へお知らせすることが何だか義務を果たしたやうな心持がします。（大正二年三月三十一日　筑前博多千代松原より　玄海の奇勝芥屋の大戸全景の繪ハがキ　佐久間政雄宛）

其十八

過日の御手紙難有拜誦、然る處小生在京中非常に好經過に候ひしも、歸宅後漸次不良に陷り、天候惡しければ思ひ切つて轉地も成り難く、只げつそりと瘦せて寢てばかり居り申候。熱高く八度にのぼり申候へば油斷もならず、何よりも手紙書くことが苦痛故、門間君へもまだくやみも出し不申候。明日わびをいうて手紙を書く積りに有之候。不日伊豆の伊東へ轉地して靜養可仕、さうして今度は肥え可申候。門間君も不幸の人、然しながら小生の境遇から見れば、至幸の人に相見え

中候。只年齢が餘りに若く候へば、大事取らねば相成るまじく候。（大正三年三月一日　自宅より　ハガキ　佐久間政雄宛）

其十九

今夜はあなたへおわびかたがたこの手紙を書きます。實は日向から歸つて門間君の手紙を見てお嬢さんの御不幸のことも知つたのですが、當時どうも非常に疲れて居て困つて仕舞つたので、何所へも御無沙汰しました。日向行は意外な天候から人事上の失敗が作つて、むしろ酷い目に遇つて來ました。餘り苦しい時なものですから、門間君に厭味などいつて遣つたこともあります。其後とてもいけなくて、此二十日以來といふものは、八度七分に昇つた熱がどうしても八度以下にさがらず、時には朝が八度のこともあるのです。それでも久保博士には秘して、熱のあることはいはずに手術をして貰ひましたが、此はいいやうです。そんな譯で

手紙がこんなに後れました。いまふいと思ひ出したものですから兎も角も筆をとりました。只此狀だけをお孃さんのお弔みに差上げます。其のしるしは略しました。何卒不惡お許し下さい。私は四五町先の博士の町へこの五ヶ月に四度だけ行きました。電車でいつて直にもどつたこともあります。さうして寢てばかり居ます。此間門間君から何か書きたくて仕方がないといつて來ました。是非書いて欲しいと思ひますが、先づ非常に骨折るといふこと、書いたものを人に譽められる積りで見せないことと、此丈は大條件であります。いつかもあなたが被仰つたやうに、同君には才があつて、物が年に似合はずわかるのですが、どうも鈍な分子が缺乏して居ます。これは同君の大病弊です。貴下からもよく御注意下さい。書いて終つたら屹度貴下へ持つて行くのでせう。私の此の手紙を見せて下さい。お弔みの積りで遂こんなことに成つて、書き直すには大儀ですし、どうかお許し下さい。今頃こんなことをいつてあげて、却つてお心を騷がす樣なものかも知れま

せんが、お見のがし下さい。（大正三年十一月四日夜　福岡より　封書　佐久間政雄宛）

（右十九通、大正四年六月發行アララギ第八卷第六號長塚節追悼號所載）

門間春雄宛

其一

拜啓　疾に挨拶不致候ては、折角の御書狀に對し申譯なき次第に有之候へ共、小生先頃より朝日新聞の小說を引きうけ一意稿を急ぎ候ため、何方へも缺禮致居候場合、思ひながら貴下へも御無沙汰仕り候。殊に唯今は小生の一番苦惱いたし候時節と申候は、小生は廿歲以前より腦を病み候て、それが野茨花さき麥の穗の熟

する頃が尤もよろしからぬ時節にて、小說など書き候ことも實は無理にて小生も困り居候、餘裕なき小生の頭にては、唯今の處玉稿に對して何かと詳細の意見も申述べ兼ね候。いづれそのうち小說脫稿小閑を得申候はば如何にも申進むべく、それまでは何卒ぢつと御辛棒被下度御願申上候。文章御熱心と申候へば「ホトトギス」も御熟讀の儀と存申候。相應に御意見も有之可申、小生より無理に申述べずとも、素より御會得のことゝは存候へ共、要するに面接の上、意見の交換をなす同人なき人の第一に志すべき處は、ふつと思ひ定めたることは、自分の心に此ならばと合點の行くまで、それが短篇に候とも幾回にても稿を改めて、始終其文章にのみ心を勞し候時は、不知不識の間に上達すべきものと存候。面白かるべき材料は、どれ程にても有之可申候へば、一奮發相成り候ては如何に候や。筆の序に申進め候。兎に角今夜惱める頭に書きしるし申候こと故、申すこと前後致處も有之可申候。御判讀被下度候。（明治四十三年五月廿七日夜　自宅より　封書　門間春雄宛）

其二

拜啓。ふと大兄を思ひいでて、不思議の場所より一書差進申候。此までの御疎遠これにて御海容被下度候。小生は只今喉頭結核といふ診斷にて、兎にも角にも手頼るものは斯道の大家より外に無之、岡田博士の經營する本院へ參り申候。只今思へば八月以來唾液を嚥むに、ぴりりと咽喉に痛みを覺え候に、別に氣にも掛けず打棄て置き候ひしを、十月に成りて咳はげしく、懇意の間柄なる田舍の專門醫に見せ候處、此も格別のことにも思はぬ樣子にて打過ぎ居候に、小生も別段苦痛も感ぜぬ病氣ながら、ふと思ひ出してよくよく奥の方まで見て貰ひ候處、醫者も始めておどろき候譯合、先月中旬上京小此木と申す大家に見せ候に、只喉地へ行けとのみ、小生も二三泊して歸鄕すべかりしに、友人の勸めにより木村といふ學士、此は富豪岩崎一家の格別なる信用を博し居る人の由にて、此に見せしに卽刻

病名を宣告、打捨て置候へば存命は一年か一年半と申されしに付、流石に小生も數日間は快々として食慾も減退の氣味、然しながら只管此の學士を賴みて通ひ申候處、小生の弟に工學士一人有之此者只今在京、嘗て高等學校にて野球の選手たりしより、只今大學教授にして病理學者なる長與又郎氏と入懇なるを幸、同氏の紹介を貰ひくれ候に付、先月末日岡田博士に診察を受け申候に、手術を施して患部を切取るに如かずとのこと、藥品の塗布によりし木村氏を棄てて一昨日入院仕り候。

肺部にも僅ながら故障有之ものの由、只此は熱もなく盜汗もなく、只今の處身體は虛弱と申ながら從前と異ることなく、一日六七里の道を行くに苦しからず候。治療の結果如何に落つき可申か、全治せぬまでも可成餘命を延長し得ることを望み申候。三四年間とくと心掛け候て、今一つ長篇の小說に筆をつけたくと存居候、風情おほき霞が浦沿岸を捕へて描寫したきは年來の志望、實際の處殆んど部

分的に捕捉すべからざる霞が浦は、何人も未だ滿足に表現し得たる者無之かと存じ候。此希望全しからぬ樣とそれのみに候。若し萬一にも手術の効果顯はれて、一時なりとも小康を得ば、世事を放擲して再び遊子の身となり申度。此の希望實現せられし時は、自然錦地に參り可申機會も可有之候へ共、既に傳染性の惡疾に候へば、うかと他人の家を訪ね申間敷もの、矢張不自由の身の上に可有之候

此の夏中上京の序知人を訪ね候に、下女に御地長岡あたりの出と申もの有之、舊宅のことなど承り、鹿島の市人相ひきゐて菖蒲見に參る由に候へば、今更ながら安積山の故事、嘗て十八歳の時徒歩にて鯖野から靈山、松川浦など探り候こと思ひ出でられ候ひき。小生は只今三十三歳、大兄とは大分の懸隔、然しながら此は數字の上のこと、感情の上の懸隔は無之樣に存ぜられ候。大兄の風丰は御寄贈の寫眞にて知り申候。小生をば御存じ有之間敷候。小生は幼少より瘦せて血色よろしからず、體量も十二貫匁を越ゆること多からず候。只今はどの位有之候か心細

く候。偖て自分のことのみ申上候て、あとは何と致候ものか。大兄も唯今は家事上に御多忙に候はんこと、推察致すまでも無之候へ共、何なと時には御認め相成候や。されば今執筆中思ひ出し候。久しき前に御送付相成候旧稿、小生の疎懶なる返事一つ差上げ申さざりしこと何とも申譯無之候、記憶を辿り候に、彼の作は到ること未だ遠かりし様に候ひき。面白き事實は周圍に幾らにても可有之、されば必ず忠實の寫生を主として、必ず其範圍を越すこと勿れ。要は只これのみに有之候。

佐久間氏へも小生はふつと音信を絶ち申候、始終思ひ出しては苦しみ申候へ共、筆不精は如何とも詮なく候。前述の如く二三日にて歸郷の豫定に候ひし故、上京するにも何の用意もなく、佐久間氏の住所なども控へ不申、手紙出すにも困り申候。大兄より何卒可然様御傳へ被下度願上候。在院中所々へ平素の御詫仕度考へ有之候、病院と申す處、退屈なると不自由なると食物の粗惡なるとに苦しみ申

候。此からまた寒く相成可申、退院の後は一時鎌倉へなり參る筈に有之候。申上ぐべきこと盡き不申候へ共此にて擱筆仕り候。（明治四十四年十二月七日　根岸養生院より封書　門間春雄宛）

其　三

拜啓。鄕里へあてての御手紙難有奉存候。病院生活も最初は長くとも四五十日位の積に候處、意外にひまどれ候て、七十八日目の昨日漸く表記へ移り申候。惡性のことなれば全治は期す可からず候へ共、向後は只天命に從ひ可申候。唾をのむにまだ少しの痛みは有之候。本月一杯は在京、それより歸鄕して數日の後には九州へ發足可仕候。鎌倉の方は思ひとどまり申候。福岡の大學に久保猪之吉氏を訪ね診察を受け可申、其上は死んでも悔は無之譯合に有之、鄕里を出でて既に三月以上に相成申候へば、言たきこと聞き度こともおほく出で來申候。小生も兩三年

以來百姓の仕事がおもしろく相成、殊に竹林栽培に非常の興味を有し候ことと て、昨秋の如きも綠肥として小粒の豌豆を二町歩も作り申候。それも石灰を利用して連作を試み候處、成績良好の由申越候に付、是非共一見致度歸心は箭の如くに候へ共、此處を去ることは相叶ひ不申候。九州へ參れば間もなく花の盛に相成可申、衣裝もうすく身も輕ら相成るべく候へば、鹿兒島までは探り申度心組に有之候。夏にも相成候はば、帶て參り候羽後の酒田の港より便船に乘じて、飛島と申すに渡り申たく心掛居候。此は風俗のおもしろき由語られたる故も有之候。飛島は酒田より少しく北の海岸にある湯の濱の溫泉より、手もとどくばかり近く横り申候。此企今年は覺束なしとするも、來年は決行致すこと叶ひ可申、さすれば一たびは御目にかかる機會も可有之、來年までの生命は懸念有之まじと存申候。

備て亡師の筆蹟をとの御申越承知仕り候。少々ながらまだ鄉里には保存有之候に付、歸鄉次第郵送可仕候。以前は澤山所持致候へ共、只今は手紙の外には短册も

數葉に過ぎ不申候。それも事情あつて今回他の手に相渡可申樣相成可申かと存ぜられ候に付、小生の手もとには單に手紙だけに相成可申候。されどそれはさまで急ぐにも及び不申候に付、兎に角持合の全部は御目にかけ可申候　次に小生に對して先生の敬稱は向後は御辭退申上度、先生などと申され候ては、小生汗の出る程恐縮仕り候　以前も申上候かと存候へども、小生は十六の時に廢學、それも腦病故にて候へば、書籍によつて知識を攝取することは絕對に不可能に相成、したがつて世に文筆の士にして、小生程の無學は嘗て有之間敷と存申候　されば小生の書きしものは卽ち小生の全部にして、其他には何物も存在不致候　實を申せば小生に御會ひ被下候ても、失望の外には少しも得る處は有之まじく、嘗ては小生にも身に覺え有之候へ共、新聞雜誌等に印刷せられ候作者をば、心底より尊敬して見ることが、田舍に居住する正直なる人々の間には通有性とも見可申か、然しながら此は最初の御手紙に對しても、大兄へ斯樣のこと申候は無禮に有之候へ共、

小生自らは自分の過去を憶ひ出でては深く警め申候ことに有之候。姓氏を以て御よび被下候ことは、小生の希望にして又滿足致す處に有之候。此事は必ず御わすれ被下間敷くれぐれも御願申上候。今朝待つ人あつて心忙しく此狀認め申候。筆も思ふに任せず候。（明治四十五年一月二十一日　那須信より　封書　門間春雄宛）

其　四

拜啓。先師の遺墨兼ねての御約束の如く、今日書留郵便にて御とどけ申候。短ざく五葉封書十二通葉書三枚他に畫賛二葉、歌三首句が一葉有之候。六月上旬までは留置かれ候て支障無之候。柿の畫賛は小生が無闇に筆蹟を欲しがり候ため聊か小言を申され候て、其後此を持つて參れと與へられたるもの、鷄のは小生の土地は田が反四俵石數にして一石六斗位が普通なりなど、或夜一人枕頭に侍して語りし時、今夜は君のために苦痛を免れたりとて、非常に喜ばれ候て直ぐに書かれ申

候。歌の分は說明を要せずと存じ候。以前は澤山所持致候も、漸次減少して此丈に相成申候。それも手紙類を除いては讓渡致可申運命に際會致申候。大兄は過般來小生に對する格別の同情者と覺え申候に付、如此御目にかけ申候。尤もかかる要求もはじめてに有之候。今一通長き手紙有之候ひし筈なれど見當り不申、誰かにそつと取られ候ものか覺束なく存ぜられ候。小生の山茶花の歌は、入院中の記念に有之候へばさし進め申候。手紙書く外に習字することなければ書くも詮なけれど、此後更に取換へむ時期も可有之と思ひきつたる仕業に有之候。數日中には關西に向け出發可仕、此狀御落手相成候日は東京にて諸般の準備に忙殺せられ居候ことに候　小生へ御消息など被下とならば、福岡市郵便局留置に御願申上候。追て過日の手紙にうつかり認め申候樣記憶致候が、豫州の地理には非常の誤有之候へば其御積に願上候。湯の濱と申すは鶴岡から海岸へ出ての處に有之候ひき。

（明治四十五年三月十二日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其五

拜啓。ここへ入院致すことに相成候ため、福岡郵便局留置の信書等すべて轉送相成候樣過日請求書差出し申候處、今日二月十五日附の御手紙拜受仕候。先師の遺墨は前便にも申上候如く、以前は同人中にも羨まれし程澤山所持致居候ものを、先年ふとしたることより友人の手に歸し申候。只今に相成候ては多少後悔の念も湧き申候。されど今は左樣のことも愚痴を申す可き場合には無之候。拜眉の折も有之候はば何かと御はなし可申上候。偖て藥書にても申すすめ候如く、手術は一遍に濟み申候ていまは傷口の治するを待つのみに有之候。旅宿に居るよりもここが却て輕便故暫時じつと致可申候。大抵はすぐに退院を命ぜらるる樣に候へども、內科小兒科に友人が助手をつとめ居られ候へば、好きな程居られることと存申候。久保氏に就いては難有奉存候。ここを出てからおたづね仕度と存居候。旅行

に出來る限り繼續仕度と決心致居候へば、土產咄なども出來可申と存候。御令閨樣と久保氏の令妹と御懇親に入られし由、世の中に他人はないなどと申す通り、不思議と申せば可申ことに有之候。乍末筆御父上樣の御はなしも恭く拜聽仕り候。小生只今は熱もなく、かなり長時間汽車に乘り候ても何とも無之候へば、差當りどうと申すことも有之間敷候。寫眞の御請求に候へ共只今は手もとに無之、それに小生は自分の寫眞を見ることが餘り好きに無之候故、滅多に撮影不仕候へば一寸差上兼申候。折角のことなれど不惡御ふくみ被下度願上候。（明治四十五年三月二十九日　京都帝國大學醫院十二病舍耳科より　耳書　門間春雄宛）

其六

再三の御手紙難有拜見仕り候。高柴村の手奇木馬由來記を見るに極めておもしろく、田村郡と呼ぶ處、往昔の田村將軍に緣故あるより起りしものかと想像せられ

候。大多鬼丸の牙と稱するもの、羽後の大沼山の大沼神社の別當の家にて見たりし樣記憶致居候。或は大多鬼丸には非りしかと思へども、磐城國あたりのこととは聞きし樣に有之候。牙の主は田村麻呂の征伐せし夷賊には相違無之候。それは兎に角木馬の由來記によりて、大沼山を思ひ起したる處愉快に有之候。大沼山は橘南谿の東遊記に掲げられたる浮島の有る地にて、小生は別當のもとに二泊して共に盥の（如き、舩？）幾多の小さき島嶼の浮遊するを見申候。島に生ぜる糸の如き草も試に採つて家に郵送したるに、此は歸宅前に掃溜へ捨てられて長き憾をのこし候。干柿も甚だ鄭重なる取扱方感服仕り候。實は「一土」の中に書きたる鎌博勞と申すは實在の人物にて、彼の唄も同人にうたはせ申候が、此博勞に木馬の噺柿のはなし致候へ共知り不申唯驚き居候。小生方へ御出の折は、時宜によりては此博勞を呼び寄せ可申候。木馬のお噺など承り候はば同人恐悦可仕候。偖て御光來被下となならば、停車場は小山驛より水戸線へ乗換、下館驛に下車、南方下妻（しもつま）町へ

四里、更に二里にして小生の居村に候。下妻町より一里にして鬼怒川の沿岸に出で、暫く土手を傳うて若宮戸（わかみやど）より皆葉（みなば）に渡り、半里に遠からず候。下館より下妻までは乘合馬車も有之候へ共、貴君には人力車の方便利に候べきか、馬車ならば三十錢、人力車ならば六十錢乃至六十五錢、それ以上申す時はお叱り相成候て可然候。下妻より人力車に乘換へて　お出に相成候こと、何れにしても一番宜しく候。二里の道なれど渡船場からが時としては非常の惡路故、或は四十五錢か五十錢位のこと申出づべく候。何にしても上野驛は隨分早くお立に相成らずては、日のあるうちに小生方へは六かしく候。青森線の七時二十五分ならば九時四十六分に小山驛着、十時四十六分小山發十一時二十分下館驛着、此處にて一寸晝食せねば途中には何物も無しと覺召さるべく、それも停車場前の旅館などへお立寄相成候ては面倒故、少しはやくても小山驛にて辨當など求め、下館まで車中三十分以上の時間有之候へば、其間にお濟し相成ること至極と存じ申候。輕便の旅行を主

とする小生は斯様の手段を取り申候へども、此は千金の子に語るべからず、貴君に對しては却て失禮かも知れ不申候へども一寸書添申候。人力車にて通しに小生方へお出相成候も亦一方法に有之候。國生へ参ると仰あれば、車夫共心得申居候ことと存じ候。國生は小生の住める大字の名にて、コクシヤウには無之コツシヤウと申候。右の時間ならば其時頃に小生方へつき可申、小生も其積にてお待ち可申候。銚子よりは廿四日頃御歸京の由、其折は何日にこちらへ御出に相成候か、前以て葉書を給はり度、更に恐入候へ共、當日は電報にて時間の處お知らせ被下度候。小生にも相應に俗用も候へば、お出の時間がしかと致候はば、一寸したることは前以て片付け可申考に有之候。小生の居村は東京を去る僅に十七八里なれども、まだ汽車見ぬ人間さへ有之程とて、凡ての不便は申すまでもなく、折角の御光來にも第一に差上可申食料にも事缺き申候。其邊は豫め御承知被下度、茶は些少の用意も候へども、暫く上京不致ため茶菓の用意は皆無に有之候。此一品御持

參相成候ならば頗る妙と存じ候。おねだり申す樣にて恐入候へども、はたと當惑致候故腹藏なく申上候お笑被下度候。小生の家族はいつも唯の二人にて、父は萬事に干與せぬ人とて、内外一切の事母が一人にて負擔致居候樣の次第に候へば、世上の主婦の如き品よく優しく相構へ居候ことは、小生の母には絶對に望み難く、婦人としての微細の點に於ては缺けたる處も多く、來客のあしらひなども年來の懇意は宜しく候へども、たまたまお出の方には思はぬ方に失禮の點も發見致され可申、此は普通の婦女子として生れたる母にはせむべからざることと存申候　それに小生方はお出に相成候へば直ぐにお分に候へども、積年の疲弊の後を承けてみすぼらしく、貴君のお出を待つこと、其實は心苦しき限りに有之候。されど折角のこととて否むべきには無之、兎にも角にもお待ち申居候。あたりは一面輕鬆の木質故、連日の晴天にも不拘夜は凍りて晝は解け、足駄の齒もたまり不申程の惡路ながら、家の内には埃はいつも溜り居り候。今の時節にお出相成候にはすべて

の見窄らしさにお驚きなされ候のみに有之べくと存じ候。かくも冬枯の凄じき中に小生の健康は却て衰へ不申、再三御配慮被下候程には無之、此は意外の一つに覺召さるべきか、何にしても當分の處は死なぬことに心を落つけ申候、お相手致すに時間の儀は致不申候へば、それのみにてお宥し被下べく、くれぐれも御不自由は御覺悟の上御光來の程希望仕り候。夏目先生へは別に小生手紙差出可申候。申すまでもなけれど同氏は只今執筆中故、面會の時間に於て多少の斟酌を要し候ことと存じ候　佐久間君とも御上京の前御噺合のことと存じ候へ共、伊藤左千夫君もお訪ね可被下、本所江東橋行の電車にて終點までお出に成り、橋を渡り右に中學校を見て眞直に突き進み、中學校の塀の盡きる處を左へ取り、突き當り右へ折れて、更に突き當る少し手前の右の出外れの處が同氏の宅に候。江東橋から三町程には過ぎ不申候。前日葉書などにてお遣しに成れば、同氏は喜んでお待可申と存じ候。夏目先生のお宅へは神樂坂よりも、却て江戸川終點に下車して、大道

を左へ取つて早稲田南町とお尋ね相成候方宜しかるべく、少しは面倒の處なれど、終點にて五月蠅くすすめる客待の人力車に乘れば譯もなく候。車賃は十錢餘位に候べきか。なかなか御多忙と存候へども、御在京中は博物館は是非共御覽被下べく、表慶館には常に少くも三四點の國寶の繪畵を陳列致居候へば、お土産噺に篤と御覽被下度候。本館の方には數體の佛像有之、京都府下太秦の廣隆寺の如意輪觀音の如きは、原始的の製作とも可申ものか、千三百年の古堂中に安置されありしものに候。又室の中央なる吉祥天女の彩色木像は、山城淨瑠璃寺の出品にて有名のもの、同寺は多田滿仲の建立にて昨夏小生は大暑を冒して訪ね申候が、三重塔と併せて心ゆくばかりの建築にて候ひき。播州鶴林寺の金銅佛聖觀世音は、製作の優秀なる點に於ては全國に卓立すべきものと存じ申候。他に小なる金銅佛元法隆寺四十八體の内と稱する三十體ばかりのものも、鑄金家の八ヶ間敷申すものに候。素より奈良には比すべくも候はねど、一應は見逃すまじきものと存じ候。

兼ねて御承知かとも存じ候へども、小生は昨夏までに京都へ五回奈良へ四回參り候も、漸く佛像等古代の藝術に就いて、自ら深き趣味を感知したるが如く覺えられ申候こと故此處に申添へ候。右吉祥天女、聖觀世音共に館内にて繪葉書に製して賣下げ居候。吉祥天は原色版にて能くは出來居候へども、一枚五錢と申す不廉の定價ながら御購求可仕と存申候。小生も所持致候ひしが、久保博士の夫人へ差りて今は手許に無之候。されば小生への分と覺召して、一枚餘分に御求め被下度願上候。小生は元來が筆不精に候へ共近來は殊に甚しく、二ヶ月も治療を受けし久保博士へも其後一回も音信不仕、尤も近頃中に再び九州へ參り申度と存居候へ共、餘りに心苦しく暮し居候。昨夏は既に發足の積に候ひしも遂に延引仕り、今年は意外といはるる寒氣と襲ひ申候。貴君の御出を待つて匆々に用意仕度心組に有之候。申すこと前後致し候。昨夜より今夜にかけて此狀認め終り候。今日は稀有の吹雪にて惡路に更に惡路に相成候。途中御難澁の程只管懸念仕候。（大正二年一

月廿二日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其七

拝啓。郵便物二箇正に落手仕り候。小生方只今病父八十日以來臥床の儘にて、日ごとに八度以上の熱いで、しかも病根更に相分り不申困却致居候折柄、御惠贈の櫻桃何程の幸とも知れ不申候。只今は全く果物の少き節とて、市場にも此外にはむしろ蔬菜の部に屬すべき草苺に限られ可申、これが博多の市場ならば、長崎茂木の枇杷、雨後の店頭ともし灯のもとに堆きところなど、見る目にも美しく候へ共、東京には安房の國より枇杷も參り候へども、形小さくみすぼらしく相見え申候。されば自然櫻桃の外には有之間敷、價格の不廉なるも道理と存申候。遠方より供給を仰ぐため腐敗をおそれてか、市場の品には七分の成熟を望むべからず、隨て東京の人士は淺紅なる半熟のものを、普通と心得居るらしく相見え申候。小

生も此數年間に御惠贈のものの如く、殆ど黑色に變じたるものの多く交りたるを見たること無之候。御厚志の程誠に申上ぐる言葉も無之、殊に平日とは異り前述の次第、病父の枕頭にそなへて第一の慰藉に相成申候。未だ御目にかかり不申候へ共、皆々樣へもよろしく御傳へ被下度、先は不取敢御挨拶までに申進め候。（大正二年六月十三日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其八

卒爾ながら申上候。小生の友人にて、正岡子規子の筆蹟を數多所藏致居候もの有之候が、近年家道不如意に候處、右を小生より先年條件附にて讓渡いたし候もの故、今回特に相談有之候は、老母の病氣のため金子調達の必要生じ、他に方策も無きまま右筆蹟中の數點を賣却致度故盡力を望むとの事、今日まで小生の手前を兼ねて持ちこたへ候儀、氣の毒にも相成申候に付、應分の斡旋可仕旨約束仕候。就て

は大兄に於て一品御引受被下思召も有之候はゞ、現品本人より直接郵送致させ可申候。

五月雨や上野の山も見あきたり

病人に鯛の見舞や五月雨

病人の枕ならべて五月雨

五月雨や棚へ取りつくものの蔓

さみだれや脊戸で落合ふ傘と傘

名は無之候へ共、嘗て御覧に入れし様の大きさの書箋紙に見事に書かれ申候。殊に立派の幅仕立に候へば此は珍ら敷ものに有之、小生の舊藏に有之候。

山茶花や爐を開きたる南受

此も幅仕立にて一行書名入、不折山人の舊藏と申候。但し小生は見不申候。他に歌の短册三枚句の短册一枚、以上の中五月雨の句殊に面白しと存申候　至急御返

事被下度願上候。小生の舊藏故行方不明に相成候ことの惜しく、大兄に於て御奮發被下候はゞ、此上もなき仕合と存申候。嘗て申さけられ候中尊寺のことに就ては、新任の岩手縣知事は近親のもの故、今回地方長官會議にて出京中相尋ね申候處、縣編纂の分は疎略と申候。黑田氏の奈良と平泉も一寸見申候へ共あれにて十分と存申候。あとは見る人の頭腦次第にて、如何樣にも解決せられ可申候。小生は兩度參り候へ共更に何の智識も豫備も無之、それにても小生は悔い不申候。何の詮議よりも御覽に相成候が大事に有之候。（大正二年七月十日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其九

子規子の筆蹟其中御手許まで郵送可仕、在京の知人なる×××と申すが所持者に有之候、此人より直接相とどけ申す樣取計らひ申候。絲瓜の句は畫箋に非ずして唐紙には無之候や。

賣れ殘る鮟鱇買へと勸めけり

君を呼ぶ内證ばなしや鮟鱇汁

老妻の火を吹く顔や鮟鱇鍋

等の句むしろ順序もなく書きつけ申候ものならば、しかして既に幅に仕立しものならば、此は今回の×氏の藏品にて、嘗て小生より讓渡したる中の一つに有之候。果して然りとすれば、五月雨の句等を大兄へ御すゝめ申候ことも妙な縁と存申候。今回の鮟鱇にまさる一段に有之候。短冊も同樣に可有之候。偖而病父其後追日よろしく、八十日以上八度以上の熱を持續致候故、一時は母と死後のことまで語り申候へども、只今はそれも笑ばなしの一つに相成申候。

夏目先生には昨年以來一回も逢ひ不申候。然し大分御丈夫の由此間のホトトギス催能の席上、森田草平氏よりきゝ申候。（大正二年七月廿日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其十

×君より差上おき候筆蹟短冊二葉ほど、是非御とり下され度候へども如何に候や。あとの三葉は早速御返却下され度、一方小生より鹽谷鵜平氏へ運動致置候處、品物を早速送る樣とまで相運び申居候。氏は碧梧桐君自ら天下第一の知己と稱し居る程にて、同君行脚の際も書齋を新築して之を迎へ、更に二千金を投じて多數の同人を集め、俳三昧に四隣をおどろかしたる程の人にて、小生も關西旅行の折は大概訪問して、勝手の氣焔など吐く間柄に相成居候。然しながら同君へ全部を委ねるよりも、大兄の手に歸せしむることを希望仕居候故、最初に勸め申候次第、前便にも申上し如く×君も家庭の事情申樣も無き有樣にて、目下母堂神戸へ參り居り、同君の病弟を伴ひ候ことに候が、氣の毒にも久しく精神病に罹り居候。母堂の苦惱尋常ならず、自身も老病の氣味に候處、病者を嫁の手に遺して行くに忍びず同伴、せめてもの希望は、日頃信ずる金光教會の本社に參拜したく、然る時

は或は精神病の平癒すべきかと一縷の望をかけ居候由、それへ差當つて送金せねば成らぬ由にて困り居候樣子に有之候。若し大兄に於て御ひき取被下候ならば、至急×君へ御送金被下度、それにしても五月雨の句一幅短冊二葉にて何程位に御含み置被下候や。手紙の往復は只今にては面倒に相成申候に付、何卒電報にて價格の處だけ御申越被下度、さすれば折合候樣ならば其旨直ちに返電可仕、其次第によりて前陳の如く至急御運び被下度、實は小生も少し迂濶に相構へ居候て×君へも申譯なく相成申候。自分のことならばこんな勝手のことも不申上候へども、誠に心もとなき御願申候。御ゆるし下さらば幸此上もなく存じ申候。(大正二年八月十三日　自宅より　封書　門間春雄宛)

其十一

拜啓。只今盆踊の場所より歸り電報拜誦、願意御きゝとどけ被下候由難有御禮申

上候。先夜の便にも申上げし如く定めし不廉と覺され申べく、小生も押賣の樣にて誠に困り申候へ共、御厚志により×氏の母堂も、兩三日中には彼地に於て心强く思はれ候ことゝ推察仕り候。十圓は不廉とおぼされしかと存候へ共、關西に於ては幅仕立の短册二枚にて百五十金に賣行きし事實も有之候に付、十圓丈は喜捨の覺召に候はば、後日にいたりては決して悔も有之間敷と存申候。然しながら無理に御すすめ候段は、かさねての折幾重にも謝罪可仕、小生も事によりては秋田方面へ參り、田澤湖畔のラデウム含有の溫泉へ參る樣相成可申候。若し其運びに相成候はば一寸御面會相叶ひ可申と存じ候。すべて其折に譲りて只々御禮のみ申上候如此に有之候。盆踊と申すこと、小生參りて取締り不致候ては風儀亂れ可申、岡田村は靑年男女の風大に改り、殊に國生地内には田舍に珍らしく、二十歳に達しての處女も有之樣相成申候。それ故盆踊と申せば、此の國生に近村を集めて踊らせ申候に、男女の手を執り合ふものも見受け不申候。今夜からも四晩眠きおも

ひ致すことに候へど詮方も無之候。

蚊にせめられ候こと、足のうらを螫され候こと、たまり不申候に付亂筆にて右申進め候。（大正二年八月十五日夜十二時　自宅より　封書　門間春雄宛）

其十二

此間中の御不幸は、何とも申上ぐる言葉もありません。唯私はあなたがまだ二十代で、働盛りの御親父樣に先立たれたといふことに、深い同情と懸念とを有ちます。私の父が養子に來て、祖父に別れたのが二十七の時でした。さうして私の家はそれ以前からの行き掛りて、不仕合せなことが絶えないのみならず、私の父の心が檢束を失つた爲め、其後三十年一家をよくよく疲弊させてしまつたのです。三十に成らぬ人間が、五萬の富を殘して親に死なれたものは、私には危險界に入つたものとしか思はれないのです。然しながら貴下は私達とは違つて、一見して

年の割合には老成して居ますし、御親父様も信頼なすつたことと信じますから、すべて私の杞憂に過ぎませんが、婀娜にあなたを抑へつける威力を有して居る傑れた人物が有るならば、あなたは非常な幸ですけれど、若しあなたの家の世話に成る様な人々ばかりででもあつたなら、それはあなたの生涯に、非常な不幸な事實だといふことを、自覺して頂きたいのです。あなたの家庭の容子も何も知らぬ昨今の淺い交際の私が、こんなことをいふのは僭越極つたことですけれど、私は自分の身につまされてそればかりが懸念であります。經營して居る事業の上に一時困る位のことは、不仕合などといふ語を用ゐるべき性質のものではありません。それはあなたが努力しさへすれば譯もなく解決することとです。只私は貴下の心理の變化に就いてだけ。

ここまで此の朔日に書き出したのですが、餘りに氣分が惡く成つたので止めて見たら、熱が八度六分に成つて居ました。それからすつかり寢てしまつて、到頭思

ふことも書くことが出來ません。

偖て私があなたに就いて申上げたいのは、今後少くとも貴下は決して社會上の地位を占める樣なことの無い樣にと、希望する丈のことであります。それも瀬上の町だけならば仕方もありませんが、其他に就いては意思を鞏固に持つていただかねば成りません。貴下は私などとは違つて、整頓された家庭に成長された人ですから、私等の難いとする處が何でもないことは知れ切つた譯ですが、それでも一點の疑があります。貴下には私等と違つて才氣があり、且つ事務に練達して居られると思ふのです。然しながら人は唯純一無雜の境地に住し得た時に、始めて其人は確立されるのです。私は私の父とは正反對の性質で、十二三の時分から繪畫が非常に好きでしたが、父には一向そんなことがなく、又私の周圍に少しでも私を導いてくれる人がありませんてした。中學に行つても同樣でした。二十を越えてもさうてした。只死んだ左千夫君からは少なからず得る處がありました。だけ

れども人と交際することを知らない私には、三十を越えたばかりにはまだ少しも目が開きませんでした。さういふ自分を顧みると、貴下がまだ年少の内から、藝術の方面に理解を有して居られることを驚嘆して居るのです。それだけ貴下には私達から見て、才氣が格段にすぐれて居るのです。何を見ても理解する事が出來、又趣味を發見することの出來る特長を有つて居られるのです。それはあなたの御親父樣が、壯時山陽外史の書を學ばれたといふ一事から、必ず家庭があなたを早くそこに導いたに相違ないと信じます。要するに私の見る處を少しの飾りもなくいへば、貴下は何でも出來る人と思ひます。そこが才人に通有の長所と斷定することが出來ませう、然しながらそれは純一無雜といふことと直ちに兩立出來ませうか。

今日もこれだけ書いても氣分が惡く成りました。私は歸宅すると暫時で容態が惡くなり、見る影もなく痩せました。熱は時々八度以上に昇り、何よりも手紙書く

のが苦痛で毎日濟まぬ濟まぬと思ひながら、今日まで申上げませんでした。別紙は御香料のしるしまでに添へましたから、何卒御納め下さい。昨今は寢てばかり居ます。疾に伊豆の海岸へ行く筈でしたが、天候が惡かつたり何かで遂延び延びになりました。何でも體量が在京中からでは、一貫匁以上は減つて居ると思ひます。私は自分の家が丁度霜枯の曠野の中に居る樣な心持で、歸りさへすれば何時でも不快な心持にばかり成つて居ます。さういふ私から見ると、貴下はどれ程幸福だか知れません。何にしても私はここに怠慢の御詫をして、改めて御くやみを申述べます。後れて濟まぬ濟まぬと心にせめられて、此の爲替券をとつたのが二月十八日、それが今日漸く果すことになつたのです。近いうちにどうしても轉地せねばなりません。（大正三年三月五日　自宅より　封書　門間春雄宛）

其十三

葉書で御免を蒙ります。昨日は思ひ掛けないものを頂戴して何とも恐縮に存じます。山形の榮玉堂は私も店頭へ立つたことがありますが、勿論其時は大沼山の浮島を見に行つた程ですから、草鞋穿の姿でした。さうしてあの大火の前でした。のし梅は疾に承知ですが、梅羊羹ははじめてであります。病院内の大勢のものと、樂むことの出來たのは何よりであります。私の病氣は其後毎によくないので、思ひ切つて上京したのでありますが、安靜にして居る爲か熱もさう高くは成りません。然し平熱に成るにはまだ間がありませう。御手紙を難有存じました。國の方へのはまだとどきませんが私も大に安心致しました。毎々經過がよければ夏には巖手縣へ行つて見たいのですから、其折にはお目にかかれようかと思ひます。

（大正三年三月二十四日　橋田病院より　ハガキ　門間春雄宛）

其十四

拜啓。此の二十五日午後思ひ掛けなく御令弟樣御來訪被下、見事なる果物一籠御惠贈にあづかり、御厚志の程千萬忝感謝候。其後小生も存に宜敷方にて、來月中旬位にも成らば轉地も相叶ひ可申かと存申候。尤も今回は大事をとりて十分辛棒致申度覺悟に候故、入院も意外に長引き可申か、其邊はしかと相わかり不申候。先頃金澤町に滯在致候際は、熱度はいつも七度以上有之候にも不拘、體量は驚く程增加致候ことなど相考候に、療養の道もなかなか人のいふ樣にも無之、自己の體質にもよることにて、其の點の見極容易のことには無之と存候。小生自身のことは、今回改めてここへ入院して聊か得る處有之候樣にも考へられ申候。轉地の上は十分體質に應じたる療養法に從ひ可申候。昨秋來の氣管支加答兒も、只今は一寸わからぬ樣に相成候由なれど、慢性のこと故急にも參り兼ね候ことと存申候。來月三、四日の學會には久保博士の上京も有之、其節喉頭の診察致しくれ候旨、二三日前同夫人より申來り候。洵に交際の狹き小生にも人々の情うれしく、慰む

こと若干とも知れ不申候。兎に角今差當つて變態を來す程のことは萬一にも無之と存候故、尊宅へ一度參上致す位のことは必ず出來可申と存申候。思ひの外に命冥加に可有之か。再々爪の色など見て脈の條は是非も無之候へども、思ひ棄つべきにもあらずなど心強く存居り候。御令弟樣の御はなしにもいろいろ御家庭の御容子なども承知仕り候。家屋の新築を延期せられ候こと至極と存申候。十年も二十年も心掛け候人には、胸中幾多の變遷を重ねてしかと成算も立ち居りしに相違なきも、あととる人にはそれ丈の用意まだ缺乏せるは勿論のことと存申候。何よりも大兄に於ては一家といふよりも、先づ第一に大兄自身の充實をはかることに有之べく候。名家は何處までも榮えしむべく候。大樹の蔭を手頼る者には、大樹を枯しては成り不申候。一身一家の爲ばかりには無之、周圍の人々の爲めに大切のことに有之候。一鄕に重んぜらるる程の家は、決して一代の力には成り不申候。少くとも數代の力の凝結したるものに候。それ故此を繼承する人は、恐れて

戒めねば成らぬ儀と存申候。數代の人の努力に成りし結晶體を、一人にて支持して行くことを考ふる時には、容易のことには無之と存申候。偖而國許への御手紙も過日轉送相成申候。こまごまと何も彼も明瞭致申候。矢張り大兄には御母堂樣が大變な味方に可有之候。眞實に愛ふることの出來る人は、貴きものに有之候。書籍など御貸與被下候旨此の上もなく難有存候へども、汚損が第一のおそれに候故、此は御宅へ伺ひ候折、ゆるりと拜見致すことに致申度候。御厚志の程は身に餘りて嬉しく存申候。殊に御母堂樣に於て小生の身上など御憂慮被下候趣、意外とも意外に存申候。皆々樣へよろしく御願申上候。匆々。（大正三年三月三十日　橋田病院より　封書　門間春雄宛）

其十五

拜啓。三日程前御令弟樣打つれて御來訪被下、兼ねて御手紙の奈良漬一折御おく

り被下、早速病院内の他の者などにも分ち賞味仕り候。或は粕の工合など只の酒粕に非ず、御手製にはあらずやなど存申候。それにしても驚き申候。何卒御母堂様へ可然御傳被下度、當分の處ゆるゆる樂み可申候。過日の御手紙の折など、御母堂様へ何か差上申度と心づき候へども商店は遠く、附添など遣し候ては間違おほく、遂疎末のもの急に近くより取りよせ候て少々差上申候。それも附添の日ばし短く、折へつめさせ候こと申おくらず、袋などにて持つて參り候故、こちらにて有合せの折へつめさせ申候。不體裁此上もなく相成申候。其後小生も左程のことは無之候へども、一先づ落つくまでにはかなりの日子を要することと存申候。久保博士の上京を幸に診察を受け候結果、三たび九州行決行のことに成り申候。奈良の藤花を見て參り申度心掛け居り候へども、此分にては如何かと存申候　匆々。（大正三年四月十五日　橋田病院より　封書　門間春雄宛）

其十六

月末まで辛抱しなくては成らなくなりました。六月の十日頃迄には必ず福岡につくことでせう。治療の方法は最新式といふのですから東京にはないのです。此間博覧會は見ました。鴨は矢張り面白い出色のものです。只少し混雑の感があるのを遺憾とします。平福君も今十年過ぎたら、十分な落つきが出來ていいと思つて居ます。平等院に就てはどんな御議論があつたのですか。私には何も申す程のことがありません。矢張あなたの方がえらいのでせう。私は極端に讀書しないものですから、平子君の「佛教藝術の研究」なども見てません。然し平子君はどんな博士先生でも皆舌を捲いた天才なのです。私は日本美術史講話を買ひましたが便利なものです。それ丈でいいのです。私は最初からたいしたことは望まなかつたのですから。

櫻桃お贈り下さるとのことは、御志だけで十分難有存じて居ます。只今居所も定

まらないから、時の來るまで御あづけ致して置きたいと思ひます。私は以前桑を四町步から持つてゐましたが、今は一本もなく拔き捨ててしまひました。勿論母が大反對をしましたけれど、だがそこには竹が每に林相を形つて來て居ます。私の容態は別段に變化が見えませんが、院長はあなたが思ふ程惡くはないんだといつてくれます。近頃精神上に動搖を來すことがあつて困つて居ます。昨今のやうにかう長い間を、悲哀につつまれて居ることは常てないことなのです。只私は自分の病氣だけではさう悲しいと思ふことはなく成つて居ます。（大正三年五月廿六日東京神田錦町橋田病院より　大正博出品青坡筆の繪ハガキ　門間春雄宛）

其十七

またことしも櫻桃を難有うございました。私は二十九日に退院して三十日に歸郷したのですから、其あとへとどいたと思ひます。それを事務員が氣が利かないも

のですから、高田に居る私の弟の處へあてて轉送したのぢやないかと思ひます。弟はあなたを知りませんから、何處からだか來たといつてこちらへ屆けてくれました。昨日は私の大事な事で心配してくれる人があるので、そこへ行きましたが少し持つて行きました。櫻桃も四畝で九十圓は全く駭きました。然し私の方では枝が徒長していけない樣です。土質のいい處でないと無駄なのでせう。私には梅を植ゑて置きますが、果物の土地でないのですから、うまくやるには餘程の技能を要する樣に見えます。本場といふと勿論創業者の大なる犧牲が拂はれて居るには相違ないのですけれど、同時に天惠も多いと思ひます。近來苦竹へ花がさいて枯死するもののぽつぽつ出てくるのを知りました。私の竹林栽培も天惠が乏しいのぢやないかとも思ひます。然しそんなことはまだわかりはしません。私は明日出立して、途中成るべくみち草せずに行かうと思ひます。三十日位は入院しなくては成らない相です。歸りに奈良あたりを見ようと思ひますが、私にはよくはわか

らないのですから、只おどろいて歸るだけです。私はいまの境遇ではそれで滿足せねば成りません。病院に居る頃はどうも精神に動搖を來すことがあつて困りましたが、方々歩いたら大に紛れると思つて居ます。だが咽喉はなかなか容易でなくなつて居ると知りつつ、そのため懊惱するやうなことはちつともありません。また申上げます厚く御禮を申したいと思ひます。（大正二年六月四日　自宅より　封書　岡本春雄宛）

其十八

時々たよりをせよとあなたからいはれた時、私は憮然としました。あなたも年の割に老成した人ですがやはり丈夫なんです。私は今日繪葉書を三十枚以上書きます。書くとなるとさう書かねば成らず、熱が出ると苦しいのですから、容易には書かぬことにしました。暑い時などは繪葉書屋を尋ねて歩くのさへ、大抵のこと

ではありません。あなたの御希望通り時々十分な消息が出來る位ならば、私は病氣で苦しみはしないのです。一昨年昨年は、葉書をかくのが樂みな位でしたが、今年はもう違ふのです。あなたが私の葉書をお待に成ることはよくわかつて居ます。然し私は何も書かずにねかして貰ふのが何より難有いのです。病者でないと病者の心はわからないと、今年に成つてつくづく思つたことでした。あなたに不足をいふのではなく、私の苦しさを訴へてお察しを乞ひたいのです。さうして健康者の心より外にしらないあなたを羨むのです。これからの御無沙汰はかういふ理由であるとお許し下さい。日向は私のために幸福な處ではありませんでした。それで熱が出ては氣分の惡いからだですけれど、舟車の便をたよりに南へ南へと志して來ました。景色はいい處で結構です。も少し南へ行かうと思つてます。十四五日の頃までには博多へもどります。大儀ですからおたよりは致しません。（大正三年九月三日　日向油津港より　梅ヶ濱の繪ハガキ　門間春雄宛）

其十九

油津港から出した葉書には失禮なことを書きました。あなたに丈夫なら折々出せないことはありません。私は昨日南から歸りました。海は連日の荒れで、五十噸位の小蒸汽船では隨分ひどい目にあひます。靑島もいい處ですがまだ未開の地で、昨日からの宿には座蒲團もなければ括り枕もないのです。其前は三軒とも肺病のやうだといふので逐ひ出されました。もう博多へもどります。陸にしようか船にしようかと思案中です。日向は丈夫で健脚自慢の頃なら面白かつたのでせう、漁さへあれば一夜六十錢の泊りでうんと生がたべられます。幾日か滯在なら一日五十錢で十分です。然し時化と來てはくふものがありません。靑島は小さなものですが、熱帶產の植物が繁茂して居るので、地理學上有名なんだ相で、それが陸地の方には一本もないのです。博多へもどる途中まだ葉書を見つけませう。先日の

ことは氣にしないで下さい。あの時は熱が出ました。（大正三年九月七日　青島より　青島横椰木の繪ハガキ　門間春雄宛）

其廿

こんな葉書を一枚あげます。今日午前に漸く博多へもどりました。何分にも疲勞して發熱するのには困り切つて居ます。御手紙は拜見しました。御心の程はよくわかつて居ます　難有う存じます。旅行中に歌などはありません「鍼の如く」のやり方は間違つて居るので、私はいま後悔して居ます。濫作したからなのです。もう暫くアララギへも歌は出しません。何よりも歌のないことがさうさせます。御令弟が私の歌を諳誦されてるなどはおどろきました。さうして慚愧の至りです「鍼の如くも」せめてあの半分三分の一ならまだどうか成ります。これからは作つたものを、二三ヶ月ほうつて置いてからでなければ出したくないと思つてま

す。（大正三年九月二十六日　平野旅館より　繪ハガキ　門間春雄宛）

其廿一

別封は此地の名物です。ここにうまいものはないのですが、此品ばかりは私の大賛成なものです。もつと大きな箱があるのですけれど、いまはこれで許して下さい。何だか最初は京都奈良で大變ゆつくりの積で、博物館長への紹介なども持つて居るのですが覺束なく成りました。滯在が餘り長く成つたのが何よりも祟ります。然し熱があるからといつて諦められないこともないのです。尾の道に友人が待つてますが、寄らずに歸らうとも思つてます。あそこにはいい寺があるのですけれど仕方がありません。先週の金曜に比較的大手術を受けました。電氣で燒いたのですが三十分もかかりましたらう、八月以來博士にねだつて漸くやつてくれたのです。今度は餘ほどいいやうです。私は文展のある内にかへりたいと思つて

居ます。此の十日以來は八度七分まで昇つた熱が、どうしても八度以下に下らないので非常に困つて居ました。それですから戰地に居る弟へも一度も消息しないので、今曉から總攻擊だ相ですから、私が一度も手紙をやらない中に戰死してでもくれては殘り惜しいと思つてます。書物を二さつ難有う存じます　お蔭ですぐに須永の話をよみました。彫刻の方は私にも持合せが有りましたからお返し致します。然し著者が餘り不見識なことをいふから一二行書き込んだ處があります。思はず失敬しました。（大正三年十月八日　福岡市平野旅館より　ハガキ　門間春雄宛）

其廿二

其後佐久間君へは文章を御見せに成る相ですが、骨折つたものが出來ましたか。本當に佐久間君に賞められたものならば、拜見いたしたいと思ひますけれど如何ですか。

私はまだ手術をしなければ成らぬらしいので、遂どうも逗留が長く成つて困ります。もう冬ですけれど郷里に居て櫟林を見る樣に、季節の感じが本當に浮んで來ません。巷の間ではあり且つ只の松原丈なのですから、變化が著しくないのです。郷里だと庭だけでもむしろへは籾をほすし、一體に十一月の日光が黄色に見えます。私にはどうしても百姓が面白いのです。それで私は今年反に一圓の金肥を使つて、五俵以上六俵近い陸稻をとつた畑があります。土地が瘦せた私の村落で一番惡い處です。本當にやればもつと成績がよかり相ですが、私が居ないから駄目です。はやく歸つてことしの竹の出た樣子でも見たいと思ふのですけれど殘念なことです。それに先生が大事をとつてなかなか手術をいそぎません。

けふはふと手紙をあげる積りに成つて筆をとりました。一つには先頃あげた小包がとどいたかどうか懸念で仕方がないからです。筆まめなあなただからもう疾に何とかおたよりが有る筈と思つて居るのです。（大正三年十一月十一日　平野旅館より　封

其廿三

御手紙拜見しました。私の手術はまだ濟みません。今週の水金のうちにやります。昨夜久保博士を訪ねてきめて來ました。さうしたら歸國しようと思ひます。文展を京都で見る積りで居ります。私の弟は戰地からたよりがありませんが無事の樣です。あの聯隊には死傷者が一人もない樣ですから、何をして居るのかわかりません。しばらく聲が嗄れて本當に出なくて困つてます、心細い次第です。これもどう成ることかわかりません。
私のやどから海は近いのですが、もう久しく出て見たことがありません。子供等が立てた棒で中央を限られて居るのが志賀の島といひます。シカの島とよみます。ここへは二度ばかり行つたことがあります。神社に牛鐘が一つあつて國寶に

成つて居ます。鍍金をしてある珍らしいものです。今日は日曜ですから暫くぶりで外出をします。中山博士といつていま院長ですが、繪畫が非常に好きな人ときいてたづねます。（大正三年十一月二十五日　平野旅館より　伊崎ヶ浦の繪ハガキ　門間春雄宛）

（右二十三通、大正四年六月發行アララギ第八卷第六號長塚節追悼號所載）

禎　豐作宛

其　一

拜啓。玉稿正に拜受仕候。馬醉木も三月は休刊の姿にて、一ヶ月繰送（越？）しに候へば、四月廿日締切の雨も、五月廿日締切に相成申候へば、尙一應御骨折の上、

再度御投稿相成度切に申入候。櫻に春雨といふが如きは陳の陳なるもの、宜しく避くべき事と存候。他に何か見出し候て、御作り有之度切望仕り候。いくらにても有之可申と存候。

過日左千夫氏宅にて老兄の風丰に接するの榮を得申候。更に親しく謦咳に接するの日あらむことを期し申候。偏に玉稿の山の如く至らむことを待ち申候。（明治三十八年四月二十五日　自宅より　ハガキ　楨豐作宛）

其　二

御たよりをいただいて、遂疲勞が甚だしかつたものですから其儘に成つて居ました。

私は先月の二十二日にこちらへもどつたのですから、もう二十日にも成るのです。然し毎日氣分が惡くて仕方がないのです。病氣の方がどうも思はしくありま

せん。

歌も近來一寸出來なく成つて居ます。アララギへ出して居たのは私自身に愧づる處がありますから、當分見合せて居ます。あなたの御作に就いても、お目にかかつたらお話申したいこともありますが、今は仕方がありません。

アララギに對しての御感想は私も同様です。然しあの人達にはいうても駄目です。あの儘に任して置くより外はないのです。只あれから悟入して、立派な道を辿る人が出てくればいいと願つて居るだけです。要するに品位といふことのわからぬ人には、藝術家たるの資格は十分でないのです。

あなたにお目にかかりうる機會が生涯に一度も來ないだらうと思ひます。

今度もかへりには沼津を通りますが。（大正三年十月十六日　福岡市大學通平野旅館よ

り（福岡市多々羅川の大橋の繪ハガキ　槇豐作宛）

中原しづ子宛

其一

七日に上京して昨夕歸宅、御手紙を拜見しました。こまごまと御親切の段感謝の外はありません。何よりもあなたは御丈夫にお成りなされたといふことを、第一にお喜び申上げます。齋藤茂吉君の家で胡桃澤君と邂逅して、あなたが百姓していらつしやるといふことを知りました。それなら何よりだと思ひました。私も少しづつ百姓の指圖だけはして居ますが、自ら鍬鎌を執るだけの勇氣はまだ出ませ

ん。一昨年發病以前は盛に堆肥の製造をして、此は自分で手を下して見ました。それだから此一點にはいくらか通じた積りで、人を使ふのに大變樂であります。私は年々堆肥を二萬貫匁も仕上げます。そして竹林の栽培をしてゐます。興味を此方に奪はれてゐて、只今では文藝の方には疎くなりつつあります。何よりもあなたが御丈夫にお成りなされたことを、およろこび申上げます。

私は幸に咽喉の方はいい相ですが、胸の方がなかなかで有ります。然し鎌倉あたりへでも行つたら、あなたの樣に成るかも知らんと思つて居ます。只體格があなたの樣に行かないばかりです。私は昨年お目に懸つた時、これはどうしても病などのある人でないと思ひました。私は何時又あなたとお目に懸れるかわからないと思ひます。健康恢復の後のあなたは何處へ落着かれるか、さうしたらもう再會の機はないと思ひます。私も健康に成りたいと思つてゐますが、私一人の身體でも私の一家に取つては、重大な關係をもつてゐます。私の家の戸籍面には、兩親

と、今靜岡の聯隊に奉職してゐる軍人の弟と、私と丈です。私はどうしても丈夫になりたいと思つて居るのです。そして今一度何か書きたいと思つてゐます。鎌倉は私には初對面の土地ですから、近頃古美術に興味を有つて來た日には、嬉しい所でなければ成りません。一寸御禮だけを申上げて置きます。東京で久保田君の令閨にあひました。（大正四年六月發行アララギ第八卷第六號長塚節追悼號所載　大正二年十一月十六日　自宅より　封書　中原しづ子宛）

森山汀川宛

其一

拜啓　過日は御丁寧なる賀状に接し忝く存申候。甚だ相後れ候へども、御禮までに如此に有之候。早々。

追て失禮には候へども、吾兄は汀川君に候や。果して然らば去年御面會の折の御厚情偏に御禮申上候。其後の疎音申わけ無之候。（明治三十九年一月十一日自宅より　ハガキ　森山藤一宛）

依田秋圃宛

其一

拜啓。過日は公務御多忙の折柄御厚志にあづかり難有奉存候。小生は途中五泊漸

く昨日歸宅仕り候。深田舍のこととて、何となく穴の中へもぐり込み候樣に感ぜられ申候。麥はぽつぽつ穗を孕み申候て、過日の雹も餘り害はなかりしかと存ぜられ申候。何處を見ても柔かなる晩春の綠、殊に樫の大樹は心持よく存じ候。此から匆々に草花の種を蒔かむと心構居り候。（下略）

もろ共によしとめだしと語らへる樫の若葉は庭にもえたり

（明治四十年五月一日　自宅より　依田秋圃宛）

其　二

拜啓　ことしの梅雨は餘りふらぬならむと噂有之候ひしにも不拘、此分にては早あきれ申候。

小生昨秋來庭に草花を植うることに少々苦心致し來候。花菖蒲百餘株既に末に相成、靑桐のもとの立葵はまだ盛に有之候。行く行くは庭中葵にしたき所存に有之

候。

此梧桐は入口の戸袋の所へ、寒山竹と交へ植ゑ申候。秋はそこへ葉鷄頭を燃えしめむとの趣向に有之候。葉鷄頭の苗植込申候。今年の秋は隨分美麗なる庭に相成可申かと樂み居候。

雨おほく候故苗の根付よろしく候。

扨て先頃上京致候處、左千夫氏の談に大兄近く愛知縣を辭して關東に來られ候由、或は水戸あたりを御希望とのこと、左すれば御面晤の機もおほかるべく、小生も水戸ならば折々は參りうること故、是非共右事實として現はれ候はむこと切望に不堪候。

別紙甚だ恥ぢ入り候ものながら、約束なれば是非もなくと認め申候。中學生兩名のものへ御渡し下され度願上候。匆々。

平福百穗君と御逢ひの由、同君はなかなか談話に富み居候故、定めし面白

かりしことと存申候。其折の葉書極めて面白く難有拜受仕候。(明治四十年六月×日　自宅より　依田秋圃宛)

其三

鬼怒川の堤は近頃暫く見不申、只管陸稻の穗の出際を打案じ且つ樂み申候。小生は今年から百姓の仲間入致申候。口の先でばかり仕事する百姓故、なかなか骨折れ申候。大兄と御日にかかり候は何年前にて候ひしか、小生はあれから專心竹林の經營に從事し、あと三年にて一先づ完全の見込に有之候。此れて小生も極めて小さな林業家に相成申候。一方に於ては大兄の仲間入に可有之候。

今年風のおほく庭上草花皆狼藉たる有樣に有之候。毎日惘然として暮し居り候。昨年以來文章も作らず心細く候。歌は三年以來はじめて成り申候。此はあらら木に載せ可申候。匆々。(明治四十一年八月二十四日　自宅より　依田秋圃宛)

其四

十二月七日夜十二時水戸發急行列車に乘じ、八日朝八時過平泉、高橋旅館といふみすぼらしき宿の貧相な男客引に出て居る。中尊寺まで案内料十錢といふので賴む。此男の嫁が案内してくれる。ふと「わたりもの」を思ひ出したので、此夏かくかくのことで祝言はなかつたかときく。有つたといふ。嫁は十六であつたらときく。どうして知つて居るといふ。製板會社の前を過ぎて行く。晴天に雪がちらちらと散り來る。丁度マントのやうな形の引き廻しといふのを着た人々が、炭をつけた馬を曳いて來る。一人で三頭は曳く。オイ其嫁はどうしたときく。一ヶ月計で加藤サンが會社へ出たあとで、一切荷物を纏めて家へ逃げて行つてしまつた。尤も嫁になる前から厭だといつて居たのである。加藤サンは恐ろしげな顏をして居るが氣は惡くない。若い女房を持つたのだから非常に大事にして居たのだ

が、年をとつて居るので一つは厭がられたのだといふ。幾つだといふと廿八であつたといふ。それで加藤サンは仙臺の製板會社へ行つてしまつた。それは外聞が惡いからだといふ。松並木へかかると道は左へぐるりと曲る。娘の家はどこだときく。並木の松の下で右側の一寸した百姓家がそれだといつた、表に赤い鼻緒の下駄が一足ぬいである、娘のだらうといふとさうだといふ。加藤サンを嫌つて出ても「このゑ「サンもめでたいことではないといふ。このゑサンといふのは娘の名であつた。娘の家のあたりから中禪寺の森がよく見える。

歸り途である。

オイお前其娘を呼び出して見ないかといふと、嫁は碌な返事もしない。また娘の家の前へ來る。表の下駄はもうない。嫁は家に近づいたと思つたら、今日はといつてこのゑさんと呼んだ。ハイといつて障子のガラスの所から、一寸顎から下を見せてやがてすつと開けて出た。十六の女の子に相違ない。嫁は行きに此の子は

眼が少し近くて、日を見る時には一寸妙な眼付をするといつた。果してさうだ。このゑサンは急に明るい所へ出たせいか、少し首を曲げて一方の眼を細くしたりして見る。血色のいい丸ぽちな娘である。寒いので綿入をうんと着て、ネンネコ絆纏のやうなのを上張りに着て細紐を一本締めて居る。何處までもあどけない容子だ。家の中では娘の母の聲で案内の嫁と頻りに何かいふ。母の姿は見えなかつた。緣側には麻が竿に掛けてあつて青首の大根が蓆に干してある。腹が減つて居たのでそこそこに宿へ歸る。雉子鍋で飯をくふ。同行の從兄は酒が好きなので快げに飲む。さうしてあの娘が可愛相でしやうがないといふ。從兄は或女の子にふとした出來心から子が出來た。さうして女の子が身分の違ふ所から、忽ちに別れさせられた。其子が妊娠したのも丁度十六の時で一昨年のことである。このゑサンといふ子が憎らしい顏をして居たら何とも思はないが、如何にも愛らしいあどけない顏をして居るので、餘計哀れに成つてしやうがない。このゑサンといふ名

も可愛い名だといつて、何だか泣き相に成つた。從兄は醉つて爐の向でごろりと横に成つて眠りかけた。晴天にも拘らず思ひ出したやうに、雪がちらちらと散りかかるといふ日であつた。三時に平泉を立つて六時過に松島へ下車、十五夜の月を見て同所十一時半の急行で、九日朝六時過水戶へ歸着。

○

小生所用のため水戶へ參り候處、機關庫に奉職せる從兄の勸誘にて時間を見計らひ、僅々一日の暇を以て中尊寺を見物仕り候。唯このゐサンに口をきかせなかつたことを遺憾と致し候。中尊寺は天下第一と存じ候。一驚を喫し申候。嫁の案內でこのゐサンを見たことも更に深き興味を惹き申候。このゐサンは大兄は御覽無かりしかと存じ候。淸澄山の谷は大兄によりて後のことを知り申候。而してそれは作者が本人を見てあと訪ふ人は見ず。平泉村は其後のことを小生によりて大兄は知り可申道理、而して作者は却て本人を見ざりしこと、兩々面白き對照と存申

候。中尊寺は此次復びゆつくり參る積に有之候。それは何年の後なるべきか。而してこのゑサンは其時如何の境遇にあるべきか。兎に角並木の松の下に赤い鼻緒の下駄をぬいでありしこと。このゑサンが障子を開けて出て妙な眼をしたこと、長く小生の記憶を去り不申と存候。先はつまらぬことながら、大兄の興味を惹くに十分の事實と存じ候に付右申上候。（明治四十一年十二月十三日　自宅より　依田秋圃宛）

其　五

拜啓。廿三日を以て歸鄕仕り候、繪葉書慥に拜受仕候。このゑさんは小生も全く失望仕り候。二泊の豫定も此がために果さず、倉皇として淺蟲へ去り申候。赤い鼻緒の下駄は、もはや見る可からず、母なる人は見申候。このゑさんは母なる人に酷似致居候、嫁といふものの奇なるはこのゑさんの上にも見るべく候。いまは

從兄弟同志の夫婦に候由、小生は長き將來の幸福を祈り居り候。平泉村は早晩一篇を草すべく、前便にも申上候如く、宿の妹に五串の瀧まで案内させ候ことによつて、今回の平泉行は徒爾ならず候。

平泉村を書く時は「わたりもの」一篇を拜借し紹介可致候。（明治四十二年十月二十八日　自宅より　依田秋圃宛）

其六

拜啓。小生實は思はぬ惡疾を得て根岸養生院に療養致居候處、七十八日にして漸く表記へ移り申候。あららぎの歌を御覽被下候ならば疾に御存じのことと存候へ共、平素の御詫にもと存じ書きつけ申候。今月一杯位滯京一寸歸郷して、更に九州へ轉地可仕心組に有之候。昨年はしみじみと筆とるといふことも無之候ひしが、今年は是非共數篇を草したく腹案も有之候。平泉村の少女、大兄の所謂お梅

さん、實名このゑさんなど何時までたつても記憶を去り不申候に付、赤い鼻緒の下駄なども現はれ可申候。

されど急には參るまじく、今年中の仕事として大兄まで豫告致申候。何も別に申上ぐることも無之候へば、此にて筆とめ申候。西征の途次往復いづれかに錦地へもおとづれ申度と存居り候。匆々。（明治四十五年二月廿日　自宅より　佐田秋圃宛）

宛名不明

其一

拜啓。玉章反覆深く肝に銘じ候。小生不謹愼の行爲に對し、御立腹の段陳謝の辭

も無之候。多少の分別も可有之筈にて、如斯の仕儀、分疏の道素より有之べからず、只々慚愧の至りに御座候。恐懼して御挨拶申上候。

逐て小生病狀捗々しからず候に付、不日東京を去りて當分居所も定まり申すまじく候。なほなほ此狀尊宅へ轉送せらるるを憚り、一昨日御缺勤の旨承知仕候まま差控申候て、漸く今日發送仕り候次第、遲延致候こと恐入候へども不惡御了承被成下度候。（右書簡の下書　年月宛名共に不明）

其二

昨晩神戶泊り、今日は下關まで、明日ははやく博多でせう。神戶の宿はひどいことをすると思つたら意外です。歌に直したいのもあります。途中は疲れて駄目ですからあちらから。（大正三年六月九日　ハガキ　宛名なく其儘になし置きしもの）

其　三

昨日父からの手紙を受取つて見ましたら、直枝さんが何だか病氣がいけないとかいつてましたが、困つたものだと思ひました。さういへば私には思ひ當ることもあるのですが、高安君のことなどもあり、あなたも重ね重ねの御不幸申上げ様もありません。人間の家も不運がつづきはじまると暫時はどうしてもいけません。さういふ時には只もうおつとして一向あせらないのに限ります。何よりも大事なのは御養子の問題でせうが、まださきのあることだしこれこそ熟考（推定、大正三年九月　青島檳榔木の繪ハガキ　宛名不明　書きかけにて置きしもの）

其　四

汽船が岩國へついた時に夜が明けた。一度行つた錦帶橋はどこから行つたのであつたか、海から見たのでは一向見當がつかない。宮島で午餐の皿に小さい魚のフ

ライがついた。軟かでうまい。何だといつたら女中が鮎の子だといつた。何處でとれるのかと重ねて聞くと、岩國の前の川でとれるのだといふ さうすると此葉書にある橋の下行く水でとれるのである 潮の「タダヘ」の處でとれると女中は敎へる。潮水と淡水の「タダヘ」の處だといふのである「タダヘ」といふのに境といつたのを間違へたのかも知れないが、二三度さう聞えたのである。さうして境が本當であつたら落膽するから、「タダヘ」ときめてしまつて居てもう聞きかへさない。

此の葉書はここへ來て佛像を見に行つてふとしたことから和尚さんに貰つたのである。さうして宿へかへると鮎の子をたべて、君へ一寸書いてあげたく成つたのだ。私はおもしろいことだと思つて居る。（大正二年六月發行『ララギ』第六卷第五號所載 大正二年四月五日 宮島より 繪ハガキ 宛名不明）（古泉千樫宛？）

其五

奔湍の如く瀨戸内海に向つて激する陰暦三月一日の大潮を見申候。早鞆の瀨戸とはよくも申候。しかも兩岸の山々そこここにほかりと山櫻の匂へる見捨て難く候。八日の朝門司より紅丸に乘る。此度は内海第一の豪華なる船にて、小生は其第一等船室の客として、愉快なる航海をつづけて昨夜神戸に上陸、おそく京に入り申候。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年四月十日　京都より　繪ハガキ　宛名不明）（古泉千樫宛？）

其六

此處に八人立つて居るのは、京の祇園の花なる舞子である。場所は龜山の公園で、赤松の木の間を透して青く見えるのが大堰川の流である。水を隔てて卽ち嵐山である。大悲閣の下から渡船で三軒家まで下る。醉つぱらひが乘つた。別の船には

若い夫人連が乘つた。其連中に千鳥が淵の岩のもとに船をよせて、一人が櫛に水をつけて一人の髮をなでつけてやる。坐つた儘右の手はすぐに川の水につく。醉つぱらひが大きな聲で呶鳴る。私の髮もなでてくれといふのである　夫人連はやつぱり笑つた、罪がないからである。花見にはかういふ人間も毒にならぬ、ことばが京ことばだもの。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年四月十三日　京都より　繪ハガキ　宛名不明）（古泉千樫宛？　齋藤茂吉宛？）

其七

出雲の春はいま菜の花の田圃道、どこでも三十三ヶ所の札打の男女がぞろぞろと群れ歩いて居る。四國遍路と違つて中に緋縮緬のゆもじを垂れた少女も見える。女の足では十日以上もかかる道程ださうだ。民部君と夕方土手の篠に挾まれた道を歸ると、遠くに爪折笠を負うた一群が見えた。我々は車上であつたから忽ちに追

ひ越して畢つた。少女は疲れて居た。さうして皆カバンのやうなものを肩から腰へ掛けて居る　櫛や白粉がはひつてるのだらう。だが少し鼻の低いだけはいづれの土地にも共通の現象である。（大正二年六月發行アララギ第六卷第五號所載　大正二年四月十七日　出雲杵築より　繪ハガキ　宛名不明）（伊藤左千夫宛？）

補　遺

伊藤左千夫宛

讃岐へ來てもう十一日目である。丁度高松へ上陸した日に先帝崩御の報に接し氣も消えさうだ。卅日の夜十二時頃に棧橋から宿引に連れられて、もう栓を拔くば

かりの穢い錢湯を浴びて寢たのが、その一時少し前であつた。我が日本の國勢から言へば、大正といふ年は必ず明治に劣る筈ではないけれども、我々はどうも明治といふ年號はどれ程でも長く繼續することを熱望して居た。これからはもう仕上げの時代で、先帝の御壽命は御長ければ長い程、日本の國に偉大なる光彩を添へた筈である。我々は悲しさに堪へない。何だか暫く御無沙汰をして居る内にかういふ大事件が起つたりして、遠く隔つてしまつた樣な感じがしてならない。明日は汽船の都合が惡いやうだから、岡山へ渡つて大阪へ向ふ積だ。格堂をも尋ねようかと思つたが、京都から出した葉書に返事も見れないし、一寸妙に思つたこともあるから止めることにした。（大正元年九月發行「アララギ」第五卷第九號所載　大正元年八月九日　高松市より　繪ハガキ　伊藤左千夫宛）

福田昌健宛

其一

拜啓　卒爾ながら一書さしすすめ候。

北相馬郡六郷村大字清水（古井戸）一二三番地

亡榮次郎長女　平澤くに

明治廿三年十二月生

右之者小生へ世話致しくれ候もの有之候へども、遠隔の地とて萬事不明、最も取手町高安松之助氏へも照會致し候ことには候が、これも同志（氏？）他行等致し

候場合尚不明の點もおほく困候。地圖にて相調べ申候處、御地はすぐ隣村のやうにも思はれ申候。何かと御耳に達し候ことと存じ申候。

一、血緣　一、本人の性行　一、目下の狀況　其他

能ふ限り精細に御申きき下され度御願申上候　蛯原勝三郎氏の親戚と申すことと、家運の衰へ候こととは承知致居候。

何分とも至急御一報下され度お願申上候。匆々。（明治四十一年十二月三十日　自宅より（？）　封書（？）　福田昌健宛）

其　二

拜啓。過日は御懇篤なる御書狀に接し有難く御禮申上候。殊に御病中いろいろ御配慮下され候由何とも恐縮の至りに存候。

扨而御申越の旨先づ以て小生に於てはむしろ過分に存申候。家運の衰頽の如き

は前以て承知致居候こととて、更に厭ふところ無之候。尚ほ一應踏込んで御探索相叶ひ候ものならば御手數下され度、最も小生も其內京斤へ可參用事も有之候に付、其節是非共御地へも參り申度存居候。兎に角御一應御探索下され度懇願奉候。匆々。（明治四十二年二月十四日　自宅より（?）封書（?）福田昌健宛）

西山亮三宛

拜啓。過日ふと申上候西國巡禮のことに付御たづね下され候旨、小生も其希望は山々に有之候へ共、昨今のことには實行致兼ね候事情も有之折角の御勸誘には有

之候へども、必ず何時と相定めおくことは唯今甚だ差支申候次第、不惡御承引なし下され度御願申上候。よしなきことを申上げ候て御心を煩はし候儀申譯も無之候。小生こと腦中何やかやと希望のみおほく、思ふことの十が一つも實行の運びには不至、隨つて遊びに參り度個所も數々有之候へども只々空しく打過ぎ申候。それにても人よりは自由の身なりとて羨まれ申候。西國めぐりは御同伴不相叶候ても再び御目にかかり半日の閑談相試可申折も有之候ことと存申候。吉野ならをめぐりて京にかへり、島原太夫の道中壬生念佛など見物の上歸途に就き、昨日虚子君のもとをおとづれ玉章拜誦致候次第、返書相後れ申候段は御宥恕なし下され度願上候。

東京につき申候處若葉の上に雨やまず降り注ぎ申候。荒川堤の櫻は八重おほく今が盛りの由きき申候へ共、小生は見に參らむとも存じ不申候。御地も雨に候や。先は不取敢右まで申上候　匆々。（明治四十一年四月二十八日　東京より　封書　西山亮三宛）

上方九州旅行中發信者覺書（推定）

胡桃澤勘内　本郷西片町一〇、ろの八號　齋藤隆三

久保田俊彦　高崎市赤坂町　村上成之（銀閣寺特製博多福岡城）

佐久間政雄（早稲田町十八）　名古屋長者町二丁目　奥島金次郎

門間春雄　東京市外巣鴨町二ノ三五　山田麒太郎（北枝山博多）

横瀬夜雨　名古屋市東區鍋屋町二丁目大光寺境内　依田貞種

橋詰孝一郎　長野縣諏訪郡北山村　篠原圓太

奥田とし子　東山梨郡諏訪村　岡千里（大學今景）

登倉松枝子　京都市東丸太町川端東入十四ノ九　松田道作

中島喜作（福岡大學）　北見國斜里港三井物產株式會社出張所　松田善三郎

三浦義晃　撫順炭坑　平野正朝

赤木格堂
拓植惟一
堤定次郎
寺田憲
齋藤茂吉
倉田龍次郎
岡三郎（赤坂丹後町六、）
中村不折（中根岸卅一）
寒川陽光
秋葉類助
小竹重則
金子長三郎（寺多檣石）

甲斐東山梨郡松里村　日原無限（金剛寺特製）
小石川戸崎町一　小瀬胤昭
東京市外上澁谷一三五　平福百穗
小石川白山御殿町一〇七川味内　外池達之助（博多、高野、岡寺）
銚子町鐵道汽機關庫　渡邊剛三
小石川雜司谷町百十　黑田昌惠
長野縣下諏訪町　久保田俊彦
四谷右京町十一　小久保喜七
京都市元誓願寺大宮西入　河井長藏
木島座脇　柳澤健
香取秀眞（古鏡）
結城郡總上村袋畑　安塚千春

伊藤保治（岩崎、八幡）

蕨直次郎（天狗山、宮島）

森田草平（たたら川）

蕨一郎（名島、夕照）

片岡勝六（博多）

靜岡步兵第三十四聯隊第三中隊　整四郎（なら、宮じま、對州、博多、京）

上根岸九五　木村芳雨

水戸上市大町五　渡邊源五郎

新潟縣北蒲原郡長浦村　長場璜次郎（玄海夕照、高野、宮島、金閣寺）

本郷弓町一ノ八石原とみ女方　大槻とら子（平安神宮）

岐阜在江崎　鹽谷宇平

岐阜市　玉井梧一

四谷傳馬町一ノ卅六　樋渡彥九郎

本所綠町三ノ三〇石井方　古泉幾太郎

長野縣南安曇郡東穗高村　西澤本衞

上根岸三八　鼠骨（宮島、高野）

久慈郡太田町　正木壯吉

芝琴平町二番地　晩翠軒

大阪府下西成郡玉出驛西二丁　森田恒友

大阪毎日新聞

奈良縣高市郡飛鳥村大字豐浦　豐田龍吉

福岡市外東公園裁縫女學校前　武片準

岡崎町福の川六六辻　草間庸（天拜山、筥崎夕照トフローヒ、）

鹿兒島縣姶良郡加治木　壹岐武之助

久保（松山二枚、ノサゴヤ三枚、ケヤ三枚、對州三枚、イキ三枚、彦山四枚、ヤバ三枚、ベップ一枚、宮島三枚、サスキ一枚、高野二枚、なら二枚、京四枚、）

伊藤左千夫　月が瀨　白河女　嵐山　吉野　對州　開聞岳　太宰府　博多名所　船ゴヤ　ヒコサン　サヌキ　高野　尼上　なら　貞二枚

胡桃澤　月が瀨　白河女　吉野　開聞岳　都府樓　對州　宮島

門間春雄　月が瀨　卅三間堂　吉野　佛像　船小屋　高野　關寺

夜雨　月が瀨　上賀茂　嵐山　開聞岳　博多　イキ

中岫　月が瀨　花賣女　義政木像　吉野　すしや　岩國　開聞岳　對州　ヤバ二枚　ベツプ　宮島　戸崎　太宰府　天拜山　礎石　持國天（不明）　ヒコサン

依田貞種　かささぎ　なら　高野

寺田憲　月が瀨　京染所（？）　ライオンの子　吉野　岩國　開聞岳　博多　トフ趾　大堀風光　對州　ヒコサン

渡邊源五郎　夜櫻　開聞岳　博多　カルカヤ　イキ　高野

平野正朝

黒田昌惠　吉野　開聞岳　不空羂索　ヤバ　高野

古泉千樫　カサギ　卅三間堂　吉野　開聞岳　博多　筥崎　對州

佐久間法師　夜櫻竹製　吉野　トフ樓　不空羂索　大堀風光　ヒコサン

木村芳雨　白河女　太宰府　岡寺

高濱虚子　通天　トフロウ　イキ　ケヤ　ドウゴ　高野

奥島金次郎　月がせ　上賀茂　吉野　開聞岳　博多　對州　高野

齋藤茂吉　月がせ　白河女　吉野　櫻島　イキ　ベップ　ミヤジマ

奥田康之助　鹿　大極殿　博多　イキ　ケヤ　高野

石塚崚　妙心寺

篠原圓太　祇園　高野

雜司谷町百十三太田 松田善四郎　吉野　天拜山　箱崎樓門

青木轍兒　櫻島　天拜山遠(一字不明)　檣石

佐々木好母　博多

岡三郎　月がせ　卅三間堂　千代松原　病院前　日蓮　(不明)　宮島　吉野　開聞岳　太宰府　對州　イキ　ヒコサン　ヤバ　ベップ

久保田俊彦　月がせ　白河女　岩國　都府樓　帆柱石　對州　宮島

小瀬胤昭　　月がせ　吉野　榎寺　宮島

橋詰　　月がせ　京　卅三間堂　ライオンの子　封狀　吉野　開聞岳　博多　太宰府を望む　對州　ヤバ　宮島　高野　ナラ

小布施　　月がせ　卅三間堂　嵐山　吉野　すしや　岩國　開聞岳　長崎　太宰府　とふろう　國寶の面　對州　ヒコサン　ヤバ　ドウゴ　宮島　サヌキ　なら　ナラ

格堂　　比枝山

渡邊剛三　　月がせ　封狀　平安神宮　封狀　吉野　ライオンの子・開聞岳　博多　宮島　高野

柳澤健　　カサギ　妙心寺　開聞岳　榎寺

平福百穗　　月がせ　卅三間堂　吉野　開聞岳　太宰府　玄海　宮島　高野　タタラバシ　大黒天　持國天　阿彌陀如來　對州　イキ

河井長藏　　吉野　博多　ヒコサン　宮島　高野

齋藤隆三　　月がせ　上賀茂　吉野　開聞岳　太宰府　千代松原　夕照　芥屋　對州　ヒコサン　ヤバ　高野　宮じま　サヌキ　ナラ　京

松田道作　　天拜山　吉野街道　ヒコサン

鹽谷宇平　　祇園　狛犬　對州　ハコザキ　宮島　なら　壁畫

駒込神明町四三七
四方太　　高野　宮島　瓦

堤　定次郎　　觀音寺　大堀風光　對州　夕照　ヒコサン　ヤバ　ドウゴ　高野　京

潮音　　京　岩國　博多　イキ　宮島　岡寺

安塚千春　　卅三間堂　槇寺　妙見島を望む　イキ　京

三浦義晃　　孔雀　博多　觀世音寺　ベップ　サヌキ　奈良

武井　準　　開聞岳（不明）彦山　ベップ　宮島

岡田小學校　　開聞岳　大學

蕨　眞一郎（高崎市柳川町北門先　小澤別莊前通）　　聖觀世音　船小屋　たたらばし　イキ　ベップ

丹羽泰藏　　千代松原　夕照

藤倉新吉　　彦山

平野竹之助　　ヤバ　ナラ

極堂　　宮島

霽月　　大三島の道　サヌキ　宮島

西宗寺　宮島

甲之　宮島

渡邊眞一　高野　なら

管壽人　高野　なら

（編者曰、以上覺書は中型手帳中にあり。人名下六號活字地名は旅行中給はがきを出したる覺え書きなりと思はる）

雜文

竹の里人〔一〕

○先生と自分との間柄は漸く三十三年からのことで極めてあつけないことであつた。それも自分がいつも京住まひで三日あげずに先生のもとへ往復が出來るならば格別であるが、何をいふにも交通の不便な土地なので、割合に近い所であり乍ら思ふやうには訪問することも出來なかつた。併し年に四五回位は上京して時には一ヶ月も滯在したこともあつて、勿論その間といふものは殆んど隔日位に詰め掛けて、隨分と小言もいはれたことであるから、思ひながらも遂に一日も見られなかつたといふ僻遠の人々から云つて見れば、自分はいくら幸であつたか知れない、先生から聞いたことはいつでも珍らしく思つて居たのだから、その時々のことを日記のやうなものにして置きたいと思つたことは再三のことであつたが一度

も實行したことがない。これは自分が性來の懶惰なるに因るのであるが、一つは頭の惡い爲めでもあつた。厭だと思ふと迚ても仕事が出來ない。精力といふものは殆んど持つて居らぬかと怪まれる計りであるが、そこが今になつて考へて見ると遺憾極まることであるが、なに一つ記して置かなかつた理由なのである。それに先生を訪問すると日中行つても、晩方行つても必ず夜更けまで居る。自分のいつも居たのは根岸からいへば上野の山の向うで不忍の池のほとりであつたから、先生を訪問するものの中では先づ一番近い所であつたが、歸つてくると淋しい通りは益々淋しくなつて、家の者はもうぐつすり寢込んだといふ時分であつた。左千夫君などは内へ着くと三時が鳴つたなどといふ事があつたやうに聞いたが、敢て珍らしいことでもなかつた。そんな鹽梅で先生を訪問すればいつでも夜更になる。これは自分に取つては非常に無理なことで、一晩夜更しをすれば二三日位は頭がぼんやりしてはしはし仕ない。それがまた隔日に行きたいといふのだから、

到底日記を認めるなどといふことの成就すべきものではなかつた。それのみならず上京中はなんでも無駄に日を過すまいといふ考なので、根岸へ行かなければ本所へ行くとかどこへ行くとかで薩張り落着かない。左千夫君と話を始めるとこれも長くなつて果てしがない。泊り込んでは夜更してである。明れば連れ立つて根岸へ行くといふので考へて見ればをかしなことであつた。いつであつたか左千夫君も先生の言はれることは一寸した事柄でも深く玩味すべきものである。もうこのさきいくらも存命でない先生のことであるから、今のうちに注意して一々筆記して置かなければならないといふやうなことを云れたやうであつたが、後に立ち消えになつたやうである。それから先生の柩の傍で通夜をした折いろいろ雑談があつたが、その時の虚子君の話にもいつも來る度にその日のことを書いて置かうと思つては、歸ると疲れて仕舞つて果さなかつたと云はれたが、さうして見ると自分ばかりが出來ないのでは無くつて、後ではいづれも遺憾に思つて居るのは同一

であらうと思ふ。こんな鹽梅であるから、先生に就いてなにか書かうにもなんだか有るやうで無いやうで、急には思ひ浮ばないのである。然し成る可くは秩序を追うてしたいので、時にはこの前にこんなことがあつたと云つたやうなことで喰ひ違ふこともあらうが、注意はする積りである。それに自分のは先生を批評するなどといふ大層なことをするのではなく、先生と自分との間柄のことを述べるだけなのである。それだから先生といふことよりも自分のことが主になつて仕舞ふやうな場合も無いとは限らない。それから自分以外のことでも、先生の許で見聞したことは記憶より喚起される限りは述べることにする。

○自分は曩にいつたやうに先生に見えたのはこの間のやうであるが、先生の名を知つたり、又は先生の議論を見たりして景慕のあまりに、是非共逢つて話も聞いて見たいといふ念慮のあつたのは、もう久しいものであつた。こんなことがある。

幕府が瓦壞の時分に江戸で役向を勤めて居た人で、僕の村の名主と知合であつたとかで、後にその名主をたよつて僕の村へ永住することになつた岡本といふのがある。その人はとうに死んで跡目の代である。確には記憶も無いが十四五位の頃であつたらう。その時のことは今でも知つて居る。父と共に村の中を散歩した時のことである。茶の木の花がややだらけて菊がもうよつぽど摘まれた頃である。枯芒のなかを歩いた時に父からからういふ話を聞いたのである。父はその岡本といふ人から聞いたのだといふことであつた。岡本の伯父位になる人で東京に發句を作る人がある。その知合とかに大學生があるが非常な發句熱心で、古人の發句の八萬句とかを八萬遍繰返して讀んだとかで、今では恐ろしい豪らいものに成つた相だといふやうなことで非常に驚ろいて話された。その頃は自分は發句などといふものは素よりのこと、頭が一切空虛なので格別に感じよう筈もなかつたが、只豪い人もあるものだな位に、豪いと話されたのでさう思つたのであつた。その後

もそのことは念頭から離れて居つたが、去年あたり不圖思ひ付いて聞いて見るとそれが全く先生のことであつたのだ。後にこの話をした岡本は自分が家を離れて居るうちに肺病になつて死んでしまつて、その子といふのがこれも肺病で去年の夏死んだ　丁度自分と同年齡であつた。自分が見舞に行つた時に、爨のことを思ひ出して尋ねて見たところが先生のことは知つて居つて、緣者の老人が宗匠でその宗匠が先生にも遇つたことがあるのだといふことをいはれた。兎に角これが先生に就いて知つた一番はじめのことであつたのである。

〇二十八年九年とこの二夏は鹽原へ保養に行つたのである。自分はその頃から頭が惡くて仕方がないので、なんとか治療の方法も無いものかと思案の末人の勸めで行つたのである。二夏行つたのであるからしかとも覺えないが、たしかにあとの夏であつたやうに記憶して居る。鹽の湯といふ狹苦しい谿谷に六十日も滯在した。喧ましい鹿の股川を隔てて鼻を突き合ふやうな雜木山に向つて退屈でしやう

も無かつた。かういふ所の習慣で、相宿の客とは別懇に成り易いものなので自分もいろいろの人と交際をした。大抵は入り替り立ち替りで暫くも止まることは無いが、下野の矢板の在から來た人が長逗留をした。この人と格別に往來をしたが、この人が「日本」を見て居た。自分はその時分國民や讀賣が好きでいくらか文學の趣味を解した積りなので、文學新聞はこれ計りだなどと獨極めをして他のものには目もかさうとしなかつた。ところがその人の云ふに近頃俳句の議論が「日本」に出て居るがなかなか六かしいものであるというて見せられた。成程六かしいものだと思つて見は見たが解しよう筈はない。然し一つ面白いと思つたのが今に記憶して居るが、それは「名月や裏門からも人の來る」といふ句の「も」の字が惡い理窟であるといふのであつた。然しその時は論じた人が誰だか一向注意もしなかつた。さうして「日本」を見たのも三日か四日に過ぎなかつた。この俳句の問答をかいたのは先生であつたといふことを知つたのはずつと後である。

自分が先生の議論を見たのはこれがはじめてであつた。

○それからこれも其の夏のことであるが鹽原から歸つて、近く發刊せられた「世界の日本」と云ふ雜誌を見た。世界の名士の肖像などが載せられてあるのを酷く面白く思つた。これに「我が俳句」といふ一篇が出て居た。自分は先づ一わたり讀んで見たが、ひどく六かしくつて薩張解らないやうに感じたが、何だか面白い所のあるやうに思つた。さうして主意がどうかうといふことよりも「我が俳句」と云ふ一篇があつただけは忘れ去ることは出來なかつた。その後さきにいつた岡本がまだ存生中で或日なにかのことで自分の家へ來たことがあつたが、その時にどういふことであつたか「我が俳句」の話が出てそれを岡本に見せたところが、此の獺祭書屋主人といふのは俳人子規の別號である。子規といふのは肺病でどうだとかいふことを語つた。岡本といふ男もこれだけのことは伯父かが一寸知つて居たのでそのわけから知つたのらしい。素より俳句もなにも解つたのではない。

さう聞いて見ると同じ一册のうちにも子規といふ名で俳句が出て居るのに心付いた。それで「侍の野梅折りけりおとしざし」といふ句のあつたことは今になつても忘れない。それから自分は見向きもしない位であつたが、自分の家では久しく「日本」をとつて居たので、この時分から少しづつ注目するやうになる。先生の句がいつも目に付くやうになつた。これが先づ先生の名を知つたはじめなのである。而してこの頃は俳句を見たつて解るのではなし、馬鹿々々しいつまらないことを拵へたものだなどと思ふやうな句もあつたが、捨てるのも惜しくつて切りぬいて置いた。さうしては只見て居た。こんな鹽梅で或は他に原因がなくつて、さうしていくらか早く趣味を得たならば俳人の仲間入をしたかも知れない。さうするとも少しはやく先生に見えたかも知れない。だが自分は俳句の趣味が解らなかつたのと、それから他に原因といふのはいくらかこの時に歌の方の頭に成つて居たために、俳句を作る心持にならずにしまつたのである。その後いくらか俳句を面

白く感じて來た時に、先生の「歌よみに與ふる書」が出たので、もう十分にこの方に引き付けられて、とうとう歌で敎を受けるやうになつた。これからのことはまたこの次に書くことにする。（明治三十六年十二月發行　馬醉木第七號所載）

竹の里人〔三〕

○「歌よみに與ふる書」といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でたまらないので、丁寧に切り拔いておいて頻りに人にも見せびらかした。偶々これに異議を挾むものでもあれば、其人がいかにも惡らしくつて溜らぬ位であつた。その頃大分「日本」紙上の歌論は喧びすしかつたが、他の歌よみ專門の連中はうんだとも潰れたとも云はない。たまになぜ默つて居るのだと人から揶揄はれても、自分は歌よみではないといふやうな遁辭を設けて尻込する弱蟲の中で、盛に先生に張合つて居た春園といふ人が、今日吾々と行動を共にして居る伊藤左千夫君であるといふことは更に思ひ掛けよう筈もなかつたのである。

さうして此の如く眞正面に立つて喧嘩腰になつて居た左千夫君がどうして先生の

門に遁いたか、それは後にいふ可き折もあることと思ふからいはない。兎に角その時分は日として歌に就ての議論が「日本」に出ないことがない位であつたから、殆んど半分は了解出來ないといつていい程であつたにも拘らず、待ち遠しく讀んで居たのである。それから「人々に答ふ」といふ標題で出たのが、いかなる難問に遭逢しても、極めて明快に極めて容易に解說されたが、いかにも心持がよくつて今だに忘れない。その中でも或人の、和歌が人を感動せしめて命を助かつたとか、領地をかへされたとかいふ歷史上の問題を提へて詰責したのに答へて、人を感動せしめた歌が決して名歌でない。都々逸は下品なものであるが女郎雲助を感動せしむるのは都々逸でなければならない。維新の志士と稱するものの詩は、詩でなけれども書生の氣を鼓舞するのはこの志士の詩に限つて居る。眞の名歌と稱すべきものは、趣味を覺た文學者の頭で判斷したものでなければならないといふやうな意味のものがあつたが、どうしても忘れられないことなのである。そのう

ちに議論ばかりでは埒が明かないから、作例を示さうといふので百中十首が出はじまつた。自分はそれまで歌集などを餘り見た事もなく、古今集などでも一枚讀まないうちに厭になつて、ほうり出して仕舞ふといふやうな塩梅であつたが、百中十首が出ると初めは變なものだと思つたが、段々面白く感じて來てとうとう眞似て見るやうになつた。さうするとどうしても先生に逢つて見たいといふ念慮も起つて來る。その念慮が起ると一層先生が慕はしくなつたのであるが、思ひの外に先生の所を訪ねたのが遲かつたといふのは一つは先生の住所が分らない。一つは自分の無識であることがひどく恥かしく感じた。教を受けようといふ身であるから、自分が低いのは當然なことであるが、その時は唯恥ぢて居つたのである。そこで自分は先生の住所を知ることに非常に苦心をした「日本」に關係ある人たのだから社へ質せばおきに分るのであつたらうが、その時分はそんな智惠も出なかつた。隨分可笑しなものであつた。そこで不圖日本の俳句に「鶯横丁曲らむとす

れば時雨けり」といふのがあるのに目が付いて、これは乾度坡が先生の住所であると知つた。それから「ホトトギス」を見るやうになつて、漸く上根岸のそこがさうであるといふことを確めた。それからその後根岸のあたりをぶらぶら歩行いて、いよいよといふことを突き止めたといつては變だが、そこらの模樣を見て三月二十七日それは明治三十三年の三月二十七日に染筆を乞ふ積りで、短冊を用意して半ば畏を懐いて先生を訪問に行つた。自分はいまは一年に三回か四回の上京も覺束ないのであるが、その頃はその前三年以來頻りに上京して悠遊したことであつたのだから、速く先生のもとに就いたならば更に大いに利益したことであらうに、惜しいことをしたと思ふこともあつたが、此の時はじめて思ひ切つて行くことに成つた位なのだから據處ないことである。さてその二十七日といふのは非常に天氣もよい日であつたが午後から出掛けた。黑塀をぐるつと廻つて前に見て置いた門のところへ出ると、立派な人力車が一臺主人を待つて控へて居て、そつ

と玄關を見ると客の下駄のやうなのが二三足ならんで居る。思ひ切つて這入らうかと思つたが何となく氣臆れがして二三遍行つたり來たりした儘、とうとう門の扉を押し開ける勇氣も出ないで悄々として歸つて仕舞つた。翌日は人に先んぜられないやうと思つて午前に行つた。今日は誰もまだ來て居ないやうであるから玄關に立つて案内を頼む。そのうちにゴホゴホといふ先生の咳は二三度聞えて、軈ておつかさんが出られたので、自分は半紙を手頃に切つて自分で認めた名刺を出す。暫くすると導かれて先生の病室六疊へ通された。その時先生はガラス窓に近づいて襖の方を枕にして寢て居られたが、上體を少し擡げて左の肘で支へ宛、いま自分が出した名刺を蒲團の上へ置いて下を向いた儘じつと見詰めて居らるる所であつた。イヤ失敬といふやうな先生の挨拶があつて、俳句の方で御目に掛つたことがあつたですか、歌の方で御目に掛つたことがあつたですかといふ間があつた。そこで自分は歌に就て敎を受けたいのであるといふと先生は暫く默して居

つ者が、いくらでも作るがいいのですといつてまた程經て、作つて居るうちに惡い方へ向つて居ると、それがいつか癖になつて來るのです、惡いことであつたら乾屎橛になつて仕舞ふのです、といふやうなことを話された。自分は先生はもつと物を言はれる人であらうと思つたのに案外言葉の少ない人だと思つた。然し考へて見ると只漠として歌の話を聞きたいといはれても困るのであらうし、そんなことをいつて來るものがいくらもあるとすると、隨分迷惑なことであるのであらう。それで話が少なかつたといふのでもなかつたらうが、兎に角少なかつた。併しこの少なかつた話が自分には非常に滲み透るやうに覺えた。それから尙ほ自分は昨日來客があるやうだから歸つてしまつたといふと先生はそれは惜いことをした歌の人が二三人來て居たのだ。昨日見えればよかつたのにといふことをいはれた。そのやうなことやその他いくらかの話をして居るうちに、持つて往つた短冊を出して揮毫を求めると、先生は微笑し乍ら覺束ないのだがといひながら自分の

求めた歌を書かれる。自分は一枚出來れば一枚宛手に取つて嬉しさに堪へず見て居る。さうするとさつき自分がはひつた襖を開いて來た人がある。その挨拶振から先生のやうすが心易い人であるといふことを知つた。客なる人は背の低い目のくりくりした男で、自分の左手へ無造作に坐を構へた。服裝はあまり見よくもないのみならず襯衣の如きは綿フランネルの手縫のやうなものであつた。先生は尚揮毫をやめない、書き終つて下へ置く短冊を見て客なる人は、俳聖の書は蕪村のやうだなといつて笑つて居た。やがて先生の足の方の簑笠の掛つた柱の右手に文晁の描いた寒山の雙幅をかけて、先生は臥しながら見て居る。客は立つて腰を延べたり屈めたりして見て居る。不圖客に氣がつくとその穿いて居る足袋は爪のところが抜けて居た。やがて先生は、この畫はどこに面白いところがあるのかといふと、客はなにといつたやうな鹽梅に耳を先へ出す。更にこの畫はどこに面白い分子があるかといふと、ちつとも面白いところがないといふので有つた。客なる

人がどうもどこかで見たことがあると思つて考へて見ると、二三年前に草津の湯に居る時分にチギレるやうなズックの鞄をさげて費しめたやうな羽織を着て居た畫工であることを思ひ出した。さうして中村不折といふ名であるといふことも知つた。あまり長く居るのもよくないと思つて、この日は先生と客との話中に歸つた。道々自分は先生の ところへ はまたぢきに 訪ねたい、然し迷惑で もあらうから明日はよしにしようが、 明後日はまた行かなくてはならないと思ひつつ歩行いた。(明治三十七年二月二十七日發行 馬醉木第九號所載)

竹の里人〔三〕

○一日を隔てた三十日に二回目の訪問をした。先生の姿勢はいつもの通りであつた。その時自分は國元から持つて行つた丹波栗の二升ばかりを出すと、それはどうして保存して置くのかといふやうな問があつた。砂と交へて土中に埋めて置くといふやうなことを話すと、ウムと聞き取れない程にいはれて暫くは默して居られた。自分は丹波栗を先生に進めたといふことで咏んだ二三首の歌を見せ先生は唯々じいつと見詰めて居られたが、その内の一つをこれだけは別に惡いこともないが、あとのはもつと尻が締らなくてはいかないのですと言はれた。自分は嬉しいやうな恐ろしいやうな氣がして聽いて居つた。夫等の歌といふものは素より自分でも厭惡すべきものであつたのだから、先生に在つては必ず始末に困つた位に

は思つたのであつたらうが、別に小言もいはれなかつたのである。先生のは後になつても其通りであつたが、自分等の作つたものを見て貰ふのに其作品が非常に拙劣で隨分叱責されるやうな場合でも、最初はこの時のやうに唯じつと見て居られてそれから極柔かに叱られるのであつた。比較的上作であつた時は直ちに面白いといふ一言で終るのである。拙劣な作であると、物を言はれる迄には必ず少なからず時間がたつやうに感ぜられた。軈て「大鷦鷯高津の宮は雨漏るを葺かせぬことを民は喜ぶ」の歌を例に出して、この結句が「民は」と曲折して居るから尻が据つて居るのである、三句までは極めて平凡に言つて有る。四の句に至つて一つの曲折を形作つて居るのを、更に結句にかういつて有るので十分に締りがついて居るのである。これが若し「喜びにけり」といふやうな句で結んであつたら到底物に成らないのである。「大汝少彥名の在しけむしづの岩屋は幾代經ぬらむ」の歌であつても、三の句までずうつと一直線に言ひ放つて四の句の「しづの岩屋は」

の「は」で曲折を成して、次に時間を含んだ句で結んであるから尻が非常によく調つて居るのである。こんなに長い時間を含んで居ながら卒讀した所では夫れが際立つて感じないのは、實に珍らしい歌といつてよいのである。この結句はまた「苔蒸しにけり」といつても落着くのである。夫れから又古今集かにあつた「白金の目拔の太刀をさげ佩きて奈良の都を練るは誰が子ぞ」などでもさうである。四の句までをずうつと言ひ下して置いて、結句で「練るは誰が子ぞ」の「練るは」と曲折を付けてあるから据わりがいいのだ。實朝ので非常に好きな「八大龍王」の歌抔でもさうだが、三の句までは非常にまづいのである「時により過ぐれば民の」なんて實にまづい、殊に「時により」抔といふ句は酷いのであるが、その替り唯でさへ振つて居る「八大龍王雨止め給へ」といふ句がついて居るのだから一層振つて見えるのである。この三の句までの平凡な處が非常に好きなんだ。初は成たけ輕くするのだ。さうすれば尻が据わるが、初めに強く言ひ切つて仕舞ふと

尻がどうしてもふらふらして仕舞ふのである。修辭學の原則にこんなことがあるのだ。一つの文章なら文章を初から終りまで同じ面白さに讀ませるのには、仕舞へ行く程面白くしなければならないといふことなのだが、歌でも仕舞へ行つて十分な力が這入らなければ到底駄目である。それであるから初一句に言ふことは二句位に延して言つて仕舞ふのだ、それで二の句のものは三の句へ、三の句のものは四の句へ、順々に繰り下げて行つて結句で十分に力の這入るやうにするのだ。詠むべき目的物は結句にいふといふのが先づ原則である。繪であると空間的のもので時間といふものがないのだから、目的物は上の方に在つても中の方にあつても下の方に在つても決して差支がない。歌といふものはどうしても尻が据わらなければならない。成る可くいふ事柄を、次の句へ繰り下げるといふ必要があるので、枕詞が出來た譯なのだ。少くとも枕詞は一方に於てこの必要を充す爲の適當のものなのである。古今集は尻に力があるといふ程には行かないが尻の輕いとい

ふ弊は先づないが、古今集以後に成るともうそれは實にひどいのである。こんな調子のことなどに氣が付いたものは貫之からこの方一人も無いのさ。極めて明瞭に了解せらるるやうに教へられた。かういふ話のうちに晝も過ぎた。先生は家族のものを呼ばれて線香に火を點ぜしめ、軈てこの線香の燃え切る間に茲の實景を歌に詠めと命ぜられた。自分はこんなことに遭遇したことが無いので少なからず不安心に感じた。已むを得ず筆を持つて出鱈目に書き付けたのが十首ばかりに成つた。此の日は非常によく晴れた暖かな日であつたが、ガラス障子の外に低い杉垣の芽が延びて下へ向いてゐる。薔薇の紅い嫩芽もついと立つてその上には小さな羽蟲が群り飛んで居る。庭には柔かな草が萠え出して、土はいくらか濕つて居る。極爽快な日であつた。今迄耳新しい話をされて、夫柄歌を考へつつ、矢張り歌を考へつつある先生に向き合つて、互に沈默して居た時の心持は何ともいへない。自分の歌は線香の燃え切らない内に出來て仕舞つたが寧ろ意外であつた。先

生は暫くたつて筆を投げ捨てて、室内の器物を詠んで見たといひながら紙片を自分に渡した。我が家の長物といふ標題でその後日本へ掲載したのがその時の作である。自分のが餘に亂雜な書き方であつたので讀あげてみた。先生からいろいろ注意があつて、此日は忘るべからざる樂しい日であつたが、自分のこの歌を淸書して殘して行つて呉れと云はれたのを氣にも留めなかつたが、後三四日を經て日本に掲載されたのを見て僕は寧ろどうして掲載されたことかと驚いた。この日から一日隔てて四月の一日自分は初めて歌會の席上に列した。在京の歌人と知合になつたのもこの時である。

自分は玆に一つ先生を訪問する以前の事に立ち戻つていつて見たい事が有る。これは自分に於ても不思議な程に思つた事なのであるが、それは固より何時の頃の事であつたか慥に記憶もないけれど、唯その事だけが殘つて居るのである。曩にもいふ通り先生に逢つて見たいといふ念慮は一日や二日ではなく絶えず腦髓を刺

載して居たのであるから、詰りそれから來た事には相違ないが、一晩自分は先生を夢みたのである。その夢がまた非常に妙な事であるといふのは、處は街道の村外れといふやうな處で一軒の茶店がある。葦簀の極々粗末な作りやうで右手の戸袋によつて駄菓子のやうなものがガラス箱に入れて置いてある。左手の方が腰を掛けられるやうになつて居てそこの座敷は家族の者の起き臥しをする處である。駄菓子箱の方は土間で向うの壁際に爐があつて鍋や何かが自在鍵に掛つて居る。さうして爐に接近した戸を開けると、野が見えるやうになつて居る。この茶店は少しく勾配ある土地、卽ちいくらかの坂垂れ(?)に成つて居るかと思ふやうで、極めて茫漠たる野が、この茶店のほとりに立つて見ると目に入るのである。そこには一帶に蜀黍が作つてあつて、重た相に傾いて居る穗をば、秋風が搖がしつつある。自分は嘗て見たことの無い野らの景色である　これだけならば夢として不思議に思ふことでも何でもないが、裏戸を開けた壁の外側の園も無い處に一人の病人が

寢臺のやうな物の上に臥せつて居るのである。重症の患者には相違ないが、顏の様子を見るのに中々さう衰へても見えない。寧ろ元氣な病人である。病人も口をきくでもなく、自分も話しをするでも無かつた。そこが夢だけに極めて漠たるものである。暫くするとその病人が立ち上つた。夢は唯これだけで畢つたが、その病人の様子などはホトトギスや日本を見て自分が嘗て想像しつつあつた先生なのである。想像しつつあつた先生其儘を夢に見るのは當然であるけれど、茶店や蜀黍の作つてある野らや又壁の外側の寢臺はどうしてそんなものを見たのか到底分らない。先生の容貌を明かに見且つ想像し始めたのはこの夢からである。この夢で見ない内は慥にかうであらうといふ相形を描き出すことは出來なかつたが、この夢以來はありありと目に浮び來るのであつた。その目に浮び來る所のものが、親しく自分が逢つた先生の容貌に酷似して居たのには、自分は實に驚かずには居られなかつた。こんな事を書いてつまらぬと人はいふかも知れないが、先生の事

を憶ふと何時もこの夢の記憶が喚び起されるのである。この事は餘り多く人に話さなかつた、先生にはとうとうこの夢の物語をする機會がなくなつて仕舞つた。機會はいくらでもあつたであらうがどうしてか話し出さずに終つた。（明治三十七年四月五日發行　馬醉木第十號所載）

旅行に就いて

余は旅行が好きである、年々一度は長途の旅行をしなければ氣が濟まぬやうになつた。兎に角全國歩いて見たい積りで地圖の上に朱線の殖えるのを樂みの一つにして居る。時には汽車や汽船の便を借りることもあるが、大抵は徒歩である。隨つて身體には苦勞を掛けて、歸りには顔が黑くなつて頰骨が出る。それで苦勞をすればする程、旅行の面白味が增して、話の種が殖えて來る。人に旅中の話をすれば、人も面白いといふ。自分は益々得意になる。偶々旅行して、どれだけ面白味があるのだと反問するものがあるが、旅行をしたことの無い者には、旅行の面白味は分るものではない。枇杷の木に黃色な實が熟したとて、下から見ただけでは味はわからぬ。一つでもちぎつて見れば、枇杷のうま味は直にわかる。旅行を

して見れば、旅行の面白味は直に知れる。素裸になつてただごろごろして居る者は、長い暑中休暇を短くして暮すものである。五十餘日を回顧して何物も頭に浮び來るものが無いからである。旅行をすれば、其處に追懷といふものがある。短い時日でも、長くするのは變化と活動とに富める旅行の賜である。特別の事情ある者は格別、然らざるものには、切に休暇中の旅行を勸める。多くの學生の間には、必便宜を有して居ても、躊躇して居るものがあることと思ふ。此は余が以前は非常な旅行嫌ひで、僅に一日の遠足でも出ることが稀で、素より修學旅行などに隨伴したことがなく、唯恐れてばかり居つたことに徵して、十分に想像が出來るのである。然し實際旅行をして見ると、案外に人が親切で一向苦にならぬものである。

余の旅行は極めて簡易な仕方である。最初の用意は旅費で、これが出來ると、豫め歩かうと思ふ方面の地圖を披いて旅費に相應した行程を定める。參謀本部の二

十萬分の一の分圖であれば、何處へ泊つて何處へ出るといふことが、大抵は大なる間違なく極めることが出來る。たとへば下妻と下館との間が幾里、下館と結城との間が幾里といふことが分るからである。余は何時でも手帳へ豫じめ宿泊する土地を記入して置く。全くの徒歩ならば一日五六十錢で余は十分に支へてゆくことが出來る。旅費と行程とが定まれば、旅裝の支度になる。余は大抵旅行の時期を夏から秋の初めと定めておくが、此れは旅裝の輕便を欲するからで、學生の旅行期と一致して居る。單衣一枚着たまゝで、肌衣はシャツとヅボン下と越中褌とを別に一組荷物へ入れる。肌衣は忽に汗じみて仕まふものであるから、時々洗濯を要するが、天候の如何によつて出來ないことがあるから、其時の用意である。

木曾街道もだんだん美濃に近づくに從つては、俗に金時の生れたと稱する沆きびそ山などといふ峠が聳えて來る。愈々街道十曲峠といふ峠一つで美濃になるといふ所に、木曾川へ落ち込む流れがある、日は炙くが如く照りつけるので、其流

れの岸で休息した。余は不圖洗濯をしたくなつたので、褌まで取つて清冽な水に押し揉んで、燬くが如き石の上へ引き延して、大巖の蔭へござを敷いて、洗濯物の乾く間眠つた。眼を開いて見ると綠深い山と山との間から見える眞蒼な空に、折々白い雲がふわふわと出てすぐに山へかくれる。綠樹の梢が搖ぐかと思ふと涼しい風が流れを渡る。一寸足を動かすと足の先が冷たい水につかる。實に何ともいへぬ心持であつた。洗濯物は一時間ばかりで乾いた。素裸になつて身體を洗つて、乾し上げた肌衣を着て出た時は生れ變つたやうであつた。洗濯物は少しは生乾でもよい。それは直に復た汗じみるからである。洗濯は宿屋で盥を借りてもよい。翌朝生乾でも復た汗になるからである。

荷物は外に地圖辨記帳鉛筆藥品位で、あまり澤山は持たぬ。此外に大切な物は辨當箱である。余の使用するのは、長さ五寸餘巾四寸餘深一寸四分である。旅行全體からいへば、金錢が第一の必要條件であるが、單に一日一日でいへば、辨當位

大切な物はない。殊に暑中の旅行で、人家の遠い所で腹がへつたら、とても仕末になるものではない、茶店があつたとしても支度をさせるに無駄な時間を費す。辨當を持つて居れば、自分の勝手な時に腹を滿たすことが出來るのみでなく、其處に一錢の冗費をも費さぬ。湯茶が無ければなどといふのは贅澤である。一厘錢も無駄をせまいといふのは、余の旅行中の嚴重な掟である、今一つ辨當が空になれば、荷物が頓に輕くなる。此時の心持は經驗が無ければわからぬ。荷物はこれだけで、これは二包に分けて所謂雨掛といふものにして肩へかける。脚は脚絆草鞋で固めるのは極つた話であるが、草鞋掛の足袋は底が拔けても指が現はれても決して捨てぬ。旅費の節約を旨とするからである。これで笠を冠つて蓙を着れば旅裝は完全する。笠と蓙とは晴雨共に旅客に大なる便宜を與へる。余は笠は必旅行毎に一かいを求めて好個の記念とする。蓙の便益に至つては余の爲に大いに氣を吐かねばならぬ。雨が後ろから降りかければ、蓙は後ろへ廻す。前から降れば

紐をしめて横へ向けぬ。嘗て旅客を濡らさぬ、日光がぢりぢり照りつけても同様にして暑さが凌げる。涼しい木かげて休息する時は蓙を地上に敷いて雨掛の荷物を枕にして一睡を貪る。疲れた身體を思ふさま延ばして路傍に轉がつた時の心持は、家の中で晝寢を貪る者には解されぬ。枕元を馬が通らうが、牛が通らうが平氣である。美濃の中津川から再び木曾川へ出る所に赤土の小松山がある。短かく痩せた女郎花がよろよろと咲いて居る。往來の人も無い寂しい峠であつたが、赤土の禿げた處の多い山だけに非常に暑い、此の峠に只一本の大きな栗の木があつた。栗毬が落ち散つて居る。余はろくろく栗毬もはらはずに、早速蓙を敷いて寢た。實に嬉しかつた。富貴の子が金錢の貴きを知らぬが如くに、僅に一本の栗の木の有り難さは、疲れた旅客で無ければわからぬ。此の如く蓙は起臥共に必要であるが、更に宿屋で無くてならぬ事がある。余は時として非常に粗末な宿屋へ泊る事があるのであるが、流石に其時困るのは寢具である。暑い時だから、蒲團は

着なくともよいが、敷いた蒲團に肌を觸れてはならぬ。此時に備ふるものが蓙だ。蓙を蒲團の上へ敷くのだ。

余は旅中は非常に節約をする爲め食物などはちつとも六かしい事はいはぬ。頰骨が少し位高くなつても、消化力が旺盛になつてるから、歸つてから二週間經過すれば太つて仕舞ふ。不攝生はよろしくないが、甜瓜位は俺くことを知らずに食ふ。滅相に大きな甜瓜があつたので、手拭に包んで比叡山へ擔ぎ上げたことがある。大袈裟な言ひやうだが、此甜瓜を持つたのは實際苦しかつた。然し四明が嶽の絶頂で琵琶湖から丹波丹後の山山、奈良の方まで一目にあつめて、徐ろにこの甜瓜を嚙つたのは甘かつた。唯冷水を貪るならば熱い湯を飲むがよい。熱い湯に砂糖を加へて飲むことに暑い時の好飲料である。余は關西の旅行で甘酒と飴湯とを味つて、此二つの味を解せぬものはともに旅行を談ずるに足らぬと思つた位である。

宿屋へ着けば、必宿料の談判をして安くさせる、必ず辨當を詰めさせる約束をする。一日は一日の節約をして、一日の豫定額の内から十錢でも二十錢でも翌日へ繰越が出來れば心は甚だゆるやかに感ずる。懷中は如何にしても日日に減却するばかりだからである。宿料を安く泊れば宿屋に不平が起らぬ。風呂の加減も聞いて呉れる。お給仕もして呉れる。床も敷いて呉れる。余は却て氣の毒に感ずる位である。余が明石の宿屋で粗末な辨當を貰つて兵庫まで來ると、ある工場の傍に腰掛茶屋があつたが、荷車引等が飯を喰つて居る。余も鯖を一皿注文したら鯖が八匹あつた。幾らだと聞いたら二錢だといはれて驚いた。以上のやうな貧乏な旅行を我慢さへすれば旅行は格別苦になるものではない。これを人に語れば人は面白いといふ。旅中に錢が無ければ身體に苦勞がかかるが、後日になれば其苦勞が面白い話の一つになる。旅行の面白味は此後日における追憶がむしろ最なるものといつてよい。敢て長途の旅行でなくても、僅に二日か三日でも其時の事を考へ

ると、相應に長く感ぜられる。五十日經過しても素裸でごろごろして居たのでは、唯ごろごろして居たといふに過ぎぬ。時日を長くするも短くするも方法の一つである。學生たるものは宜しく此五十日の休暇を活用すべきである。旅行の面白味に伴ふ利益は贅言を要せぬ所で、實行して見ればすぐに了解される。二日でもよいから出たまへ。さうして家を出る時には必ず辨當箱へ家人の焚いた飯を詰めることを守りたまへ。此貧乏な旅行に最大切な節約の第一歩だからである。

最後に一寸言ひおきたいことがある。それは旅中における余の名物癖である。敢て名物といはなくても、例へば會津の若松へつくと、非常に金鍔燒の多いのが目につく。此時兎に角金鍔の一つ二つを頰張つて見る。蓙を着た旅客が、店頭に金鍔を頰ばることは決して人目につく憂が無い。羽前の山形近傍に、茶店に青い餡をつけた美しい團子がある。此青い餡は枝豆を擂り潰したのでヂンダと稱するもので、ヂンダをつけたのだからヂンダ團子だといつた。鹽で味をつけたので、甘

い物では無いが面白い物だ。こんな道樂は漸く二錢の奮發で十分である。山形の山中で徑一尺に近い煎餅があつたから名を聞くと、オスゴレ煎餅といふのであつた。一枚いくらだといふと一錢づつであつた。近江の三井寺の觀音といへば、湖水を一目にした形勝の地であるが、此處で力餅といふのを團子のやうに串へ立てて賣つて居る。一皿が二錢であつた。近江から京都へ越える逢坂山には走り井の餅がある。餡を中へ包んで三角形にした器用に出來た餅である。一盆十個で三錢。木曾街道では鳥居峠の蓬餅、上松附近の餡の餅、木曾の中心にして天下の形勝なる寢覺へ出ると寢覺蕎麥、須原には種々の花を並べた花漬などがある。中にはやや高價な物もあるが、大抵は二三錢から五錢以內で樂める。貧乏な旅客でも懷中にちつとの心配も要せぬ。餅のわづか一皿でも、其土地の非常な好い記念となる。消化力の旺盛になつて居る旅中には、令飯を喰つたとて、面白い名物であつたら、一皿位では胃に障るやうなことはない。此道樂は是非共學生にも勸めた

いと思ふ。これも後に旅行における樂しき追懷の一つとなるからである。（明治四十年七月作　山島の渡所載）

寫生斷片

余は天然を酷愛す。故に余が製作は常に天然と相離るること能はず。此に揭ぐるものは長き文章の一部にして我が郷の田野の寫生なり。一は其冒頭にして二は其結末なり。素より斷片なり、一篇の文章としては見るべからず。余は近時本誌の文章の天然描寫の一段に於て多大の進境を認むると共に喜悅の念禁ぜざるものあり。

天然必しも悉く美なるに非ず。然れども他の美ならずとする所のものを以て自らは之を美なりと感ずるに何の妨かあらむ。而して自ら感じたる處を極力文字に現はす時、直ちに讀者を醉はしむことを得べし。これ文章の力なり、吾感情の尊き所以なり。余が此の寫生の如きは極めて拙なるものな

りと雖、天然描寫に志す諸君の爲めに多少の參考たるべきを信ず。

併せていふ。余は本誌過去一年間の製作品に就いて及び文章に就いて余が考ふる處を述べて次號に發表せんとす。甚だ多忙ならざる限り必ず其約を履むべし。

一

小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて、他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に添うて狹く連つて居る、田圃を越して竹藪交りの村の林が田に添うて延びて居る。竹藪の間から草家がぽつぽつと隱見する。帚草を中途から伐り離したやうに枝を擴げた櫸の木が、そこにもここにもすくすくと突つ立つて居る。

田にはもう掛稻は稀で、稻を掛けた竹の「オダ」がまだ外されずに立つて居る。

「オダ」には黃昏に鴫でも來て止る位のことだらう、見るから淋しげである。鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので、近くの水は其蔭に隱れて見えぬ。のぼる白帆の梢に半分だけ見えてしかも大きい。土手の篠を越えて水がしらしらと見えるあたりはもう遙かの上流である。だから篠の梢を離れて高瀬舟の全形が見える頃は白帆は遙かに小さく蹙まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連つて見える。更に其上には筑波山が一脚を張つて他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである　其赭い頂上に點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍不透明な空氣は尙針の尖でつつくやうに其白い一點を際立つて眼に映ぜしめる。櫟の林は此の狹く連つて居る田と、鬼怒川との間をつないで横につづいて居る。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木はびつしりと赭い葉がくつついてをる。

岡の畑は向うへ幾らか傾斜をなしてをるので、中央に立つて見ると、櫟の林は半隱れて低い土手のやうに連つて見える。林の上には甲毛の山々が雪を戴いてそれがぼんやりと白い。

此の如き周圍を有して岡の畑は朗かに晴れてをるのである。土は乾き切つてをる。既に二三寸に延びた麥は岡一杯に薄く綠青を塗つたやうである。

そこにもここにも百姓が小さく動いてをる。麥畑をうなつてをるものもあるが、大抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つてをる畑の緣には馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉がつてをる。此俵があれば、遠くからでも芋掘の人々であることが解る。

馬は退屈まぎれに、どうかすると茶の木をむしることがある。其時一人が驅けて來て轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせば、復たおとなしくなつてぱさりぱさりと尾を動かしてをるのである。

各自の手元は忙しい。しかし岡は只長閑なさまである。日は稍傾いた。忽然筑波山の絶頂から眩ゆい光がきらきらと射して來た。毎日同一の時刻に此の光は此の岡へ強く射し掛けて來るのである。百姓の或者は筑波山で火を燃やすのだらう抔といつてをる。然しそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば數時間に只これだけである。ガラス窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘の人々は勿論此の光は知らなかつた。

雨毛の山々がぼんやりとした日は西風が吹かないので、隨つて暖かい。暖かい日は土いぢりの芋掘りには此の上もない日和である。

街道へ下り口の畑にも、一組芋を掘つてをる。隣づかりの桑畑は葉が大凡落ちて其芋畑へも散らばつてをる。青いよわよわした小麥が生え出してをる。小麥は芋の間に二畝づつ作つてある。芋の莖はべつたりと茹でたやうである。女は芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖刀のことである。後から男

が鍬のさきで芋の株を掘り起す。ぴかぴかと光る鍬の先を、ざくつと芋の株へ斜に突き立てて、ぐつと鍬を持ちあげると、大きな土の塊りがふわりと浮きあがる。鍬をそつと抜いて先の株へ移る。小麥へ障らぬやうに極めて丁寧に掘つてはさきへさきへ行く。女は莖を切り終ると後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかり揚げてどさりと打ちつける。こまかな土がほぐれて、こごつた小芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩手の平でぶりぶりとはがして、やがて俵を立てて入れる。さうして穴の土を手のさきでならして、先の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた丸い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其土をあとからあとからとこまやかに乾かして行く……。

二

世間は復た春が蘇生つた。鬼怒川の土手の篠の上には白帆を一杯に孕んで高瀨船

がしきりにのぼる。船頭は胡坐をかいたまま時々舵へ手を掛けるだけで船は舳がぢやぶぢやぶと水に逆つてのぼつて行く。冬の辛さがここで一度に取り返されるので、此南風の味を占めては迚ても職業がやめられぬといふ時節である。

篠の中には鳥馬がそつちへこつちへ移りながら、下手な鳴きやうをして菜の花から麥畑へ遊びに出る……。

麥が刈られて、さうして椋鳥が群を成して空を渡る頃、村のうちには毎日麥搗く杵の響が大地をゆすつてどこかに聞える。麥は夜中から搗きはじめて、朝になれば各一石の量を搗きあげる。椋鳥はしらしら明に西から疾風の響をなして空を掩うて渡る。さうして夕陽の沒する頃西へかへる。空を遙かに飛ぶ時に、麥搗は杵持つ手の右と左を持ち換へながら、今日も日和だと叫ぶ。

椋鳥が少なくなつて、稲刈になつた。刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて、また冬が来た　鵜がよわよわした羽を擴げて切ない鳴きやうをして林から刈田を

飛びめぐる。さうして寒さはまた小春にかへつて、人々は岡の畑に芋を掘つて居るのである。

短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に眞倒樣に落ちつつある。横にさす光は樊の葉をかすつて赭い櫟の林が一しきり輝いた。

畑のへりの茶の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る見る濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稲を刈る頃から、夕日の射し加減で、筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いて見れば、嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて殘照がなほ明かな數十分間は彼等の仕事が尤も捗どる時である。晩餐の支度をする爲に女等は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。

女等が去つてから百姓の手元が漸く薄闇さを感じた。頬白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓は自己以外には頓着無しにせつせと芋を俵へつめる……。

村の竹藪から昇つた青い烟は畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで届かうとして居る。其時黄昏の中を百姓は田圃から相前後して歸つて來る。何處ともなく鴨がききと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押し込んで、やがて夜の手は田圃から畑から、さうして天地の間を掩うた。

（明治四十二年一月二十五日發行　茨城縣立下妻中學校雜誌爲櫻所載）

本誌（鶯櫻）過去一個年間の文章に就いて

此處にいふ所は余が寫生文を作る者の立場に居て見た文章で議論や說明の文章は其範圍外である。又言文一致以外の文章も與らぬ。一言にして盡せば過去の一個年間に於ける本誌上の文章は漸を追うて進步して居る。然うして最初と最後との比較をして見ると驚く程の相違である。近來は語句の斡旋も自在に且つ自然に成つて如何にも心持のよい現象である。以下重なる作品に就いて短評を試み、如何に進步せるかを檢し、其間少しく余が考ふる所を述べて見ようと思ふ。善くいふ文章もあるかはりに惡くいふ文章もある。此は作者銘々に十分我慢をして聽いて貰ひたい。それと廿三號から卅四號までが滿一個年であるが廿三號に文章が無いから此を除いて最近の卅五號を加へる。讀者諸君はどうか本誌の一綴を前へ置い

て余の言ふ所を聽いて貰ひたい。短評を加へる文章を眼前に置いて見なければ更に要領を得まいと思ふからである。

廿四號には長瀨薫二郎君の雪の朝がある。本誌の文章としては僅に曙光を放つたものである。草創の際に屬して居る爲か遺憾ながらまだ及第には程遠い。卅五號の染谷森雄君の雪の朝と比較して見ると文章といふものの價値及び文章を作るものの眼の着け所がどうであるかといふことが分るであらうと思ふ。長瀨君の爲にも成らうと思ふから氣の毒の感はあるが此の一篇の最後に比較論評して見ようと思ふ。染谷君のは傑作である。文章は二ケ月絶えて廿七號の日記あはせになる。坂入久雄君のは同君の將來は何かが出來相に思はれる丈で取り立てていふ程のことはない。大槻五郎君のも佳作と稱する譯には行かぬが他人の模倣を許さぬ處がある。「三四人の子供が帶の樣な流の底へ小さな足模樣をつけてめだかを捕つて居た」といふあたりがそれである。此は大槻君の手柄である。何でもないことでも

よく見ればかういふ風に面白くなる。足で模樣を描くなどといふことが尤もよく子供に適した寫し方である。作者はそれ程に思つて書いたのではないだらうが實際を善く見たから出來たのである。寫生の貴重なのは此所である。それでかういふ綿密な觀察が號を重ねるに隨つて發達して行つてるから愉快である。兎に角大槻君のは模倣し難い所がある。煎餅の所も結末をつける手段としていい。だが餘程注意しないと下品になる。長瀨君のでも坂人君のでも實際を見なくても誰にでも出來相な文章であるのが物足らぬ處である。

廿九號の我が庭園。大久保甫一君のはうまい。金魚も紅杜鵑もよい。築山にのぼると赤い鳥居が杉の間から見えるといふ段になると机の上で考へたのでは出來難いものに成つて居る。他人が漫然筆をとつたとて到底及びもつかぬといふ點が文章の生命である。大久保君の此文章あたりから漸く本誌の文章も物に成り掛けて居る。然しまだ足らぬ。

暑中休暇の後の卅一號は著しい進歩を示して居る。藤嶋琴夫君の日誌の一節、佐藤政雄君の忙しき一日、坂入久雄君の雨後、此の三篇皆振つて居る。藤嶋君の朝顏の花なども面白い所を捉へた。文中弟と妹とが書いてあるが、何だか此の朝顏の花も弟と妹とを相手に打ち興じた樣に推察されて懷しい感がある。中干の所もいい。文章の結末をつけるためには必要なことである。文章は始よりも終が力の籠つたものでなければならぬ。此は必然の法則である。佐藤君の忙しき一日。此は又筆路の暢達した、相應に變化のある、纏つた文章である。養蠶の忙しさが目に見える樣である。然し上簇の所だけでは餘り普通で又餘り單調に失する。だが作者はそんなまづい手段には終らなかつた。其處へ蟬取を挾んだのは此の單調を破つて文章に幅も奥行も拵へて居る。大手柄である。それで其蟬捕もなかなか善く描いてある。作者は一篇の結末をつけるのには再び養蠶のことが出してある。注意が深いといつていい。口のまはりを黑くして食べた祝餅は、（此處一字不明）のこ

（此處二字不明）のキリギリスで、蟬捕の結末までつけてある。一篇の結構と云ふことを作者がそれ程に思つたかどうか知らぬが終始立派なものであつた。坂入君の作は實は前の二篇は孰れも拙かつた。然し、雨後の一篇では余は全く驚かされた。材料の捉へ所が實にうまい。さうして筆路にちつとも澁滯がなく、標題の雨後の如くしつとりとして味がある。筆を執る時分餘程眞面目であつたと推察する。本誌の文章にもどうも氣取つた浮かついた語句の見えることがあるが實に厭な感じがする。文章を書く時には何處までも文章其物に對して尊敬の態度を失はぬ樣にしなければならぬ。利口振つた口吻や人を茶化したやうな或は自分の頭に無い悟りめいたやうなことをいつたりするのは大の禁物である。さういふ點に就いても此の一篇は注意すべきものと思ふ。それで牛の姿態動作の寫生が緻密に遺憾なく發揮されて居る。田野の雨後がよく現はれて居る。短文だけに始から終まで皆うまい。蟬の聲が此の短い文に相應してちやんと結末をつけて居る。坂入君の以前の

文章は餘り概括的であつた。雨後は面白い一部分を捉へて細叙して居る。その相違が文章の價値に著しい相違を示して居るのである。

寫生文家は誰でも知つてることであるが、寫生文は或る天然人事を寫生する文章で、其天然人事を讀者の眼前に彷彿せしむるためには精細の描寫を要する。精細に描寫するといふことは一方極端に省略することである。卽ち無駄な部分を省くことである。無駄な部分を省いて必要な部分に力を籠めるからいい所は益々善く見えるのである。無駄な部分を省かなければ一篇錯雜して善い部分が惡い部分に掩はれてしまふ。讀者は倦怠の念を起す。先づ無駄を省くといふことが作文の第一階梯である。

以上三篇、皆歸省中の寫生であることが頗る注意を要する。比較的單調な學校生活から放たれて故郷に歸れば周圍が皆新しい刺戟を與へる。總てを興味を持つて見ることが出來る一方からいふと材料が皆珍らしいものになつて居る。心に興味

を感じて珍らしい材料を描くから出來たものが面白くなるのである。寫生は一つは材料に因るといふのは此處である。卅四號の文章の如きも旅行といふ新たな刺戟であんな傑作が出來てゐる。學生の在學中は自然の約束で各科平均に勉強しなければならぬから文章に專らにすることは出來ないが、暑中休暇とか修學旅行とかいふ特別の場合には其心持で居れば結果必ず刮目して見るべきものがある筈である

卅三號、外池達之助君の郊外、非常に達者な筆である。然し前半は概括的で錯雜して居る。餘り材料を排列し過て居るからである。「山腹に切餅を乾した樣だ」といふ筑波の町の形容はうまい。後半牛小屋の處は秋晴の長閑な感じが十分で敬服する。「人が居ない樣で居た處など絕妙である。此一篇も前段にいつた如く無駄をもつと除けばよかつたのである。「平和の色が溢れて見える」とか「如何に平和と詩趣とに滿された眺めであらう」とかいふ云ひ方は耳障りである。牛小屋の光景を

自分が興味を持つて細叙すれば平和な感じも長閑な感じも讀者は十分に味ふことが出來る。讀者が折角恍惚として居る處へ不調和にも平和とか詩趣とか云ふ悟りめいたことを云はれると、俄然として興がさめてしまふ。どうかすると中學生などは德富蘆花の自然を寫した悟りめいた文章にかぶれたがる弊がある。諸君はまだあんなことをする柄ではない。唯眞面目に寫生すべきで、本當に眞面目に成つてをれば才走つた文句などが出る筈はないのである。單に文章としては諸君の傑作は德富蘆花の自然を寫した文章よりも面白い。慥かに面白い。上手なのではない面白いのである。其面白く讀ましめる祕訣といへば唯自分が非常に面白く感じたことを眞面目に本氣に成つて書くこと以外に何もないのである。

卅四號の文章は特筆するに充分な價値がある。柴準平君の函根越、橋詰倭文雄君の中禪寺湖、外池江山君の峠道皆傑出してをる。函根越の靜岡縣の木標を見た所などは、眞情が溢れて居ていい。誰も注意せぬ樣なものでも作者が面白く感じて

それを其儘いひ表はせば直ぐに面白いものに成るといふのが此で解るであらう。寄木細工の形容も山腹の畑地を言ひ盡して居る。玉蜀黍を極力描いたのも誠にいい。無駄を省いて必要な部分を極力精細に描けと云ふのは此所である。結末の牛もいいが、もつと素直に云ふ方が更に善い。此では少し拵へものらしくて眞面目の氣が乏しい。「突然後から追ひかける樣な牛の聲が聞えた。驚いて見ると斑な大牛が首を低い垣越に突き出して小さな目を光らしてこちらを見て居た」と云ふやうにしたら厭味が少なくなるだらう。短歌の如きものに成れば文字極めて少ない丈唯一字が一首に非常な影響を及ぼす。函根越の如き短い文章になると、唯の一句が全體に大なる關係を及ぼす。何處までも語句は謹愼して使用せねばならぬ。少しでも浮かついてはいかぬ。少さな目を光らしたといふ一句は非常に善い。中禪寺湖、傑作である。一體によくこなれて澁滯した所がない。戸を開けて湖水を見た所でも顏を洗ふ所でもいい。殊に英國の海軍大佐の乘つたボートなどを捉へ

たのは中禪寺湖を動かないものにしてしまつた。船頭が英國大佐の死んだあたりを說明した抔と云ふ所も前のボートを活かしてをる。さうして中禪寺湖其物を活かしてをる。前の船と後の船とが見える計で艪の音が霧の底から聞えると云ふあたりも讀んでしんとして來る樣な感じである。英國大佐の死と云ふやうな噺は其霧を更に心細くさせるので此使ひ方は甚だ巧である。橋詰君はそんなことを思つて書いたのではないだらうが、實際を注意して居てそれが頭に殘つたから書いたのだらう。此の實際を疎略に見ないといふことが作文の秘訣である。結末を船頭の言で止めたのもよろしい。峠道、作者の達者な筆つきは此に至つて益々發達して居る。筆つきがなだらかで讀むにちつとの苦痛もない。雨の注ぐ熊笹でも霧のひまから見る紅葉でも、ゆかしく囁く水の響でも皆讀者の心を惹く。達者と云ふ點に於ては函根越でも中禪寺湖でも其敵ではない。然し其實質からいふと峠道は劣つて居る、要するに峠道は、峠道其物が霧で變化を發見し難かつたかも知れぬ

が、文中何處といつて別段に力の這入つた所がなく餘りに平板である。函根越や中禪寺湖には格別に目につく所がある。即ち山と稱すべき點がある。斯ういふと峠道はまづいのかと云ふにさうでない。峠道は傑作である。余は外池君の才筆を惜んで殊更に苦言を呈するのである。達者な者はどうかすると達者に任せて書き過ぎる。本誌の文章でも四年五年に佳作が絶無で一年二年あたりに傑作のあるのも一方は達者で書きすぎるのと、一方は本氣に眞面目になつて居るのとの區別から來る現象である。今傑作を出した諸君でも達者になるに從つて此の眞面目な態度を失ふ樣なことであつたら乾度文章は見られなくなつてしまふ。以上暑中休暇以後の作品は各作者特有のものに成つて他人が机上で捏り出すことの絶對に出來ないものである。余は此の現象が愉快でたまらない。卅五號の染谷森雄君の雪の朝を評して本篇を終ることにする。廿四號の雪の朝と比較して見ると染谷君のは語句が自然に出てをる。何時もは七時頃迄床の中にむぐつて居る僕……起きずに

をられない」此の云ひ方は拮据てさうして不自然である。「大分寒い朝だと思つて起きて見ると思ひがけない雪である」此はすらすらとして極めて自然である。南天でも染谷君のは簡潔に叙してあつて其後へ全く自分の働きから出た松の雪を書いてある。松の梢に雀の止つてをる丈では普通であるが雪が屋根の樣だといふので生命がある。鬼怒川の土手のあたりもうまいが雪に足あとのない所やツグミなどが殊にいい。長野の鐘も結末がうまく出來て居る。染谷君の雪の朝は全く染谷君が其境にあつたからはじめて出來たので、文章はそこにならなければ成らぬ。卅四號のは修學旅行の後だから傑作が出たのかと思つたら、すぐ又雪の朝のやうなものに接するのは諸君の進境を十分信じていいことと思ふ。殊に此の雪の朝が卽題だと云ふに至つては、三嘆敬服する。

以上の外の諸君のでも注意すべき作品はある樣であるが暫く此所にはいはぬ。筆を擱くに臨んで余は諸君の天然描寫の進境を祝して天然を愛し天然を樂むものの

幸福であることを告げたいと思ふ。如何なる食物もうまく食へる人は幸である。それは、胃の消化力が旺盛だからである。然し其消化力を常に旺盛ならしめるには適度の運動を要する。他人の省みぬ天然の現象をも常に愉快に見ることの出來るものは、强健の胃をもつて居る人が食物に對する樣なものである。それで自ら天然の趣味を更に養つて行く必要がある。諸君は各科に渉る勉强の餘暇に十分天然を味ふことが出來る筈である。天然は寸時も我々を離れないものである。

（明治四十二年二月二十五日發行　爲櫻所載）

「木像」評

この書物が私の手に來たのは、六番目であります。さうして非常に綺麗に取扱はれてゐました。それは嬉しい事でありました。それで頁を繰ると、最初に心持よかつた。

この作者の作物は調子が低いといふ一般の評であるが「木像」もさうである。何處といつて讀者を吸ひつける處もなく、考へさせる處もない。只作者自身が吾々よりも世間といふものを知つてゐると思はせる丈である。要するに潤澤のない西風が吹いて通つた後の「ノガタ」の畑を見るやうな感じがする。さう思ふと表紙までが畑の土を見るやうである。篇中大阪の料理屋の娘の酒をあふるあたりは非常に面白かつたが――も一つ小學の先生も面白かつたが――竹丸の心持の變化し

て行く徑路も餘りに疎略に描かれてゐる。要するに腑に落ちかねる。人物の行爲に首を傾けてる間に讀者はコソツパイ處をずんずん引つ張つて行かれるのだ。要するにたいした小説ではない。自分は只この一篇でこの人の作風を知り得た事を喜ぶのである。

自分は舊臘奈良の冬を見に行つて、この小説で知つた若宮の祭のお假屋を見て來た。其の時は別に心づかなかつたが、何でも今思へば祭の後と見えて、芝生は人のふんだあとのやうであつた。祭は見る機會に接しなかつたのだ。尤も奈良へは泊りもしなかつた。三度目の見物であつたからだ。……「木像」中の描寫も今少しどうにかなりさうなものであつた。綺麗に見て後へ廻してくれた人々に敬意を表しつつこんな事を書く氣になつて見た。（二月十一日）

註。下妻中學校の先生達と、私達とで、本を買うては順ぐりに讀んだことがある。長塚君がこれを書いたのは、明治四十四年の春らしい。會員の中に

は馬鹿なやつもゐて、口繪をむしつたり、中を切拔いたりするのがあり、人の迷惑は何とも思はないで讀まずに放つたらかすのもあつた。長塚君はかうした感想を時々紙のはしへ書いて貼りつけておくのだつた。（横瀬夜雨氏記）

「木像」は上司小劍氏の小說である。（編者記）

（山鳥の渡所載）

寫生文を作れ

自分は、此の長い暑中休暇を徒らに過さない工夫の一つとして、諸君に文章を作れと勸告したい。文章の修業といふことは、比較的多忙な平生に於ては、容易なことでは無い。然し殆んど絶對というてもいい程、心身の自由を與へられた暑中休暇は、幾らでも文章を上手にさせる稀有の機會である。假令多少の例外はあるとしても、學校に在る時よりも甚だしい苦痛であると嘆ぜしめる程、諸君を拘束し虐待する父兄は嘗て有るまい。加之盛夏の天然は開放的である、諸君が或程度迄、放恣の態度を敢てしても、寛大な盛夏の天然は、笑つて之れを許容し、且つ愛撫する。人間禮儀の要件であるべき衣服を棄て去つても、之れを咎めない計でなく、爽かな凉しい手を以て、薄い肌膚に快い摩擦を與へる。夫れが冬の季節で

あるならば、其一滴が襟元に落ちてさへ、全身を悚然とさせる水の……河や沼の中にさへ、安らかに諸君を導くのである。其處には、蓮や、蓴菜や、睡蓮や、又は奇異な形狀を保つて居る蒲の穗が、到る所に裝飾をなして居る。盛夏の天然といふものは、此の如く無限の好意を有つて、諸君を優遇して居る。諸君は凝然と靜思して見給へ。成程と首肯しなければなるまい。天然の現象には、心がないと見ても、それは咎めることは出來ない。然しながら、硝子の板の上に落した一滴の水も、只一滴の水として取扱ふに何の誤もないが、更に此を檢微鏡の下に置いて、種々な生物が蠢動しつゝあることを慥め得た時に、諸君は果して驚異と喜悅との念を禁じ得るであらうか。誰でも眼を開くことに於て、他人よりも餘計な幸福と快樂とを享受することが出來る。一滴の水にも生物の世界が存在して居ることを學び得た筈である諸君は、此れを知らない人よりも、餘計に幸福で、且つ快樂を感じなければ成らぬ。寸時も此れを離れ去ることの出來ない天然の現象に於

て、殊に現在我々を抱擁して居る盛夏の天然現象に對して、明かに無限の好意を感ずることが出來たならば、書間の長き所以を察して、我々は寧ろ、其處に感謝の意を表明せねば成らぬ。只一滴の水のみでは無い。一塊の土にさへ、一草の尖端にさへ、此れを捉へて研究する人の眼が、緻密で精透である時には、其發見が學者として不朽であるべき或者が祕密に包まれて居るに相違ない。天然現象を趣味の眼から視る時に、我々は何時でも其處に、嫌惡すべき分子の介在してゐることを認め得ないのである。我々は四季の孰れに於ても、愉快でさうして感謝の念を起しつつあるのである。然し自分は、今俄に、諸君に向つてさう感ぜよとは勸めない。諸君は必要から促されて、絶えず多忙に襲はれてゐなければならぬ。さういふ間にあつて、暑中休暇が、諸君を安樂境に開放して、各自の心の赴くままに任せようとして居るのである。諸君の多くは、必ず天然を心ある如く見ることには馴れてゐないのみでなく、自分が前に云つた樣なことを聞くと却て驚くかも

知れない。それはどうでも善い。只自分が前に云つた事に少しく心を止めて、解つても解らなくても天然界に向つて、以前よりは強ひても、深く觀察しようとして、不斷の注意を怠らずに居て見給へ。只一滴の水にも學術上の無限の興味を惹起し得るやうに、諸君は必ず何物かを獲得するに相違ない。諸君は注意して何物かを獲たならば、必ず之れを文字に表現する必要が有る。其の時に文章が生れるのである。仔細の觀察をすれば、天然は必ず面白い形になつて眼前に迫つて來る。面白いと感じた時に此れを文字に表現すれば、必ず其作者の氣分といふものが、そつくりと浮んで來る。氣分は心持である。作者が面白いと沁々感じて書くと、面白いといふ文字は一箇所も使つてなくても、其出來た文章全躰の上に何處となく面白かつたらうといふ感じが浮んで、讀者の心を動かすのである。然しこれが、面白いとか愉快だとかいふ感情は、時日を經過するに隨つて漸次薄らぐことを免れないから、成るべくは餘り時間を置かないで、作らなければならぬ。さうして

出來上つたものは、前にもいつたやうな當時の氣分が浮んで居るから、後日になつて假介どんな巧妙な文字を斡旋しても到底及ぶ可からざるものでなければ成らぬ。詰り其時でなければ出來ないものが出來るのである。それだから諸君はさういふものを作り得たならば、それは必ず生涯の記念として存在せしむる値打が有り得るのである。本當に氣分が現はれたものは、他人には眞似が出來ない。自分でも後では出來ない。要するに一方からいへば、自分自身の實だとも云ひ得るのである。以上書いたことは、餘りに抽象的で、或は了解し難い點が有るかも知れない。更に自分は實例に就いて、少しく述べて見たいと思ふ。

寫生文といふのは、一言にして盡せば天然人事の眼に見、心に感じたことを、見た儘感じた儘を書く文章である。例介ば夏の夕暮近く、砂沼の岸に立つて見て居ると、或は斯ういふことが氣に着く筈である。それを綴つて見るならば、

汀には、比較的大きな川楊が涼しい蔭を作つて居る。

落ちかけた日の光は、もう川楊の錯綜した枝や葉を透す程暑くないばかりでなく、其明るさが却つて、沼の水を涼しく見せてゐるやうである。沼の水は如何にも平らである。自分の居る足もとに、かなりの面積をとつて睡蓮の葉が相集つて浮いて居る。ずつと先の方へ行つても、岸に近くぽつりぽつりと睡蓮の葉の集りが水を掩うて居る。それも皆水面と共に平らかで、さうして極めて、静かである。其平らな葉の間からは、白い小さな花がぽたぽたと、先端ばかり表したやうにして、然かも、もう眠らうとして、花瓣を閉ぢてゐる。此の葉でも花でも、僅になよなよとした蔓で底の土にくつついて居るのである。見るから可憐である。對岸の低くさうして濃厚に繁つた、林の梢から、大きな雲の峰が無理に引き延ばされた樣に思ひ切つて、長くむくむくと騰つて居る。非常な恐ろしげな形をして居ながら、唯静かに、其形の大さを增して居る。それでもう見えなくなつた夕日の、

先を一杯に浴びたのか、燃える火の樣に、赤く成つた雲の峰は、段々に引き延ばされながら、燃えるやうな、其ままに沼の水に映つて居る。遙かに向の方から、微かに花の白く見える睡蓮の群りを越えて、こちらへ屆き相に、水の上にも輝いて居る。斯うして何時まで經つても靜かであらうと思ふ樣な水面に近く忙しげに飛び交して居る蜻蜓が、時々戲れてでも居る樣に低く降りては尻でちよんちよんと水を打つてついと飛ぶ、水面は其爲めに微動してものうげに波紋を描く。

先づ恁んな臘梅に書くことになる。自分は今不圖思ひ出して書いたのだから、更に實際の寫生をした樣に適切に行かない處を有して居るが、沼の幾部分は表はれると思ふ。此れが敍景である。天然の描寫である。然し此れ丈けのことでは、もつと巧妙に描寫したとしても、何だか足りないといふ感じが起る。夫れは人間が一向出てゐないからである。處で天然といふものは、全く天然で存在してゐない

て、我々の觀察の仕方一つて、極めて都合の善い形で現はれて呉れる　川楊の蔭に尙暫く立つて時刻の移るに任せて居れば、或は更に怎んな事が、眼に觸れるであらう。

雲の峰は餘りに强い力で引き延ばされたからだと思ふ樣に、段々林の梢に近い根の方が薄く成つて、軈て燃えるやうな赤さが褪め掛けた。同時に水面の赤さも洗ひ落されたやうに成つて、微かに白かつた睡蓮の花が却て目に着いて來た。薄らに黄昏が逼つたのである。此れでも微風が渡るのか、拭ひとつたやうな水面に、花崗石の砂でも敷いた樣に白く見えてる處が有る。それが滑らかな水面と、きつかり直線で界して、幾箇所にも現はれてゐる。「をぼそ」といふ魚だらう、頻りに白い鱗を光らせて、一尺二尺位の高さに跳ね揚つて直ぐに落ちて畢ふ。沼の靜かな黄昏が小さな「をぼそ」の爲に僅かに破られたやうな形である。雲の峰は漸く白つぽく灰色に成り

かかつたら、ぴかぴかと稻妻が光り出した。依然として靜かな儘である。微かな響をさへ傳へない。「をぼそ」の跳ねるのも少くなつた。「をぼそ」は我々に對しては惡戲者であつた。我々が釣を垂れる時彼は鉤を啣へるには足らぬ小さな口で少しづつ餌料を啄いては泛子(うき)をちよいちよいと動かして我々に氣を揉ませる。さういふ時に鉤を擧げて見ると、屹度餌料がたらされて、鉤の尖が出てゐるのである。此の小さな惡戲者の夕の戲れは、迚ても此の平靜な沼を亂す程には到らないで止んだのである。

突然小舟が一艘、少し先の葦の蔭から出だした。老人が一人坐つた儘舳に居て、櫂で忙しく水を撥いてこちらへ來る。一寸手を止めては舟の中から細い篠の竿を出して水へ立てて、それから又忙しく舟を漕ぐ。彼は魚を捕る爲に置鉤を置いて歩くのである。さう思ふと先刻から遠くの方に舟が出たと思つたのがそれであつた。自分の近くへ來た處を見ると、鉤へ田螺か

何か餌料をくつつけて、篠を立てては舟を漕ぐのが中々手早である、薄い板で拵へた舟は極めて輕いのであらう、艫に一人乘つたばかりで艫の方があがつて少し水から離れ掛けて居る。舟は遠慮もなく睡蓮の間を漕いで行く。小さな白い花は舟の底に敷かれて、舟が去ると共に、艪の處から以前の如くひよつこりと頭をもたげる。小舟は其の後に太い線を引いて、復た遠くへ去つた。夜が近づいた。根のない雲の峰はいつか崩れて畢つてゐた。

要するに此れ丈けのことならば、諸君は平生何の氣なしに、見て居るのに相違ない。然し斯うして一篇の文章として見ると、うつかりしてゐた凡ての物が、どうやら活きて來相に思はれるであらう。唯此の文章は舊い記憶を辿つて、此處に自分の說を叙述するのに、便利な方法として書き放しにしたので、構想も疎略で、

鍛錬も缺乏してゐるのだから、寫生文としては固より獨立し得べき値打は存在してゐない。第一に叙景ばかりで、此れを背景とした人間の運動が加はつて居らぬ。其れでも此一篇で見ると、最後の漁夫が必要なのである　此れが若し實際に目撃して書いたのならば、雲の峰でも、小舟の過ぐる道でも方角が現はされねばならぬ。舊い記憶を辿つて、漸くのことで、書いてみると、決して疎略に取扱つたのではないが、明瞭に讀者の眼前に展開させるといふには、どうも足らぬ處がある。

此れを諸君がまだ新らしい記憶から愉快に書いて見るならば、それは生き生きとしたものが出來なければならぬ。諸君にしても我々にしても眞實が第一の堅固な墻壁である。眞實を離れては何物も存在しないのである。今一つ例を擧げて見る。

季節にしては餘りに暑い日だと思つたら、夕方になつてごろごろと雷が鳴

り出した。こつちとは全く無關係だといふ様に遙か遠くて鳴つて居る。其の音響は丁度地上を渡るやうに鈍く傳はつて來る。風呂で汗を落して居ると雨がざあつと降つて來た。雷はだんだん大きく鳴り出したがそれでも餘程まだ遠いらしい。雨の足もさほど激しくない。浴衣を引つかけた儘に簾を下ろして外を見て居ると、有繋に涼しい。

空が廣く見えるやうに、首を低くして廂の下から覗いて居ると、少し晴れかけた。一體自分の住んでゐる庭は陰欝で、僅に二三歩で限られて居る低い竹垣の外には、柿の木が一杯に枝をひろげて、其の少し先には白髪のやうに花を遮つた栗の木が、わさわさと茂つて東の空を塞がうとして居るので、空を見ようとするのには、かうして廂の下から覗き出さなければならないのである。

南の空はいくらかからりとして居るが、樹木のある方角の白い雲が重く

見えて自分は好てある。垣根を見ると雨蛙が一匹中途にくつついて居る。幾ら見てゐても動かない。さうすると又思ひ出したやうに、雷がごろごろと鳴つて、まだ降り足らなかつたといふ鹽梅に雨がざあつと來た。竹垣の外から庭へざらりと莢を垂れたゑにしだの青い枝が頻りに雨に頭を打たれて居る。雨蛙がいつの間にか見えなくなつた。ゑにしだの枝へでも移つたかと思つて見てもそんな樣子もない。

世間が俄かに明るくなつた。日がもう落ちかけたのらしい。明るくなつても雨蛙は矢張見えない。

ふと氣がついて見ると、庭の小さな水溜にぽちんと動いたものがある。雨蛙が飛んだのかと思つたら、ずつと延ばした柿の木の枝から、ぽたぽたと雨垂が落ちてるのであつた。

溶後の冷かさが少し身にしみて感じた。もう梅雨期である。朝から陰欝な

日が續くのであらう。日が暮れた。

雨蛙は初めから一聲も鳴かなかつた。

此一篇も夕暮の寫生であるが、組織からいふと前のよりも整つて居る筈で、それて却て面白くない。それは描寫すべき材料が後のは劣つて居るからである。同一筆法では、どうしても材料の勝れたものが値打を持つのは當然の理である。然し材料は劣つて居ても、此れを見る人が其の物に向つて非常に興味をもつた場合は別である。書く人が非常の興味をもつてゐれば、文章の上に自然と其の氣分、卽心持がはつきりと現はれる　若し作者の氣分が文章の上に躍動して居るならば、其處に其の文章の眞の値打があるのである。處がこの雨蛙の一篇にはそれがない。

實際をいふと、此の文章を書くのに自分は何等の興味をも惹き起さなかつたので

ある。或る日人の處で雨宿をして種々な話が交換された末に、斯ういふ題でも書けば兎に角一篇の文章が纒るのだから、書いて見ようといつて主人になつた積りで書いたに過ぎないので、材料が面白いと思つたのでもなく、隨つてそこに自分は何等の感情も動かされなかつたのである。

それであるのに、なぜ文章が出來たかといふのに、從來幾分でも練習を積んで來た爲である。こんなことをいふのは自慢らしくて甚だ厭なことではあるが、平靜に作者としての自分を離れて見ると、實際それに相違ないのである。要するに多少の腕を恃んで作つた文章である。さうして詰らない文章である。興味を以て書いた諸君の本誌上の文章の方が面白いものが幾らもある。

感情の動かない、興味の乘らない文章は全く空虚である。感情も動かず興味も乘らずに無理に體裁を繕つたものは眞實でない虛僞である。

反覆していふ。眞實を離れて文章はない。文章の値打は人を動かすにある。人を

動かすのは眞實以外に何物もない。諸君は前揭の文章の値打ないことを注意して吟味するの必要がある。更に今一つには諸君は語句を素直に使はねばならぬ。餘りに氣の利いた文句を使つてはならぬ。氣の利いた文句でも自然に心から出たのならば至極結構であるが、多くは自ら注意をしないと人まねになりたがる。心にもないことをいふやうになる。さうなるともう虛僞である、眞實でない。沼の夕暮の方には「雲の峰が無理に引き延ばされたやうに思ひきつて長くむくむくと勝つて居る」とか、雨蛙の方には「こつちとは全く無關係だといふやうに遙か遠くで鳴つてゐる」とかいふやうな率直でない文句があるが、此れは作者自身に於て全くさう感じたから書いたのである。無暗にこんな文句を挿入しなければ文章は出來ないもの、上手な文章とはいはれないものと誤解しては大變である。文句は文章ではない。文章に幾度反覆しても同一であるが、全體として人を動かす處に眞の價値は存在して居るのである。唯眞實に作者がさう感ずるまゝにさう

書くより外に仕方がないのである。同じ時計の音でも西洋人の耳にはちつくたつくと響く。しかしながら凡てが單純な特質を有つて居る日本人の耳にはかつちかつちと響くのが普通であらう。他人の耳にどう響かうとも自分の耳にはかつちかつちと響くならば、それを書く時にはかつちかつちといはねば其人としては虚僞である。我々が天然の現象を觀察するにしてもそれである。自分の目に映じ心に感じたことが其の人の眞實である。他人が面白いというたとて自分が面白くなく思つたら、それは面白いと書く譯にはいかない。同時に他人が顧みない物でも、自分に興味があれば興味があるといふより外に仕方がない。どれほど鰻の味がうまくても、衰弱した半死の病人には其の强い脂肪に堪へないばかりでなく、其の臭ひにさへ惡感を催す筈でなければならぬ。しかしながら此れは半死の病人として極めて眞實で、さうして自然である。凡て自分の感情を僞らざる處に其の人の特色があるのである。他人の模倣を許さぬ特色が出れば、其の文章は其の人獨特の文

章である。只自分の眞實を吐露し、目に見、心に感じたまゝを描け。

幾度いつたとて、理窟は外に無いのである。

自分は時々思ひ出して愉快に感ずることがある。それを諸君に語つて此の一篇を終らう。

暑中休暇の後、或小學校の敎員が自分に短い文章を見せた。惜いことに全く文章を成しては居なかつたが、其の中に到底見逃すことの出來ない愉快な一項があつた。それは鳳仙花の花を書いたのであつたが、細く尖げた鉛筆の先でそろつと觸つたら、ふくれて居る花がほろつと落ちたと書いてあることであつた。諸君は此れを見てどう思ふか。自分はこの位鳳仙花の性質をよく現はしたものはないと思ふ。しかし作者は鳳仙花の性質がどうのかうのと理窟をつけて書いたのでもなければ、さう書いたことが他人を感動させるに足りると信じたのでもない。實際鳳仙花の側へ行つて鉛筆でつついたら花が落ちたから落ちたと書いたので、其の落

かう言ふ間には多少何とか直す所はあつたにしても其儘原稿に書いたのである。信書といふものには、こんな種類に属するものが少なからず存在して居ることがある。當時も生活してゐるうちにも目的が達せられないといふやうな意見を有し得べき處置を讃へることが出來るのである。しかし此日記もこのままでは文章を上ごさない。自分は其の時其の衆員に話つたことがあるが、それを此處に書いて見よう。

自分は餘程長い道程を毎日學校へ通つて居る。朝は極めて早く出かけるので涼しいが、暑い晝中を歸宅に及ちつつ居るので、家に歸つて居る間に相當に疲勞を感じて、もう何をする氣もなくなる位である。休暇になつてからは、身體がどうかしたかと思ふ程樂になつた。三日たち五日たつ内に日曜日を除いては、今まで日中といふものは殆んど籠いて居た自分の

家の凡ての物にしみじみと目を放つやうになつた。

庭の隅の掃溜の側に赤と白と二三本鳳仙花が立つて居る。それはこれまでも知つて居ても心が忙しいので疎略に見て居たのであるが、もう驚くほど繁茂して横に丸くふくれて居る。日中は其の軟かな葉が萎れながら一杯に花をもつて居る。自分は始終其の花に注意するやうになつた。

鳳仙花は日数たつに隨つて其の夥しい花を惜氣もなくそこらへ振り落すやうになつた。それでも花が少しも減つた樣子がない。或日自分は雜記帳へ何か書かうと思つて暫く机に向つた後、鉛筆を持つた儘鳳仙花の側へ蹲んでみた。尖つた鉛筆の先でそろつとつついて見たら、鳳仙花の花はほろりと音もしないで落ちた。よく見ると鳳仙花の花はやつと糸でくつつけたやうな形になつて居るのであつた。

其の敎員になつて書いたのである。平凡だがこれでどうにかなるだらうと思ふ。然しまだ足らぬ。

自分は或日の夕方庭の掃除をしながら溜つて行く塵埃を段々掃きよせ掃きよせ掃溜の側まで行つた。箒の先が鳳仙花へ觸つたら、横にふくれた草は驚いたやうに身顫ひしながらぞろつと一時に花を落してしまつた。時々あなり花が落ちて居ると思つたのは、さうすると、箒で掃除されたのだなと自分は思つた。

段々鳳仙花は詳しく描寫されたことになる。此れで鳳仙花に關聯した或物があると一篇に完成される。其の時自分の家に珍らしいことがあつた。鷄に就いてである。それで假りに此を續けてみる。

鳳仙花は漸く花の趾へ莢をもつて來た。此れも夕方のことであるが、自分は掃溜の向の垣根の側に立つた低い樅の木の枝に白い鷄がぢつと止つてゐるのを見た。自分の家の鷄には白いのは居ない筈だからどうしたのかと思つたが其の儘にして居た。白い雞は二三日もさうして樅の木に泊つた。聞いて居ると隣の家で買つた鷄が、落ちつかないで一夜止つた樅の木へ毎晩來るのだといふことが分つた。暫くたつてから、或る夕方に白い鷄はけたたましい聲を立てて、自分の庭の掃溜の側へ飛びおりた。やがて隣の主人が來てそつちこつち鷄をおひ廻しながら、木小屋の隅の暗がりへもぐつた處を攫へて悲しく叫ぶのを抱へて行つた。樅の木には梯子がかかつて居る。鷄を獲へようとして逃げられたのである。

次の朝自分は顏を洗ひに井戸端へ出て、鳳仙花を見たら末になつた花が影

しく落ちて、いつもの邊よりは遙かに遠くへ散亂して居た。白い鷄が慌てて飛びおりる凄しい勢で鳳仙花は荒されたのである。莖には莢がくるりと捲いてそこらには種が彈き出されてあつた。鳳仙花はすつかり衰へた。暑中休暇も畢に近づいた。

これで實際にあつたことを其の儘に書けばたかだかこんなものおやない。なぜ自分は諸君に、虛僞を敢てするな、眞實を書けといつて、想像で文章を作成したかといふのに、文章といふものは、どうしても幾部分一定の形式を履まなければならぬ。組織といふことにも意を致さなければならぬ。自分は其の組織といふことの參考の爲めに、以前から多少の興味をもつて居た鳳仙花を一篇の文章として見たのである。

自分は此れで三つの實例を諸君の前に提供した。一讀した後諸君を多少でも利益する所があつたら幸である。諸君の周圍には宏大な天然が展開されてある。諸君は長い日子の間幾らでも滋味を攝取することが出來る。一歩垣根の外へ出ても、玉蜀黍の葉がざわざわと諸君の心を騷がさうとして居るではないか　黄色な葉になつた蔓のさきには妙に曲つた胡瓜が、此處にも何かがあるのだといつて諸君の前にぶら下つて居るではないか。諸君は穢くなつた畑の桐の梢が郊外の展望を妨げる時に、其桐の木が、今一歩進みたまへ、非常によく向うが見えるのだと敎へて居ると思つたら、それで穢い桐の梢が邪魔だといつて憎むことが出來るか。更に諸君は、盛んに生長しつつある筍の籜を落しつつ僅かに開きかけた軟かな枝の上に雨蛙のぢつと乘つて居るのを時としては見るであらう。彼等は見る人に必ず何をか語つて居ねばならぬ　夕方には驚くべき多量の水分を吸收した筍の且軟かな枝の先から白く結んだ水滴が落ちる　雨蛙の顏に其の水滴が落ちた時降く彼

は我々に何を語つて居るであらう。我々が身を投げかけて抑れてしまふ時、天然は無限の同情者である。

自分は暑中休暇後の本誌に、多大の望を囑したいと思ふ。實際自分は此の爲櫻位優秀な文章の揭載される雜誌は、中學の雜誌として他には無いと思ふ。然し以前の優秀な作者は相續いて去つて居る。後繼者は在學中の諸君である。爲櫻を豐富にするのは諸君の責任でもあり、又義務でもある。自分は只管諸君と共に豐富な爲櫻を樂みたいと思ふ。

（明治四十四年七月二十五日發行　爲櫻所載）

伊藤左千夫君の追憶

故人には逸話が多かつた。數年間交際を繼續して居た人々は誰でも他の人には知られない、單に自分との間にのみ起つた或事實の二つや三つは持つて居ないことは無いであらう。それが大抵は語れば一座が皆どつと笑ひこけるやうなことのみに屬して居るらしい。一體故人の生涯は恐ろしい矛盾の生涯であつた。矛盾といふことは人生の常態であるにしても故人のは殊に甚だしいのである。あの何事にも理窟が立つて時としては其弊に墮する程滔々として自己の意見を發表し、往々にして對手を感服させるといふよりも寧ろ威壓して畢ふといふ程の力を有して居たにも拘らず、其相貌の何處といふことなしに滑稽な分子を含んで居て、聰明な後進の人々からは何時でも竊に微笑を溶せ掛けられて居たらうと思はれるのであ

る。それが非常に度の強い眼鏡を二つも掛けなければ能く見ることが出來ない程の近視眼から遂に物事に間が抜けて勢ひ滑稽の分子が附纏うたに相違ない。

日本新聞で第四回目かの短歌の募集があつた時、故人と格堂君と自分と三人が根岸庵に會合して正岡先生の下見をして置いた應募歌の中から先生の入選になつたものを格堂君が書き抜いて、其一つ一つに就いて各自に異存があれば苦情を持ち出すことにして、牀上の先生も成るべく數の少くなる方がいいからどんどん減りますよ抔と、唯さへ小さく成つて居た自分を笑ひながら揶揄はれたことである。其頃は自分の製作の善惡などは問題ではなく唯一つでも餘計に選ばれて晴の紙面に印刷されるのを無上の手柄でもした様に喜んで居た罪のないあどけない然しながら誠實な時代であつた。當時相當の年齢に達して居て、實社會に立つても堂々たる一家の主人であつた故人の如きも全くそれであつた。格堂君が日光山の觀楓をして一時に數十首を日本紙上に飾つた時、矢も楯も堪らなくて結城素明君を唆

かして中禪寺の湖水に舟を浮べて恐しい長篇の長歌を作つた。それが日曜附錄か何かに結城君の挿繪があつて掲載になつた。唯それ丈では何でもないが後年自分が根岸庵で先生の手づから此の反古の中で欲しいものが有つたら選り出して持つて行けといはれた籠の中に知人の手紙類が幾通かあつて、ふと目についたのは故人が彼の中禪寺湖の長篇に就て哀願愁訴した長い手紙であつた。最初餘り先生の氣に入らなかつたものと見えて手紙の文句によると、此の一篇が沒書にならうものならば自分はどうしても格堂に合せる顏がない。だから惡い箇所があればどうか指示して貰ひたい。幾十百回の改竄も決して苦いとは思はないといふ意味のことが熱誠を込めて書いてあつた。先生も此には困つたであつたらう。だから紙面も立派に印刷された時の作者の滿足はどんなであつたらうか。僕の長歌一篇は君の短歌百首に匹敵すると格堂君へ手紙で自慢して遣つたと自分に語つたのは其當時であつたと記憶して居る。格堂君が苦笑したのを自分は見ないけれども其事を

思ひ出すと今でも眼の前に在るやうな氣がする。其苦笑にはどういふ意味があつたか此を忖度して明言する事は出來ない。だが當時の同人殊に故人はさういふ熱心な態度で作歌に努力して居た。眞實の努力といふ事は故人五十年の生涯を通じて其當時が第一であつたであらう。熱心といふのは一面に於ては功名心の發現であつた。だから自己の製作を發表して貰はうと切望して居る一方に他人の成功に對しては恐ろしい羨望の眼を以て見て居た。日本新聞の附錄週報に課題募集が每號繼續した。短歌も俳句も同題で根岸の先生も衰弱を極めて來た頃なのでなかなかの嚴選であつた。容易なことでは通過しなかつた。隨つてそんな處へ無駄骨折らうと甘んじて取つて掛るものが段々減少して、每號必ず缺すまいと齒嚙みをするものは故人と蕨と自分位なものに成つて畢つた。さういふ時に故人は四回も續いて入選したことがある。其位のことだから一時に二人も三人も名を連ねるやうなことは滅多にあるものぢやない。だから作者としての故人の得意は素晴しいも

のである。處がどうした機會か自分は其後六回も續いて入選した。勿論故人は旗色が殊の外惡いのである。さうすると根岸庵の席上で君はもう五度續けて出るのかと聞いた。六回だといふと安からぬ容子である、其頃は大抵自分は故人と一緒に根岸へは行つたものである。其後一人で根岸へ行つた時、先生は段々の話の後に、君ああいふことをいふのだからなと單にそれ丈語つた。自分は唯默つて首肯いた。

だが故人のかういふ功名心もあの强い抑へる事の出來ない樣な我執を不思議に沒却して居た根岸庵の時代に於ては寧ろ愛すべき美點となつてのみ現はれて居たやうである。生涯決してまだ大家と呼ばれる人々の門に膝を屈した事はないと壯語しつつあつた故人が心底から服從した根岸の先生に對しては我執を沒却し得たのは當然の事である、然し只美しかつた此の時代は僅に明治卅三年から卅五年の秋まで滿三ヶ年には足らなかつたのである。根岸庵時代の寧ろ愛すべき敬すべき無

邪氣な小さな功名心は後に至つては甚だ憂ふべき現象を呈したやうである。其終始附纏つた功名心は資質が餘りに小さかつた。だから聰明な若い者には觀破され易い。さうして默つてこそ居るが冷笑の目を以て見られ易い。名古屋から出た雜誌鵜川の編輯者が故人の原稿を求めた際の事、印刷が成つてから組入れの場所が惡いとかで、僕の短歌數首は他の人々の手に成つた文章の數頁に相當する。だから餘り虐待しては困るといふ故人の手紙を受取つて惘然としたと語つたことがある。正岡先生歿して二三年になるかならぬて、もう强ひて人に求めるやうに成つた。自信力の强いのは其長所であつたに相違ないが、見え透いた、餘りに小さな功名心は尠なからず個人として禍する處が有つたであらう。そこが如何にも遺憾の次第である。

故人は一見したばかりで威壓され相たあの偉大な體格を有して居たと同時に恐ろしい蠻勇を有して居た。敵としたら薄氣味惡い様な容子をして居た。そして其顔

面には何處にも寛容の様子を發見し得ない。眼を一つ放して見ると小さい。鼻を一つ放して見ると小さい。廣い意味に於て藝術家として此等の條件は一切累する事はないが、何處までも一派の牛耳を執つて行かうとするには資格が足らなくなる。古來多衆の上に立つて世と推移つて行く人に智識の秀でて居ない者はない。何處までも矛盾して生れ來た故人は一方に學問して來た人の考へ及ばぬ處を平氣で解釋して居る豪い驚くべき長所を有して居ると共に誰にも解ることが解らぬ樣な遲鈍な處がある。偶々學問のある若い者が訪ねて來て色々な噺をすると一々尤な噺だから尤に聞くのも當然だが、直ぐにぐたりと柔かに成つて畢ふ傾がある。根蔕が動搖するから非常に強くて非常に弱くなる。冷靜な眼で傍見すると不安に堪へないことが多い。其處が固陋な分子を有して居たに拘らず、何時でも非常に若くて居た所以であるかも知れない。噺はふとしたことから岐路に入つて畢つたが、最初に戻つて根岸庵の席上で募集歌の選のあつた時に左圖は北向で所謂鶯横

町の東京には珍らしい程鄙びたよく中村不折畫伯の筆に上つた樹木のすくすくと立ち並んだ下蔭であつたが、ふと反對の庭の南の隅の木戸を開けて小さな風呂敷包を手にした夫人が斜に庭を這入つて來た。南受の縁側から上つて、先生の寢間の六疊に隣した八疊の間の閾に近く庭を後にして坐つた。椿堂君は南向に机に倚つて自分も其近くに居たと思つた。故人は二間を界して居る襖際に玄關の方へ向いて居た。病人の先生は自分が知つてからは何時でも北枕で居た。一座は皆夫人の挨拶につれて會釋した。先生の母堂も出て挨拶の交換が有つた。夫人と故人とは僅に相去ること一間に過ぎなかつたのである。暫く經つてから故人は思ひ出した樣に、ああ何だ僕の……と一寸極りの悪相な容子をした。其日は牛のお産があつたが何だか難産に成り相だといふので其頃は老いても達者であつた母堂が案じて騒いで仕方がないから取敢ず車を馳せて來たのだといふ。故人は僅に一間離れてるか離れない傍に坐つた細君を全く他人と思つて居たらしかつた。だからあの

體格として自然に崩れ易い居ずまひを直したり會釋の仕方が殊に丁寧であつた。先生の母堂と夫人とが談話を交換したについて始めて氣がついたらしい。さうして倉皇として其席を辭し去つた。此罪のない間の抜けた事實は各自に自然に起る笑を禁じ得なかつた。然しかういふ喜劇は其性格から來る點もあつたが大部分は極度の近眼が原因であつた。此は其後のことゝばかりで年度の記憶はないが、故人と二人連れ立つて向島の百花園あたりへ行つた時のことである。どつちも歩くのが平氣な同志であつたから本所から押通しに新設の工場の並んだあたりの田圃道を曳舟通へ横ぎつた。其跡路に餘り遠くはない筈だといつて、田圃の道から少しはひつて服部躬治氏を訪問した。故人はあの太い逞しい腕の力でがらりと表の格子を開ける。暫時にして障子があく。出て來たのは服部氏自身で何か書いて居た處と見えて墨の含んだ筆を手に持つた儘である。故人は首だけを格子戸の内に突込んで、單に伊藤といつた丈で雙方とも何ともいはぬ。服部氏も近眼である。

さうして自分が側に見て居ると氏は眼鏡を時々きらりと光らせながら異様と見た來客を上から下へと見上げ見おろして居た。純粋な田舍漢の自分と連れ立つて歩くのに故人は勿論尻をからげてゐた。自分は服部氏の庭に立つ時分尻をおろしたがそんなことには極端に無頓着な故人はぎつしり尻を捩上げた儘である。一體故人は最初に根岸庵の席上で逢つた當時から、自分の眼には爺さんらしく見えてゐた。それでゐながら其時の年齡を調べて見ると今の自分と殆んど相違がないのである。服部氏も大きな田舍臭い親爺が不作法に突立つて首だけ出して居るのだから少々意外であつたらしい。凡そ東京に永く生活して居て藝術界にも名を知られて居ながらあの位野暮な容子をした人は少いであらう。兎に角主客が玄關で睨み競べをして居る譯なのだから、見るに見兼ねた自分は、伊藤左千夫君ですといふと、安心したと見えて直ぐ上れといふことに成つた。君服部君だぜといふと故人も、はははあさうかと急に打ち解けることに成つた。主客は其前一度逢つたことが

ある。築地の水交社に國風家懇親會の催しがあつた。夜に入つて人は段々に散ずる　其時數杯の麥酒に勢をつけた服部氏が坂正臣氏を捕へて萬葉集中の一首に就いてまくしかけまくしかけ大分氣焔を吐いて居た　坂氏は何處までも下手に出て服部氏の説を聽いて居る。自分は奇異の感を懷きながら傍見した。さうして坂氏の悧巧な如才ない態度を見て世を容易に渡るにはああでなければ成らぬものかと思つた。坂氏が辭し去つてからストウブを擁して服部氏と故人とは相對した。服部氏は著書を故人に贈る。故人は君新年に成つたらお互に堂々と論戰しようぢやないかと挑む。坂氏の態度とは雲泥の相違である。其特有の蠻勇が首を擡げたのである。十二月の幾日であつたか其の夜は再び服部氏の氣焔を聞くこととなしに歸路に就いた。其會で逢ふ前に故人は雜誌上で夥か服部氏を攻擊しつゝあつたのである　さういふ間柄でありながら玄關で睨み合ふ程互の記憶がなかつたのも近眼の所爲であつた。其日は難かしい噺は勿論出なかつた。さうして恐らく服部氏は

故人の意外に好々爺であつたに驚いたであらう。本所へ戻りながら故人は自分に對して、能く君は覺えて居たなと云つた。一度見た人を其家へ訪ねて見れば解るのが當然であるのに故人に於ては難事であつたのだ だから恐ろしく些細なことにも心底から感服することがある。或時電話をかける必要があつて故人の近所のを借りて貰つた。其際のこと君は能く電話がかけられる僕がやつてはどうしても出ないといつて不思議がつて居る、察する處受話器を耳へ當てた儘只鈴を鳴らして見てそれつ切り再び手をつけて見ないのであらう 忙しい交換手の小さな聲がはつきり耳の底に響く程不馴な故人は鋭敏ではなかつたのである。其位だから何か聞き嚙つたことを噺しても直ぐに、はあ君はなかなか物知だなといふのが常であつた。其時丈はあの我執の强い人に心持よい程一點の邪氣も認められなかつた。それから尙あの悠長な人間が時として恐ろしく狼狽する。其態度は又格別であつた。

明治卅八年の初夏に自分は房州の清澄山からの歸りに故人を案內して、下總神崎の寺田君を訪問した。本所の家は停車場の直ぐ脇である。汽車の時間も極つたので少し早かつたが晝飯をくつて行かうとそれまでの用意は非常によかつた。さうするとふと臺所へ行つた儘幾ら待つても來ない。一列車後れると成田で空しく數時間待たねば成らぬ。自分は氣が氣でなかつたが仕方がない。其內にあたふたとして出て來て羽織の紐の鐶が容易に嵌らないで暇どつてゐる。停車場の東口へついた時列車はごろごろと動き出して畢つた。それから二人は龜戸まで步いて暫く待つて汽車に乘つた。果して成田の薄暗い停車場の待合に不愉快な幾時間を過さねば成らなくなつた。見ると交々手を兩方の袂へ入れて何か探して居る容子である。さういふ時はぐつと首を垂れてさも困つたといふ樣に見える。どうしたのかと聞いて見ると眼鏡を忘れて來て畢つたといふ。寺田君へは始めてで其上に自分から兼々噺をした珍襲の畫幅を見に行くのである。さうして眼鏡が二つなければ

細かい物を見ても仕方がないのは極り切つたことなのである。それだから只困つてゐる。自分はふとすると不動尊の庭先に希望の眼鏡があると心附いたので走つた。其爲に二三日寺田君の歡待を受けて滿足して歸ることが出來た。然しながら時間の觀念の確ではない人を案内した爲に一日寺田君を待ち暮させて薄暮に漸く辿り着いたのである。斯の如くにして家人を狼狽させることは自分は蛇蝎の如く嫌である。だからもう一緒に道行は難かしいと考へた

四五年前のことと記憶するが胡桃澤勘内君が松本から上京された際自分も折よく故人の宅で同君及び他の同人諸君と會合が出來た。其時例のそそくさとする癖の故人は夥か疊に灰を零した　目に喰ひ込んだ灰が容易に除き去られるものではない。箒を持つて來てそろそろ叩けば皆灰がくるまつて畢ふといふ噺をすると狼狽てて臺所へ驅けて行く。箒を手に攫んで來た時自分は胡桃澤君を顧みて、默つて居ると必ずあの箒をどさりと疊へ投げ出すがといふと果して其通りである。胡桃

澤君は微笑した。其態度が如何にも滑稽である。斯ういふ幾多の事實も普通の他の人が仕たとしたら何でもない筈のが故人がすれば滑稽に成る。兎に角獨自一己の力であれ丈に成つた人であるから門に集つた後進者が幾ら聰明であらうとも感服せなければならぬ點は多かつたに相違ないが、時あつて演出する滑稽な態度には心中竊に輕侮の念を禁じ得なかつたであらう。だが近來接近して居た同人中には、一人でも狡猾な人がない。故人は前にもいつた樣に恐ろしい功名心の強い人なのだから其呼吸を呑込んで居れば籠絡するのに何の苦もない。唯隱約の間に譽めて居れば機嫌のいい人であつた。其弱點に乘じて自己を利益したものが舊友の間に發見されるのを遺憾とする。然しながら近來の同人は、（「故人が」、脱？）餘りに自己の固陋な尺度を當て篏めようとするに對して、反抗の態度を執ることがあつても、皆誠實な人々である。或はさういふ弱點を心附かずに居る者もあるであらう。此は故人の大なる幸であつた。

あの蠻勇と遲鈍とが、眞に痛快極つた事實として表はされた機會がある。或年の夏、それは上野に博覽會があつて、それから愈文展が開催されるといふ頃であつた。北村四海の鐵槌騷ぎがまだ耳に新たであつた。或夜故人と鷗外博士を訪れたら間もなく他に一人の客がはひつて來て上席に据ゑられた。我々に別段嘶のある譯ではない。隨つて多少忙しいと見えた其客が一人で饒舌ることに成つた。何でも博覽會の審査員に成つて居たのが、更に文展の審査員も囑託されるらしいが受けてよいかどうか相談に來たといふ。隨分妙な相談をしに來る人もあるものだと思つて居ると、審査員などに成ると世間から敵にされて馬鹿々々しい。あの北村四海などの石彫でも何處に一つ出來てる處がない。あれで巴里歸りだなどと片腹痛いといふ樣な事が幾分職人肌のべらんめえ口調が交りつつ語られた。自己の進退を相談しようとする程の人の前だから餘程の愼みが有る筈なのに其態度が甚だ高尙な人として許すことの出來ないのに驚いた。藝術家として存在を認められて

居る少壯の人々がさうであらうとは自分は嘗て思ひ掛けなかつたからである。取次の女中が愈際に現れた時我々の後からの訪問客は白井雨山といふ彫刻家であることを女中の口から知つた。さうして其客が案内された時自分は遙の末席に下ることを相當なことと思つた程敬意を表したのである。圓滑な主人博士はいい加減に應對して居る。すると雨山氏と隣して居た故人は思ひ出した樣に、あなたは彫刻をなさるのですかと聞いた。何といつた處で藝術家として相當の年歳に達して社會上の地步を占め得て居る者には自負心がある。それなのにあなたは彫刻をするかと聞かれた時雨山氏の心中には侮辱を感じたであらう。然しながらさういふ點に遲鈍な對手は北村四海の名は記憶して居れど白井雨山といふ名を忘れない程の人ではない。眞實そんな人があつたか無かつたか、知つたことではないのである。さうして段々噺を聞いて見ると今迄は新聞のいふことばかり信じて居たから北村四海ばかりをいい者と思つて居たが大分違ふものである。然しさういふこと

ならば何故あなたは審査員としてあなたの意見を堂々と發表しないのですか、さうすれば世間の誤解もなくなつて我々のやうな素人にも幸である。私が若し審査員であつてそんなことなら決して承知しない。昂然としてから言ひ放つた。主人博士は伊藤君なら屹度やるといつて洪笑した。其時雨山氏の容子は氣の毒な程であつた。それから雨山氏は中村不折畫伯と懇意だといふことから色々のことを聞かせた。故人は又私も懇意だといつて畫伯の書で飾られた扇を出して見せる。主人博士が其書を譽める。雨山氏は其晩は甚だ不首尾で匆々にして歸つた。變な奴だと思つて見た時にあのくしやくしやした顏のあの打つても突いても動かぬ樣な偉大な體格のさも腕力の逞し相なあの人物を凝視し、其いふことの勢のいいのを聞いては意外な奴が世間には存在して居るものだと思つたであらう。自分の知れる限りに於て此が故人の最も振つた逸話である。

（大正二年十一月發行　アララギ第六卷第十一號　伊藤左千夫追悼號所載）

○

嫩草山。東大寺の事務所から見るのは金閣寺の衣笠山より一段上である。庭には蓮の花が一様に咲いて居て、其間に忙しい人力車が往來して居るとは思へない程閑雅な趣である。東大寺の庭が恐らく天下無雙であらうと思ふ。

多摩川の上流。此は主として甲州の部を指す。霞が浦は捉へ所のない點が頗るいゝ。水郷といふ感じの深いのは此沿岸に限られて居ると思ふ。

月光を浴びた那智の大瀑。宿の庭に涼みながら溪を隔てて大きな白い瀑を見るのである。庭先の芋の葉にも月は一杯に射して居る。（推定大正三年）

○

二荒山、箱根の湖水、男鹿半島、舟行陸行共によい。熊野の瀞八丁。甲板上から見た伊豆の南岸。多摩川の上流、此は主として甲州の部を指すのである。秋の晴れた日に、成相山の中腹から見瞰した天の橋立。笹子の隧道を出て汽車が鹽山、初鹿野の間へかかると左手の窓から展開された甲州の盆地。豐前の新耶馬溪、但し大雷雨を衝いて行つた、雲煙の妙を極めて居た。夜明に見た瀨戸内海の來島海峽の桃花、他に一木を交へない島がある。檜原湖を隔てた磐梯山の破裂面、此は凄愴の感を極めて居る。開聞嶽の絕頂から霞の底に只ぼんやりと見えた硫黃島、竹島、ひよいと跳ねたら其處へ落ちるかと思ふ程すぐ脚下にあつた。羽後の笹子から院内へ越える松木峠の黃葉に降りかかつた雪。月光を浴びた那智山、宿の庭に涼みしながら溪を隔てて白い大瀑を見るのである。庭先の芋の葉にも月は一杯に射して居た。霞が浦は捉へ所のない點が頗るいい。水鄕といふ感じの深いのは此

の沿岸に限られて居るかと思ふ。奈良の嫩草山、東大寺の事務所から見るのは金閣寺の衣笠山よりは一段上である。庭には蓮の花が一杯で山と庭との間を見物人を乘せた忙しい人力車が往來して居るとは思はれない閑雅な趣である。庭では嫩草山を取り込んだ此の東大寺に企及すべきものはないであらう。最後に偉大な藝術と相俟つて海内第一の稱を恣にすべきものは宮島の山水でなければならぬ。（推定大正三年）

女郎花と茅花

諏訪の湖畔から鹽尻峠を越すと壯大な松本平が眼前に展開するけれど、足は暫く荒涼たる僻村を過ぎねばならぬ。桔梗が原の土地である。木曾へ出るのに迂廻して桔梗原を通過して見たことがあるが別段の印象を止めて居ないが女郎花のかなりにおほかつたことは忘れない。それも女郎花だけであつたらどうだつたか知れ

ないが、そこら一帶の稚松が非常に短くて、却て女郎花の中に生ひ交つて居るやうであつたのが私の興味を惹いたからである。先月十日に門司を發した列車が、いつか海岸近い松林の中を通る頃、一杯に此も非常に短い稚松があつて、剽輕な白い茅花が其稚松の頭をするやうにして絶えず挑みかけて居るのを見た。輕快な茅花が好きになつたと共に、今更のやうに桔梗が原の小松を思ひ出すのである。

（推定大正三年）

玄米飯の炊き方

玄米一升、水二升五合内外、米の乾燥の度合（に、朧）より增減す。

釜の口には白布、蓋の上には一貫匁の重石、手桶又はバケツに水を滿てるを便利とす。沸騰する迄火を强く焚き充分に沸騰せしめて後、多少ねばり汁の溢れ出づるを度とし、燃火を引き去り置くこと約三十分間、再び一焚き盛に焚き後卸す。

此燃料は松葉か枯枝又は藁の如き、所謂焚付け様のものを極く短時間焚くのみにて可なり。

一、決して炊き終るまで蓋をとる勿れ。

一、丸麥の二三割混炊すれば殊更美なり。但し丸麥は玄米と同時に煮る。火水加減も同様なり。（推定大正三年）

炭焼日記

炭焼日記

一月十三日（明治三十八年）

小竈煉瓦ヲシキツメテ櫟ノ枯龎朶ヲ焼ク。……コノ日數一日一夜止メテ翌日。……

十三日。櫟ヲツメテ點火口ハ煉瓦竪一枚ダケ。

十四日。口ヲソノ儘ニス。

十五日。正午頃五指三指トナス。コノ日木醋非常ニ濃厚。夕第一樽多量ノタールヲ含ム。三指一指トナシ夜十二時殆ンド口ヲ閉ギ、第一煙突ヲ除カントスルニ既ニ焼盡セシヲ發見シ、龎朶ヲ焚キ込ムコト例ノ如シ。一時半口ヲ下ゲタリ。煉瓦タテ一。

十六日。六時半頃ニ至レバ既ニ噴煙ナシ。卽チ二晝三夜ニシテ燻燒シ畢リタルモノナリ。前面ノ空氣口ハ開クニ暇ナカリキ。

十三日、伊豫宇和島ナル鈴木鑛一氏來ル。

十八日、鳥取縣伯耆國東伯郡北條日置秀藏氏來ル。共ニ炭竈ヲ見ント欲シテナリ。

此日大竈煉瓦シキツメニ從事ス。

二十日

小竈ノ炭ヲ出ス。少シク燒ケ過ギタレドモ、從來ノモノトハ全ク異リテ品質佳良ナリ。炭材ノ小ナリシタメ重量ハ少シ。三時過ギマデニ櫟ノ炭材ヲ詰メ終ル。重量ハ別項記載スル所ノ如シ。四時點火九時頃口ヲ下グ。點火口ノ炭材大ナリシタメカ、點火ニ時ヲ費セリ。十時過口ヲ四指二指トナス。ハジメハ煉瓦竪一枚タルコト例ノ如シ。

二十一日

九時頃三指一指、五時二指一指、十時二指半一指トナシ、前面一指一指ノ口ヲ開ク、五時第一煙突ヲ去リタリ。木醋ハウスシ。

二十二日

九時後空氣口ヲ塞ギ、前口三指トナス。木醋未ダ濃厚ナラズ。大竈甲落ツ。シキリ煉瓦トナシ、兩側モ煉瓦トナサントシタルニ、點火口東側ノ壁崩潰シテ甲ノ一部墜落セリ。

二十三日

岩次ヘ打電。空氣口二時ニ閉ヅ。夜木醋濃厚。

二十四日

八時口焚キ九時閉ヅ。二時噴烟ナシ。昨今二日石灰ヲ製ス。此前ノ竈ヨリ獲タル木醋ナリ。重量七貫七百目ニ過ギズ。夜藤崎氏ヘ手紙ヲ書ク。

二十五日

越後西頸城ノ人來ル。夜雪。

二十六日

雪。

二十七日

炭ヲ出ス。火起ル。閉ヅ。煙突ヲ開ケ放チタルガタメナリト源三郎イフ。曩ニ火ノ起リタル時モ同樣ナリ。炭ハ七分通リ出ヅ。コレマデニテハ第一ノ出來ナリ。

二十八日

頸城ノ人カヘル。炭ヲ出ス。點火口ハトメル。櫟モ少シ燒ケ過ギタル所アリ。炭材ヲ入レル前ニ連絡ヲ一寸バカリ淺クスル。楢三百六拾四貫切束七十貫、點火口ヘノ雜木榛エゴ等六十一貫、四時半焚付ケ、コンドハ方法ヲ替ヘテ甲ヘサシコマズニ、麁朶二把半バカリタキ、切束ノ下等ナルモノ一把タク。火ノタマリタルヲ見テ口ヲサゲル例ノ大サ。碧梧桐ヨリ手紙來ル。炭燒ノ歌變體五六首アリ。

二十九日

アサ火消エタリ。更ニ二把半バカリ焚ク。ツク。十二時頃口ヲ四指四指。ユフカタマデ稍ヌルシ、復タ口ヲ大キクス。十一時頃火力タカマル。三指二指。木醋ハ酸味稀少。生枯レナルト雪ニヌレタルママヲ入レタルタメナラン。

榎本峯次來ル。竈ノ崩レタ話ヲシテキカセル。驚ク。

三十日

大竈ノ甲ヲ取リ崩ス。殘リタル部分ハ石ノ如シ　峯次ト土質ヲ見ニ行ク。

夜火事。小竈ハ昨日ノ儘。木醋稍味濃シ。

三十一日

大竈點火口ダケ築キ終ル。小竈十二時過ギ前面ニ空氣口ヲアケル。三指二指。火弱シ。再ビ後面セル氣口ヲ開ク。ソノ儘納豆(?)ヲ出ス。

二月一日

晕次土トリニ行ク。助手一人ト内壁ノ築造、小竈九時頃後面閉ヅ。三時頃全ク閉ヅ、木醋濃厚。

夜雪來ル。イカケヤ來ル。

二　日

煉瓦ノ側立成ル、總體ニテ五百九十八本ヲ要セリ。晝近ク小竈既ニ木醋ノ稀薄トナリタルヲ以テ十管ヲ外ヅス、噴烟藍色ヲ交フ、次ニ全ク藍色ヲ呈ス、コノ間二時間程、間々口ヲ開クニ火至ラザリキ。口焚キ晝食ノ後庵桑三把、口ハ四寸ニ六寸、夜ニ至リテ噴烟極メテ熾ナリ、蓋上部ノ切束十分ニ乾燥ナシ、下部ノ大束ノ水氣多カリシタメ、火ハ先ヅ上部ヨリ來リタラント思フコトト、口焚キノ早キニ失シタルトガ原因ナリシ如シ、甲ハ熱セリ。七時過再ビ口ヲ密閉ス。

三　日　（大晦日）

九時閉ヅ、小荷駄士ツケ、煉瓦工事、欣人氏ヨリ手紙。

四日（舊元日）

煉瓦内部成ル。緣喜。

五日

炭材松ノ五本二貫ヲ入ル。小竈ノハツ出シヲセント十本バカリ出シテ見ル。一口ハヤイノデ著（？）サガヒドイ。スグモトノ如ク口ヲ閉ヅ。炭ハコレマデニナイ惡イ炭デアル。口焚キノ時間ハヤ過ギタノダ。夜一時マデカカツテ藤崎氏ヘ手紙ヲカク。郵税九錢カカル。

六日

源三郎來リ炭ヲ出ス。ドレモ惡質。櫟ノ小丸ヲクベル。點火夜ニ入リテ木醋出ヅ。點火ノ時ニヨク見レバ松麁朶ノ火ハスグニ灰ニナル傾キアリ。近來點火口ノ炭材ノ減入リガヒドイノハ、松麁朶バカリ焚クタメニ、外ヨリデ入スル空氣ガ濃厚ナ儘、炭材ニフレルカラデアル。ソレカラ翌日朝マタタイタラヨカラウト思ツテ源

三郎ニ命ズ。源三郎モ松庵染ニナッテカラメイルヤウダト思ッテ居タ相ダ。イカケヤ昨日モ今日モ來ナイ。五指三指。大竈ノ炭材ツメコミ老人一人デヤル。大抵出來タ。

藤崎氏カラ手紙、長崎デ二間ニ十間ノ竈ヲ築造スルトイッテ來タ。

七　日

正午三指二指。コノ時マデ濃厚ナリシ木醋次第ニ稀薄トナル　土ツケ甲ノ形成ル。

稲敷郡ノ人竈ヲ見ニ來ル。

八　日

小竈昨日ノママ。大竈甲ヲツキハジメル。夜九時二指二指。

九　日

九時一指二指二指半。十二時一指塞グ。五時二指半閉ヅ。木醋ハ濃厚。築造ハ八日三側半、九日五側半、八分通リ畢ル。イカケヤ來ル。

十日

小竈雁首ヲ外ス。白烟正午近クナリテ靑烟。夕方稀少。口焚キ、閉塞面ニ數個ノ小孔ヲ穿ツ。夜十時閉ヅ。大竈築造成ル。點火口及ビ炭材出入口共ニ頗堅クシテ削リ易カラズ。千本突キノ手間二十工。石灰釜成ル。カネテ中和シタル木醋ヲ煎ジハジム。

十一日

大竈焚付ケ。夜石灰賚詰マル。順次郎ヨリ手紙。眞木受取ル。

十二日

石灰ヲ製ス。一釜ダテ五貫目ヲ得。夜一釜賚詰マル。木ノ根ヲ運ブ。石灰ノ下ニタク材料。

十三日

石灰(一字不明)貫目ツクル。一釜賚ツマル。

大竈朝來少シク湯氣立チヤウヤクカハク。頂上ニ横ニ裂ケ目ガツク。少シク烟ヲ噴ク。稻敷ノ男カラ竈築キニ來テ吳レト葉書ガ來タ。梅一リンヒラク。

炭竈を、庭に築く、二つ築き、今日も燒く、厩戸の枇杷がもと、かき掃きよせて、炭を出す、莚をきせて、藁をきせて、雨にもあてず、雪にもあてず、
雪ふれどぬれもせずぬらしもせず
眞垣なる、棕櫚がもと、眞木をつむ、ならの木、くぬぎの木、そねの木、ゑごの木、雜木の眞木も積むと、いちぢくの冬木の枝は、押し撓めてみえず。

眞木伐りて炭に燒く、その眞木はくぬぎぞよき、梔を石もてつき、その染汁を塗りけむごと、伐り口のいろばみ行く、くぬぎの眞木ぞよき。

十四日

小竈炭ヲ出ス。屋根木少シク燒ケ過ギル。口焚キ（三字不明）コトオナジ。樫ノ枯（麥蒔頃伐リシモノ）小丸ヲ入レル。二百五六十貫目ナリ。口焚キノ所ハ煉瓦ヲ積ミ

重ネタルタメ七把計リヘル。栗十三把口焚キノ庇朶ハ生枯。夜煙突ヲツナグ。四指三指。大竈ハ甲殆ンド乾ク。横ノ大割レ五ツバカリニナル。煙ヲ吐ク。石灰四貫四百目ヲ製ス。夜焚詰マル。

十五日

小竈口ヲアケテ口焚キヲ再ビス。三指二指。大竈火ヲ入レル。三時過ギ土管ヲツナグ。口ハ大四寸ニ六寸。石灰三貫三百目夜焚詰マル。

十六日

小竈朝二指位ニス。火力弱シ。四時半頃再ビ三指二指。木酢ハウスシ。大竈夕口ヲ塞メル。三指ニ九指。

十七日

十時二指二指ト二指二指。夜十時後フサグ。木酢濃シ。大竈二指半九指。峯次カヘル。順次郎ヨリ小包屆ク。

炭竈に立つけぶり（は）（烟たつ）、しりから立つ、陶物の管をつなぎ（ただにたてど）（たたしめず）、干菜つる（我炭竈）、竹の林の（に）をちかたに、そを導けば、をちかたに、烟たつ、夜みればふとしく立ち、日にみればうすらにたち、白けむり止まずとたてば、竹の葉は枯れぬ。

十八日

小竈十時口ヲ開キミル。眞木ノ儘ナリ。此時第二樽ノ木醋ハ酸味強シ。二時開ク。眞木ハ黒色ニ變ジタレド火來ラズ。四時火來ル。第二樽木醋味ウスク色ウスシ。生ソダ三把タク。石灰ノ俵ヲヒラキ上排ニシテ閉ヅ。口ハ九指。上部ニ穴ヲ作リ時々ノゾク。夜八時煙絶エザレド閉ヅ。上部ノ口ヨリノゾキテ大ニ火力ニ就イテ得ル所アリ。

大竈夕一指半九指。

十九日

大竈ソノ儘。炭ガマ見ニ人來ル。

二十日

大竈木醋濃厚トナル。二時口ヲ半分ニス。（五時フサギテ）二時前面ニ口四指四指トシタルモノヲ一ツトス。噴烟熾ナリ。

二十一日

小竈樫炭非常ノ惡炭、考究、粡ヲ入ル。口焚キハ三貫六百目ヲ出セルヲ以テ、消滅セシハ五束位ナラン。出入口ノ雜木ハ存セリ。大竈火來ラントシテ來ラズ。此夜四指四指ヲ塞グ。小竈ノ口ハ四指三指トナサントシタルニ、風ノ強カリシタメ四指二指トナス。

二十二日

大竈朝火來ルヲ知ル。（夜中ナラン）

小竈再ビ口焚キヲナス。風ノタメニ煨（ウツ）メル。噴烟甚ダシク木醋非常ニ濃厚ナリ。卽チ二指二指トス。夜十時二指一指トシテ前面ニ一指一指ヲ穿ツ。此時土管ノ度

ハ五ツ六ツ、今回ノハ一月二十日入ノ椚ヲ標準トス。
稲敷郡ノ人此度ハ二人ニテ再ビ來ル。

二十三日

小竈十時過グル頃（十一時ナランカ）二指二指ヲ塞ギ、前二指一指トス。木酢ハ濃厚ナルニ至ル　點火翌朝（?）ノ色ニ似タリ。夜十時全ク塞グ。此時後口少シク空隙アリシヲ發見ス。密閉ノ度少シク早カランカト思ヒタレド、炭材既ニ乾燥セルガ上ニ、樫ノ惡炭ナリシト、椚ノ彼ガ如キ結果ナリシハ、強熱ナリシ故ナラント思惟セシヲ以テ然カセリ。此竈土管ノ度ハ今ニ至ルマデ低キヲ以テ、大ナル過モナカランカト思ヒ居レド、一夜ノ強風ノタメニ或ハ意外ノ失策アランモ知レズ。然ラザレバ良炭ニ近カランカ。石灰昨日中和ノ分今日煮詰マル。木酢ハ樫、今日中和セシモノハ凡石灰一俵ヲ要シタリ。木ノ根ヲ焚クコト前四日、今昨日ヨリス。
（原文ノ儘）

二十四日

小竈噴烟稀少。昨夜一指一指トスベキヲ密閉セシガタメナリ。十時少シク空氣ヲ入ル。十二時二指一指ヲ穿ツ。三時噴烟强ク、木醋非常ニ濃厚トナル。六時火來ル。七時口ヲ開ク。左方ハ稍灰ヲ蒙リタレド右方ハ燒盡セズ。木醋モウスラガズ。尙二時間ヲ置クベキモノナレドモ、焚クロハタテ一。十一時噴烟白シ。口ハ一指トシ煙突ヲ二分開ク。大竈甲冷却ス。明日ハ炭ヲ出サントス。石灰ハ二竈ニテ（楢ト櫟ト）十五貫七八百目アリタルヲ今日確ム。卽チ一回七貫目ヨリ八貫目ノ間ニ居ルモノナリ。

二十五日

大竈炭ヲ出ス。下積眞木ハ狐色トナリタルニ過ギズ。火ノ屋根ヲノミ通リタルモノト思惟ス。茨城縣林業巡回教師來ル。多賀郡關本村ニ醋酸石灰ヲ製造スルモノアリトイフヲ聞ク。八溝山下ニモアリトイフ。

二十六日

彌右衛門ノ竃ヲ調査ス。大竃夜四指三指トス。此日熱頗ル强シ。石灰昨日燙詰メタル分五貫八百目ヲ得。一昨日製造セシモノト合セテ九貫目ナリ。コレハ樫一竃製出高昨日燙詰メタル分(椚)三貫六百目ヲ得。今日九貫二百目(四釜)製出ス。此口マデニ木ノ根ヲ焚キテ製出シタル石灰ノ量ハ二十八貫。

二十七日

大竃昨日ノ如シ。

二十八日

巡回教師來ル。此朝未明ヨリ炭ヲ出ス。先夜少シク無理ヲ犯シタルタメ、炭ニ赤衣ヲキル。カカリアル所モ有リ。點火口ノ栗ハ八貫六百目ヲ出ス。此代金六十錢分アルベシ。束數十三トスレバ約四十錢ナリ。卽チ二十錢ノ利益アルモノナレドモ、口焚キノ麁朶三十錢ヲ差引ケバ、二十錢ノ損失トナル。普通ノ炭竃ニ在リテ

ハ楢十束ニシテ炭二貫目、ソノ他麁朶二束トシテモ、三十錢以上四十錢マデノ損失ナリ。椚九十九束三百二十七貫四百目、點火口栗十三束及ビ出シ入レ口ノ分合セテ四十四貫九百目ヲ入ル。一時點火二時間餘ニシテ第一煙突ノ噴烟熾ナリ。更ニ焚キテ五時麁朶七束ヲ費シタル後煨ノタマレルヲ見テ、石灰俵ヲ二ツヒラキテ煨ノ上ヲ掩ヒテ口ヲ下グ。煉瓦縦一本、然ルニ第一煙突ハ噴烟熾ンナレドモ、第二煙突ニ烟ヲ噴カズ。(五時ヨリ先立ツ二時間ニシテ土管ヲツナギタルモノナリ)卽チ土管ヲ外スニ些ノ烟ナシ。第一煙突ヲ八分フサギ空氣口ヲ檢スルニ土塊ノフサガリシモノアリ、除ク、漸ク煙アリ。八時土管ヲツナグ。四指三指。大竈ハ四時頃二指二指。次デ前四指三指後フサグ。

三月一日

小竈噴烟少シ。木醋モウスシ。十二時四指二指。大竈モトノ儘木醋ハ濃厚トナリ、第二樽多量。石灰殘リヲ製セシニ五貫八百目ヲ得タリ。卽チ櫟一竈ニシテ九貫四

百目ヲ得タル割合ナリ。

二　日

小竈土管ノ度少シク强シ。昨日ハ三十四十五十モ數フベカリシヲ、今日午後ハ五ツ六ツ十ニハ堪ヘズ。木醋モ酸味强シ。色ハ濃カラズ。二時二指一指トシ、前ニ三指一指ヲ穿ツ。夕土管ノ度十五六ヲ數フレドモ堪ヘ難カラズ。噴烟稀少ナルニ至ル。夜十時後ヲ閉ヂ、前四指二指トス。大竈ハモトノ儘。（四指一指半ノ狀態ヲ保ツ）噴烟多ク木醋ハ第二樽多量。

三　日

大竈朝火來ル。口焚キヲナサズ。煉瓦竪一本ノ口ヲ開ク。土管ヲ外スニ、白煙次イデ稍靑煙ヲ交フ。十二時煉瓦ヲ閉ヅ。夕フサグ。ナホカカリアルヲ覺ユ。

小竈朝土管ノ度更ニ低ク、最終ノ如キハ掌ヲアツルコト暫タニシテ漸ク微溫ヲ感ズ。木醋ハ淸水ノ如ク、第二樽ハ寒冷。一日ノ量ハ少。九時四指二指ヲ四指三指

トシ、十時四指四指トシテ、後再ビ一指ヲ穿ツ。噴煙更ニ濃厚ナラズ。十二時後三指一指、前煉瓦竪一本トス。噴煙ノ度進マズ。四時前口ヨリ風ヲ煽ギ入ルルニ、少シク強度ニ煙ヲ吐クガ如クナレドモ、普通ノ第二日ノ如シ。後ハ即チフサグ。六時四指三指トス。

四　日

口ハ昨日ノママニテ一日ヲ過ス。朝風雨。土管冷却。口ハ雨水ノヒタス所トナル。土ヲ少シク掘リ下ゲテ水ノ浸入ヲ防グ。夜噴烟少シク強シ。此日マデニ木醋ーウスキ）二石。

五　日

八時噴煙多ク木醋濃厚ニシテタールヲ交ヘ多量ナリ。口ヲ一指トス。三時ニ至リテ噴煙少ク木醋亦ウスシ。四指一指トス。

六　日

七時噴煙熾ンナルヲ以テ閉ヅ。木醋漸ク酸味稀薄ナレドモ火來ラズ。午後噴煙稍少シハジメハ火ノ來ルナラント思惟シタレドモ、是レ蓋シ密閉シタルヲ以テ火力ノ滅退シタルモノナラン。此ノ竈ニ於テハ屢々此現象ヲ見タリ。夜十二時火來リ、第一列ノ炭材ハ少シク灰トナル。口焚キ。木醋ハ三石ヲ超越セルガ如シ。

三時密閉シテ就床。

大竈七管ヲツナガザルヲ以テ、火力強クナリタルガ如シ。二時六指二指トス。源三郎曰クブリキ管ト敷ノ間餘リ狹カリシタメ、火ヲ引ク事少カリシガ瓦ヲ去ルニ及ビテ噴煙オホクナレリ。タメニ點火ノ時間ヲ長クセリ。今日ノ松炭未曾有ノ出來ナリ。竈ト炭材トノヨキガタメナラン。煉瓦壁ナレドモ屋根高キタメアツカラズ。

七日

小竈十一時青煙脚ナク、鼻ヲ衝クコト少、閉ヅ。コノ竈去月廿八日一時點火シテ

日ヲ經ルコト八、結果未ダ知ルベカラズ。惡シケレバ甚ダ惡シク、善ケレバ又更ニ善カラン。此竈ノ燒盡カク遲カリシハ、最初口ヲ下グル時菰ヲ着セタルガ原因ナラント思フ。菰ヲ掩フノ必要ナルハイフマデモナケレド、一夜火力ヲ强クシテ翌朝再ビスルヲヨシトスベシ。栗炭八貫六百目ヲ得タルヨリ見レバ、エゴノ如キハ尙多量ナラン。大竈一日ソノ儘。夜四指三指。

八日

大竈ソノ儘。

九日

一昨日ノ儘。夜二指四指位トシ前少シク開ク。

十日

朝煙突ヲツナグ。噴煙稀少。晝頃只水蒸氣ノ上騰スルヲ見ルノミ。口ヲ大ニスレドモ效ナシ。夜前ヨリ焚込ム。口ハ縱一。小竈炭ヲ出ス。少許ニシテ火起ル　ヤ

ム。（炭量二十貫三百）炭質ハ未ダ强勢ニ至ラザルタメ、手ニ持ツニヨゴル。

十一日

炭ヲ出ス。結果不良。良炭材ヨリ九十貫ヲ出ス。點火口向テ左側ハ白頭。スベテ頭見惡シ。炭材三百四十貫。

大竈夜十二時口ヲフサグ。

十二日

小竈八時焚込ム。前日ノ煨ハ既ニ消滅シテエゴノ炭材露出セリ。麁朶二把、五指三指。第一煙突ハ煉瓦ヲ以テフサグ。噴煙微少。スベテ前例ニ據ラズシテ、土管及ビ木醋ノ度ニヨルコトトス。夜十時四指弱三指。木醋コノ日ハエゴノ揮發分ナラン、色濃ケレドモ酸味强カラズ。大竈八時再ビ煉瓦一。五時頃口ヨリ青煙ヲ時時噴出ス、小孔トス、ヤム、ソノ儘。此口點火口ノ煨ヲ貯フルニ、處置ニ困難ナリ。粉炭ヲ以テセントノ念起ル。既ニ炭化シタルモノハソノ質ノ如何ニ拘ラズ、

必ズ空氣中ニ燃燒セシメタル煨ニマサラン。粉炭ヲツメソノ上ニテ鹿朶ヲ焚ケバ、煨ノ消滅スルニ從ヒ漸次炭ハ火トナルベシ。

小竈昨夜土管ヲツガズ。今朝ニ至リテツグ。夜十一時三指三指二指二指。

十三日

小竈噴煙强カラズ。十二時前六指三指强カラズ。三時松炭一箕ヲ入レテ小束二束タク。此時灰ノ下ニ未ダ煨ノ殘レルヲ見タリ。口ハ三指三指木醋漸クウスシ。朝ハ稍濃カリキ。

大竈昨夜ノ儘噴煙少シ。夜十一時タテ一。小竈夜十一時前六指三指、後三指二指。

噴煙少ク土管ニ手ヲアテ居ルニ熱サヲ感ゼズ。

十四日

小竈夜十一時後フサグ。第一樽ノ木醋殆ンド冷却。

大竈夜フサグ。

十五日

思フニ小竈ノ煙突ニ故障アリ。火力ノ到底强カラザルモノヲ、口ヲ大ニスルハ徒ニ炭ヲ柔カク輕ク減ラスノミ。此口コノコトヲ悟ル。

眞瀨一泊。

十六日

福田ニ來ル。雨ノタメニ明日ヲ案ズ。

十七日

竈築造ヲハジム。五尺二寸一尺八寸、口ハ二尺、側立一尺、深サ二尺、千本突ハジメ、人夫二人。

十八日

側立成ル。隣村ノ人來リテ見ル。望ミノモノナリ。人夫七人。

十九日

煉瓦シキ成ル。木材ヲツメコム。地ツケ人夫五人。

二十日

歸宅。此日甲戍ルベシ。

夕刻小竈未ダ燒盡セズ，源三郎曰ク十六日ノ朝四指三指トス。十七日ノ夕マデソノ儘。夕二指三指。十九日ノ朝二指一指。廿日ノ朝閉ヅ。

大竈十八日出ス。前口ハ減少。炭ハ山ノ如ク投ゲ上ゲアレドモ折レザルモノアリ、良炭。十八日焚付ケ。十九二十日夕マデ煉瓦竪一。夕四指三指噴煙熾ンナリ。

二十一日

小竈午後五時頃口焚キ、尙少シク早カリシガ如シ。炭材前列未ダ黒キヲ以テ知ルベシトス。夜十一時頃口ヲ二指ニシテ煙突ヲ六分塞グ。火ノ來ルコト十分ナラザリシヲ以テ、噴煙靑カラザルコト多時ナリ。

大竈二時頃二指三指ナホ噴煙熾ナリ。

二十二日

朝小竈水蒸氣ノミ閉ヅ。

大竈一時頃後口閉ヅ。前口煉瓦一。夕噴煙稀少。卽チ再ビ口ヲ開ク、多シ。後口ヲ閉ヅルハ徐々タルベキヲ知ル。卽チ兩口ヲ同時ニ開キオクコト少クモ一日タルベシ。前口ヨリスル空氣ト、後口ヨリスル空氣トハ作用ニ自ラ異ナルモノアルナラン。

小竈ノ此ノ如ク徐々タル甚ダシキハ、殆ンド火力ナキカヲ疑ハシメタリトイフ（余ガ留守中）ハ、想フニ連絡口ノ小ナルト點火口ニ煉瓦ヲシキタルガ原因ナラン。十二日目ニシテ閉ヅルヲ得タリ。

二十三日

源三郎蒸發竈ヲ修繕ス。大竈噴煙稍多シ。午後下妻マデ。

二十四日

水戸マデ。瀧口氏ヲ訪フ。昨日土浦ヘ赴キシ由。

二十五日

十一時五十一分水戸發。磯原下車。華川村中妻滑川氏ヲ訪フ。案内ヲ受ケテ小豆畑山縣氏ヲ訪フ。醋酸石灰製造ハ中止。竈ヲ見ル。同人ハ不在。歸途炭鑛採掘ノ狀ヲ見ル。

今日聞ク所ニヨルニ、當地方六貫目ノ炭ヲ製造スル炭材ハ、二錢・二錢五厘・三錢・四錢・ノ間ナリ。卽チ長サ六尺高サ五尺ノ一棚（木尺一尺八寸）一圓五十錢ヲ標準トス。炭竈ハ六貫目（正味）俵七十俵ヨリ三四十俵ノ間ヲ出ス。交通ノ開ケタル結果石ガマハナシ。六貫目俵磯原ニテ三十錢位。今ハ少シク安クシテ廿四五錢ナラン。

二十六日

才丸行キ。事業既ニ停止。竈ハ五貫目俵三四十マデ甲ハヒクク尻ヒロシ。炭質疎

惡。炭材二百貫ニテ四石弱ノ木醋ヲウル割合。小豆畑ニテ聞ク所ニヨレバ、生木十五貫目ニシテ木醋五貫、卽チ一斗許、但シ兩者共石灰ヲ製スルハ、煮詰メタルモノハ少時ニシテ乾燥ス。小豆畑ニテハ八貫目ヲ一時ニ二時間ニシテ仕上グル由。才丸ニテ午前ニ十貫目ヲ製ス。

巡回敎師ノ調ベニ係ルモノ、生木百貫ニ付炭十九貫、口眞木五十貫餘ニシテ炭五貫弱、ソノ他口焚多量。時間ハ五六時間ヲ費ス。

二十七日

（此處五字不明）ヲ見ル。（辻郡長ニ逢フ。）海水ハ（此處三字不明）ノ粉炭ニシテ二千石ヲ蒸發セシム。夜水戸着。

二十八日

（此處三字不明）泊。

二十九日

笠間ニ來ル。

三十日

石寺ノ山ニ石竈ヲ見ル。

三十一日

四月一日

再ビ石寺山。

二日

笠間ヨリ下妻。

三日

下妻ヨリ歸宅。今日炭ヲ出ス。粉炭ヲ入ル。一時間ニテ點火シ終ル。粗朶ハ二束。

留守中二十五日炭ヲ出ス。惡炭。點火口ハ六貫目位ノコル。炭材ツメコム。粉炭

ヲ入ル。午後四時焚付ケ。粗朶二把ニテ五時口ヲ下グ。此夜三指四指。

翌日六時二指三指トス。コレハ炭材モ屋根木モ乾燥シタルヲ以テ、熱度上騰シタルタメ木醋ノ濃厚トナリシ故ナリ。

廿七日。二指一指六時。

廿八日。六時前面三指三指ヲ穿チ後一指トス。十二時一指ヲ閉ヅ。前面ハソノ儘。

廿九日ノ朝火來ル。麁朶二把焚キ込ム。縦一本ノ口三時トム。

大竈廿四日ノ朝閉ヅ。此時マデ口縦一、五夜ヲ隔ツ。

廿九日。出ス。下側ハ殆ンド焼ケズ。廿九日入レテ焚キ付ク。二時間焚ク。麁朶四把。六時口ヲ下ゲル。縦一。

四月一日ノ夕四指三指トス。三日モソノ儘。

四日

小竈炭材梢少シ乾燥足ラザルヲ以テ火力少シ。焚付ケノ日四指三指トス。ソノ儘

ニス。此日ハ木醋末ダウスシ。

大竈ソノ儘。

五　日

小竈ソノ儘。

大竈十二時火來ル。後口ヲ閉デ前口縱一ヲ開ク。

六　日

朝小竈ソノ儘。大竈口ヲ小ニシテ一夜オク。噴煙漸ク靑シ。午後三時福田着。小竈松ヲ二カマ。今櫟ヲ燒ク、四日目ナリ。大竈二カマ目ニシテ、松三日目。點火口徑六尺五寸、中五尺五寸、口六尺、巾六尺五寸。

七　日

小竈午前火來ル。口焚ヲナサズ。午後三時頃噴煙稀薄、ナホカカリアルヲ知ルモ閉ヅ。大竈午前ニ口ヲヒラク。

八日

歸宅。大小共閑デアリ。小竈ハ今朝トツ。云々。

九日

出京。整四郎ニ逍フ。

十日

滯京。

十一日

同。秀島氏ヲ訪フ。

十二日

秀島氏ヨリ大里氏訪問アル旨イヒ來ル。

十三日

錦町ニ大里志郎氏ヲ訪ヒ、秀島氏同道和泉橋外ニ衛生試驗所長田丸良純氏ヲ訪フ。

醋酸製造會社員本間賢次トイフ人ニアフ。

十四日

茅場町泊。

十五日

同。小石川泊。

十六日

整四郎ヲ（順次郎ト）麻布材木町二二莊原好一方ニ訪フ。昨日軍旗下附、今日勅語捧讀式。午後三人江木本店ニテ撮影ス。

十七日

雨。歸宅スルヲ得ズ。午後左千夫ヲ訪フ。

十八日

歸宅。小竈閉ヅ。大竈燻焼中。

留守中、第一。四月三日炭ヲ出シ眞木ヲ入ル。夜縦一。四日朝四指三指。五日ノ朝マデソノ儘。朝二指三指。六日ノ朝マデソノ儘。六日ノ朝二指一指トシテ、前口煉瓦一本、十二時マデソノ儘。十二時火來ル。卽チ四指三指トス。四時頃マデ四指三指ノ時、後口ハ閉ヅ。夜口ヲ全ク閉ヅ。翌朝フサグ。炭ハ楢、十一日出ス。出來ハ中出來。

第二。十一日炭ヲ出シ眞木ヲ入ル。四時焚付ケ五時口ヲ下グ。口ノ縦一。十二日ノ朝マデ四指三指。少シク燃エ悪シキヲ以テ、十三日一日ヲ經テ、十四日ノ朝二指三指トス。十五日ノ朝マデ。十五日ノ朝二指一指。火ノ來ルマデ前口縦一。午後四時頃火來ル。同時ニ前後共閉ヅ。十六日ノ朝フサグ。

大竈十二日出ス。炭ハ上。コレマデ敷ノ部分燒盡セザリシガ、コノ時僅ニソノ痕跡アルノミ。十二日ニ入レタル分ハ十八日マデ縦一。少シク火力ノ足ラザリシタメナリ。夜前口縦半トシ後口ヲチヂム。

十九日

小竈炭ヲ出ス。良結果ニシテ敷ノ部分全ク燒ケズ。最後ニ空氣ヲ前口ヨリ取ラザルタメナラン。再ビ竈ニ入ル。點火口ノ炭材大部分殘リタレドモナホ煙ヲ立ツ。五時十五分焚付ク。𥫗𦽳一把半弱。四十五分卽チ六時ニ口ヲ下グ。粉炭ト、屋根木ノ乾燥セルト、ブリキ管ノ敷ヲホル四寸トナリシタメニ火ノツキ早キナリ。口ハ縱一。大竈朝水氣ノミ。卽チ前口ヨリ焚付ケ、後口ヲフサギテ、縱一。木醋タ濃厚ナリ。コノ竈空氣ノ作用極メテ鋭敏ニシテ、兎モスレバ火ノ消ユルコトアリ。

二十日

小竈朝四指二指。一日ソノ儘。

二十一日

小竈ソノ儘。大竈閉ヅ。

二十二日

小竈朝六時二指一指、前三指二指、晝後ヲフサグ。木醋濃厚ニ來テ漸次タール多シ。火來ラントシテ來ラズ。夜九時全クフサグ。

二十三日

六時煉瓦縦一。未ダ白煙稍青色ヲ交フ。九時過ギ青烟。十二時煉瓦ヲサシ込ミ空隙僅少。二時口ヲトヅ。四時過ギ煙突ニ噴煙稍少ナリ。乃チ止ム。

二十四日

蒸發竈改築。

二十五日

同。

二十六日

小竈ナホ火アリ。大竈ヲ出ス。殆ンドカハリナシ。良炭。

二十七日

小竈ヲ出ス。炭質脆。焚付例ノ如シ。

二十八日

大竈縦一。小竈四指二指。下妻ニ行ク。小山泊。

二十九日

鏊四郎ニ逢フ。下妻泊。

三十日

夜帰宅。大竈屢々消エタリトイフ。小竈検セズ。

五月一日

小竈一指ナルヲ見ル。木醋稀薄噴煙稀少。朝前口縦一。強カラズ、トサマカウサマ加減ス。夜大竈口ヲチヂメ前口縦一。

二日

大竈朝焚付ク。消エントシタレバナリ。前後共午後噴煙濃シ。夜前一。後小口。小竈昨日午前十時頃、前口ノ既ニ火アルヲ見ル。庇梁ニ火ノ來リタルナリ。口ヲ小ニス。夜極小トナス。十時頃一旦前口ヨリ焚込ミタリ。石灰煮詰メハジム。

三日

大竈火弱シ。第一煙突ヲ立ツ。晝頃火力强シ。後繼一トス。

小竈前閉。午後煙突ヲ去ル。又ツグ。夜前小口。五箇ノ老婆來ル。曰ク炭ハ焚込ミガ肝心ナリ。ヨク點火セザレバ時間ヲ長クス。長クスレバ良炭ヲ得ズ。口ヲ餘リ緊縮スルヲ以テ赤衣ヲ着ルナラン。予不圖考フ、口ハ後口ノ儘最終マデ燒クベシ。

四日

小竈閉ヅ。大竈後口ノ儘。

五日

大竈朝稍青煙。夜ニ入リテモナホ燻ル。ソノ儘ニス。午後二回一時間位ヅツ前口縱一ヲ穿チミル。

六日

大竈朝微カニ水氣ヲミルニ過ギズ。更ニ前口ヲ穿チテ後口ヲ閉ヅ。十時青煙ヲ發ス。夜ニ入リテナホアリソノ儘。

七日

石灰ヲツクル。人足ラザレバ炭ヲ出サズ。

八日

小竈炭ヲ出ス。炭質ハ稍佳ナレドモ頭皆白ク屋根木ハ灰トナリタリ。連絡口ヲ檢スルニ過小ナリ。卽チ口ハ大ニス。五時點火十分。從來惡炭ヲ生ジ日數ヲ要シタルハ、一ニ口ノ小ナリシニ由ル。口小ナレバ空氣口大ナルモ煙ヲ噴キ難シ。卽チ遲シ。屋根木ハソノ間ニ灰トナラン。夜十二時十管ヲツナグ。最初四指五指トシ

テ此時五指三指。

九日

朝七時五指二指。

十日

朝八時五指二指。午後五時五指一指。

十一日

朝火力弱シ。大竈炭ヲ出ス。

十二日

昨日晝火來ル。今日前口ヲ大ニス。朝稍青烟ヲ交フ。次デナホ口ヲ大ニス。白煙トナル。敷ノ燒クルナリ。青煙トナリテ午後閉ヅ。大竈火力朝來弱シ。焚キ込ム。

齋田氏ヨリ手紙。

十三日

大竈昨日ヨリ煉瓦縱二。石灰ハ今日マデニ充分蒸發シ終ル。新ニ採取セル楢ノ木醋ヲ中和シテ蒸發シハジム。

十四日

大竈昨日ノ儘。

十五日

同。石灰製殆ンド終ル。

十六日

大竈朝前縱一ヲ開ク。二時間許ニシテ煙ウスシ。モトノ如クス。夜後一トス。

十七日

大竈朝青煙即チ前ヲ開ク。噴煙再ビ白クシテ熾ンナリ。縱二寸位トス。夜ニ至ルニ從ヒ色稍々カハル。

小竈炭ヲ出ス。少シクイブルノ外ハ極メテ良質。前口モ一ノ損失ナシ。二時半焚

付ケタ閉ヅ。今日少シク焚付テ取ル。漸ク秘法ヲ悟ル。ハジメ四指五指。夜十時五指三指。

十八日

朝思ヒシヨリモ強カラズ。乃チ五指四指強シ。三指トナシ後四指トス。此時正午過グ漸ク強シ。夜十時二指五指。

大竈朝青煙夜全クウスシ。卽チ閉ヅ此竈熱度爾來第一、甲ニ載セタル倏燃ユ。

十九日

朝木醋少シクアフル。終日五指二指、夜モ。此日宗道ヨリ下妻。

二十日

朝七時前ニ五指一指ヲ穿ツ。十二時前五指二指。後五、一。薄暮後ヲ塞グ。夜十時前五、三。此時木醋ヤヤウスシ。噴煙熾盛ナリ。

二十一日

朝噴煙熾ンニシテ木醋ヤヤ酸味少シ。十二時タールヲホシ二指五指トス。夜口ヲ小ニス。

二十二日

朝煙キレタルガ如シ。閉グ。大竈甲落。房州へ立ツ。

二十三日

房州清澄山ニ至リ。三十日下山。名所ヲ週遊シテ六月九日歸宅ス。甲ノツキ方。甲ヲ保タシムル方法。木醋ニ就イテノ智識ヲ得タリ。

竈ハ兩方トモソノ儘ナリ。

六月十七日

小竈ヲ出ス。良炭ニシテハジメテ人ニ語ルヲ得。點火口減ルタメニ炭ニ白坊主アリ、之ヲ缺點トス。楢ノ外積ミシメリタルヲ入ル。藁ハ十分ニ注意シテキセタリ。

二時半焚キ込ム。五時口ヲ閉グ。麁朶二把半シメリタルヲ以テ面倒ナリ。兎角ニ

シテ第二煙突ノ煙冷ナリ。ハジメ第一ヲフサギ、夜マタ第一ヲ開キテ、口ハ三指五指トス。

十八日

朝六時噴煙オホキヲ以テ第一ヲ閉デ、十管ヲツナグ。九時頃三指五指ヲ縦一トス。一時頃十管ハ外ス。七時十管ヲツナギ、十時半六指三指。

十九日

噴煙強カラズ。一日ソノ儘ニス。

二十日

此日少シク強クナリシガ如シ。夜九時半二指六指トス。此日木酢ハヤヤイロヅキ濃シ。

二十一日

朝七時半噴煙燃ナレバ、後口一指六指トシテ、前口一指六指ヲ穿ツ。八時半後口

閉ヅ。十二時半少シク弱キヲ以テ復タ開ク。夜フサグ。

二十二日

朝弱シ。七時半後口一指六指ヲ穿ツ。ナホ弱。八時半二指六指弱シ。前口三指六指漸ク强。後口閉ヅ。强、後口二指六指ニテ……。

二十三日

前夜七管ヲツナギオキタルニ、朝六時ハヅシミレバ青煙。十二時殆ンドナシ。閉塞。

二十六日

ヒラキミル、悪炭。質脆弱。從來曾テナシ。

二十七日ヨリ七月二日マデソノ儘。

七月二日

炭ヲ出ス。一週日モ費シタルモノハ必ズ悪炭ナリ。早キモ宜シカラザレド遅キモ

ヨカラズ。而シテ炭ノ燻ブルハ低熱ニシテ皮ノ燒クルニ至ラザリシモノナリ。櫟ヲツメテ三時焚付ク。（櫟白五束）ブリキ管ノ短キハ普通ノカマノ如ク、口ニ火ヲ引クヲ以テ宜シカラズ。カクノ如クナレバ連絡上部ニ火ノ十分ナラザルニ口ヲ塞ギ、噴煙（第一）ノ度ヲ見テ第一ヲフサグヲ以テ、遂ニ十分ノ點火タラズ。隨テ時日ヲ要スルコト大ナリ。二時間ニシテフサギ、夜ニ入リテコレヲ悟リタルヲ以テ總テトヅ。

三　日

朝ブリキカンヲ出來ウルダケ下ゲテ火ヲ焚ク、二束。カクノ如クニシテ八時半閉ヂ、ヤガテ土管ヲツナグ。煙ウスシ。卽チ土管ヲハヅス。煙オホシ。三時頃三指六指トス。前口縱一。土管ヲツグハ十分ノ煙トナリタルヲ度トスベキナリ。

四　日

昨日ノママ一日ヲ過ス。夜下妻ヨリ歸リ、十時之ヲ檢スルニ尙强カラズ。少シク

煽グ、稍強シ。

五　日

朝七時強カラザルヲ以テ前口少シク開キ、種々ノ方法ヲ施シタレドモ強カラズ。乃チ麁朶一把ヲ焚ク。ヤガテ十管ヲ外シ縦一トシテ午餐ノ後之ヲ見ル。口ヨリ噴煙熾ンナリ。卽チ十管ヲツナギ口ヲ全ク閉ヅ。漸ク穏カナルヲ以テ三指四指トシ、四指五指トス。是ニ於テ全ク常態。

六　日

前口ヲ穿チ二指一指。

七　日

朝青煙五時間ニシテ閉ヅ。此竈必ズ中途ニシテ強熱ヲ與ヘタルヲ以テ、短カク折ルベキヲ思フ。只櫟ナルヲ以テ然ラザルカ。

十　日

試ミニ口ヲ開ク。火起ラントス、閉ヅ。炭質ハ豫想ノ如シ。

十二日

再ビヒラク、復タトヅ。

十四日

全ク出シ終ル。屋根木多ク炭トナル。上積ノ炭却テヨシ。之ハ強熱ヲ與ヘザルウチニ炭化シタルタメナラン。點火口ノミハ從來ナキ良炭ナリ。櫟日五束ツメル。櫟鹿朶四束ヲタク。第一煙突ヨリ煙十分ナル時、口ヲ下ゲテ煙突ヲ瓦ヲ以テフサギ、口ヨリ風ヲ煽ギイル二十分許。第二煙突アクト煙漸ク熾ンナリ。三指五指トシテ一夜ヲ過ス。

十五日

朝煙突ヲツグ。三指六指トス。正午過ギ二指六指木醋濃。

十六日

朝煙熾ンナリ。二指四指。

十七日

朝煙熾。二指三指。晝過ギ二指二指トシテ少シク煙弱キガ如クナレドモ、十管ノ度ハ變ゼズ。聽テ二指一指トシテ前門二指二指、次デ後口一指夜一指ヲ閉ヅ。煙熾。

十八日

朝煙一層熾。木醋變ズ。一指一指。十管ヲ外ス。晝二指一指。夕ヤヤアヲケレド日ニタタズ。二指三指。

十九日

朝青煙、閉ヅ。

二十五日

炭ヲ出ス。良炭ナレドモ清澄行前ヨリハ劣ル。白頭トナルモノアリ半焼ヲ入ル。

生眞木ヲモ入ル。夕口ヲ下ゲ、夜三指四指トス。

二十六日

朝土管ヲツナグ。一日ソノ儘。七時三指五指トス。稍木醋ウスカリシタメナリ。

二十七日

一日三指五指。夜煙熾ンナルヲ以テ二指五指トス。實ハ燒キ直シヲ加ヘタリシヲ忘レ居リシ過チナリ。

二十八日

朝後口閉ヂ、前口二指二指、次デ二指三指、夕閉ヅ。

八月二日

口ヲ開ク。暫クニシテ火起ル。一時間以上心付カザリシナラン。炭ハ脆弱。此日ヨリ醋石ヲ製ス。

九日

炭ヲ出ス。(此處三字不明)出入口ゴツゴツ。他ハ良炭。樫ノ方ヲ入ル。火付キ面倒。
夜十時過ギ三指七指。醋石ハ途中ヤスミ七日ヲ以テ終ル。

十日

一時三指四指、六時弱シ。漸時雁首ヲ外ス。卅分餘ニシテ强シ、ツナグ。

十一日

昨日ノ儘。

十二日

三時頃七指一指トシテ前口五指二指トス。夜十時頃七指一指トス。煙ハ强シ。

十三日

朝後口閉ヅ。前口二指四指。六時二指三指。八時半ニ見タルニ煙　煙少クシテ前口ヨリ熾ニ吐ク。乃チ土管ヲ外シテ口ヲ全ク閉ヅ。十時一指三指ヲ穿ツ。吐クコト止ム。

十四日

朝白煙稀少。或ハ火力ノ著シク減少シタルナランカト、松粗朶一束焚キ込ム。オナジク白煙稀少。十時頃ニ至リテ始メテ夜中燒盡セシモノナラント心付ク。閉グ。此竈モシ案ノ如クナラバ、重量減ジテ良炭ナラン。然ラザレバカカリアルカ、或ハ惡炭ナラン。思フニ必ズ良炭タルベシ。

炭材ノ量（本文參照）

一月二十日

櫟　十　束　三十四貫九百目　三十三貫三百　三十四貫六百　三十五貫百　三十五貫　三十四貫九百　三十三貫八百　三十二貫五百　三十四貫

五束　十七貫四百

そね材十束　三十一貫五百　三十四貫二百

櫟切株十束　二十五貫百目　二十七貫　一貫五百目ヲ減ズ

そね二束　五貫五百七十目

點火口そね材十七束許　凡五十六貫目

本　炭　材

櫟大束九十五束（十七貫四百 三百〇八貫百目）…　三百二十五貫五百

櫟切株十九束　五十貫六百目

そね材五束許　十五貫目許

總　計（五十六貫 三百七十三貫七百目）…（十七貫四百 四百二十九貫七百目）

五月十七日

栗　眞　木　十一束廿五貫　六束十二貫五百

櫟　九束卅貫三百目　十束三十一貫五百　十束三十二貫五百　十一束卅二貫五百　十一束卅二貫五百　十束半三十一貫五百　九束卅一貫五

百　十束卅四貫二百　十一束卅二貫　二束半八貫八百　七束廿五貫

三束十一貫

切　　束　栖櫟十三束二十九貫五百　八束半十九貫　一束二貫目

點　火　口　栗廿束四十五貫　切束五十貫五百　櫟百四束三百三十三貫三百

六月十七日

出ス。櫟九十一貫二百目、一束ニ付八百八十目弱、歩合ハ二割七分三厘、點火口約四貫目、此代金三十錢。栗眞木ノ代金ハ五十錢トシテ損失二十錢。櫟炭ハ九貫目トシテ拾圓拾參錢。拾貫目トシテ九圓拾貳錢。炭材一束六錢五厘トスレバ百四束ニテ六圓七拾六錢。七錢トスレバ七圓貳拾八錢ナリ。

九貫目ニテハ、六錢五厘ノ計算ニテハ差引、參圓參拾七錢ノ利益ニシテ、十貫目ニテハ、貳圓七拾五錢ノ利益ナリ。七錢ノ時ハ、一ハ九貫目ノ相場、貳圓八拾五錢。一ハ十貫目ノ相場、壹圓八拾四錢。（原文ノ儘）

耕作手帳

耕作手帳

（編者曰、以下四頁各項或は抹殺し或は諸記號記入しあり）

中宿屋敷境の欅を居宅屋敷内へ移植す。

屋敷内竹林東北の隅へポプラーを移植す。

藤兵衛屋敷緣木中欅三本を屋敷内へ移植す。（一本は土藏の裏舊欅の位置）

梅畑の周圍にはアカシヤの垣を作る。アカシヤの苗は若干を購入して藏ノ下田島へ挿木にして繁殖せしむ。

棕櫚苗を求めて竹林緣木の杉の下へ移植す。

卯木の苗木を作ること。

樟を屋敷内及び西の山林内の日光に疎からざる個所を見て移植す。

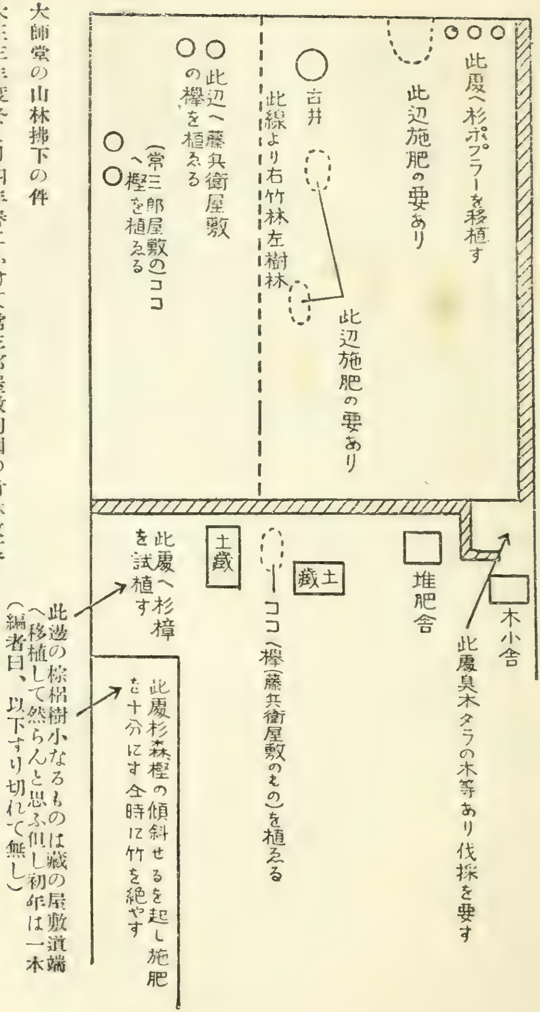
常三郎屋敷の橙を移植すること。

澁柿の苗を大師堂東落し堀の緣に移植す、間隔三間。

大正二年度は梅畑の中央以北へ陸稻――戰捷――を作る同南へは大豆を作る。

大師堂附近臺（?）開墾地へ、は大正二年度は蕎を試植す。（三年度に變更三年以後ならむ）

大師堂西小麥跡へ陸稻、大麥跡へは同連作。
大師南小麥跡、大豆。
門畑開墾地陸稻四年目の連作。
須賀、馬鈴薯、里芋。
大師南桑畑を漸次廢止すること。
岡本岩吉の山林を購入すること。
門畑開墾地の地盤を高めること。（大正四年五年の後ならむ）
門畑の桑を除きて開墾地に接續せしめること。
大師東の櫟林を開墾して望みの者に入付けること。
大正二年度は春中堆肥舍の壁を塗ること、土は冬期中に搬入し置く。（三年度に變更）
北原前の山林を開墾して畑とすることに就き熟考を要す。
山王の持地を桑原神社の社有地に買得の件、同時に社有地賣却の件。
土藏の西脇へは試に樟を移植して見ること、同時に杉も宜しからん。
右裏へ欅を植付に付篠の類を刈り絕すこと。
屋敷内大杉の下の竹を絕し樫の木へ施肥すること。
樫塀を直すこと。
生垣を設くる爲に椎檜の苗を買入ること。



大師堂の山林拂下の件

大正三年度冬より四年春にかけて常三郎屋敷周圍の竹林改良

三郎屋敷つづきの山林購入の件

藏屋敷下高處には豌豆、低所には蠶豆栽培

大師堂南里芋趾休閑地として春苗木を栽培す

豌豆栽培地は　梅畑　約一反五六畝歩　藏ノ下　二反歩
栗　畑　二反歩　仁右衛門　三反歩
七郎平　七畝歩　大師南　一反歩
門桑畑　七畝歩

蠶豆栽培地は　門畑　一反四畝歩　藏ノ下　一反五六畝歩

春アカシヤの苗を挿す

筑前宇差(佐、?)八幡、筥崎八幡の樟實を蒔くこと

萩の實を蒔くこと

大正三年度大豆栽培地、梅畑、大師堂南、約二反餘

同綠肥用大豆……藏ノ下三反歩　栗畑　六反歩
仁右衛門　三反歩　約一町二反歩

同陸稻栽培地門畑開墾地、桑畑趾、反別二反歩

綠肥用豌豆及蠶豆栽培に要する精過反五貫匁當全部にして七十貫匁にて足る

堆肥	三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇
精過	五、	——	一、〇〇〇	——
灰	三、五	——	、〇六三	、一三五

硫加	一、	―	―	、五〇〇
計		一、七四〇	一、九六三	二、一三五

此配合藏ノ下に適すべし、七郎平屋敷へは堆肥四〇〇、を施す。

堆肥	三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇
精過	二、五	―	、五〇〇	―
骨粉	二、五	、〇九〇	、五〇〇	―
硫加	二、	―	―	、九六〇
計		一、八三〇	一、九〇〇	二、四六〇
堆肥	一五〇、	、八七〇	、四五〇	、七五〇
精過	四、	―	、八〇〇	―
骨粉	四、	、五四〇	、八〇〇	―
硫加	二、五	―	―	一、二〇〇
灰	二、五			
計		一、四一〇	二、〇五〇	一、九五〇

6 七郎平 一反歩　1 栗畑 二反五畝歩　2 仁右衛門 二反歩
5 藏ノ下 二反七畝歩　7 梅畑 二反歩　4 門桑畑 六畝歩
3 大師 一反歩　計 一町二反二畝歩

○

○藏ノ屋敷 四反歩　納屋屋敷 一反歩
○藤兵衛 一反歩　○中宿 五畝歩
計 六反五畝歩

○

第一年 彼岸 馬鈴薯 薙
第二年 土用薙を採りて其あとへ秋蕎麥、更に豌豆
第三年 五月下旬豌豆青刈のあと大豆、秋蕎麥、冬は休閑
第四年 馬鈴薯 薙

第一年の收穫 馬鈴薯 四十圓……五十圓
第二年の收穫 薙 四十圓……五十圓　秋蕎麥 十圓
第三年…… 大豆 十三圓　秋蕎麥 十圓

三年合計｛百十三圓
　　　　｛百三十三圓　平均｛三十七圓六十六錢
　　　　　　　　　　　｛四十四圓三十三錢

同上肥料計算　第一年　堆肥千貫匁　精過一〇、〇〇〇　加里一、

第二年　堆肥千貫匁　精過一〇、〇〇〇　加里一、　堆肥二〇〇、　精過五、　加里一、

第三年　堆肥三〇〇、　精過一〇、　加里一、　堆肥二〇〇、　精過五、　加里一、　此外豌豆へ三百貫匁

精過五、　加里一、

計　堆肥三千貫匁　六圓三十錢｝九圓三十錢
　精過四十五貫匁
　加里五貫匁　三圓

同上堆肥の原料　蕪の屑二〇　秋蕎麥のから三〇〇　豌豆一、〇〇〇　大豆莖二〇〇

計約　千五百貫匁　此手間四圓五十錢

補給　千五百貫匁　代十圓五十錢

計　十五圓

肥料總計二十四圓三十錢

手間料　第一年十八人　第二年三十八人　第三年三十八人　計　七十八人　代二十五圓

肥料手間通計約五十圓

収穫と差引八十三圓

三年に割當一年純益二十七圓餘

○

甘藷畑一枚連年麥と甘藷

一年大麥　芋　二年大麥　陸稻　三年大麥　大豆　豌豆　粟

大麥十二石八十圓

陸稻五俵四十圓

大豆一石五斗十五圓

粟二石十五圓

計　百五十圓　此外芋四十圓—百九十圓

肥料一年堆肥千貫匁　二年千貫匁　三年八百貫匁　四年六百貫匁

計　三千四百貫匁

精過一年十五貫匁　二年二十貫匁　三年二十貫匁　四年十五貫匁

計　七十貫匁十圓 ｝十五圓

加里十貫匁　五圓

堆肥の原料　二千貫匁　此手間六圓

補助千五貫匁　代十圓五十錢

計十六圓五十錢

肥料總計　三十一圓五十錢

手間一年二十人　二年三十五人　三年二十人　四年二十人

計九十五人　代三十五圓

肥料手間通計六十六圓

收穫と差引百二十四圓

一年分三十一圓

大正二年度大麥施肥料

堆肥	一、五〇〇、〇〇〇	—	八、七〇〇	四、五〇〇	七、五〇〇
骨粉	一〇、〇〇〇	二、五〇錢	、三八五	二、〇〇〇	—
精過	七、五〇〇	一、〇〇	—	一、五〇〇	—
硫加	二、〇〇〇	、八七	—	—	、九六〇
灰	一〇、〇〇〇	—	—	、二一〇	、四五〇

計		四、三七錢	九、〇八五	八、二一〇	八、九一〇

堆肥	一五〇〇、〇〇〇	内	七〇〇、〇〇〇	木の葉
			三〇〇、〇〇〇	麥藁
			四〇〇、〇〇〇	草
			一〇〇、〇〇〇	青刈豌豆

堆肥	一〇〇〇、	、八七〇	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇	—	—
硫加	一一、	—	—	—	、九六〇	—	一、三
精過	一〇、	一、三四〇	—	二、〇〇〇	—	—	六、
骨粉	七、五	一、八七五	、二八九	一、五〇〇	—	—	四、五
	計	四、〇八五	六、〇八九	六、五〇〇	五、九六〇	—	

外ニ灰三、

骨粉四貫匁一圓　硫加一貫匁四十三錢五厘の割

堆肥　一〇〇〇、内　五〇〇、木の葉——三〇〇、　六畝歩にして　蒔付肥　四〇、　下肥　二六〇、

四〇〇、青　草――二四〇、｝一〇〇、二四〇、
一〇〇、青刈豌豆――　六〇、｝六〇、

六畝歩へ施す堆肥

下肥には　木の葉　二六〇｝四百貫匁
　　　　　青　草　一四〇
蒔肥には　木の葉　四〇｝二百貫匁
　　　　　青　草　一〇〇
　　　　　豌　豆　六〇

大正二年度豌豆蒔付反別

栗畑　一反四畝歩　十月十二日蒔｝堆肥七十二俵
同　　一反歩　　　同十三日蒔
仁右衛門　七畝歩　同十三日蒔｝四十俵
同所前　　六畝歩　同十四日蒔
門畑　一反四畝歩半分より北　十四日蒔｝四十五俵
同　　半分南　　　　　　　　十六日蒔
納屋　六畝歩　十六日蒔――二十二俵
七郎平　七畝歩　十六日蒔――二十三俵
梅畑　一反一畝歩　十九日蒔――三十三俵
藏ノ下　二反七畝歩　十九、二十日蒔――四十俵　反一五〇の割

門桑畑　六畝歩　二十日蒔――二十俵

二十日迄に蒔付一町八畝歩――二百九十五俵

堆肥二千八百五十貫匁

大師南、西　五畝歩　廿一日蒔――十俵　反二〇〇の割

大師南　一反歩　廿二日蒔――十六俵　反一六〇の割

七郎平　三畝歩　廿二日蒔――四俵半　反一五〇の割

藏屋敷　一反歩　廿三日蒔――十五俵

梅畑　一畝歩　廿三日蒔――三俵

蔬菜畑　十五歩　莢豌豆　廿四日蒔――一俵

藏屋敷　五畝歩　廿五日蒔 }十一俵

同大工前　二畝歩　廿五日蒔 }

二十一日より二十五日迄蒔付三反六畝十五歩　堆肥六十俵半六百五貫匁栽初より通計一町四反

四畝十五歩

堆肥三百四十五俵半

三千四百五十五貫匁

梅畑甘藷跡一反一畝歩　二十七日蒔――十六俵半

通計　一町五反六畝歩、堆肥三千六百二十貫匁

堆肥二百貫匁　十一月二、三日大麥蒔付に用ふ

堆肥六百貫匁　蒔麥、蕪、蔬菜類へ

以上十一月上旬までに畑へ施したる木の葉の堆肥

四千四百二十貫匁

堆肥百六十五貫匁　十一月二十四日梅畑甘藷跡へ

堆肥千二百貫匁　百二十四俵　十二月九、十日藏屋敷家跡へ

七百貫匁　七十三俵　同十三日藏屋敷下の分へ

堆肥八百貫匁　八十八俵　大正三年二月五、六日店のうらへ

總計七千二百八十五貫匁

大正二年度植込堆肥

木の葉　七千二百八十五貫匁

青草――最初の分八〇〇、麥蒔へ

同——四百八十貫匁竹林へ
麥藁屑物
青刈豌豆——二〇〇、麥蒔へ
煙草莖
土草

玄米飯炊方

玄米一升に對する水二升五合(米の乾燥の正否によりて多少の差あり)の割合を以て水を加へ釜に入れ、釜の口を白布にて覆ひ、其上に蓋を載せ、其上に六百目乃至一貫匁位の重りを載せ、沸騰し來る迄は火を强く焚き、沸騰し來らば其儘二三分間置き、十分に沸騰するを度とし火を弱くして約二十分間置きて釜を卸し、尙十分間位置きて後横に移すべし。但し鍋にて焚く時は白布及び重りは用ゐざるも可なり。然れども釜焚と味に差あるは勿論なり。

焦つき煮損じ等は必ず無きにつき火を焚きつけて後は横に移すまで必ず蓋を取らざる樣注意すること。

大正三年度豌豆蒔付豫想地　大正二年十月記

梅畑

栗　畑　七反歩
藏ノ下　一反五畝歩
門　畑　一反四畝歩
仁右衞門　一反六畝歩
七郎平　五畝歩
嘉　吉　二反歩
計　一町四反歩

同年綠肥用大豆蒔付豫想地　大正二年十月記

栗　畑　六反歩　内四反歩五月十日頃より
藏ノ下　二反歩
仁右衞門　二反歩
七郎平　一反歩
藏屋敷　三反歩　内二反歩五月十日頃より
嘉　吉　二反歩　同上

梨畑　一反歩　同上

計　一町七反歩

同年夏季農作物蒔付反別豫想

甘諸　大師西六畝歩

里芋　同、同東、七畝歩

大豆　梅畑道端約一反歩

陸稻　門畑二反歩

馬鈴薯　梅畑一反歩

陸稻　大師南一反歩

計　六反三畝歩

同年冬作蒔付反別豫想

麥　大師西　甘諸跡六畝歩

麥　同　里芋跡六畝歩

蕪　梅畑　馬鈴薯跡一反歩

麥　大師市　蕎麥跡一反歩――豌豆種取跡秋蕎麥

計三反二畝歩――四反二畝歩

一ヶ年間傭人の爲に要する諸經費見積

男三人、女三人

四十五圓　一人　四十圓　一人　三十五圓　一人　男三人計百二十圓

三十五圓　一人　三十圓　一人　二十五圓　一人　女三人計九十圓

通計　二百十圓乃至二百二十圓

食料

大麥九石　約七十圓　一斗四升の相場

玄米五石　約百圓　石二十圓　俵八圓の相場

副食物　一人一日三錢として一日十八錢、一年六十五圓七十錢

○計　食料二百三十五圓七十錢

更に食料を一日二十五錢とすれば　一年九十一圓二十五錢

2　○計　二百六十一圓七十錢

更に又玄米一石二十五圓と算すれば

3　○計　二百八十六圓七十錢

前者に於て　1の場合　四百五十五圓七十錢

2の場合　四百八十一圓七十錢

3の場合　五百六圓七十錢

四百五十五圓七十錢とすれば　一人平均　七十五圓九十五錢

一日同　二十錢八厘

四百八十一圓七十錢とすれば　一人平均　八十圓二十八錢二厘

一日同　二十二錢五厘

五百六圓七十錢とすれば　一人平均　八十四圓四十五錢

一日同　二十三錢

次に四十五圓の男は食料共に　百十二圓五十錢

一日分三十錢八厘

食料共に　百二圓二十錢とすれば

一日分二十八錢

大正三年度竹根植付

栗　畑　二反五畝歩　畝間一間宛

仁右衛門　一反五畝歩　同　同

七郎平　一反歩　同　同

栗　畑　四反歩　同　二間宛

計　九反歩

同四年竹根植付

栗　畑　二反歩　畝間一間宛

同年櫟林を竹林に變更する爲め開墾する分

助藏うら　三反五畝二十六歩　苦竹栽培

三平屋敷　五反九歩　黑竹栽培

同五年竹根植付

助藏要　三反五畝二十六歩

○

陸稻苗床一本二寸四方にすれば一坪九百本

同本畑植付	畝二尺	株間六寸にして	一反歩	九千本——（十坪）
	同	株間五寸にして	同	一萬八十本（十一坪）
	畝一尺八寸	株間六寸にして	同	一萬五十本（十二坪）
	同	株間五寸にして	同	一萬二千六十本（十三坪半）
	畝一尺六寸	株間六寸にして	同	一萬千二十五本（同上）
	同	株間五寸にして	同	一萬三千五百本（十五坪）

石塚式食養法　京橋區入船町五丁目三番地日本農業社——神保ふく子

痔

半搗米、禁物は砂糖氣のもの、肉魚類、但し魚をたべるなら極く少くして之と野菜の量をより餘計にしてつける。菓子類はつぶし餡のものは惡い。いいものは鹽氣と油氣の強いもの。野菜は凡て皮剝かず。蕗と獨活だけは皮をむく。果物はいけない。適當なものとして若布、昆布、ひじきなどを煮てたべます。胡麻油を用

ひた揚物は結構です。味としては味噌汁にその油をたらしてたべると大層おいしい。胡麻鹽もよろしく、里芋はいいが、馬鈴薯はいけない。胡蘿蔔ごぼうはよく、きんぴらごぼうなど大變良いと思ひます。凡て海草類をたべると血色がよく、腹の中の腸がだらりと成つたのが引きしまる。氣長にやらねばいけない。飯七分おかず三分。

梅干番茶で體を温める

梅干二つに薑をおろして入れ熱い番茶を注ぎ飯茶椀二杯位飲みほす。

肺結核

肉を食ふのは惡い唯一のものだから全廢し、半搗米を食し、玄米スープを飲み、食物は野菜を皮むかず、鹽からく油濃くしてたべる。飯は成るべく丈多く、菜はすこうし。赤飯に胡麻鹽をつけてたべる。肉と魚は禁物藥はいらぬ。

小麥

十月二十一日播種　大師堂西　六畝歩　甘薯趾　十月二十一日蒔込　種ハ三升宛　石灰加用

		代金(圓)			
堆肥	四〇〇、	二、八〇〇	二、三二〇	一、二〇〇	二、〇〇〇
硫安	二、	一、三五六	、四〇〇	—	—

精過	一〇、	一、三〇〇	—	二、〇〇〇	—
硫加	一、五	、六四〇	—	—	、七二〇
灰	三、	、一五〇	—	、〇六三	、一三五
		計 二、七二〇		三、二六三	二、八五五

以上金肥三、一九六　合計　六、二四六

外に粉灰一俵半を施す。代、三〇〇故に金肥三、五九六　合計　六、五四〇

同日播種　大師堂前　三畝十五歩　廿番跡　二十一日蒔込　種三升宛　石灰加用せず

堆肥	五〇〇、	三、五〇〇	二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇
硫安	三、	二、三〇四	、六〇〇	—	—
精過	一二、	一、六〇〇	—	二、四〇〇	—
硫加	二、	、八五〇	—	—	、九六〇
灰	三、	、一五〇	—	、〇六三	、一三五
		計	三、五〇〇	三、九六三	三、五九五

以上金肥四、七五四　合計　八、四〇四

藏ノ下約六畝歩　陸稲跡ヘ連作　二十八日蒔込　種三升五合宛

堆肥	四〇〇、	二、八〇〇	二、三二〇	一、二〇〇	二、〇〇〇

硫安	二、	一、三五六	、四〇〇	―	―
精過	七、五	一、〇〇〇	―	一、五〇〇	―
骨粉	二、	、五六〇	、〇八〇	、四六〇	―
硫加	一、五	、六四〇	―	―	、七二〇
灰	三、	、一五〇	―	、〇六三	、一三五
	計	二、八〇〇		三、二二三	二、八五五

以上金肥　三、五五六　　合計　六、五〇六

但し追肥として人糞尿五荷一〇〇、を施す。

以上堆肥中の成分は必ず缺乏せるものなるを知るも便宜標準成分表に從ふ。尤も重量の割合に分量非常に多きを以て或は相應に含有せるかと思考す。

大師堂附近二枚の分は甘藷の蔓を掘り込み置きたり。

又此の二枚の分は附近の山林の爲に養分を吸收せらるる缺陷あり。仕事の都合により種は肥料と交ぜて所謂ザラ播とせり。但し肥料の全量を元肥とす。

三枚の畑合計反別一反五畝十五歩

金肥	二、一五七	合計	三、九二四
	一、六六三		二、九四一
	二、一三三		三、九〇三

通計 五、九五三 通計 一〇、七六八

平均反當 金肥 三、八四〇(円) 金額の分 六、九四七

大麥 大豆趾 二尺畦 株間一尺

藏ノ下約一反十歩 此に反當の肥料を施す 十月二十七日播種

堆肥	三五〇、	二、四五〇(円)	二、〇三〇	一、〇五〇	一、七五〇
生大豆	七、二	一、〇〇〇	、三八〇	、〇七四	、〇九〇
硫安	三、	二、〇三四	、六〇〇	―	―
精過	七、五	一、〇〇〇	―	一、五〇〇	―
骨粉	二、	、五六〇	、〇八〇	、四六〇	―
硫加	二、	、八五〇	―	―	、九六〇
灰	四、	、二〇〇	―	、〇八四	、一八〇
		計	三、〇九〇	三、一六八	二、九八〇

金肥 五、四四四 合計 八、〇九四

收穫 二石三斗

◎藏ノ下　四畝五歩　四畝として施肥す　陸稻趾　二尺畦、一尺　十月廿八日播種

堆肥	七〇〇、	四、九〇〇	四、〇六〇	二、一〇〇	三、五〇〇
硫安	二、	一、三五六	、四〇〇	—	—
精過	一〇、	一、三〇〇	—	二、〇〇〇	—
骨粉	二、	、五六〇	、〇八〇	、四六〇	—
灰	四、	、二〇〇	—	、〇八四	、一八〇
		計	四、五四〇	四、三四八（？）	三、六八〇

内元肥として反當堆肥　三、〇〇　硫安全量　精過　六、五〇〇

骨粉全量　灰　三、〇〇を施す

但し精過　六、五〇〇の燐酸分は　一、三〇〇なるを以て此分は一六成分の多木燐酸　七、五〇〇を代用せり。

追肥として堆肥　四〇〇、　精過　三、五〇〇　灰　一、〇〇〇を施用す。

金肥　三、二一〇　合計　八、三一〇

◎藏ノ下　七畝歩弱陸稻趾　二尺畦株間一尺三寸　石灰加用　十月三十一日雨中播種

堆肥料は前同斷　但し追肥堆肥　一〇〇、を施す、卽ち堆肥は元肥　六〇〇、

金肥　三、[圓]二一〇　合計　八、三一〇　但し石灰加用の分は三〇〇を增して

金肥　三、[圓]五一〇となる、

以上二枚にて收穫二石二斗、反二石

([illegible])大師堂南　小割約二十一歩　十月三十日播種

堆肥	六〇〇、	四、[圓]二〇〇	三、四八〇	一、八〇〇	三、〇〇〇
精過	七、五	一、〇〇〇	—	一、五〇〇	—
灰	五、	、二五〇	—	、一〇五	、二二五
			計　三、四八〇	三、四〇五	三、二二五

金肥　一、〇〇〇　合計　五、四五〇

大麥

大師堂南　七畝十五歩　十月三十日播種

堆肥	五〇〇、	三、[圓]五〇〇	二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇
硫安	二、	一、三五六	、四〇〇	—	—
精過	五、	、六五	—	一、〇〇〇	—

骨粉	二、	、五六	、〇八〇	、四六〇	―
灰	三、	、一五	―	、〇六一	、一三六
計		金肥 二、五六六 全躰 六、二一六	三、三八〇	三、〇二一	二、六三六

收穫 一石一斗、反一石六斗

大師堂西 道端六畝歩

堆肥	一〇〇〇、	圓 七、〇〇〇	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
硫安	三、	二、三〇四	、六〇〇	―	―
精過	七、五	一、〇〇〇	―	一、五〇〇	―
骨粉	五、	一、四〇〇	、二〇〇	一、一五〇	―
灰	五、	、二五〇	―	、〇六〇	、二二五
計		金肥 圓 四、七〇四 全體 一一、九五四	六、六〇〇	五、七一〇	五、二二五

内二畝歩西側、十一月一日蒔、但し雨中、畦二尺株間一尺。

堆肥の半分を引き肥とし半分に金肥を混合して落したり。

内中間二畝歩、十一月二日蒔、畦二尺、堆肥は前同樣として種は金肥と共に合せて所謂ザラ蒔とせり。

内東側二畝歩、畦二尺、株間一尺三寸、西側と同斷なり。

收穫東より四斗、五斗、六斗、反二石五斗

須加六畝歩　畦二尺　株間一尺　十一月三日蒔

堆肥	六〇〇、	四、二〇〇	三、四八〇	一、八〇〇	三、〇〇〇
硫安	二、	一、三五六	、四〇〇	—	—
精過	七、五	一、〇〇〇	—	一、五〇〇	—
灰	四、	、二〇〇	—	、〇八〇	、一八〇
計	金肥	二、三五六 六、七五六	三、八八〇	三、三八〇	三、一八〇

收穫一石八斗　反三石

大麥作付總反別四反一畝二十一步　小麥一反五畝十五步

金肥總計十五圓二十錢五厘　麥、小麥反別五反七畝六步

反當金肥　三圓五十五錢

大麥小麥總施肥量　三千百五十二貫匁

大麥收穫總計　八石九斗　反當　二石一斗三升四合

小麥　一石四斗五升　反當　九斗三升五合餘

明治四十四年度施肥量

		(圓)			
堆肥	四〇〇、	二、八〇〇	二、三三〇	一、二〇〇	二、〇〇〇
蚕渣	一〇、	、五〇〇	、二七一	、〇二四	、〇一三
濠洲肥料B號	二、四	一、〇〇〇	、二一六	、二一六	—
尿	一〇〇、	一、〇〇〇	、五七〇	、一三〇	、二七〇
精過	六、五	、八八〇	—	一、三〇〇	—
灰(木)	四、	、六〇	—	、一五六	、四六八
計 金肥		一、八八〇	三、三七七	三、〇二六	二、七五一
全體		六、七八〇			

右の内堆肥の一部及び尿を追肥とせり、更に燐化滿俺 一、五〇〇匁代 圓、五五〇を土用に入りて二回に施したるを以て金肥の總計二圓四三〇となりたり。即ち

金肥二圓四三〇、

全體肥料額 七、三三〇なり。然るに反別一反一畝歩にして竹林の蔭なるにも拘らず收量七俵を算せり、但し本年の間に五月中旬を過ぎて播種せり種は約四升

濠洲肥料は窒素九燐酸九の成分なれども肉骨粉に硫酸アンモニヤを配合したるものといへば若干のアン

モニヤを元肥としたるに同じ。アンモニヤを元肥とすることは追肥とするよりも或は有效なるには非ずやと思ふ。鹽漬は施用の前十日間堆肥と混合し多少の水分を與へ朝夕二回必ず切返しを行ひたり。此も有利の方法なりしと思考す。而して發育極めて良好にして土用前其尤も旺盛に赴きし際は皆成熟期に至り倒潰すべきを豫言したるに土用半に至りて鹽化滿俺の半量を水に溶解して施用したるに一週日にして著しく莖葉の硬化したるを認めたり。更に半量を立秋三日前に施用せり。開花前に至りては莖葉漸次黄變して十分の生育を遂げたり。播種の當時注意を怠りし爲め半は鴉の害を蒙りしを以て一週間後に其部分に更に急遽下種せり。如此の害なかりしならば或は此の以上の收穫を見たりしならむと思ふなり。

大正元年度肥料豌豆　種量は反六升、處により六升以上

藏ノ屋敷　寺久脇　一反五畝歩　十月十二日蒔

堆肥	六五〇、〇〇〇	圓三、五〇〇
精過	七、五〇〇	一、〇〇〇
硫加	三、七五〇	
金肥		圓二、五七五

反當

堆肥	四〇〇、〇〇〇	圓二、八〇〇
精過	五、〇〇〇	、六五〇
硫加	二、五〇〇	一、〇六二
金肥計	圓一、七一七全體	
通計	三、二〇五	

同道端　三反五畝歩　十月十三、十四日蒔

堆肥　一二〇〇以上
精過　一五、
硫加　八、

反當
堆肥　三四〇以上　二円、三八〇
精過　四、二八〇　、五六〇
硫加　二、二八〇　、九六九
金肥計　一、五二九
通計

右二口五反歩へ生石灰六俵粉炭二俵半を施用す。
代金　二、五〇〇
五反歩の金肥石灰共　一〇円、四九〇　反二円、〇九八

七郎兵衛屋敷　一反七畝歩　十月十五日蒔　粉灰五俵代　一円、〇〇〇
内七畝歩　此分種取金肥　一円、一〇四

堆肥　一四〇、〇〇〇
精過　三、五〇〇　円、四六七
硫加　一、五〇〇　、六三七
灰　二、〇〇〇

反當
堆肥　二〇〇、
精過　五、
硫加　二、一
灰　三、弱

内一反歩

堆肥　三〇〇、　二、一〇〇圓
精過　五、　、六七〇
硫加　二、　、八五〇
灰　一、　、〇五〇
金肥　一、五二〇圓　一反七畝歩に付金肥　二、六二四

納屋屋敷　約八畝歩　十月十六日蒔
反當
堆肥　三〇〇、　二、一〇〇圓　堆肥　二四〇、　一、六八〇圓
灰　二、五　、一二五　灰　二、　、二〇〇
計　一、七八〇

麹屋後　約四畝歩　十月十六日蒔
反當
堆肥　四〇〇、　堆肥　一六〇、

精過　六、　精過　二、五
硫加　三、強　硫加　一、二五〇

豌豆門畑　一反四畝歩　十月十八日蒔

堆肥　四二〇、　反當　三〇〇、
精過　七、　五、
加里　二、一　一、五
灰　三、五　二、五

藏ノ屋敷明地　約一反歩　十月二十九日蒔

堆肥　二八〇、
灰　六、

豌豆作付反別約一町三畝歩

施肥料　三千三百八十貫匁

蕪　九畝十五歩

堆肥　四五〇、　堆肥四百三十貫匁　土川に入りて收穫す
精過　七、五　十一月二十二日施肥　反百五十貫匁の割
木灰　五、

仁右衛門屋敷

堆肥　二十三駄　一駄凡そ三十貫匁　總計約七百貫匁
同　二十二駄　中宿西竹林　六百六十貫匁
同　十五駄　彌右衛門東竹林　四百五十貫匁
同　七十二駄　藤兵衛屋敷竹林　内四十七駄　一駄三十貫匁
　　内二十五駄　四十貫匁　二千四百十貫匁
同　九十二駄　栗畑二反六畝歩　三千五百七十五貫匁
　内四駄木の葉　一駄三十貫匁
　七十五駄草　同　四十貫匁
　十三駄　草　同　三十五貫匁
同　十駄　栗　畑　三百五十貫匁
　計　八千百五十貫匁

○

麥小麥　三千百五十二貫匁
豌豆　三千三百九十貫匁
蕪　四百三十貫匁
竹林　八千百五十貫匁

明治四十四年度練馬大根施肥量

反當

堆肥　三〇〇、	人糞　四〇〇、	生大豆　一三、
精過　二、	灰　六、	サツパ　一〇、
窒素　五、三七四	燐酸　三、〇一五	
加里　三、〇四三		

同直隷白菜施肥量

反當

堆肥　四〇〇、	人糞　三〇〇、	生大豆　四五、
精過　七、五	灰　三〇、	サツパ　一五、

窒素 七、四二〇　燐酸 四、九六八
加里 四、七二七

同茄子五十本の施肥量

魚肥 、六〇〇　精過 、一五〇　堆肥 一二、〇〇〇
灰 、三〇〇

大正二年度梅畑陸稲肥料豫算

堆肥	六〇〇、		三、四八〇	一、八〇〇	三、〇〇〇
硫安	二、五	一、六七五	、五〇〇	—	—
精過	七、五	一、〇〇〇	—	一、五〇〇	—
灰	四、		—	、一五六	、四六八
メ粕	二、	一、〇〇〇	、一九四	、〇八〇	—
		計	四、一七四	三、五三六	三、四六八

金肥 三、六七五　外に滿俺 、五五　石灰 、三〇　通計 四、五二五

同別法

堆肥	一、〇〇〇、	七、〇〇〇	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
硫安	三、	二、三〇四	、六〇〇	—	—
精過	一五、	二、〇〇〇	—	三、〇〇〇	—
灰	五、	、二五〇	—	、一〇五	、二二五
		計	六、四〇〇	六、一〇五	五、二二五

金肥計　四圓三十錢四厘

總計　十一圓五十五錢四厘

外國魚肥の如きもの二貫匁を加ふれば金肥一圓を増す。

六、五九四	六、一八五	五、二二五

金肥　五圓三十錢四厘

總計　十二圓五十五錢四厘

更に滿俺　、五五　石灰　、三〇を加用すれば

金肥　六圓十五錢四厘

總計　十三圓四十錢四厘

明治四十五年度陸稲施肥量

門畑開墾地　一反四畝歩　三年目連作

堆肥	三五〇、	二、〇三〇	一、〇五〇	一、七五〇	―（元二〇〇、追一五〇）堆肥
動物肥料	一〇、	、五九〇	、〇四九	―	―（元七、追三）動物肥料
骨粉	五、	、二〇〇	一、一五〇	―	
精過	三、	―	、六〇〇	―	
灰	二〇、	―	、四二〇	、九〇〇	―（元一二、追八）灰
硫安	三、	、六〇〇	―	―	
硫加	一、	―	―	、四〇〇	
	計	三、四二〇	三、二六九	三、〇五〇	

開墾初年七郎平屋敷陸稲施肥量

堆肥	三五〇、
動物肥料	一〇、
骨粉	五、

精過　三、
灰　二〇、
硫安　三、
硫加　一、

大師堂西　六畝歩　東一反歩

堆肥　三五〇、　──元二〇〇、　追一五〇、
動物肥料　一〇、　──元七、　追三、
骨粉　三、
精過　二、
灰　二〇、　──元一二、　追八、
硫安　三、
計　三、三四〇　二、六〇〇　二、六五〇

明治四十四年度門畑開墾地　一反四畝歩　二年目連作

堆肥　四〇〇、〇〇〇

人糞　一〇〇、〇〇〇
濠洲B號　二、四〇〇
蚕渣　一〇、〇〇〇
精過　六、五〇〇
灰　四、〇〇〇
窒素　三、三七七、　燐酸　三、〇二六、　加里　二、七五一
鹽化滿俺　一、五〇〇を加用す　精過　七、五にて　一、〇二錢位

四十五年度里芋施肥量

堆肥　六〇〇、　元、追の割合は十と六
精過　一、
骨粉　二、
灰　二〇、
尿　一〇〇、
計　四、〇五〇　三、〇一〇　四、一七〇

同甘藷

堆肥	一五〇、		
精過	一、		
骨粉	三、		
灰	二〇、		
計	、九九〇	一、八五〇	一、六五〇

同馬鈴薯

堆肥	四〇〇、		
精過	一、		
骨粉	三、		
灰	二〇、		
計	二、四四〇	二、五八〇	二、九〇〇

明治六年　十五年　二十一年（小部分旱魃）　二十六年　三十六年　四十五年――大正元年　大正二年

大正二年度梅畑陸稻　一反歩　休閑地　蒔付五月十八日

堆肥	六〇〇、		三、四八〇	一、八〇〇	三、〇〇〇
硫安	二、	一、四〇〇	、四〇〇	―	―
精過	一〇、	一、(同)四〇〇	―	二、〇〇〇	―
灰	二〇、		―	、三九〇	一、一七〇
外國魚肥	二、	一一、(同)〇〇〇	、一七〇	、一〇五	―
計			四、〇五〇	四、二九五	四、一七〇

内元肥

堆肥	三〇〇、	
硫安	二、	
精過	五、	
灰	一〇、	
魚肥	二、一	

追肥

堆肥	三〇〇、
精過	五、
灰	一〇、

收穫梅畑全體一反一畝餘にて三俵弱、堆肥千貫匁の分も六百貫匁の分も殆んど同じなり。

同梅畑三十八坪

			陸稲	同日蒔付	反當施肥量
堆肥	一〇〇〇、		五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
精過	一五、	二、一〇〇（同）	—	三、〇〇〇	—
灰	二〇、		—	、三九〇	一、一七〇
計		二、一〇〇	五、八〇〇	六、三九〇	六、一七〇

三十八坪に對しては

	元肥	追肥			内元肥	追肥
堆肥	七〇、	五七、	計 一二七、〇〇〇	堆肥		
精過	一、	、九〇〇	一、九〇〇	精過	一〇、	九、
灰	一、五	一、		灰	一二、	八、

同大師堂西陸稲　麥間作　六畝歩　同日蒔　反當施肥量　前作堆肥一、〇〇〇、宛施す

堆肥	五〇〇、	二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇

精過　一五、　二、[四]一〇〇　——　三、〇〇〇　——
灰　二〇、　——　、三九〇　一、一七〇
計　二、[圓]一〇〇　二、九〇〇　四、八九〇　三、六七〇　收穫反三俵強

（但し時期を見計らひ人糞尿を施す。人尿を硫安二に替へる）

元肥　六畝歩にて　追肥　六畝歩にて計
堆肥　三〇〇、——一八〇、　二〇〇、——一二〇、……………三〇〇、
精過　六、——四、　九、——五、　九、
灰　八、——五、　一二、——七、　一二、

同大師堂西前の畑の南　六畝歩　小麥間作　反當施肥量　二十五日蒔

堆肥　五〇〇、　二、九〇〇　一、五〇〇　二、五〇〇
精過　一〇、　一、[圓]四〇〇　——　二、〇〇〇　——
灰　二〇、　——　、三九〇　一、一七〇
人糞
計　二、九〇〇　三、八九〇　三、六七〇

（收穫反三俵。大正二年度は蒔付二反三畝歩にして米六俵半、反三俵の割）

	元肥	追肥
堆肥	三〇〇、——一八〇、	二〇〇、——一二〇、
精過	五、——三、	五、——三、
灰	一〇、——六、	一〇、——六、

陸稻蒔付方別法

字（編者曰、この一字意味不明）

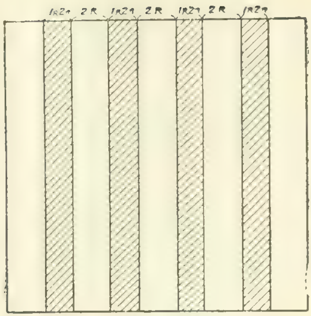
(1) 一畝三尺二寸として内一尺二寸へは種を落す。此法によれば種下しの面積は全體の八分の三にして一うれにては空隙と比較して五と三との割合なり。

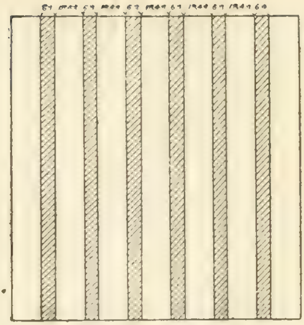
(2) 有うれ間を一尺八寸として一うれ三尺とすれば全體五分の二

一うれ　三と二

(3) 一尺六寸とすれば七分の三

一うれ　四と二





(4) 從來の如くうね二尺として內六寸へ種を落す法によれば種下しの面積は全體の十分の三にしてうねにては七と三との割合なり。

1 二百八十分の百五 種五升

2 ——百十二 種五升三合四勺

3 ——百二十 種五升七合一勺

4 ——八十四 種四升

麥蒔付

二尺うね間二尺蒔巾とすれば 全體の二分の一——十分の五（種五升）（種六升二合）

二尺うね六寸蒔巾（從來法） 全體の十分の三——十分の三（種三升）（種四升）

二尺五寸うね間二尺蒔巾 全體の九分の四——（四升四合四勺）（五升九合二勺）

畑輪作法假定

初年 大豆 蒼麥 肥料豌豆

二年 陸稻 小麥

三年　大豆　大麥
四年　陸稻　小麥
五年　初年にかへる

○芋を栽培する場合

初年　大豆　蕎麥　肥料豌豆
二年　陸稻　小麥
三年　大豆　大麥
四年　芋　小麥
五年　陸稻　大麥
六年　初年にかへる

○芋を作り又蓮華草を作り得る場合

初年　大豆　蕎麥　肥料豌豆
二年　陸稻　小麥
三年　大豆　蕎麥　蓮華草

四年	陸稲	小麦	
五年	芋	大麦	
六年	大豆	蕎麦	肥料豌豆
七年	陸稲	大麦	
八年	大豆	蕎麦	蓮華草
九年	陸稲	小麦	
十年	芋	大麦	

大正元年度落葉

芝　原　約九反歩　籠數　約百籠（入付四圓、手間　五百五十貫匁）　六圓五十錢　一籠六錢五厘

前　　同三反歩　同　同五十籠、入付二圓手間一圓二十五錢　三百貫匁　三圓二十五錢　一籠六錢五厘

大師堂　同三反歩　同　同六十籠、入付二圓廿五錢手間茶畑西と併一圓六十五錢）計二口にて三圓九十錢

前屋敷　同八反歩　同　同百　籠、入付四圓手間二圓五十錢五百五十貫匁）計六圓五十錢　一籠六錢五厘

茶畑西　同一反歩　同　同二十籠

五個前　同九反歩　同　同八十籠（入付三圓手間二圓五十錢四百八十貫匁）計五圓五十錢　一籠七錢

入付代金　手間、計二十五圓六十五錢

竹林栽培地反別調べ

蔵ノ屋敷一圓	二町三反五畝歩
中宿屋敷	七反歩
栗畑	一町六畝二十五歩
仁右エ門屋敷	三反三畝二十七歩
栗畑北側田端	三反七畝二十五歩
納屋屋敷	二反六畝歩
自宅山林	二反歩
藤兵衛屋敷	三反五畝二十一歩
上田臺	二反六畝二十五歩
喜吉屋敷續き	四反九歩
計	六町二反二畝十二歩
内苦竹	五町四反五畝八歩
女竹	八反七畝四歩

同候補地

佐治右工門分萱立　三反一畝二十五歩
同　二反一畝二十七歩
同　一反一畝十四歩
同　一反五畝一歩
同　七反六畝十二歩
（以上）一町五反六畝十九歩
三平屋敷　五反九歩
助藏うら　三反五畝二十六歩
古舎一帶　三町六反七畝十三歩
候補地合計　二町四反二畝二十四歩

竹林栽培地

1、百宅山林　2、納屋屋敷　3、藏屋敷　4、梨畑屋敷　5、中宿屋敷　6、藤兵衛屋敷
7、七郎兵衛屋敷　8、仁右工門屋敷　9、栗畑　10、須賀　11、観音　12、五（一字不明）兵衛屋敷
13、儀左工門分元茶畑　14、三平元屋敷
大師堂南桑畑へ（二字不明）　竹を移植す。　三平屋敷　黑竹栽培。

大正二年五月一日發行農業世界八ノ六號所載

和蘭苺植付株間　一尺五寸——二尺
　八寸——一尺
畦間　一尺五寸——二尺
同施肥量原肥　堆肥三百貫匁　過燐酸十貫匁
鰊〆粕十貫匁　木灰十五貫匁
屎尿二百貫匁　一月——二月頃
植付時期　八月——九月
追肥　果實採集後一二回稀薄なる人屎尿を施與するに於て十分なり。

堆肥	三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇
燐酸	一〇、	—	一、五〇〇	—
鰊〆粕	一〇、	、八三〇	、五六〇	—
木灰			、三九〇	一、一七〇
屎尿	二〇〇、	一、一四〇	、二六〇	、五四〇
計		三、七一〇	三、六一〇	三、二一〇

579 同五月十二日陸稻苗床——場所大師堂——畝歩一畝強——種八升——種類勝捷——反當施肥量

堆肥 四〇〇、
硫安 五、
精過 二〇、
灰 五〇、

大正二年五月十五日農業世界定期増刊果樹改良案内所載

柿の施肥量

	窒	燐	加
二年生	、六〇〇	—	—
三	、九〇〇	—	—
四	一、五〇〇	—	—
五	二、〇〇〇	—	—
六	二、五〇〇	—	—
七	二、五〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
八	三、〇〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇
九	三、〇〇〇	三、五〇〇	三、五〇〇

十	三、五〇〇	四、二〇〇	四、五〇〇
十一	四、〇〇〇	四、八〇〇	五、七〇〇
十二	四、五〇〇	五、七〇〇	六、〇〇〇
十三	五、三〇〇	六、五〇〇	七、〇〇〇
十四	五、八〇〇	七、〇〇〇	七、五〇〇
十五	六、〇〇〇	七、五〇〇	八、〇〇〇

（編者曰、以上燐、加の部記載の數字各九行抹消しあり）

十年目

鰊粕	二二、〇〇〇	二、二〇〇	、八八〇	―
豆粕	二〇、〇〇〇	一、三〇〇	、三〇〇	、四〇〇
木灰	四〇、〇〇〇	―	一、四三五	四、一〇〇
精過燐	一五、〇〇〇	―	三、〇〇〇	―
計		三、五〇〇	四、二〇〇	四、五〇〇

施肥は年二回　二月末――三月　八月中旬頃

大正二年七月一日發行農業世界八ノ九號所載

甘藷品質と肥料の關(係、脫？)(農學士中林季平、野澤隆)拔萃

西ヶ原農事試驗場に於ては下總白種八反步

堆肥	一五六、
燐酸	三、
藁灰	一五、
計	

のもの尤も收量多く施肥量五割を增すも殆んど同一、二倍は却て減額。下總赤種は五割增尤も多かりしも、然らざるものと比して著しき增加はなし。同場にては堆肥一三〇、を施用するものとすれば藁灰は一〇、にて足り燐酸を要せず。

駒場大學圃地の試驗

米糠區　反當

堆肥	二〇〇、	一、〇〇〇	、五二〇	一、二六〇
米糠	二〇、	、三五〇	、七〇二	―
木灰	二〇、	―	、七〇〇	二、〇〇〇
計		一、三五〇	一、九二二	三、二六〇

過燐酸區

堆肥	二〇〇、	一、〇〇〇	、五二〇	一、二六〇
リンサン	四、一三〇、	—	、七〇二	—
木灰	二〇、	—	、七〇〇	二、〇〇〇
	計	一、〇〇〇	一、九二二	三、二六〇

種類は四十日、紫いも、花いも、高須、餅いも、小笠原、シカゴ七種、五月十日植付

大正二年度陸稲苗床　一畝歩　五月十二日蒔付

堆肥	四〇、		、二三二	、一二〇	、二〇〇
硫安	、五	、三五錢	、一〇〇	—	—
精過	二、	、二八錢	—	、四〇〇	—
灰	五、		—	、〇八四	、一八〇
	計	六三錢	、三三二	、六〇四	、三八〇

同五月二十三日蒔豇豆　一畝歩反當　株間一尺二寸位

堆肥	二〇〇、	一、一六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	七、五	—	一、五〇〇	—

灰	、一〇	—	、一六八	、三六〇
金肥一圓〇五錢	計	一、一六〇	二、二六八	一、三六〇

山林に接近せるを以て半は樹の爲めに養分を吸收せられ發育良好ならず、更に莢の垂れたる頃、株際より排され甚だしく根を切斷されたると旱乾との故に根際脆弱になり、皆倒潰せり。以上多くの施肥をなす場合には株間は一尺五寸又は二尺なるべく思考せらる。

甘藷のつゞき

		藷收量	莖收量
四十日	米糠	五四七、七五〇貫	七一五、二七〇
	リンサン	二〇〇、四八〇	二三九、四〇〇
紫いも	——	三〇八、二五〇	八四五、七七〇
	——	一三五、六八〇	四一五、八〇〇
花いも	——	六二八、四三〇	七二七、二〇〇
	——	三七二、六〇〇	七九三、〇二〇
高須	——	三〇三、七五〇	七四九、七〇〇
	——	三〇六、九〇〇	八三〇、四八〇
餅いも	——	三〇四、六五〇	一、〇八四、九五〇
	——	二二四、六六〇	一、〇七五、九五〇

小笠原	——	二四四、一三〇	四〇〇、九五〇	三八〇、〇二〇	三九八、〇四〇
シカゴ	——	二二七、四八〇	二三五、一三〇	一一六、七一〇	一一〇、七二〇

四十日、花いもの著しく多きは全地區の外方にて生育狀態に良好なりしなるべけれど品種の特性にもよるべし。

大正二年度梅畑甘藷肥料

堆肥		二五〇、	一、四五〇	、七〇〇	一、二五〇
精過	、七〇錢	五、	——	一、〇〇〇	——
糠		、三斗	、六〇〇	一、五〇五	——
硫加	、八五錢	二、	——	——	、九六〇
灰		五、	——	、二〇〇	、六〇〇
計	一、五五錢		二、〇五〇	三、四〇五	二、八一〇

同門畑陸稻植付

堆肥		三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇
硫安	二、一〇錢	三、	、六〇〇	—	—
精過	一、四〇錢	一〇、	—	二、〇〇〇	—
硫加	、八五錢	二、	—	—	、九六〇
灰		一〇、	—	、一九五	、五八五
計	四、三五錢		二、三四〇	三、〇九五	三、〇四五
		外に根株九八、	一、七三〇	、三五八	、三四六
		通計	四、〇七〇	三、四五三	三、三九一

同七郎兵衞屋敷植付

堆肥		三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇
精過	一、四 錢	一〇、	—	二、〇〇〇	—
硫加	、八五錢	二、	—	—	、九六〇
灰		一〇、	—	、一九五	、五八五
計	二、二五錢		一、七四〇	三、〇九五	三、〇四五
	外に根株九八、		一、七三〇	、三五八	、三四六

人糞	通計	三、四七〇強	三、四五三	三、三九一

同大師脇植付

堆肥		四〇〇、	二、三二〇	一、二〇〇	二、〇〇〇
硫安	二、八〇錢	四、	、八〇〇	——	——
精過	一、〇五錢	七、五	——	一、五〇〇	——
灰		二⊙、	——	、三九〇	一、一七〇
計	三、八五錢		三、一二〇	二、〇九〇	三、一七〇

同須賀里芋

堆肥		五〇〇、	二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇
精過	、七〇錢	五、	——	、八〇〇	——
硫加	、四二五錢	一、	——	——	、四八〇
計	一、一二五錢		二、九〇〇	二、三〇〇	二、九八〇

同年度豇豆　一畝歩　反當　肥料豌豆の莖の堆肥

堆肥	二〇〇、	一、一六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	七、五	―	一、五〇〇	―
灰	一〇、	―	、一九五	、五八五
計		一、一六〇	二、二九五	一、五八五

大豆　肥料

同梅畑豌豆　三年連作趾但し豌豆莢刈三五〇貫位、一畝五歩反當

堆肥　豌豆莖	二〇〇、	一、一六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	一〇、	―	二、〇〇〇	―
灰	二〇、	―	、三九〇	一、一七〇
計		一、一六〇	二、九九〇	二、一七〇

大豆

同休閑地　前年度里芋趾一畝十五歩

堆肥	三〇〇、	一、七四〇	、九〇〇	一、五〇〇

精過	一二、	―	二、四〇〇	―
灰	二〇、	―	、三九〇	一、一七〇
	計	一、七四〇	三、六九〇	二、六七〇

同梅畑蕎麥蒔址　八月廿一日蒔立秋十四日目

堆肥	二〇〇、	一、一六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	五、七〇錢	―	一、〇〇〇	―
灰	一〇、	―	、二一〇	、四五〇
金肥七十錢	計	一、一六〇	一、八一〇	一、四五〇

第一回中耕の際人糞尿を施す、反一石二斗の收穫樸の根(の一脱?)ために結果よろしからず。然らざれば一石五斗は容易なり。

同年度大根施肥量　八月十九日蒔　八月二十九日蒔

堆肥	四〇〇、	二、三二〇	一、二〇〇	二、〇〇〇
人尿	四〇〇、	二、〇〇〇	、四〇〇	一、〇〇〇
精過	三、	―	、六〇〇	―

灰	六、		、二二六	、二七〇	
外國魚肥	二〇、	一、六〇〇	一、〇〇〇	―	
計		五、九〇〇	三、三二六	三、二七〇	

大正三年度陸稲試験地施肥量見積

一、堆肥　五〇〇を施すもの

二、同　一、〇〇〇を施すもの

共に金肥に八九圓を投ずるものとして

(一)

堆肥	五〇〇、		二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇
硫安	三、	二、一〇錢	、六〇〇	―	―
魚肥	五、四	三、〇〇	、五二三	、二一六	―
精過	一〇、	一、四〇	―	二、〇〇〇	―
硫加	一、	、五〇	―	―	、五〇〇
灰	二〇、		―	、四〇〇	一、〇〇〇
計		七、〇〇錢	四、〇二三	四、一一六	四、〇〇〇
豌豆根株		九八	一、七三〇	、三五八	、三四六
總計			五、七五三	四、四七四	四、三四六

（二）

堆肥	一〇〇、		五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
硫安	三、	（二、一〇錢）	、六〇〇	—	—
魚肥	七、二	（四、〇〇）	、六九八	、二八八	—
精過	一〇、	（一、四〇）	—	二、〇〇〇	—
硫加	一、	（、五〇）	—	—	、五〇〇
灰	二〇、		—	、四〇〇	一、〇〇〇
	計	（八、〇〇）	七、〇九八	五、六八八	六、五〇〇
豌豆根株	九八		一、七三〇	、三五八	、三四六
		計	八、八二八	六、〇四六	六、八四六

硫安　一、——、七〇錢　魚肥　一、八——二、〇[圓]〇　精過　七、五——一、〇[圓]五

加里　一、——五〇錢の見積

石灰、鹽化滿俺　一、〇〇錢を施すものとすれば（一）は　八、〇〇〇　（二）は　九、〇〇〇となる

（堆肥？）	二、一〇	八、八二八	六、〇四六	六、八四六
精過	一五、	—	三、〇〇〇	—
硫加	一、五〇	—	—	、五〇〇

		計　八、八二八	九、〇四六	七、三四六
金肥　前表	九、〇〇〇			
追加	二、六〇〇			
計	一一、六〇〇			
根株	九八、	一、七三〇	、三五八	、三四六
堆肥	一、〇〇〇、	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
硫安	二、（一、四〇〇）	、四〇〇	—	—
魚肥	五、四（三、〇〇〇）	、五二三	、二一六	—
精過	二五、（三、五〇〇）	—	五、〇〇〇	—
硫加	二、（一、〇〇〇）	—	—	一、〇〇〇
灰	二〇、	—	、四〇〇	一、〇〇〇
マンガン石灰	（一、〇〇〇）			
計	（九、九〇〇）	八、四五三	八、九七四	七、三四六
根株を除きて		六、七二三	八、六一六	七、〇〇〇
			一、〇〇〇　精過	五、〇〇〇　を除く金肥にして　、七〇〇
		六、七二三	七、六一六	七、〇〇〇

大師堂東　豇豆跡一畝歩　蒔九月十日植付同日全部施肥

反當

堆肥	一、〇〇〇、	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
精過	一五、	―	三、〇〇〇	―
灰	一〇、	―	、四〇〇	一、〇〇〇
	計	五、八〇〇	六、四〇〇	六、〇〇〇

人糞は春季施用す

畝數十八本、南四本一粒づつ。北二本二粒づつ。中十二本三粒づつ植付く。

仁右衛門屋敷休閑地　蒔

土用明早々植付　一株一粒づつ　反別二畝歩　畝數四十二本

九月六日施肥　北二十一本堆肥五〇〇の分　南二十一本同一、〇〇〇の分

反當

堆肥	一、〇〇〇、	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
精過	一〇、	―	二、〇〇〇	―

硫加	一、	—	—	、四八〇
計		五、八〇〇	五、〇〇〇	五、四八〇

同

堆肥	五〇〇、	二、九〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇
精過	五、	—	一、〇〇〇	—
硫加	五、	—	—	、二四〇
計		二、九〇〇	二、五〇〇	二、七四〇

大正元年度肥料豌豆

前年度種採りの標準但し其年の開墾にして瘠薄の地

反當

堆肥	二、〇、	一、一六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	五、	—	一、〇〇〇	—
硫加	二、一	—	—	一、〇〇〇
灰	三、		、〇六三	、二三五
計		一、一六〇	一、六六三	二、二三五

本年度は大豆跡、窒素約一貫匁は前年度より増すものと看做す

堆肥	二〇〇、		一、〇六〇	、六〇〇	一、〇〇〇
精過	五、	、六七錢	―	一、〇〇〇	―
骨粉	五、	一、二五錢	、二九二	一、〇〇〇	―
硫加	三、	(不明)	―	―	一、四四〇
灰	三、		―	、〇六三	、一三五
		計	一、三五二	二、六六三	二、五七五

大正二年度の分但し大豆跡黍跡は堆肥二〇〇

堆肥	一五〇、
精過	四、
骨粉	四、
硫加	二、五
灰	二、五

大正二年度莢豌豆は堆肥二〇〇にして黍跡同様、十月二十四日蒔付

大正二年度大麥蒔付施肥料

堆肥	一〇〇〇、		五、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇
骨粉	七、五	圓 一、八七五	、二八九	一、五〇〇	—
精過	一〇、	一、三四〇	—	二、〇〇〇	—
硫加	二、	、八七〇	—	—	、九六〇
灰	三、				

反別一反二畝歩

計	圓 四、〇八五	六、〇八九	六、五〇〇	五、九六〇

堆肥 一、二〇〇〇の内

木の葉のもの	二〇〇、〇〇〇
青草のもの	八〇〇、〇〇〇
青豌豆のもの	二〇〇、〇〇〇

一反歩へ約粉炭二十貫匁を堆肥へ混入施用せり。

書簡追加

望月光男宛

其一

拜啓、ことしはいつもより暖かに候へども、漸々寒さ加はり申候。さき頃、諏訪には雪ふり候由、御地もよほどひどからむと推察仕り候。小生の地方は寒くなり候と申ものの、まだ氷も無之候。近來ますます御精勵の御樣子、御病症も宜しき方に候や。アシビ二の七「くぬぎたつ平瀨の山を山半ば下をこめたり夕引煙」は非常に面白く候。夕の煙は小生などもいつも歌にせむと焦心いたし候へども遂に成らず、玉咏に接して只管愕き申候。實際をよく觀察する程有力なることはなかるべく候。初冬雜咏中の「大蓮華岳」も崇高なる感じ有之「ひるさればおほよそに霧る乘鞍を朝けにみれば近くまばゆし」もよく實況を穿ちたる傑作に候。

乘鞍山は本州の名山として知らぬ人はなけれど、未だ歌にせられたることは無之様に候。歌はありとて乘鞍らしき作は斷じて無之と存候。大兄及び胡桃澤君に依りてはじめて乘鞍の面目を發揮しえたりと申すべく候。

左千夫君の「和歌は人格的なり」と申され候ことは作者が常に實情實景を離れざれば製作に作者の俤が浮ぶことを申候ものと存じ候。

他人に眞似の出來ぬもの、他人がしたとて面白からぬものなど、皆實情實景故と存じ候。萬葉の初の作が面白きは作者の經歷と相俟つての故に候。正岡先生の病牀の晚春拾首の如きも、長き病と戰ひつつありし先生の作として殊に面白きものに候（この面白いと申ことは愉快と申すこととは違ひ申候）。詩人は詩人自身が詩ならざるべからずといふことも作者と製作と相俟つて面白かるべき道理の上に詩人そのものが同情せらるべき資格なくては大に興味を殺がるべき理由なるに外ならずと存じ候。他の製作は知らず短歌のおほくの部分は自己の本位となること

免れ難き所、山に居る人は山を咏じ、海に近き人は海を咏ずるに相互に犯すことは出來申すまじく犯さざる所に面白味が有之候。卽ち自己の周圍を基礎として誠實の意思に出で候ものは決して他人の窺ふべからざる所と存じ候。菜洗大根漬の平生と比較して劣る所以は此の誠實を缺きたる卽ち無理に作りたるが第一の原因に候。早々。（明治卅八年十二月八日　自宅より　封書　望月光男宛）

其二

拜啓。御病氣御全快の由奉大賀候。病後の御保養に御旅行等の企も有之候はば御上京も面白からむと存ぜられ候。野にはそら豆の花も咲き候て、何となく心持よき時節に相成申候。兼ねて御あづかり申候玉稿遠に御返送可申筈に候へども、小生も他出勝にて遂に疎略に打ち過ぎ申候。御待遠の程御推察申上候。小生は近來つくづく自己の製作の取るに足らぬを感じ申候と同時に、人の製作など彼是申候

ことは大膽至極と心づき申候ため、馬醉木の選もやめ申さむかと存じ候處、それも出來難く以來は左千夫氏と共に選ぶ樣のことに致し申候。右まで申上候。早々。（明治卅九年四月十四日　自宅より　封書　望月光男宛）

其　三

拜啓、佐渡より越後にかへり此地に宿りて鄕里よりの書狀を受取り、御葉書も同時に落手仕り候。佐渡は雨おほくて失敗致し候。彌彥山へも登り申候。低けれども海岸故眺望極めて宜しく候。上野へ山を越えて歸鄕の筈に候。今回は歌は一首も作り不申候。（明治卅九年九月卄日　越後長岡市より　金華山黃金山神社繪ハガキ　望月光男宛）

其　四

新年の御慶めでたく申納候。（明治四十年一月一日　自宅より　ハガキ　望月光男宛）

其　五

拜啓。此地は麥刈のいそがしき節に相成申候。野らのいそがしきだけ家のうちは閑に候。此數日來頭の具合殊の外よろしからず眠くて困り申候。尤も製茶の時期は小生の第一に弱る時期に候。其茶は既に終り候故、これから力づき候ことと存じ候。時々林中に雉子の鳴くをきき申候。今は狩獵の節に無之候へば、彼等も安心してあさりあるくことと存じ候。豌豆畑に卵をうみ候由申候は昔のことにて、今は其鳴くこゑをきき候ことも珍らしきことにて候。小生は歌が出來ぬので困り居り候。旅行中のことを今少し文章に書いて見たいと存じ候。されど筆とることが億劫にて如何とも困り申候。小生のことばかり書き申候て失敬の至りに有之候。

其後承り候へば御病氣とか申候ことに候が如何に候や。何時か御地へも參上致し

たくと存居候へども、一度木曾街道を流し候ことも有之候故何となく出憎く相成申候。或は何かの緣にてふと參る樣に相成候かも知れ不申候。然し此はあてには相成不申候。

最後に貴兄の歌は今少し辛棒して眞に面白しと考へたる時に御作りに相成候が然るべしと存ぜられ候。餘り只澤山に作ることは宜しからぬことの樣に候。早々。

（明治四十年六月三日　自宅より　封書　望月光男宛）

其　六

拜啓。此間中ははじめて御目にかかり意外の御もてなしに相成難有御禮申上候。長野へ一泊、豐野へ一泊、諏訪へ一泊、十四日の夜歸宅仕り候。途中下痢の氣味やまず候に付、彼の藥二つとも盡し申候。其ため歸家までには少しの滯りもなく相成申候。身體に聊かの障りも無之候故鐵啞鈴も輕く覺え申候。（明治四十年六月十

七日　自宅より　ハガキ　望月光男宛）

其七

拜啓。上原三川先生突然御逝去の由御報に接し、只管おどろき入申候。先頃の模樣にては今頃左樣のことも候まじくと存じ居候に、人の命殊に長病人の命は測られぬものと恐ろしく相成申候。今に相成候ては小生は以ての外の罪人に相成謝罪致し候とて追ひつき申さぬ事に至り申候。小生は其後淺間へは一回の手紙も認め不申候。一つは小生先頃より頭の具合惡しく手紙書きかけ候ても忽ちにやめ候こと度々にて、遂三日四日と延引致候うち餘り長く相成候ては普通の手紙にては事濟まさる心持も致し、ゆつくり長文を認むる所存にて筆とり候處へ、御兩君よりの御報に接し重ねて寅太郎氏よりもわざわざ申越され、今更後悔致し候ても及ばぬことに立ちいたり申候。望月君よりの御たよりにては小生の手紙を待たれ候由

病中の徒然さもあるべきことにて疎慢の程自ら呆れ申候。小生の筆不精は今はじまりてのことには無之此が自己の缺點の一つとは存じ居候へども、なかなか思ふ樣に不參毎々之を苦にやみ申候。寅太郎氏へも深く小生の罪を詫び申候。詫び候とて消え不申候へども詫びねば猶更に心苦しく堪へ難かるべくと存じ候。不人情と思召され候ても一言も無之候　かく筆とり申候にも莓の馳走にあづかり候こと、唐松丁幾を贈られ候ことなど目につき申候て心苦しき限りに有之候。實は御兩君及び三川先生の御厚志に報ゆるため母が手にてゐりたる茶を少しばかり呈上致したき考に候處、只今の陽氣にては口をつけ候事不叶遂々時期を失し申候てかさねがさね殘りをしく存申候。天候定まり候はば御兩君の御手もと及び三川先生の靈前へ小包に托し可申候。先は右亂筆ながら御挨拶までに右申上候。早々。（明治四十年六月廿八日　自宅より　封書　胡桃澤勘内・望月光男宛）

其　八

拜啓。いつぞや御約束仕り候茶は、其後よくよくしらべ申候處以ての外の粗製、此は芽の延び過ぎたる故と母は申候。如此ものをわざわざさし上候とて、むしろ物笑に過ぎずと存じ候に付其後も空しく打過ぎ申候。近頃ふと思ひ起し他より購入すれば良品を得べき道理なれどそれにては手製と作に相成可申と遂にさし上申ことに致申候。兎にも角にも約束を果して小生も荷をおろしたるが如き感じに有之候。今回の水害は遂に左千夫君の家をも襲ひて水は軒外四尺床上一尺を越え、原稿は悉く水中に沒し候由、おくれたる馬醉木は更に遲れ可申候。（明治四十年九月三日　自宅より　封書　望月光男・胡桃澤勘内宛）

其　九

世の人の有りの實といふ梨のみのありとはいはずなしとわはいふ。（明治四十年九月

十二日　自宅より　黄色詩箋封書　望月光男宛）

其十

賀正。明治四十一年一月一日。（明治四十一年一月一日　自宅より　ハガキ　望月光男宛）

其十一

拜啓。御惠與の品難有拜受仕り候。御母上樣御調理の由殊に珍らしく賞味仕り候。こなた小生の母に於ても殊の外よろこび申候。母は少量を口に致候てあとは小生の樂みにせよと申候。兎角珍らしき品など到來の節は小生に多量を與へて喜び居候が母のならひに有之候。榧の實はこなたにも少々は有之候へ共此樣なる調理法も存せず候まま別に心をとめて求めあるくことも無之候。御傳授などうけ候事ならばこなたにても試み申度と存じ居り候。

小生は昨年來とかく作歌は間歇的に相成近來はまた薩張心にうかび不申候。昨秋御歌稿御送付相成候節は小生御身甚だしく疲勞致し居候折柄とて、何事もなく其まゝに打過ぎ申譯も無之候。不惡御ゆるし下されたく願上候。
先頃左千夫君諏訪へ參られ候折は大兄には御不參の由御心中御推察申上候。
末筆ながら、愚作佐渡が島のうちのはひると有之候は、多分這入ると申す個所の假名ならむと存候へども、それならばはひるにて間違無之候這入ははひいるのつまりたる語故、あ行の文字をはぶくことは當然と存じ候。辭書ことばの泉にははひると有之候。先は御禮まで如此に御座候。怱々。
此手紙書き終り候處へ御葉書到着仕り候。深く貴意を了し申候。
榧の實につきし砂糖のいや白く雪積めらずや平瀨の丘は。（明治四十一年二月一日　自宅より　封書　望月光男宛）

其十二

〔小生の旅行はいよいよ二十日出立と相さだめ申候〕

拜復。御書面の趣詳しきことは一寸申上にくき事に有之候。それは小生も何が何と筋道をたどりて申上候ほどに深く承知不致候故に有之候。唯三井君は最初伊藤君を殆んど師と思ひて交際いたし居候處、其人格に疑を生じ來り漸々相反目して遂に今日に至り候ものと可申候。尤も此は甚だ單純の申條にてちつとも要領を得不申候へども、或は其性格兩者は最初より相容れざる性質のものには非ざりしかと存ぜられ候。隨つて何が衝突の原因かと探求するが如きは抑々末なるべく候。三井君が伊藤君の人格に疑を生じたりと申ことはそれは三井君の眼より見てのことにて、素より以て他の關する處には無之候。此は小生より大兄へ御注意までに申上候。兩君はなかなか人がものを申候とて容易に聽く人には無之候へば、殊に

は大兄は遠隔の地に居住せられ其の間の御消息にも通じ難きこととて、其間に言議を挾むが如きことなからむを要し候。小生すらも其眞相として御報可致候だけにて詳しからぬ處へ御心づき下され度候。雨ふつて地かたまる、其うち何とかなり可申、唯々制作上に御放心可然と奉存候。怱々。（明治四十一年八月十四日夜　自宅より

封書　望月光男宛）

其十三

拜啓。胡桃澤君の信州の感じせずと申さるる秋山へ昨日つき申候。草津の奥なる入山より案内者を傭ひ途中大倉（だいくら）といふ所の小屋に一泊致候。案内者は魚釣りの男にて此深山を分けて岩魚をつり五六泊しては八里の道を草津の溫泉へうりに行くものに候。恐ろしき奴に候。大倉越一日は雨、一日は晴、此道今年越えしものは小生等のみ、道なき所は草を踏み折り踏み折り進み申候。小生の旅程は此地より

澁へ出でて草津へ越え淺間の裾野より碓氷、榛名山に登りて歸ること故、御地へは參り兼ね候。（明治四十一年八月廿七日　秋山切明温泉より　ハガキ　望月光男・胡桃澤勘内宛）

其十四

新年の御慶めでたく申しをさめ候。明治四十三年元旦。（明治四十三年一月一日　自宅より　赤色詩箋封書　望月光男宛）

其十五

人みなのよしとふあたみしかすがに淋しくあらむひとりしあらば。（明治四十三年一月廿二日　自宅より　封書（黄唐紙一枚にこの一首かきあり）伊豆熱海辨天屋内望月光男宛）

拜啓。未だ御目にもかかり不申候へども、亡光男樣の御尊父樣と推察仕り候。偖而過日は光男樣御逝去之由御通知に接し、只管驚き入り申候次第、不取敢弔詞差進め可申之處、如此相遲れ申候て何とも申譯無之候。光男樣とは四十年の六月松本へ參り候節、淺間の溫泉にて席上上原三川氏胡桃澤勘内氏と四人にて閑談致し候後は懸け隔て候て遂に御目にかかり不申候。胡桃澤君とは兩三回邂逅致候ことも有、光男樣の御噂も出で申候。書中之往復も小生の粗懶なる怠り勝に相成居候處、熱海滯留中之唯一の記念なりとて寫生畫一枚を賜はり、周圍に會心の友なければ披いて他に見すべき機會もなき小生の手もとに空しく保存せられ候。上原三川氏は別後二週日にして訃音に接し申候。其の時光男樣よりは三川氏は手紙の來るを待ち居られ候へ共、定めし消息ありしならむと申越され候ひしが、其の實小

生は三川氏の爲に一葉の端書も認め不申、深く自ら恥ぢ且つ悔い申候ひき。小生は爾來旅中に在る毎に大抵は胡桃澤君と御兩所へは繪葉書にて消息致居候へ共、それも此の頃疎く相成居候て今更悔い申候。此も小生今は疎く相成居候へ共先年は一向に精出し居り候和歌の上に於て、殊に表面甚だ微々たる根岸派の損失は、光男樣と堀内卓造君との死去のために痛き打擊を蒙り候譯合、長野縣の同人なければ根岸會は事實之上に於て潰滅致すべしなど申され候ひし共の同人中之天才を殆んど同時に失ひしこと小生自ら省みてまた今昔の感なき不能候。卓造君は生前遂に一回も出會ひ不申、阿羅々木卷頭の寫眞にてはじめて風丰に接したるに過ぎず、光男樣の訃音に接して私情を動かすこと深く候。別紙は甚だ少額に候へ共御佛前へ御供へ被下度先は右まで申進め候。

くやみの手紙へ此の樣なる色付の卷紙を用ゐ候こと如何はしく存候へ共、只今白きもの手もとに無之、此を求め候には二里の道を參らねば成り不申、

此の處母が病氣にて東京の病院へ參り居り、數十日間小生留守居致さず候ては相叶はず滅多に他行も出來不申、別紙相添へ候ことも郵便局までは一里ばかり有之候故、參り候こと一寸億劫にて實は此の狀も後れ申候。何も彼も右故御ゆるし被下度候。怱々。（明治四十四年二月四日　自宅より　封書　望月彌一郎宛）

坪井秀宛

拜啓。唐突に申上候ても御わかりに相成不申と存候へ共、小生は明治卅八年秋旅行の途次、松原君の案内にて相うかがひ候ものに有之候。かの節拜聽致候夜叉が池の强雨のはなしなど、爾來人にも語り申候こととて、小生の記憶を去ることは

有之まじくと存申候。其の節御尊父様よりうけたまはり候竹のことに就きては、只珍らしくおもしろく記憶致候て、人にも自慢らしく語り申候へ共、其の折はまだ竹林栽培のことには心づき不申、うつかりと相構へ居候處、一昨年來ふと竹林へ全力を注ぎ申度考に相成、自分の力相應のことは盡し居候へ共、何事も一向に相わかり不申、是非共今一度參堂仕りたく焦心まかりあり候へども、其の機を得ずして今日まで延引仕り候。もはや何事を措いても參堂御指教相仰ぎたき念存、來月中旬には是非共素志を果し申度次第に候へ共、其の節は尊父様には御在宅の御見込に有之可申候や、其の邊しかと相わかり申候ことならば、小生の便宜此上もなき次第、この狀御らん被下候はば、葉書なり御遣し被下度御願申上候。

過日の東京朝日新聞紙上の記事は、彼の節小生直々にうけたまはり候ことも有之候こと故、實に嬉しく通讀逢ふ人々にも語り申候。彼の記事中萩の栽培のことは殊に小生の心を惹き申候て、參堂の心願とても延期致難くせしめ申候。先は願用

まで如此に御座候。匆々。（明治四十三年十月廿四日　自宅より　封書　坪井秀宛）

河井長春居宛

拜啓。此の度は思ひも掛けず御厚志を蒙り、御禮の申樣も無之と存じ奉り候。祇園にての遊興は、生來嘗てなかりし事とて、父母へも報じ越し、其の他の知人へも葉書などにて吹聽致し候處、人々も意外のこととて、小生の歸國前一方ならず風評致し居り候由にて、或は小生現を拔かし候て、誰か迎へになり參らずば、歸國覺束なからむなどの懸念致せし知人も有之候樣子、何とも笑止至極の事に御座候。尤も父母は小生の平生を熟知致し居り候こととて、かやうの心配は致し申さず、却つて方々の御厚志を喜び居り候次第に有之候。

途中名古屋へ二泊、其の節俳人の觀魚といふ人を訪ね申候。此の人は名古屋にて有名なる料理店の主人なれば、京の事なども隨分存じ居り候ものから、小生の噺には一も二もなく駭き申候。一力も角屋も承知致し候事ながら、例の角屋の蕪村、岸駒、應擧の筆蹟などこまごま申候處、蕪村の梅の間は承知致し居り候ひしかど、其の他は不案内の事とて、何を申候ても、それはそれはとのみにて一言も無之有樣、小生の面目を施し候事一方ならず候。觀魚氏もまだ太夫の道中を知らざる由にて、是非一度はと年來心掛け居り候處を小生に先を越され面目なき旨申し、大笑致され候。太夫の道中を見て仲居のおせいさんに待遇を受けて、其の足にて直ちに壬生狂言まで見物致し候由申候へば、それにて京は些少の遺憾もなき譯合、先づ以て果報者なりなど申され候。

小生は以前二度ほども京へ參り候へども、いつも草鞋穿きの乞食旅行とて、祇園、島原などの慾念は起り申さず、此の間も申上げ候事と存じ候へども、舞子の姿な

どは其の影だも見申さず。其の一度は鹿が谷の百姓家に厄介に相成り居り候程なれば、只管京の淋しき方面のみに親しみ申候。三條四條も、大橋小橋などの別あること、今回はじめて知り申候。先日は五條の橋を渡り、西大谷へ出で、清水を見無くして祇園へ參り候有樣、これが二回までも京見物したる上の出來事に候へば、京に對する知識の程も御推察に難からずと存じ申候。然るに此の度は京の縮圖を腦中に描き得るだけに相成り、土產噺にも差支申さぬことに有之候。まして祇園、島原の噺などにては、聽く人呆氣に取られ候こと道理に有之候。東京にても伊藤左千夫君などは、小生歸國前虛子君よりあらまし聞き及び候由にて、小生の果報をつくづく羨み申され候とか。小生面會の折にも面白さうに噺を聽き申候。只東京の二三の人からは、島原へ泊らざりしことだけは、大いに笑はれ申候。君も若いと申され候ことに有之候。小生は此の點は默つて聞き申候。

歸宅の上、來る者來る者に、あの袱紗を見せ申候處素より田舍の百姓共とて、嘗

て斯樣のものは夢想だもせぬこと故、只々驚き申候。それが餘程おもしろく候ゝ最初あの裏を見せ候に、只綺麗なるに驚き申候。それから更に表をかへして見せ候ところ、これは何てせうと呆氣に取られ申候。それは織出しなりと申せば、どうしたら出來るならむなど、重ね重ねの駭きに有之候。又更に小生は貰ひ得たるものの由申せば、どうして其の樣なる懇意が遠くにあるものかと申候。百姓と申す者は餘程おもしろき者に有之候。

小生は途中名古屋へ二泊、靜岡に弟有之候故そこへ一泊、二十六日東京へ着き申候。九段下に友人を訪ね候處、只今能樂堂へ參り居るとの事、其の足にて能樂堂へ尋ねゆき、これも思ひ掛けぬ仕合せにて能を二番程見申候。此の度位思ひがけぬこと多き旅行は前後に無之、此の能樂にて一篇の結末をつける處なりなど、其の翌日虛子君に逢ひて話致し申候。虛子君は小說を脫稿したる處にて、讀んで聞かされ申候。二十頁以上三十頁も有之候かと存ぜられ候が、僅々一日位にて書き

あげられ候由、小生は其の健筆に喫驚いたし申候。篇中齋藤君と申す人物の仁王の樣な腕と申すは、小生の腕を申候ものに有之候。小生は瘦身矮軀に候へども、筋肉は隆々として、見掛けの割合には人々おどろき申候。尤も近來は暫く運動を中止致し居り候故大いに衰へ申候へども、それでも虛子君は驚き申候。斯樣なること申上げ候ては、貴下にもさぞかし驚かれ候事と存じ申候。小生も京見物前に小說を書きかけ居り候へば、此の五月一ぱいには何とかして仕上げたく、ほととぎすへ及第相叶ひ候樣と希望致し居り候。

東京へ三泊、更に途中へ一泊、先月三十日に漸く歸宅仕り候。何となくぼんやり致し候。小生の地方は丁度汽車から包まれ居り候有樣にて、何處の停車場へ出るにも、六七里乃至十里は有之候。東西南北悉くそれに候。隨つて非常なる深田舍の感じにて、一寸他より參り候ては暗き穴の底に這入り込み候樣に有之候。されば第一には食料に乏しく見る物も絕えて無之候。正岡先生御存生中、いつかその

話にて地圖など引出して先生の申され候は、自分も四國に生れたるを不思議に思ひ居たるが、君も妙な處に生れたるものなりなど申され候。斯樣の處にても、一度御出で下さる覺召も候はゞ、是非御出で下されたく、汽車は水戸線の下館驛へ下車し、それより南へ四里にて下妻町更に二里にして鬼怒川を渡れば小生の居村に有之候。尤も小生方は小生不在の折はどうにも仕樣のなき家に有之候へば、若し御光來下され候覺召ならば、前以て御打合せ相成りたく、數日經つても小生の返事無之節は、それは小生用事のため遠方へ參り居る時のことに候へば、其の節は御光來御見合せ下されたく、小生在宅に候はば返事致さぬやうの事決して無之候。只今申上げ候如く、不自由此の上なき田舍なることを御厭ひ無之候はば一度は是非とも御光來なし下されたく、むさくるしき家計を御覽相成り候も、時に取つて一興ならむと存じ候。屋敷内の樹木、樫、欅など若葉茂り申候。小生は樫の落葉して更に若葉の茂る處大好きに有之候。蛙はやかましく聞え申候。何處まで

も淋しき此の田舍は、小生近來つくづくと好きに相成り候。歸宅以來心落居ず、遂に御禮も延引致し申候。惡しからず御了承願ひ上げ候。頭腦の具合よろしからず、前後もなきこと相認め申候。御判讀なし下されたく候。匆々。

其の節御はなし申上げ候拙文「炭燒の娘」御覽に入れ申候。御一笑なし下されたく願ひ上げ候。（推定明治四十一年五月三日　自宅より　封書　河井長春居宛）

平福百穗宛

其一

拜啓。爾來は絶えて御無沙汰仕り申譯も無之候。御惠投の繪葉書洵に難有人にも見せて喜び申候。

來春は乃木大將の凱旋も可有之、其節は是非共上京し其賑ひも一たびは見物致度所存に有之候。

今秋旅行の物語など、御わらひ草に申述度と存じ居候。(明治三十八年十二月二十九日　白宅より　外國製繪ハガキ　平福百穗宛)

其二

祇園の花に戲れて更に此の吉野に來る。此行聊君を驚かすに足るべきを思ひ、心

中窃に愉快に候。吉野は連日の雨にて花過ぐること早く候。如意輪堂の花未だ其色を失はず候。匆々。（明治四十一年四月十六日　和州吉野山温泉より　吉野山全景の繪ハガキ　平福百穂宛）

其　三

彼の次の夜に春陽堂の番頭に會ひ申候。製版印刷共何分御監督被下度候。

梅は七日おくれたれど山に櫟おほきが面白く候。

今日彼岸の中日とて近在の人の梅見賑ひ申候。我が郷の百姓とは違ひ、娘等の服装も容貌も見あげたものに有之候。（明治四十五年三月廿一日　大和月が瀬より　月ヶ瀬風景繪ハガキ　平福百穂宛）

（編者曰、裏面の寫眞に「ココガ梅、ココヘトマリマシタ」と説明記入しあり）

其四

講釋じみたことをいつたのは私の間違ですから取消します。私の地方にも鐵道が開通して愈來月から一里の處で乘れます。上京に便利に成りますから時々出ようと思ひます。衆愚の前に威張つて見せる樣なものは私は嫌ひです。どんな小さなものでも誠意のあるものを見たいと思ひます　さうしてこれからは貴兄をお訪ねしようと思つて居ます。伊藤君と合つたのはお互に固陋な處があつたからだらうと思ふのですが、それは大目に見遁して下さい。結城君は文展で何時も貴兄の作品を賞讃します。畫家の仲間では結城君は確に知己の第一人でせうが、素人仲間にもひけをとらない人間が幾人もあります。しつかりやつて下さい。小生は貴兄が不折山人の如く、大家として知られてないのを御祝ひいたします。(大正二年十月三十日　自宅より　繪ハガキ　平福百穗宛)

其五

年頭の御いはひ兎にも角にも申納め候。扨而小生秋の頃よりすぐれ不申、發熱も伴ひ居り候處、客臘半にいたりて俄に咽喉に疼痛を覺え、心もとなく存居候ひしが、二十三日上京直ちに神尾學士の診察を受け候に、果して宿痾再發、然しながら既に手術も終り申候。此から暖地へ参り度存居候へども、暫時ここに横臥可致候。松本市在住の武井眞澄氏の嶺雲と題する屏風の畫到着、日夜展觀致居候。可驚苦心の作と申し、小生も日本アルプスの雲と申すものははじめて見申候。御暇も候はば一應御覽被下候ては如何に候や。

末廣町の停留場でおりて、二軒向合の黒焼屋の南の横丁をはひればすぐに候。（大正三年一月四日　神田區金澤町二二、金澤醫院より　ハガキ　平福百穗宛）

其六

此葉書を書く時外は雨でしたが一時止みました。此間の庭に落葉を焚くの御手紙が思ひ出されます。颯々として松の梢にひびきが聞えて居ます。御たよりで大分歌が出來てます。アララギでごらん下さい。

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かん庭の土白く

どうも只灰に霜置かんだけならないのですけれど、力が足らない作者だから駄目です。

齋藤君へは原稿おくる時に手紙を書きます。感想も書けといふのですが出來相もありません。書くことはありますが。(表面)

(一、毬三つきのふとどきました。やつぱり私にはおもしろく思はれます。厚く御禮を申上げます。只當分は御禮に差上げるものが見當りませんから暫時御ゆるし下さい。私はまた十日か十二日に咽喉を焼いてもらふことに成りました。それで十分かどうかも疑問ですから、何だか博多で越年することに成るかも知れません。

心細いやうにもあります。七面鳥が見られないでしまつて殘念至極です。森田恒友君へは其内手紙を書きます。アララギの原稿が出來あがつてからのことです。

（二）、幸に熱は其後あまり出ません。先月末からふと歌の心が湧いて、かなり頭を使つたものですから、少しいけません。熱のひどく出た頃は何も考へずに居たものですから、頭は却てよかつたのです。十日迄にはどうしても、齋藤君へ原稿のとどく樣にせねば成らないけれど、うまく行かないで困つてますから、もうまづいのでも構はずに出しますが、それでも六十首には成りません。

（三）、いつか手紙で申上げた「日照雨」がわかれば歌が一首活きるのですが、おわかりに成らないと見えて困りました。おわかりに成つたら齋藤君へおはなし下さい。

（裏面）（大正三年十二月六日　福岡市外大學通平野旅館より　鵜來島の繪ハガキ　平福百穗宛）

書簡集下・雜文・耕作手帳　終

巻末記

一、本巻には、書簡集の（下）、雜文、耕作手帳、炭燒日記を收めた。書簡は、島木赤彦氏の編輯したのよりも大分ふえた。書簡集上巻に於て寺田憲氏宛のもの、本巻に於て、補遺の分、追加の分は島木赤彦氏歿後に增補したものである。增補に就いては、土屋文明、藤倉浩吉、犬田卯、西山泊雲・今井武志、西村俊一、平福百穗、山口茂吉の諸氏から骨折つて頂き、筆寫は森山汀川、今井武志、山口茂吉氏等の手を煩はした。そのうち、望月氏宛の書簡を全部今井武志氏が筆寫されて私の手元まで送られたのを、私が不注意のために紛失し、あらためて筆寫していただいたのであつた。それから、長塚氏が竹の栽培について教を受けた坪井氏（竹埜翁）は西村俊一氏の祖父に當られるので、中村憲吉氏の手を經て送られた。それから、河井長藤居氏宛のものは、「現在名家書簡集」（富田屋）といふ書物から山口茂吉氏が見付けられ、平福百穗氏宛の追加の分は、書簡が世田ケ谷三宿の新居に移轉の際に新に發見されたものである。かくの如く、增補すべき長塚氏の書簡は現在にはまだまだ殘つて居ることは確かである。けれども、それらの增補は、後世の篤志家の手によつて成就せられむことを希ひ、私等はこれで一先づ切上げたのである。

一、雜文、耕作手帳は、島木赤彦氏の編輯豫定では、歌論歌話等と一しよにするつもりであつたのだが、頁

特の都合で次卷に入れた。雜文も、作歌も、森山汀川氏、藤平未塡氏の謄寫の筆寫によつたものである。その筆寫の如何に困難なものであつたかは想像が出來る。そして、耕作手帳中の、肥料の分量、金高その他の數字に誤寫あり、又文字不明の箇所がなかなか多い。さういふところは其儘にするより途は無かつた。

一、炭燒日記は大正十五年夏に、松浦賢雄氏が注意せられ、長塚氏自筆の帳面と共に筆寫して送られたのであつたが、その筆寫も非常に困難であつたため、誤寫があり、それを出來る限り森山汀川氏が訂正補充して呉れたものである。その炭燒日記には、たまたま歌があるので、歌集のものと比較すると興味が多い。

一、書簡集も、雜文も、既に活字になつたものから轉載したので、確かに誤植と思はれたものは出來るだけ訂正した。但し地名などの固有名詞の中には調べの屆かないものもあり、さういふのは一二、通信によつて訂して貰つたのもある。轉載の分にては、例へば、

(全集の頁)	(アララギ)	(全集)
二六四	客子	容子
二六九	人事との	人事上の
二八四	皇の幾多	盥の如き幾多
二八七	醸藏	腹藏
二九二	幹施	幹旋
三〇〇	姻戚	姻戚

3

斯の如きは眞の誤植と看做すべきものであるが、さういふ眞の誤植でなく、長塚氏自身の誤記がなかなか多い。これは手帳の覺書だからである。例へば『一昨の儘』は『一昨日の儘』のつもり、『今回一杯』は『今月一杯』の誤である。さういふのは校正の際に出來るだけ直したとおもふ。『強ひて』を『強いて』と書き、『おらぶ』を『をらぶ』と書いた如きも、その一つの例である、

ところが長塚氏には一種の習癖があつて、普通の書き方とちがふのがある。このことは前の卷末記にも記したことであるが、それに注意せずに誤植として取扱ふ人々が意外に多いから此處にも書いて置く、例へば、

（長塚）	（普通）
難氣	難儀
桶峽間	桶狹間
同者	道者
粗懶	疎懶
緣沿し	緣縫し
超越	超過
念存	存念

匂ナシ	匂ナシ
閉グ	塞グ
お償ひ下さい	お償へ下さい
耐居	堪居

かういふのが、實はなかなか多いのである。かかる種類のものは、一部は訂正した。「お償へ下さい」の如きものである。一部はその儘にして置いた。是等は原文と草稿に照合せてひろつたものであるが、實際この通りなのである。

一、以上の如き事情は正誤表を作る時に極めて書くべき性質のものであるが、一大事に映えて、長塚節全集に誤植が多いとなると、誤植でないものまでも誤植と思ふやうになる。私はこれまで、正誤表を送つて貰つたものの中でその半數は誤植でないものが多かつた。それゆゑ此處でも一言するのである。それから、既に出版になつたものの中から、このたび幾つくらゐ私等が誤植を訂正したかをも纏めて證據立て、又私等だけが不注意のために誤植になつたのをも證據立てたいと思ふ。

一、本卷の校正は主として森田汀川氏これに當り、山口茂吉氏が補佐した。

一、口繪の第一は、藤倉新吉(愚仙)氏の撮影された長塚氏の肖像で、全集發行について藤倉浩吉氏から恵送されたものである。撮影の年月はもはや確かではない。藤倉浩吉氏、横山夜雨氏等の推測では、明治四十二三年ごろ(長塚氏卅一二才)だらうとのことであるが、或はもう一二歳若いときのもののやうな氣もして

ゐる。

一、口繪の第二は、平福百穗氏に宛てた長塚氏の書信で、福岡百景、鶴來島の繪ハガキにペンで細かい字が書いてある。文句のなかに『としへになぐさもる人もあらなくに枕に潮のよらふ夜は憂し』といふ哀ふかい歌も書いてある。『をらぶ』は『おらぶ』と普通書くが、縱ひ『をらぶ』とあつても誤植ではないのである。

一、口繪の第三は　處々（京都、奈良あたり）の寺院等にある古美術の覺書で、長塚氏は晩年に日本の古美術に傾倒されてゐたのであり、私等が西洋を云々するのを不滿に思つて居られたのであつた。一つの古鏡を觀るために遥々出雲の國に行つたり、さういふことは稀ではなかつた。いろいろの都合でこの覺書のものを悉く見られたのではあるまいが、それでも中には實際見て居られるものもあるのである。

一、口繪の第四は、耕作手帳の一部で、耕作の豫定を書かれたものである。それを消してゐるのは、その爲事の濟んだといふ標なのである。地圖を畫いたりなどして、用意周到にやつてゐるところに長塚氏がうかがはれると思つて、口繪の一つにした。どうぞ本文と照合してもらひたい。

一、口繪の第五も、やはり耕作手帳の一部を示してある。これは主に、肥料の割合を精細に書記し、播種の月日、肥料の施し方などを書いたものである。文學上の作品ではないが、專門の農業上にも熱心であつたことをも私共は是非知らねばならぬので、本文と照合せる機縁としてこれを口繪にしたのである。

一、本卷を以て、長塚節全集六冊が一先づ完結した。大正十五年三月に島木赤彦氏は、この全集の初校刷をも見ずして歿した。それから滿一ヶ年を經て、岡麓氏指導のもとに、編輯同人及び助手諸氏の協力と、春

陽堂の高見靖雄氏の不断の骨折とによつて仕事完了したことを深く感謝せねばならぬ。若し未來に、機運到らば、不備をも訂し、補遺をも成就したいとおもふ。昭和二年二月吉日。齋藤茂吉識。

卷末總記

長塚節全集六卷を完結した。長塚氏の十三回忌に當つてこの出版をなし得たる事は、我等同人のよろこびである。

長塚節全集の編輯を企てたのは、大正十年であつた。それから、島木赤彦氏、森山汀川氏等が主としてその任につき、材料を集めた。筆寫につとめたのは森山汀川氏、柳平末雄氏で、大正十一年六月よりはじめて、大正十四年六月に大體終了した。この筆寫に就いては、森山氏等は非常に努力した。

大正十四年秋、平福百穗氏、島木赤彦氏、齋藤茂吉氏、中村憲吉氏、土屋文明氏、森山汀川氏、岡麓、編輯同人となり、書肆春陽堂に發行を依頼した。それで大正十五年一月、原稿を書肆に渡した。然るにその一月下旬より、島木赤彦氏は胃癌といふ診斷を受けて、つひに三月二十七日病歿した。

この不意の凶事に遭つて、悲しみつつも、編輯同人協力して仕事を進めた。就中齋藤茂吉氏は、多忙の中から、多くの時間を充て、細心に意をそそいでその勞を厭はなかつた。辻村直氏、山口茂吉氏その他のアララギ會員が、補助してくれて校正をいそいだので、

大正十五年六月　第三巻
大正十五年七月　第五巻
大正十五年九月　第一巻
大正十五年十二月　第二巻
大正十五年十一月　第四巻
昭和二年三月　第六巻

以上の順序で、ここに完結するに至つた。

なほ、書簡、その他未發表のものを、全集に收めねばならぬものも澤山あると思ふが、それは未來に篤志家が出て、增補完成するであらう。我等一同それを希うてやまぬ。

この全集六巻完結の上で、出來るだけ誤植を調べ纒めて、正誤表を配布したい考である。

日下協力して調べて居るゆゑ、近日諸彦の座右に呈するであらう。

ここに言擧ていふべきでもないが、長塚氏は信の心のあつい人であつた。はじめて根岸庵を訪うた時、既に深い歸依心にみちて居つた。すこしの我執なしに、師教のまにまに實踐躬行して、一生涯を終つたのであつた。

長塚氏の文人として特殊な事は、農家に生れて農事を疎にしなかつた。農作と文筆とを兼て、勤勉な月日をおくつて居つた。

綿密なる腦髓は、常にものの秩序を立てて、開展の道を歩んだ。未完成の地より完成の域へと進んだ。情意の人であつて、また智識の人であつた。竹林の栽培、農作物の改良等にも熱心であつた。

長塚氏は大の旅行好であつた。不治の病にかかつてからも、山川の風致を愛し、神社佛閣に詣でては、古名匠の遺したあとを見學した。自分は學問が不足だから、身體の骨惜はしないといつて居つた。旅に出ては、いつも、かなり苦しい思ひをしたのであつた。

約めていへば、長塚氏は疊の上の文人ではなかつたのだ。

和　何れの作品もすぐれたものであるが、書簡の文字のいかに信結の情がこもつてゐるかは、諸彦にもうなづいて頂きたい。

かばかりに情誼の厚い人であつたが、短命の一生が、寂しくさびしくて過ぎた。

長塚節全集は只の六冊で寂しいものだ。だけれども、不滅のものある事をば疑はない。

長塚氏が生前「土」を出版した時、大層悦んだその装幀と同じく平福氏が、この全集の装幀をされた。故島木氏、齋藤氏、中村氏、土屋氏、森山氏、いづれも深い交りの人々である。

何の役にも立たなかつたが、ふるい友のよしみに、小生も編輯者の末に列なつた。

謹んで尊靈に告ぐ。

長塚節全集六卷、豫定をあやまらず、完結した。

一言を添へる。編輯同人の島木赤彦氏が、逝いて居らない。かなしい事である。

庭前の梅花今をさかりに咲いてゐる。

昭和二年二月二十八日

岡　麓

昭和二年二月二十五日印刷
昭和二年二月二十八日發行

長塚節全集第六卷
非賣品

著作者檢印

著作者　長塚節

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　左手薫

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話大手五一・四二一〇
振替口座東京一六一七